東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17

東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）

医科学研究所附属病院 A 棟地点

報告編

2022

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17

東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）

医科学研究所附属病院 A 棟地点

報告編

2022

東京大学埋蔵文化財調査室

SK207、SK229、SK258

SK207 土層堆積状況

建物址（上・北側、下・南側）

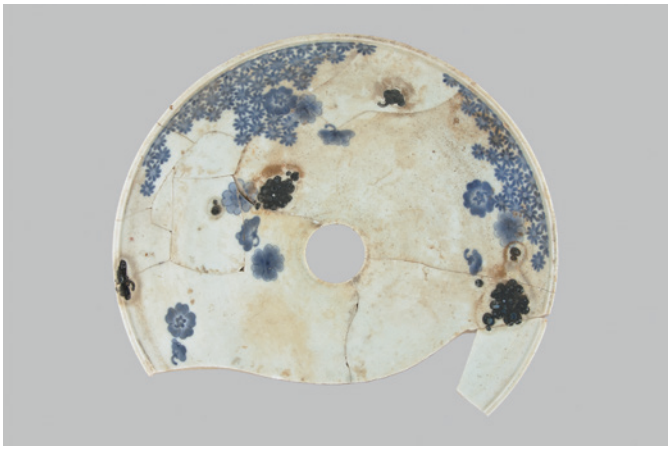
版築土層堆積状況（E6 グリッド付近）

レンガ基礎検出状況

SU360（上・完掘、下・鉛検出状況）

SK207 出土　大村藩家紋鬼瓦

SK207・SK583 遺構間接合　大皿



SD214 出土　唾壺

SK207 出土　印章

SD214 出土　香炉・火入れ

例　　言

1．本報告は、東京大学白金台構内、医科学研究所附属病院 A 棟新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　報告編である。

2．埋蔵文化財調査室の管理番号は「白金台 5」である。

3．本地点の略称は「SBS00」とした。出土遺物に行った注記は旧略称「イカ'00」を用いている。

4．本地点は、東京都港区白金台 4-6-1 東京大学構内医科学研究所内に位置している。

5．本地点は、東京都遺跡地図「港区 No.135 遺跡（白金台四丁目 6-1、台地、屋敷、[近]）」内に位置している。

6．本地点の調査面積は、4,280㎡である。

7．調査期間は以下の通りである。

試掘調査　2000 年 7 月 5 日～ 7 日
事前調査　2000 年 10 月 27 日～ 2001 年 3 月 9 日
整理作業　2005 年 8 月～ 2006 年 3 月、2006 年 9 月～ 12 月、2007 年 6 月～ 2008 年 5 月（遺物基礎整理）
2008 年 9 月 ～ 2009 年 4 月、2009 年 11 月 ～ 2010 年 12 月、2011 年 2 月 ～ 8 月、10 月 ～ 11 月、2012 年 7 月、2012 年 9 月～ 11 月（遺物図デジタル化・図版作成）
2001 年 3 月 ～ 2002 年 1 月、5 月 ～ 8 月、2003 年 1 月 ～ 2004 年 7 月、2005 年 3 月 ～ 6 月、2005 年 10 月～ 11 月、2007 年 5 月～ 6 月、2020 年 7 月～ 2021 年 3 月（遺構図デジタル化･図版作成）
2021 年 7 月～ 2022 年 1 月（事実記載）
編　　集　2021 年 12 月～ 2022 年 1 月

8．本地点の試掘調査･事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、試掘調査は、追川吉生、事前調査は堀内秀樹、大成可乃が担当した。

9．本報告の編集は、大成可乃、小林照子が行った。

10. 執筆分担は以下の通りである

第Ⅰ章　堀内秀樹
第Ⅱ章　堀内秀樹
第Ⅲ章　大成可乃、小林照子、堀内秀樹
第Ⅳ章　大成可乃、小林照子、堀内秀樹
第Ⅴ章　堀内秀樹

11. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱリサーチキャンパス、茨城県石岡市柿岡 414 東京大学工学部・工学系研究科柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。

12. 遺物の実測は、今井雅子、坂野貞子、デジタルトレース、写真合成は加藤理香、図版作成は今井雅子、大貫浩子、写真撮影は青山正昭が行った。遺構のデジタルトレース、図版作成は松野武彦に委託した。

13. 本書に付属する CD-ROM には、報告編（PDF 形式）の他に、遺構一覧表、遺物観察表（以上、xlsx 形式）、遺構写真、遺物写真（以上、jpeg 形式）が収録されている。

14. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の諸氏･諸機関より御協力･御教示を賜った。記して謝意を表する（敬称略、五十音順）。

安芸毬子、阿部常樹、大橋康二、日下正剛、渋谷葉子、谷口榮、中野雄二、松野武彦

東京大学医科学研究所、東京大学施設部、パリノサーヴェイ株式会社、港区教育委員会

発掘調査

加藤建設株式会社

整理作業参加者（所属は参加時）

青山正昭、阿部常樹、石井龍太、今井雅子、大貫浩子、加藤理香、香取祐一、小林照子、坂野貞子、杉浦あかね、野村遊、渡辺法彦（埋蔵文化財調査室）

凡　例

1．本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。
SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SP：ピット　SU：地下室　SX：性格不明、未略号化の遺構

2．本報告の遺構図版の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に 1/3 であるが、瓦 1/6、金属製品 1/2、銭貨 1/1、旧石器時代の遺物は 1/1、これと異なる場合には倍率表記を行った。

3．出土遺物の写真は、添付した CD-ROM に JPEG 形式に圧縮して記録した。

4．出土遺構の写真は、添付した CD-ROM に JPEG 形式に圧縮して記録した。

5．個別実測図を掲載していない遺構の土層説明は、添付した CD-ROM に収録した。

6．本文、挿図、観察表、CD-ROM の写真で使用した遺物番号は、共通の番号を使用した。

7．遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
・－ －は、断面を表している。
・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
・擂鉢の↓――↓は、体部擂目の範囲を表している。
・口唇部の＼←→／は、敲打痕を表している。

8．本文中に記載した分類コードは、陶磁器・土器類が、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 Ver.4.1」（『医学部附属病院入院棟 A 地点』で提示した「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類 Ver.4」を一部変更。以下、「Ver.4.1」と称する。）、人形・玩具類が、「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）、瓦類は「御殿下記念館地点・山上会館地点検出の瓦について」（加藤・金子 1990）に準拠している。なお陶磁器・土器類の分類変更は、薩摩系の生産地コードを「Q」から「T」へ変更、薩摩系陶器を「TT」へ変更したものである。

9．本地点の調査では、調査区の形状に適した任意のグリッドを設定して行った。グリッドは、調査区北東隅を基準点とし（A1）、西へアルファベット、南へ自然数（アラビア数字）を 10m 間隔で付した。グリッド名は 10m 四方枡の北東隅を交点とする英数字をあてている。調査時は日本測地系でグリッドを設定したが、報告に際し世界測地系第Ⅸ系に変換し、A1 の座標値は X ＝－ 39864.4138、Y ＝－ 9823.1424 となった。遺構平面図に記載された方位記号は、平面直角座標系による方眼北を示し、真北より 3 分 49 秒西偏している。なお、上記の世界測地系の値は平成 23（2011）年東北地方太平洋沖地震による変動数値補正後の世界測地系（JGD2011）である。

○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

○生産地

A－輸入陶磁器

- A1　景徳鎮窯系
- A2　漳州窯系
- A3　徳化窯系
- A4　龍泉窯系
- A5　宜興窯系
- A6　朝鮮
- A7　ベトナム
- A8　ヨーロッパ
- A9　福建・広東系
- A10 西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－江戸在地系*
R－三田系
S－飯能系
T－薩摩系
Z－不明

○器種

1. 碗	2. 皿･平鉢	3. 大皿･大皿鉢	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉･火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺･甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 漱瓶	29. 擂鉢	30. 餌入れ
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	
63. あんか	64. 煙硝擂鉢	65. 乳棒	66. 硯屏	67. 釜

* 本報告では人形・玩具のみで使用

東京大学構内の遺跡陶磁器・土器の分類

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器分類 Ver.4.1 （■は新規、▲は Ver.4 で修正を加えたもの。各分類の詳細は年報 10 参照）

◎ＪＡ１－－景徳鎮窯系
◎ＪＡ２－－漳州窯系
◎ＪＡ３－－徳化窯系
◎ＪＡ４－－龍泉窯系
◎ＪＡ６－－朝鮮
◎ＪＡ８－－ヨーロッパ
■◎ＪＡ９－－福建・広東系

◎ＪＢ群－－肥前系磁器
○１－－碗
・ＪＢ－１－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（底部無釉）
・　〃　ｃ（高台断面三角の製品、長吉谷窯指標）
・　〃　ｄ（高台断面シャープな「Ｕ」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯Ⅳ～Ⅵ層指標）
・　〃　ｅ（高台断面シャープな「Ｕ」字状で高台高が低い、蓋付有）
・　〃　ｆ（高台径が小さい半球形の薄手碗）
・　〃　ｇ（絵付・作りの粗雑な碗）
・　〃　ｉ（高台高が高、慣用名：小広東碗）
・　〃　ｊ（高台径が小さい腰の張る碗、慣用名：小丸碗）
・　〃　ｋ（大振りの筒形碗、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｌ（筒形碗）
・　〃　ｍ（慣用名：広東碗、蓋付有）
・　〃　ｎ（端反形碗、蓋付有）
・　〃　ｏ（腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗）
・　〃　ｐ（高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有）
・　〃　ｑ（高台が「ハ」の字状に開く碗、大振りで腰が張る、蓋付有）
・　〃　ｒ（朝顔形、蓋付有）
▲　・　〃　ｓ（丸碗形、幅広高台）
・　〃　ｔ（体部が直線的に開く大振りの碗、内側に主文様、慣用名：うがい茶碗）
・　〃　ｕ（JB- 1 - ｄのやや小振りの碗形、コンニャク判が多い）
・　〃　ｖ（梅樹文が描かれた粗製の碗）
・　〃　ｗ（高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク判が多い）
・　〃　ｘ（見込み蛇ノ目釉剥ぎ、粗製）
▲　○２－－皿・平鉢
・ＪＢ－２－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（高台断面三角で高台径が小さい、ダンバギリ窯指標）
・　〃　ｃ（高台断面三角で高台径が大きい、柿右衛門Ｂ窯など指標）
・　〃　ｄ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯指標）
・　〃　ｅ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状）
・　〃　ｆ（やや深く、腰が張る、多くは輪花に成形）
・　〃　ｇ（絵付・作りが粗雑な皿、扇面文様が多い）
・　〃　ｈ（蛇ノ目高台、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｉ（蛇ノ目凹形高台で高台高が高い）
・　〃　ｊ（蛇ノ目凹形高台で高台高が低い）
・　〃　ｋ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無釉）
▲　・　〃　ｌ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小）
▲　・　〃　ｍ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大）
・　〃　ｎ（鍋島）
・　〃　ｏ（器高が低く腰が張る皿）
・　〃　ｐ（浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標）
・　〃　ｑ（高台断面が「Ｕ」字状、輪花に成形、見込み全面に一枚絵）
・　〃　ｒ（糸切細工の貼付高台）
■　・　〃　ｓ（初期伊万里の系統で内山の影響を受けた外山で作られた粗製品、広瀬向窯など指標）
■　・　〃　ｔ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ）
▲　○３－－大皿・大平鉢
▲　・ＪＢ－３－ａ（いわゆる初期伊万里）
▲　・　〃　ｂ（「Ｕ」字状の高台）
・　〃　ｃ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ）
・　〃　ｄ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　ｅ（浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標）
■　・　〃　ｆ（高台断面が三角形や逆台形）
○４－－燗徳利
▲　○５－－鉢
・ＪＢ－５－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状）
・　〃　ｃ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ、青磁に多い）
・　〃　ｄ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　ｅ（慣用名：八角鉢）
・　〃　ｆ（高台断面三角形）
■　・　〃　ｇ（鍋島）
■　・　〃　ｈ（見込み蛇ノ目釉剥ぎ）
○６－－坏
・ＪＢ－６－ａ（丸形）
・　〃　ｂ（端反形）
・　〃　ｃ（極めて薄手）
・　〃　ｄ（腰折れ直立形）
・　〃　ｅ（型作り、慣用名：紅皿）
・　〃　ｆ（高台径が小さい半球形の薄手坏）
○７－－猪口
・ＪＢ－７－ａ（底部蛇ノ目凹形高台状）
・　〃　ｂ（底部輪高台状）
○８－－仏飯器
・ＪＢ－８－ａ（脚部のえぐりが深い）
・　〃　ｂ（脚部のえぐりが浅い）
・　〃　ｃ（脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取り）
○９－－香炉・火入れ
・ＪＢ－９－ａ（底裏に円盤状の露胎部）
・　〃　ｂ（底部蛇ノ目釉剥ぎ）
・　〃　ｃ（高台状の露胎部）
・　〃　ｄ（べた底）
■　・　〃　ｅ（蛇ノ目凹形高台）
■　・　〃　ｆ（蛇ノ目高台）
■　・　〃　ｇ（底部・高台内無釉）
○10－－瓶
・ＪＢ－10－ａ（大型長頸瓶）
・　〃　ｅ（いわゆる初期伊万里、口縁部が朝顔形に開く）
○11－－御神酒徳利
・ＪＢ－11－ａ（瓶子形）
・　〃　ｂ（鶴首形）
・　〃　ｃ（筒形）
○12－－油壺
○13－－蓋物
・ＪＢ－13－ａ（丸形）
・　〃　ｂ（筒形）

・　〃　c（段重）
■　・　〃　d（型作）
○15－－壺・甕
○16－－急須
○18－－合子
・ＪＢ－18－ａ（扁平な球形）
・　〃　b（筒形）
○19－－水滴
○20－－蓮華
○21－－植木鉢
○22－－花生
■　○23－－片口鉢
○24－－灰落し
○27－－水注
・ＪＢ－27－ａ（銚子形、釣手）
○29－－擂鉢
■　○30－－餌入れ
○35－－戸車
■　○52－－燭台

◎ＪＣ群－－瀬戸・美濃系磁器
○1－－碗
・ＪＣ－１－ａ（丸碗、蓋付有）
・　〃　b（筒形碗）
・　〃　c（蓋付有、慣用名：広東碗）
・　〃　d（端反形碗、蓋付有）
・　〃　e（腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗）
・　〃　f（高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有）
■　・　〃　g（慣用名：小丸碗）
▲　○2－－皿・平鉢
・ＪＣ－２－ａ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　b（輪高台）
・　〃　c（蛇ノ目高台）
・　〃　d（そり皿、木型打込など）
・　〃　e（陽刻）
・　〃　f（陰刻）
○4－－燗徳利
▲　○5－－鉢
○6－－坏
・ＪＣ－６－ａ（丸形）
・　〃　b（端反形）
・　〃　c（筒形）
・　〃　d（極めて薄手）
・　〃　e（寿文坏）
・　〃　f（体部が直線的に開く）
・　〃　g（型作り、慣用名：紅皿）
○7－－猪口
○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
○10－－瓶
○11－－御神酒徳利
・ＪＣ－11－ａ（瓶子形）
・　〃　b（鶴首形）
○12－－油壺
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
○16－－急須
○18－－合子
○19－－水滴
○20－－蓮華
○21－－植木鉢
○22－－花生
○34－－土瓶
■　○36－－ちろり

◎ＪＮ群－－九谷系磁器
○1－－碗
▲　○2－－皿・平鉢
○6－－坏

■◎ＪＲ－－三田系磁器
■　○2－－皿・平鉢
■　○5－－鉢
■　○13－－蓋物
■◎ＪＺ群－－生産地不明
○1－－碗
○2－－皿・平鉢
○6－－坏

陶器分類
◎ＴＡ５－－宜興窯系
◎ＴＡ６－－朝鮮
◎ＴＡ７－－ベトナム
◎ＴＡ８－－ヨーロッパ
■◎ＴＡ９－－福建・広東系
■◎ＴＡ10－－西アジア

◎ＴＢ群－－肥前系陶器
○1－－碗
・ＴＢ－１－ａ（大振りの丸碗、慣用名：呉器手）
・　〃　b（外面主文様、慣用名：京焼風陶器）
・　〃　c（内面主文様、慣用名：京焼風陶器）
・　〃　d（刷毛目丸碗、渦巻状の刷毛目）
・　〃　f（陶胎染付）
・　〃　g（刷毛目丸碗、打・波状・鋸歯状の刷毛目）
・　〃　h（刷毛目端反形碗）
▲　・　〃　i（青緑・灰釉、丸形碗、内野山窯指標）
■　・　〃　j（卵手）
■　・　〃　k（象嵌の施された碗、慣用名：三島手）
▲　○2－－皿・平鉢
▲　・ＴＢ－２－ａ（青緑・灰釉、輪剥、内野山窯指標）
▲　・　〃　b（灰・青緑釉砂目）
・　〃　c（慣用名：京焼風陶器）
・　〃　d（透明釉砂目、内野山窯指標）
・　〃　e（胎土目）
・　〃　f（陶体染付）
■　・　〃　g（刷毛目）
■　・　〃　h（白土・鉄などで象嵌の施された皿・平鉢、慣用名：三島手）
■　・　〃　i（いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す）

■ ○3－－大皿・大平鉢
■ ・TB－3－a（刷毛目）
■ ・ 〃 b（白土･鉄などで象嵌の施された大皿･大平鉢、慣用名:三島手）
■ ・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
■ ・ 〃 d（内野山窯指標）
▲ ○5－－鉢
・TB－5－a（刷毛目鉢）
・ 〃 b（白土・鉄などで象嵌の施された鉢、慣用名：三島手）
・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
▲ ・ 〃 d（青緑・灰釉、内野山窯指標）
■ ・ 〃 e（いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す）
○6－－坏
■ ○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
・TB－9－a（陶胎染付）
・ 〃 b（慣用名：京焼風陶器）
・ 〃 c（刷毛目）
■ ・ 〃 d（青緑釉）
○10－－瓶
○13－－蓋物
・TB－13－a（陶胎染付）
・ 〃 b（刷毛目）
■ ・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
○15－－壺・甕
■ ・TB－15－a（ロクロ成形）
■ ・ 〃 b（タタキ成形）
■ ○22－－花生
○23－－片口鉢
・TB－23－a（深いタイプ、刷毛目、底部鉄釉）
・ 〃 b（浅いタイプ、刷毛目、蛇ノ目釉剥ぎ）
■ ○27－－水注
○29－－擂鉢
・TB－29－a（内外面全釉）
・ 〃 b（口縁部のみ施釉）
■ ○31－－火鉢

◎TC群－－瀬戸・美濃系陶器
○1－－碗
・TC－1－a（天目碗）
・ 〃 b（白天目）
・ 〃 c（灰釉薄掛け丸碗）
・ 〃 d（灰釉に簡略な山水の呉須絵、慣用名：御室碗）
・ 〃 f（腰が張る二段の段を有する碗、渦巻高台、灰釉鉄釉流し）
・ 〃 g（灰釉、「ハ」の字状に開く、柳文の鉄絵が多い）
・ 〃 h（丸碗、慣用名：太白手）
・ 〃 i（筒形碗、慣用名：太白手）
・ 〃 j（慣用名：広東碗、太白手）
・ 〃 k（体部中位に大きな凹み有、灰釉）
・ 〃 l（半筒形碗、慣用名：せんじ）
・ 〃 m（半球形の小振りの碗、笹文など多い、京焼風）
・ 〃 n（平碗、見込みに文様、京焼風）
・ 〃 o（慣用名：尾呂茶碗）
・ 〃 p（漆黒釉に長石釉散らし、慣用名：拳骨茶碗）
・ 〃 q（錆釉斑状、横位や波状の沈線が多い）
・ 〃 r（トビガンナ状の押形文、掛分け、慣用名：鎧茶碗）
・ 〃 s（刷毛目）
・ 〃 u（内面・外面上半灰釉、外面下半錆釉、慣用名：腰錆碗）
・ 〃 v（半筒形碗、灰釉柿釉掛分け）
・ 〃 w（杉形碗、若松文、慣用名：小杉茶碗）
・ 〃 x（緑釉丸碗）
・ 〃 y（口縁部端反、蓋付有、白化粧に鉄絵など、慣用名:奈良茶碗）
▲ ・ 〃 z（端反形碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵）
・ 〃 aa（灰釉丸碗）
・ 〃 ab（慣用名：小丸碗、太白手）
・ 〃 ac（灰釉錆釉掛分け、長石釉散らし、体部に凹み有）
・ 〃 ad（筒形碗、漆黒釉錆釉掛分け）
・ 〃 ae（体部灰釉、口縁部緑釉・瑠璃釉などの掛分け）
▲ ・ 〃 af（慣用名：広東碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵）
■ ・ 〃 ag（鉄釉丸碗）
■ ・ 〃 ah（鉄釉平碗）
■ ・ 〃 ai（鉄釉筒形碗）
■ ・ 〃 aj（長石釉丸碗）
■ ・ 〃 ak（長石釉平碗）
■ ・ 〃 al（長石釉筒形碗）
■ ・ 〃 am（高台高が高、高台断面は台形を呈す、窯ヶ根窯など指標）
■ ・ 〃 an（沓茶碗）
▲ ○2－－皿・平鉢
・TC－2－a（灰釉丸皿、ピン痕有）
・ 〃 b（灰釉丸皿、輪状直重ね痕有）
・ 〃 c（長石釉丸皿）
・ 〃 e（灰釉摺絵皿、鉄絵、白泥による施文、慣用名：御深井）
・ 〃 f（幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿）
・ 〃 g（内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿）
・ 〃 h（染付皿、輪高台、慣用名：太白手）
・ 〃 i（型皿、高台有）
▲ ・ 〃 j（鉄絵皿、ピン痕多）
・ 〃 k（菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸釉緑釉流し）
・ 〃 l（菊皿、外面しのぎ無、黄瀬戸釉緑釉流し）
▲ ・ 〃 m（輪禿皿）
▲ ・ 〃 n（口縁部または体部をひだ状成形、ヒダ皿）
▲ ・ 〃 o（油皿、直重ね）
・ 〃 p（把手付油皿、口縁部内側把手貼付）
・ 〃 q（灰釉丸皿、高台無）
・ 〃 r（見込み沈線･圏線文様､緑釉沈線文皿､ピン痕､慣用名:総織部）
・ 〃 s（鍔縁、口縁部施釉、鉄絵文様、直重ね、慣用名：志野織部）
・ 〃 t（染付皿、蛇ノ目凹形高台、慣用名：大白手）
■ ・ 〃 u（輪禿平鉢、口縁部折縁状多）
■ ・ 〃 v（鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢）
■ ・ 〃 w（灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢）
■ ・ 〃 x（型皿、脚付）
■ ・ 〃 y（端反皿、ピン痕多）
■ ・ 〃 z（鉄釉丸皿、ピン痕多）
■ ○3－－大皿・大平鉢
■ ・TC－3－a（鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢）
■ ・ 〃 b（灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢）
■ ・ 〃 c（幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿）
■ ・ 〃 d（内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿）
○4－－燗徳利

▲ ○5－－鉢
▲ ・　〃　f（水盤、灰釉、口縁部一箇所凹み）
・　〃　h（手鉢）
・　〃　j（長石釉）
・　〃　k（緑釉、鉄絵、元屋敷窯、窯ヶ根窯など指標）
・　〃　l（こね鉢）
■ ・　〃　m（刷毛目）
○6－－坏
○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
・ＴＣ－9－a（灰釉）
・　〃　b（鉄釉）
・　〃　c（灰釉、摺絵、慣用名：御深井）
・　〃　d（褐釉、半菊状のしのぎ）
・　〃　e（鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ）
▲ ・　〃　f（袴腰）
・　〃　g（筒形）
○10－－瓶
・ＴＣ－10－a（二合半灰釉徳利、底部釉拭取り）
・　〃　c（二合半灰釉徳利、つけ掛け）
・　〃　d（五合徳利）
・　〃　e（一升徳利）
・　〃　f（舟徳利、漆黒釉または柿釉）
・　〃　g（柿釉徳利、献上備前写し）
・　〃　h（らっきょう形）
・　〃　k（織部徳利）
○12－－油壺
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
・ＴＣ－15－a（柿釉、底部及び器面下端露胎、平縁、慣用名:赤津半胴･銭甕）
・　〃　b（柿釉灰釉流し、底部及び器面下端露胎、口縁部外反）
・　〃　c（水甕、灰釉に鉄釉や緑釉を流す、流水状の文様、斑状の刺突）
・　〃　d（緑釉、貼付文）
■ ・　〃　e（ベタ底）
■ ・　〃　f（高台有、肩衝、有耳多し）
○18－－合子
○19－－水滴
○21－－植木鉢
○22－－花生
・ＴＣ－22－a（盤口形）
・　〃　b（朝顔形）
○23－－片口鉢
・ＴＣ－23－a（筒形）
・　〃　b（丸碗形）
・　〃　c（「ハ」の字状に開く）
○24－－灰落し
・ＴＣ－24－a（鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ）
・　〃　b（長筒形）
○25－－鬢水入れ
○26－－茶入れ
○27－－水注
・ＴＣ－27－a（褐釉、底部露胎、らっきょう形、橋状把手）
・　〃　b（円筒形の体部に注口、取手、蓋付、慣用名：汁次）
・　〃　c（灰釉、摺絵、慣用名：御深井）
■ ・　〃　d（灰釉、らっきょう形、橋状把手）
○28－－漫瓶
○29－－擂鉢
○30－－餌入れ
○31－－火鉢
・ＴＣ－31－a（瓶掛）
・　〃　b（風炉）
○34－－土瓶
○38－－手焙り
○39－－おろし皿
○40－－油受け皿
▲ ・ＴＣ－40－b（脚付）
・　〃　c（脚無、錆釉）
・　〃　d（脚無、灰釉）
・　〃　e（高い受付）
○41－－油徳利
○44－－ひょうそく
・ＴＣ－44－a（脚付）
■ ○64－－煙硝擂
■ ○67－－釜

◎ＴＤ群－－京都・信楽系陶器
○1－－碗
・ＴＤ－1－b（高台径が小さい半球形の碗、薄手）
▲ ・　〃　c（丸碗）
・　〃　d（杉形碗、鉄または呉須で若杉文、慣用名：小杉茶碗）
・　〃　e（端反形、口縁部緑釉体部灰釉の掛分け）
・　〃　g（端反形、小振りで器面には細かい貫入）
・　〃　h（平碗、多くは見込みに銹絵染付）
▲ ・　〃　i（半筒形）
・　〃　j（筒形、多くは鉄絵で文様）
・　〃　k（体部中位に大きな凹み有、灰釉）
・　〃　l（軟質施釉）
■ ・　〃　n（胴締め、慣用名：大福）
■ ・　〃　o（慣用名：小福）
■ ・　〃　p（天目形）
▲ ○2－－皿・平鉢
・ＴＤ－2－a（見込み櫛目有、灯明皿、多くは三箇所のピン痕）
・　〃　b（見込み櫛目無、灯明皿、多くは三箇所のピン痕）
・　〃　c（輪高台）
○4－－燗徳利
▲ ○5－－鉢
○6－－坏
○9－－香炉・火入れ
・ＴＤ－9－a（型作り）
・　〃　b（蛇ノ目高台、灰釉、体部に強いロクロ目、口縁部内折）
・　〃　c（筒形）
○10－－瓶
○13－－蓋物
・ＴＤ－13－a（丸碗形の身）
・　〃　b（段重）
・　〃　c（半筒形の身）
・　〃　d（格子状のしのぎ、梅花文）
○14－－筆立
○15－－壺・甕
・ＴＤ－15－a（慣用名：腰白茶壺、三耳壺、鉄釉灰釉掛分け）

○18－－合子
・ＴＤ－18－ａ（扁平な球形）
・　〃　ｂ（筒形）
○19－－水滴
○22－－花生
■ ○23－－片口鉢
○24－－灰落し
○25－－鬢水入れ
■ ○26－－茶入れ
○27－－水注
・ＴＤ－27－ａ（銚子形、釣手）
・　〃　ｄ（筒形）
○32－－柄杓
▲ ○34－－土瓶
■ ・ＴＤ－34－ａ（鉄砲口）
■ ・　〃　ｂ（Ｓ字状注口）
○36－－ちろり
・ＴＤ－36－ａ（長筒形、横手）
・　〃　ｂ（段筒形、横手）
○40－－油受け皿
・ＴＤ－40－ａ（脚付、灰釉）
・　〃　ｂ（脚無、灰釉）
○46－－カンテラ

◎ＴＥ群－－備前系陶器
■ ○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ・ＴＥ－２－ａ（ロクロ成形）
■ ・　〃　ｂ（型皿）
▲ ○5－－鉢
○10－－瓶
▲ ・ＴＥ－10－ａ（かま形、薄作、鶴首）
■ ・　〃　ｂ（底部付近に最大径を有す、体部三角形）
○12－－油壺
○15－－壺・甕
○22－－花生
○29－－擂鉢
○37－－薬研
○40－－油受け皿
○41－－油徳利
■ ○65－－乳棒

◎ＴＦ群－－志戸呂系陶器
○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ○9－－香炉・火入れ
○10－－瓶
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
○29－－擂鉢
○40－－油受け皿

◎ＴＧ群－－常滑系陶器
○15－－壺・甕
◎ＴＨ群－－萩系陶器
○1－－碗
・ＴＨ－１－ａ（藁灰釉開口碗、渦巻高台）
・　〃　ｂ（ピラ掛け、渦巻高台）

◎ＴＩ群－－万古系陶器
○1－－碗
○16－－急須
○34－－土瓶

◎ＴＪ群－－大堀・相馬系陶器
○1－－碗
○6－－坏

◎ＴＫ群－－丹波系陶器
■ ○5－－鉢
○15－－壺・甕
○29－－擂鉢

◎ＴＬ群－－堺系陶器
○29－－擂鉢

◎ＴＭ群－－笠間・益子系陶器
○29－－擂鉢

■◎ＴＮ群－－九谷系陶器
○2－－皿・平鉢

◎ＴＯ群－－壺屋系陶器
○10－－瓶
○15－－壺・甕

■◎ＴＰ群－－淡路系陶器
○2－－皿・平鉢
○6－－坏
○20－－蓮華

■◎ＴＳ群－－飯能系陶器
○42－－行平鍋

■◎ＴＴ群－－薩摩系陶器
○1－－碗
○34－－土瓶

◎ＴＺ群－－生産地不明
○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ○4－－燗徳利
▲ ○5－－鉢
○6－－坏
○9－－香炉・火入れ
■ ○10－－瓶
■ ○15－－壺・甕
○16－－急須
○17－－燗鍋
○20－－蓮華

○21 －－植木鉢
■ ・ＴＺ－21－ａ（軟質施釉）
■ ○22 －－花生
■ ○25 －－鬢水入れ
■ ○27 －－水注
■ ○31 －－火鉢
○29 －－擂鉢
○33 －－鍋
・ＴＺ－33－ａ（紐状把手貼付、柿釉）
■ ・ 〃 ｂ（軟質施釉）
○34 －－土瓶
・ＴＺ－34－ａ（青緑釉）
・ 〃 ｂ（白土染付）
・ 〃 ｃ（三彩）
・ 〃 ｄ（糸目）
・ 〃 ｅ（鉄釉）
・ 〃 ｆ（鮫釉）
・ 〃 ｇ（灰釉）
・ 〃 ｉ（イッチン）
・ 〃 ｋ（うのふ釉、やや紫色に発色する）
・ 〃 ｌ（しのぎ、鉄釉）
■ ・ 〃 ｎ（軟質施釉）
○42 －－行平鍋
・ＴＺ－42－ａ（灰釉）
・ 〃 ｃ（トビガンナ）
■ ・ 〃 ｄ（軟質施釉）
○53 －－蒸し器

土器分類

■◎ＤＤ群－－京都・信楽系土器
○16 －－急須
○49 －－涼炉
○50 －－五徳

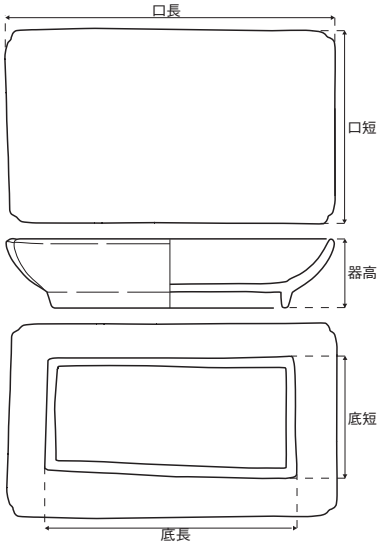
◎ＤＺ群－－生産地不明
▲ ○２－－皿・平鉢
▲ ・ＤＺ－２－ａ（小林Ｃ類・Ｅ類、梶原Ⅱｂ群）
▲ ・ 〃 ｂ（小林Ｆ類、梶原Ⅱｃ群）
・ 〃 ｃ（磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線）
・ 〃 ｄ（磨きかわらけ、底部平滑）
・ 〃 ｅ（耳かわらけ）
・ 〃 ｆ（へそかわらけ）
・ 〃 ｇ（手づくね）
・ 〃 ｈ（透明釉）
・ 〃 ｉ（底部穿孔）
▲ ・ 〃 ｊ（見込みに浮文）
■ ・ 〃 ｋ（底径大、器壁厚、小林Ｂ類、梶原Ⅱａ群を含む）
▲ ○５－－鉢
・ＤＺ－５－ａ（土師質、端反）
・ 〃 ｄ（えぐり）
○９－－香炉・火入れ
○15 －－壺・甕
■ ・ＤＺ－15－ａ（硬質瓦質蓋付壺）
○21 －－植木鉢
・ＤＺ－21－ａ（土師質）
・ 〃 ｂ（瓦質）
■ ○24 －－灰落し
○31 －－火鉢
・ＤＺ－31－ａ（土師質丸火鉢）
・ 〃 ｂ（軟質瓦質丸火鉢）
・ 〃 ｃ（鍔付角火鉢、掘炬燵）
・ 〃 ｄ（硬質瓦質丸火鉢）
・ 〃 ｅ（土師質角火鉢）
・ 〃 ｆ（軟質瓦質角火鉢）
・ 〃 ｇ（硬質瓦質角火鉢）
・ 〃 ｈ（風炉）
・ 〃 ｉ（火消壺）
・ 〃 ｊ（硬質瓦質筒形火鉢）
・ 〃 ｋ（カマド）
・ 〃 ｌ（土師質筒形火鉢）
○38 －－手焙り
○40 －－油受け皿
・ＤＺ－40－ａ（透明釉、脚付）
・ 〃 ｂ（透明釉、脚無）
・ 〃 ｃ（無釉、脚付）
・ 〃 ｄ（無釉、脚無）
・ 〃 ｅ（透明釉、長脚付）
○43 －－十能
○44 －－ひょうそく
・ＤＺ－44－ａ（無釉、脚付）
・ 〃 ｂ（透明釉、脚無）
・ 〃 ｃ（無釉、脚無）
・ 〃 ｄ（ろうそく状）
・ 〃 ｅ（透明釉、そろばん玉形）
・ 〃 ｆ（施釉、脚付）
■ ・ 〃 ｇ（鉢形、蓋付、舌付。把手付もあり）
○45 －－瓦燈
○46 －－カンテラ
▲ ○47 －－ほうろく
・ＤＺ－47－ａ（丸底）
・ 〃 ｂ（平底）
○48 －－七輪
▲ ・ＤＺ－48－ａ（内部施設を持たない七輪）
▲ ・ 〃 ｂ（内部施設を持つ七輪）
■ ・ 〃 ｅ（内底部に壁状凸帯を有す。コンロ）
○49 －－涼炉
○51 －－塩壺
・ＤＺ－51－ａ（輪積成形、ミなと藤左衛門）
・ 〃 ｂ（ 〃 、一重枠天下一堺ミなと藤左衛門）
・ 〃 ｃ（ 〃 、二重枠天下一堺ミなと藤左衛門）
・ 〃 ｄ（ 〃 、天下一御壺塩師堺見なと伊織）
・ 〃 ｅ（ 〃 、御壺塩師堺湊伊織）
・ 〃 ｆ（板作成形、御壺塩師堺湊伊織）
・ 〃 ｇ（ 〃 、泉湊伊織）
・ 〃 ｈ（ 〃 、小枠　泉州麻生）
・ 〃 ｉ（ 〃 、大枠　 〃 ）
・ 〃 ｊ（ 〃 、泉州磨生）
・ 〃 ｋ（ 〃 、サカイ　泉州磨生　御塩所）
・ 〃 ｌ（ 〃 、泉州麻玉）

・　〃　m（　〃　、泉川麻玉）
・　〃　n（　〃　、御壺塩師難波浄因）
・　〃　o（　〃　、難波浄因）
・　〃　p（　〃　、摂州大坂）
・　〃　q（　〃　、イ津ミ　つた　花塩屋）
・　〃　r（ロクロ成形、御壺塩）
・　〃　s（板作成形、大上々）
・　〃　t（ロクロ成形、三なと久左衛門）
・　〃　u（　〃　、播磨大極上）
・　〃　v（　〃　、大極上壺塩）
・　〃　w（　〃　、筒形、無印）
・　〃　x（鉢形、内湾）
・　〃　y（　〃、直立）
・　〃　z（　〃、碁笥底）
・　〃　aa（輪積成形、無印）
・　〃　ab（板作成形、無印）
・　〃　ac（ロクロ成形、壺形、無印）
・　〃　ad（板作成形、いつミや　宗左衛門）
・　〃　ae（　〃　、堺本湊吉右衛門）
・　〃　af（　〃　、堺湊塩濱長佐衛門）
・　〃　ag（　〃　、泉川麻生）
・　〃　ah（輪積成形、袋状）
■　・　〃　ai（ロクロ成形、三なと作左衛門）

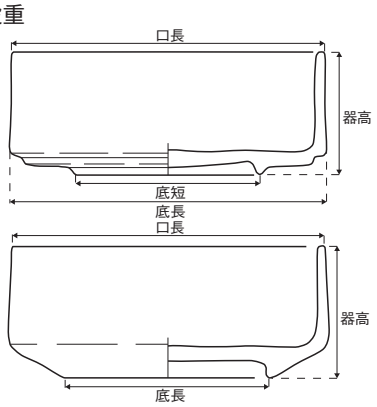
○52 －－燭台
・ＤＺ－52－ａ（筒形）
・　〃　ｂ（薄形、扁平）

○54 －－懐炉
■　○63 －－あんか
▲　○00 －－蓋
・ＤＺ－00－ａ（ドーム形、無印）
・　〃　ｂ（凹形、御壺塩師難波浄因）
・　〃　ｃ（　〃、無印）
・　〃　ｄ（断面逆台形、無印）
・　〃　ｅ（断面長方形、イツミ　花焼塩　ツタ）
・　〃　ｆ（　〃　、深草砂川権兵衛）
・　〃　ｇ（断面長方形、無印）
・　〃　ｊ（ドーム形、いつミや　宗左衛門）
・　〃　ｋ（凸形、無印）
・　〃　ｌ（凸形、なんばん七度　本やき志本）

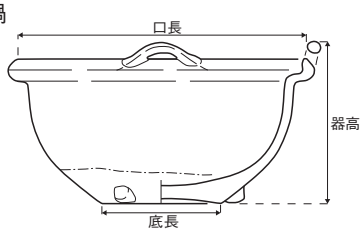
変形皿



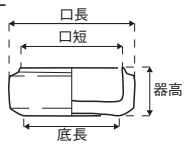
段重



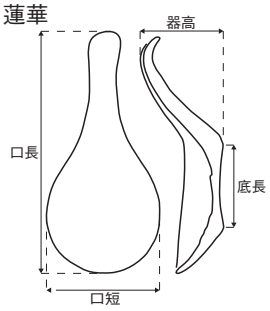
鍋



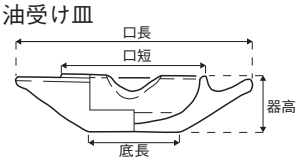
合子



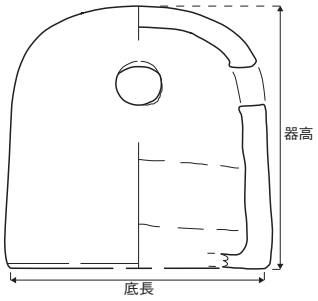
蓮華



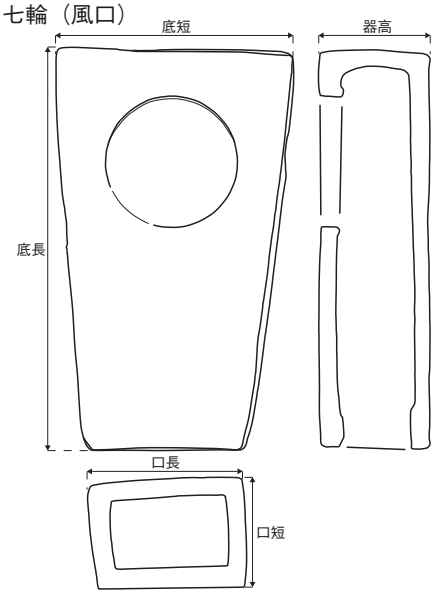
油受け皿



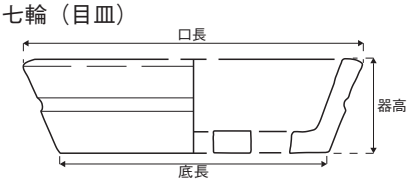
手焙り



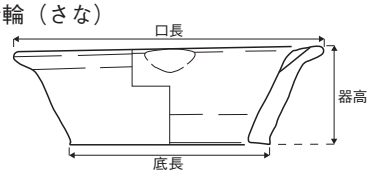
七輪（風口）



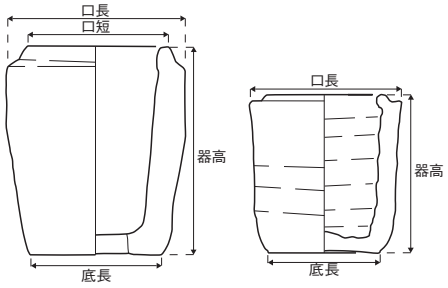
七輪（目皿）



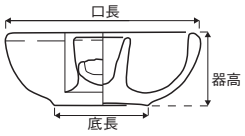
七輪（さな）



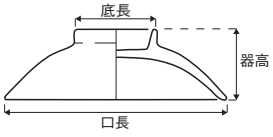
塩壺



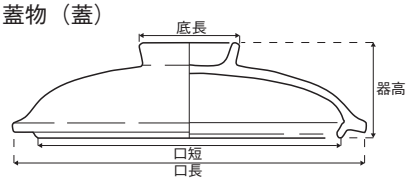
ひょうそく



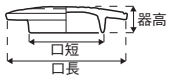
碗（蓋）



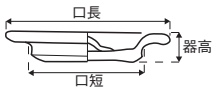
蓋物（蓋）



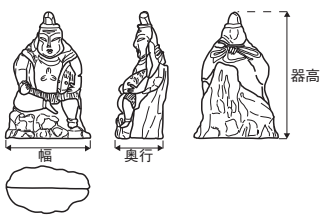
壺・甕（蓋）１

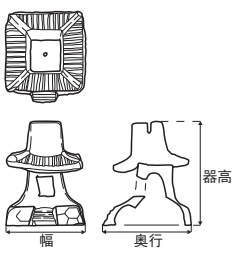


壺・甕（蓋）２

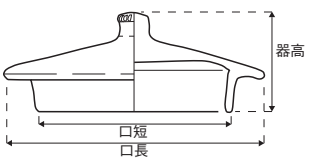


人形・玩具

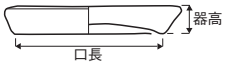




土瓶（蓋）

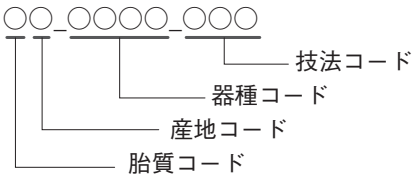


塩壺（蓋）



磁器・陶器・土器・人形・玩具　凡例

コード表記



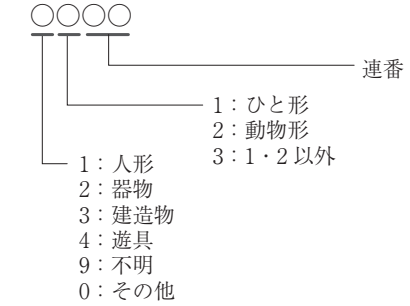
胎質コード

J：磁器（磁質）
T：陶器（陶質）
D：土器（土師質）
R：瓦　（瓦質）

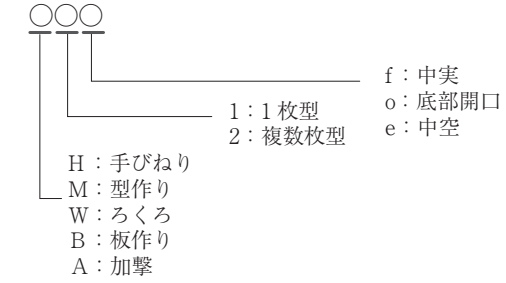
産地コード

A：輸入陶磁
B：肥前系
C：瀬戸･美濃系
D：京都･信楽系
E：備前系
Q：江戸在地系
Z：不明

器種コード



技法コード

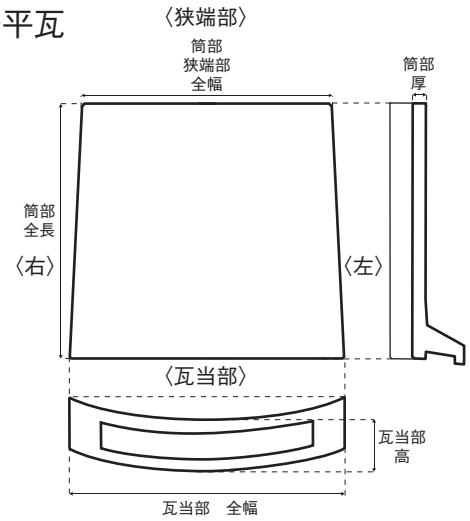


器種コード (詳細）

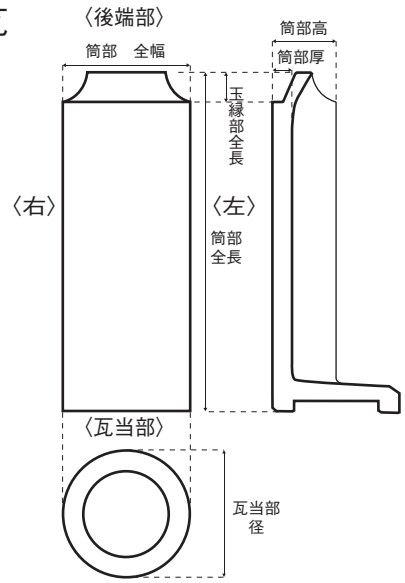
1000	人形								
1100	ひと形								
1101	天神	1102	恵比寿	1103	大黒	1104	福禄寿・寿老人	1105	布袋
1106	不動明王	1107	地蔵菩薩	1108	猩々	1109	西行	1110	衿人形
1111	力士	1112	朝鮮通信使	1113	蹴鞠人形	1114	坊主人形	1115	虚無僧
1116	猟師	1117	猿曳き	1118	福助	1119	笛吹き	1120	若衆
1121	姉様	1122	太夫（花魁）	1123	お多福	1124	三味線弾き	1125	裸婦
1126	おぼこ・禿	1127	唐子	1128	ぶら人形	1129	這子	1130	狆抱き童子
1131	亀乗り童子	1132	狆乗り童子	1133	面持ち童子	1134	金太郎	1135	桃持ち童子
1136	獅子舞	1137	鯛抱き童子						
1200	動物形								
1201	狛犬	1202	獅子	1203	猿	1204	犬	1205	馬
1206	狐	1207	牛	1208	猫	1209	兎	1210	鼠
1211	狸	1212	虎	1213	象	1214	鳩	1215	鶏
1216	鴛鴦	1217	木菟	1218	亀	1219	蛙	1220	鯉
1221	鯛・鯛車	1222	金魚	1223	蝉				
1300	その他（1100･1200以外）								
1301	達磨	1302	首人形	1303	獅子頭	1304	面	1305	陽物
2000	器物								
2001	碗	2002	皿	2003	鉢	2004	銚子	2005	瓶
2006	壺	2007	片口鉢	2008	急須	2009	土瓶	2010	鍋
2011	釜･茶釜	2012	擂鉢	2013	蓋	2014	七厘・焜炉	2015	石臼
2016	竈	2017	器台	2018	硯	2019	水滴	2020	銭貨
2021	五鈷鈴	2022	柚でんぼ	2023	香炉・風炉				
3000	建造物								
3001	祠	3002	塔	3003	城郭	3004	橋	3005	塀・袖垣・石段
3006	民家・庵	3007	灯籠	3008	鳥居	3009	御輿	3010	舟
3011	庭園・背景	3012	仕切り盤						
4000	遊具								
4001	土鈴	4002	独楽	4003	笛	4004	碁石状製品	4005	面模
4006	泥面子・芥子面	4007	土玉	4008	円盤状製品	4009	車輪状製品		
9000	不明								
0000	その他								

人形・玩具分類コード

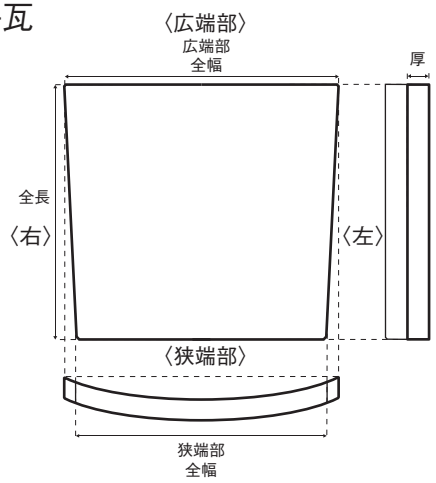
軒平瓦



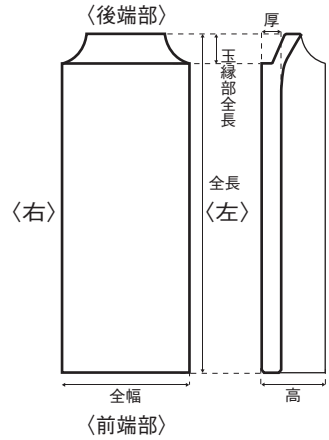
軒丸瓦



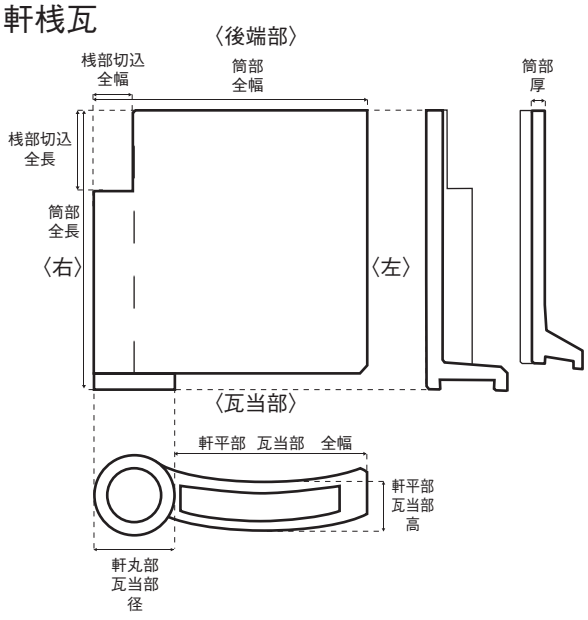
平瓦



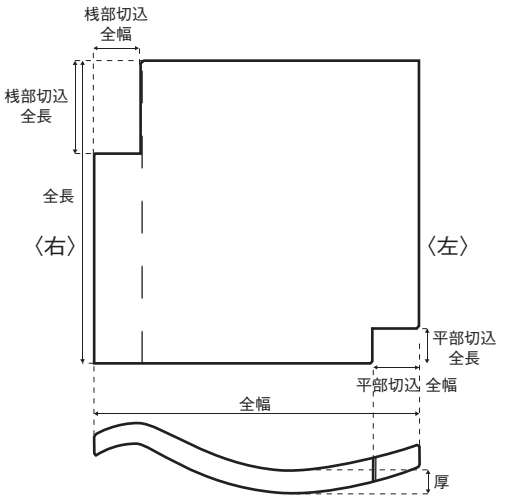
丸瓦



軒桟瓦

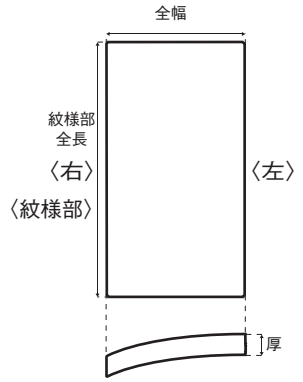


桟瓦

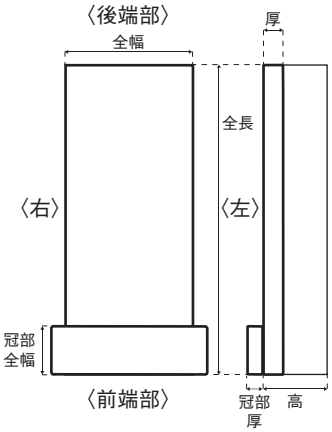


瓦凡例(1)　軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒桟瓦、桟瓦

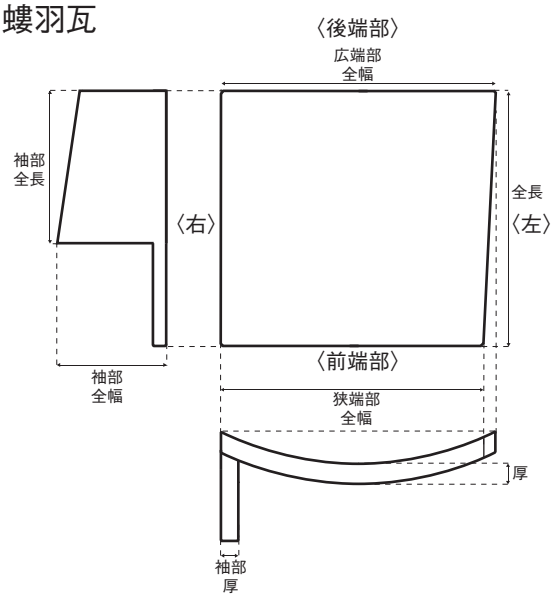
熨斗瓦



冠瓦



螻羽瓦



瓦凡例(2)　熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）
医科学研究所附属病院 A 棟地点発掘調査報告書
報告編

目　　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　調査地点の位置と環境

第１節　調査地点の位置 …… 1
第２節　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯 …… 7
第２節　調査の方法と経過 …… 7
第３節　調査の概要 …… 7
第４節　基本層序 …… 8

遺構一覧 ……13

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　遺構の概要 ……22
第２節　旧石器時代 ……22
第３節　縄文時代 ……23
第４節　江戸時代 ……28

第Ⅳ章　遺　　物 ……68

第Ⅴ章　小　　結 …… 236

引用・参考文献
報 告 書 抄 録

第Ⅰ章　調査地点の位置と環境

第1節　調査地点の位置

調査地点は、東京都港区白金台４－６－１、東京大学白金台キャンパスのほぼ中央、医科学研究所１号館の北側に位置している（2021 年 12 月現在）。

東京大学白金台キャンパスは、現在、「港区 No.135」として周知の埋蔵文化財包蔵地として全域（68,826㎡）が登録準備中である。したがって、それ以前の埋蔵文化財対応は、埋蔵文化財調査室としての判断、および港区教育委員会との協議の上で行われたものである。

白金台キャンパス発掘調査は、1992 年に初めて看護師宿舎の試掘調査を行って以来、現在までに 6 件の事前調査、試掘調査、立会調査を行っている（Ⅰ－１図）。2020 年に計画、実施されたキャンパス北側の囲障改修工事の際には、港区との協議の上で試掘調査を行い、白金台キャンパス全域を埋蔵文化財包蔵地としての登録を視野に発掘調査を実施している（同図 6）。このうち本調査は、医科学研究所新診療棟および総合研究棟（2021 年 12 月現在、「附属病院 A 棟」と称されている）の新営と関連する排水管路修繕に伴う 4 箇所の工事範囲（共同溝）を対象に行った（同図 5）。

第2節　遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

本地点が立地する No.135 遺跡は、渋谷区千駄ヶ谷五丁目付近を源頭とする隠田川と、同代々木元町を中心とした一帯の小支谷を源流とする宇田川が、渋谷駅の東側で合流した渋谷川（古川）と、北沢川・烏山川・蛇崩川が合流する目黒川に挟まれた白金台地に位置する。白金台地は青梅付近を扇頂部とし、西から東へと下っている武蔵野台地の東端に位置し淀橋台に含まれ、地形区分では下末吉面（S 面）に属している [(1)]（Ⅰ－２図）。

白金台地と、渋谷川を挟んで対面し、淀橋台に含まれる麻布台地は、ほぼ白金台地と同程度の 30m をやや超える程度の標高であるが、目黒川を挟んで対面する目黒台地は、24 ～ 26m 前後で低くなっており、地形区分では目黒面（M1b 面）に帰属し、武蔵野面に分類され、武蔵野ローム層以下の下末吉ロームを欠く。下末吉面の離水期は約 12 ～ 13 万年前とされ、武蔵野面より古く、樹枝状に台地に支谷が深く入りこんでいる点が上げられる。また目黒川右岸の目黒台地側の傾斜が緩やかなのに対し、左岸の淀橋台地側は急崖となっている点などに違いがある。

近年、増加したボーリングデータのデジタル化や、国土地理院作成による 5m メッシュの航空レーザー測量成果などが簡易に使用できるようになり、武蔵野台地全体での見直しが行われた。武蔵野台地中央部や北半部で変更があり、白金台周辺には大きい変更は見られなかったが、目黒区北端に位置する大橋・駒場周辺では従来、下末吉面と考えられていた一部が M1b 面（目黒面）に変更されている（遠藤他　2019）。

本地点周辺も上述した支谷が多く入り込み、複雑な地形を形成している [(2)]（Ⅰ－３図）。現在の標高は近世期に大きな改変を受けている可能性が考えられるため、周囲のボーリングデータ [(3)] を参照したところ、No.1 ～ 4 地点でのローム層下部のレベルを比較では、現在の比高差に近い状況であったが、No.5 地点では、表土下から砂層、砂質粘土が検出されており、上部の様相が不明である。No.5 の孔口標高は T.P. 29.00m であり、No.2、No.4 の孔口標高の 29.5m 前後と近似するにもかかわらず、砂層、砂質粘土上面レベルでは、No.2 より 3.7m、No.4 では 6.4m 以上高くなっている。No.5 データのミスの可能性も考えられるが、No.5 周辺では自然地形が大きい改変を受けている可能性が考えられる。また No.135 遺跡の南西部分（矢印部分）では、東側から入り込む谷と西側の窪地が連続しておらず、現在は土橋状を呈しているが、この部分も改変を受けていると思われる。

(2) 歴史的環境

本地点からは近世以前の遺構、遺物として旧石器時代に属する石器が 5 点、縄文時代に属する土器片が 20 点と石器が 1 点、弥生時代に属する土器片 1 点が検出されている。

旧石器時代

港区では旧石器時代の遺跡はやや希薄で、現時点で 7 遺跡が登録されているにすぎない。しかしまとまって当該期の遺物が検出された遺跡として、本地点から南西約 400m の位置に、旧白金御料地内武家屋敷遺跡が存在する（Ⅰ－３図）（No.69　白金館址（特別養護老人ホーム建設用地）遺跡調査団　1988）。この遺跡では西から東へ下る緩斜面上で、立川ロームⅣ層中より 11 点の石器が 600 点を超える礫群と共伴し出土している。出土位置は北から南へと深く入り込む小支谷の谷頭付近に位置している。

港区外では北西約 900m 地点の渋谷区恵比寿遺跡で、角錐状石器と剥片の 2 点が立川ローム層Ⅴ層上部から出土している（Ⅰ－ 2 図）（恵比寿・三田埋蔵文化財調査会　1993）。

また、恵比寿遺跡から西へ約 540m 地点の目黒区茶屋坂遺跡で、立川ローム層Ⅳ層より礫群が検出されナイフ形石器、剥片が供伴している（Ⅰ－ 2 図）（目黒区遺跡調査会　1994）。

この茶屋坂遺跡の目黒川を挟んで対岸に位置する中目黒遺跡では、これまでに A ～ C 地点の 3 回調査が行われている（Ⅰ－ 2 図）。A 地点では、8 箇所で 1,000 点を超える礫群と、3 箇所の石器集中部から 287 点の石器が北から南へとわずかに下る緩斜面上の立川ローム層Ⅳ層上部より出土している（中目黒遺跡調査団　1981）。A 地点から北に 200m の B 地点でも、9 箇所の遺物集中地点、15 箇所の礫群が、立川ロームⅢ、Ⅴ～Ⅵ層で出土している（目黒区中目黒 4 丁目遺跡調査会　1994）。C 地点では、立川ロームⅦ層よりスクレイパー・二次加工のある剥片・調整加工のある剥片を含む石器 19 点、礫 1 点が検出されている（東京ガス都市開発株式会社　目黒区中目黒遺跡（C 地点）調査会 1998）。

縄文時代

本地点では縄文時代に属する陥穴と思われる遺構が 3 基検出されているが、遺物の出土量は極めて少なく、自然堆積層から土器片が 13 点と、近世の遺構・包含層から 7 点の土器片と、鏃と思われる小破片が出土している。自然堆積層から出土した土器は、無文の胴部細片で、帰属時期を特定するのが難しいが、胎土、厚み、調整から後～晩期に属すると考えられる。出土した層位は漸移層上部の褐色土中で、後期から弥生時代の遺物を包含するⅡ Y 層に相当するかと思われる。周囲にはまとまった出土量を持つ遺跡が少ないが、本地点の南西約 600m 地点に品川区上大崎貝塚（品川区 No.1）があり、前期の貝塚として登録されているが、文献が確認できず詳細は不明である。

また本地点で出土した土器片の主である後～晩期を主体とする遺跡は、周辺には見つかっていない。

江戸時代

江戸時代と近代の歴史的環境については、研究編で詳述するので、ここでは簡単に触れたい。江戸時代初頭の当該地は、未開発の地域であった。明暦 3（1657）年頃を描いたとされる「江戸大絵図」（三井文庫所蔵）（Ⅰ－ 4 図）を見ると当該地域は、中原街道両側に途切れ途切れに町地が区画されるのみで、南側が「畑」、北側は松林の絵が描かれているに過ぎない。渋谷氏の文献調査では、大村藩が白金屋敷を拝領するのが寛文元（1661）年とされる。寛文 10 ～ 13 年に描かれた「新板江戸大絵図」（Ⅰ－ 5 図）では、街道沿い北側には、「町」、「畠」、「松平アワ」、「コトウアワヂ」と共に「大村イナバ」の名前が見える。これらの屋敷の拝領もこの段階で行われており、人の活動もこの段階以降に活発化したと見て良い。かつその文字は北側の「五嶋坂」に向けて書かれており、屋敷の正門は北側の道に面していたと推定される。

Ⅰ－ 6 図は、幕末嘉永 7（1854）年の刊行した「尾張屋板江戸切絵図」の「白金絵図」である。これを見ると街道沿いには白金四丁目からつづく町屋があり、街道に向けて「松平阿波守」、五嶋坂に向けて「五島左エ門尉」と「大村丹後守」の名前があり、「新板江戸大絵図」と基本的な変化はない。

渋谷氏によると、この間宝暦年間以降、相対替によって上屋敷を拡大しているが、その相対地を白金下屋敷のうち 558 坪とした。しかし、内実は拝領屋敷の売買で、白金屋敷内の替地を所持し続けたことが指摘されている。詳細は、研究編渋谷別稿を参照されたい。

近代

明治 4（1671）年、同 6 年の東京府行政区画改定によって、調査区は第 7 大区 1 小区白金村となる。明治 20 年の内務省地理局作成「東京実測図」（Ⅰ－ 7 図）では、地割りは存在するように描かれているが、ケバ線のみで明確な土地利用は不明である。当地に医科学研究所の前身である伝染病研究所が移転したのは、明治 38（1905）年 11 月である（移転当時は内務省所管）。その後、大正 3（1914）年に所管が文部省、さらに大正 5（1616）年に東京帝国大学の附置研究所に移管した。現在の医科学研究所は、昭和 42（1967）年の改組による。Ⅰ－ 8 図は大正 6（1917）年の研究所内の建物配置である。これら建物のうちレンガ建物であった 1 号本館などは、大正 12（1923）年に起こった関東大震災によって大きな被害を受けたが、本館を含めて昭和 10（1935）年前後までに移転当初の建物はおおむね改築されている。

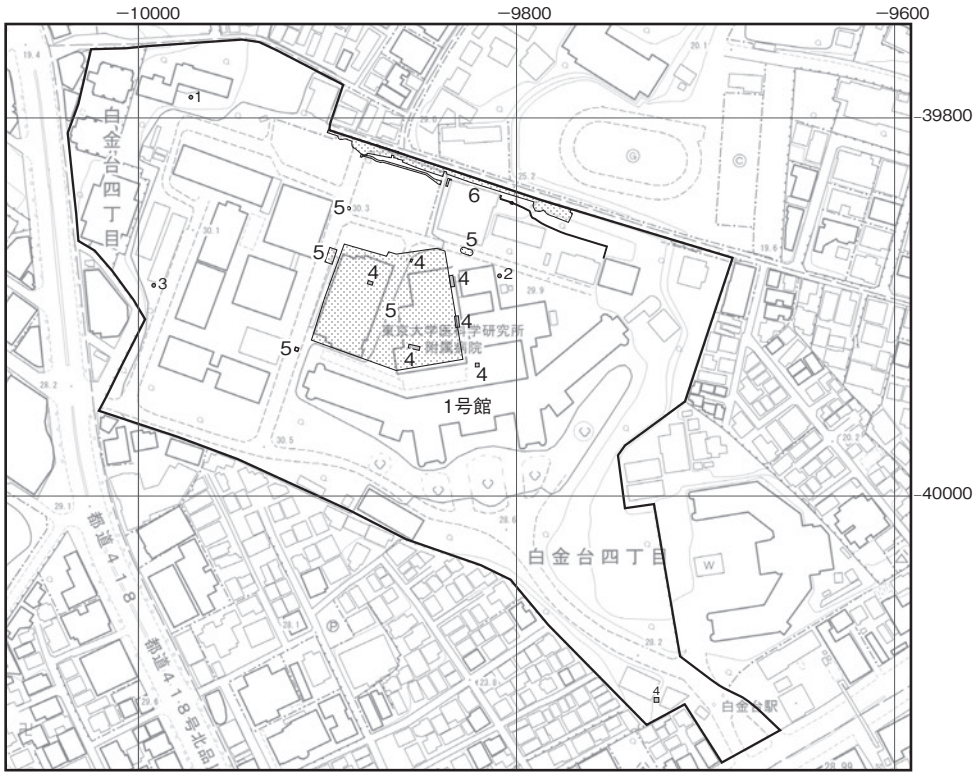
【註】

(1) 国土地理院の基盤地図情報数値標高モデル（https://www.gsi.go.jp/kiban/）から 5m メッシュの標高データを元に DEM を作成した。旧石器時代の遺跡位置は、東京都遺跡地図情報インターネット提供サービス（https://tokyo-iseki.metro.tokyo.lg.jp/）を参照し配置した。

(2) Ⅰ－ 1 図同様に国土地理院の基盤地図情報数値標高モデル（https://www.gsi.go.jp/kiban/）から 5m メッシュの標高データを元に DEM を作成し、esri 社 ArcGIS Pro の開析

ツールであるフォーカル統計を使用しDEMを近傍解析操作によってフラット化し、コンターを作成した。また5mメッシュの標高データは建物の影響による標高の補正がなされ、周囲との比高差が大きいため、建物範囲のデータを消去しDEMを作成した。

(3) 東京都建設局東京の地盤（GIS版）（https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jigyo/tech/start/03-jyouhou/geo-web/00-index.html）のボーリングデータ（番号41200020、41200197、41200016）および2021年に行われたNo.135遺跡内でのボーリングデータを使用した。



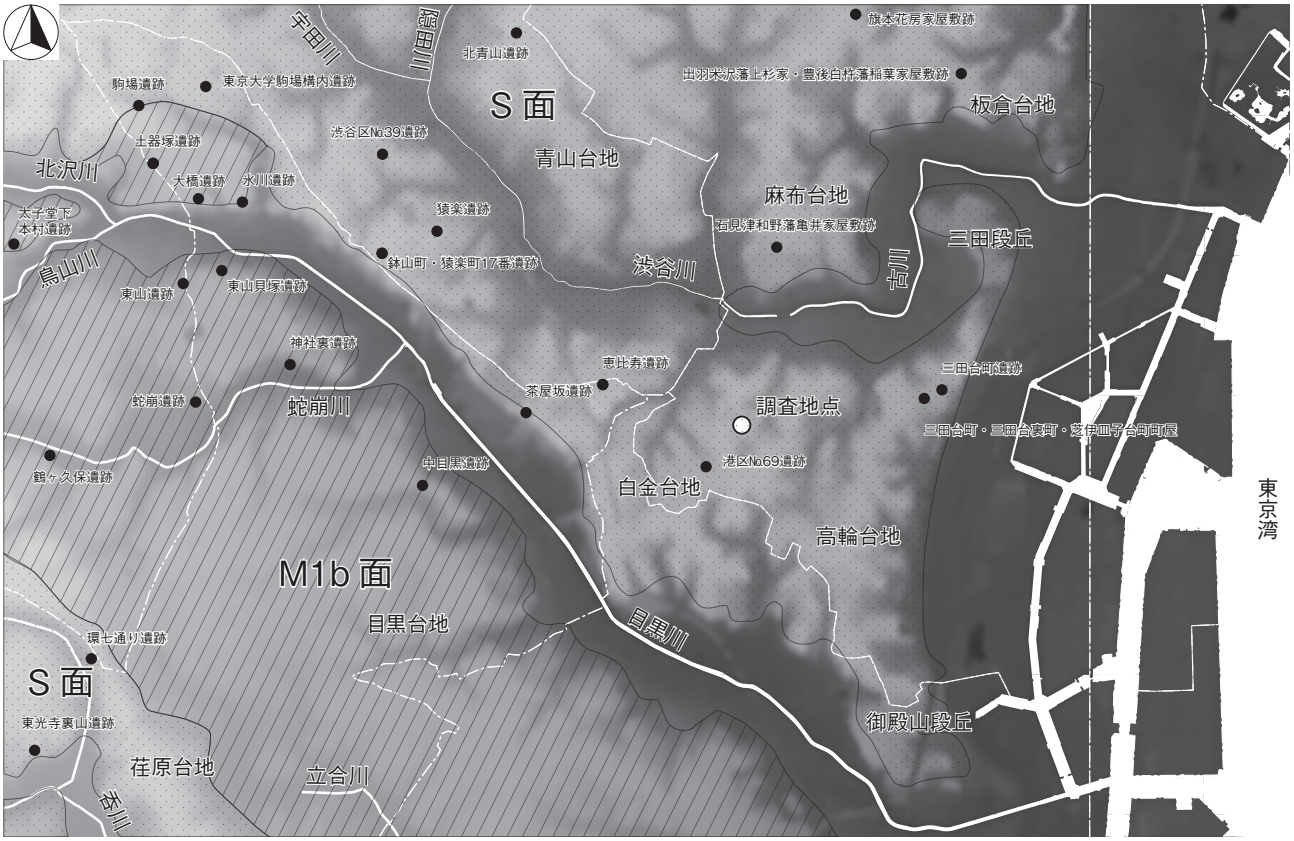
白金台構内調査地点

世界測地系
S=1/4000

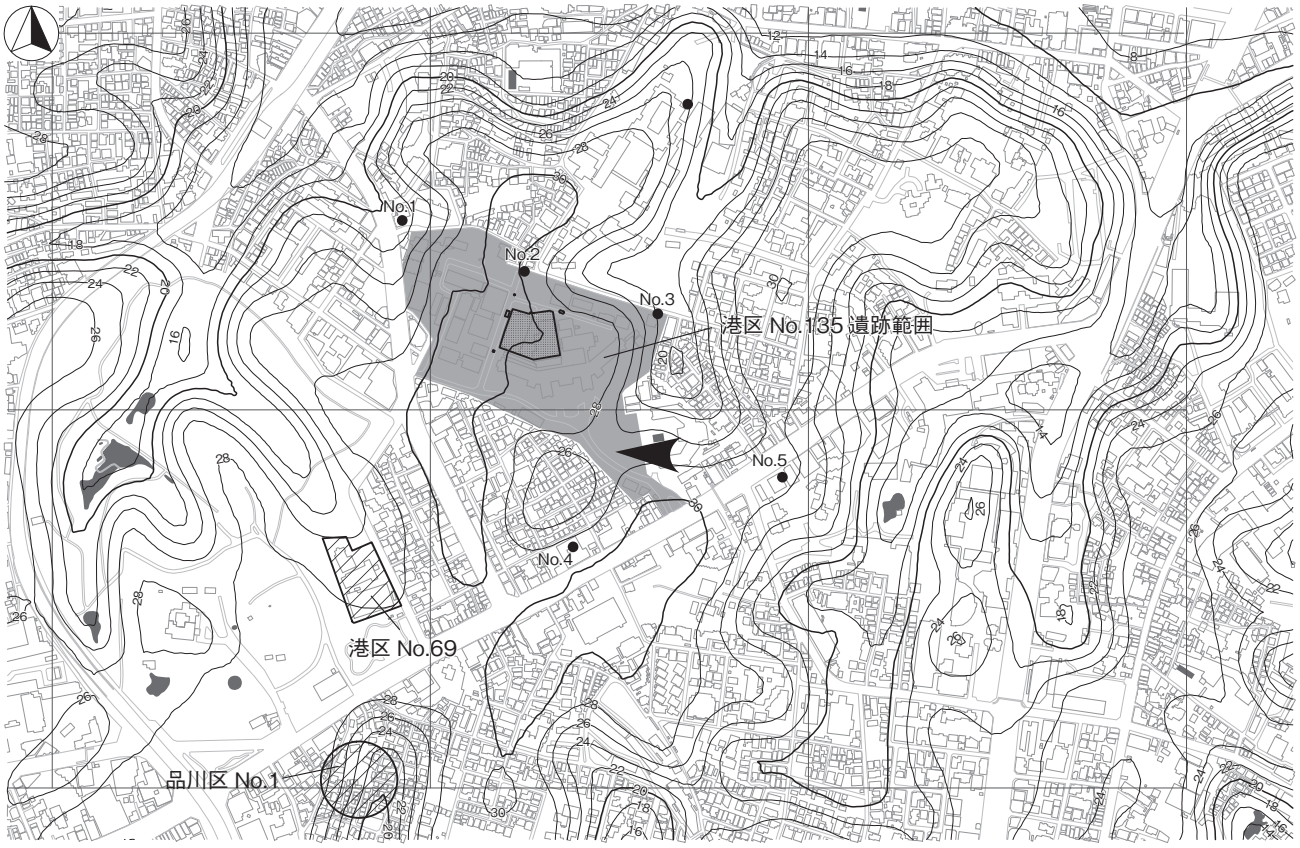
白金台構内調査一覧

構内	番号	年度	略称(旧略称)	調査名[旧名称]	調査種別	調査期間	面積(㎡)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
白金台	1	1992	−	医科学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	2	1994	−	医科学研究所MRI−CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	3	1995	−	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
白金台	4	2000	−	医科学研究所附属病院診療棟・ 総合研究棟新営	試掘	2000.7.5〜7	53	追川	江戸
白金台	5	2000	SBS00	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟	事前	2000.10.27〜2001.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
白金台	6	2021	−	白金台囲障改修	事前	2020.2.3、6.3、2021.2.1〜 6.21	593	堀内・香取	近世

I−1図　調査地点位置図

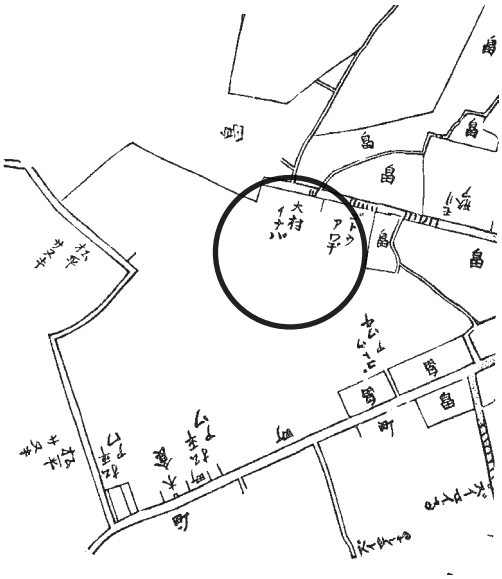


Ⅰ−2図　周辺の地形区分と旧石器時代の遺跡（1:50000）



Ⅰ−3図　調査地点周辺の地形（1:10000）

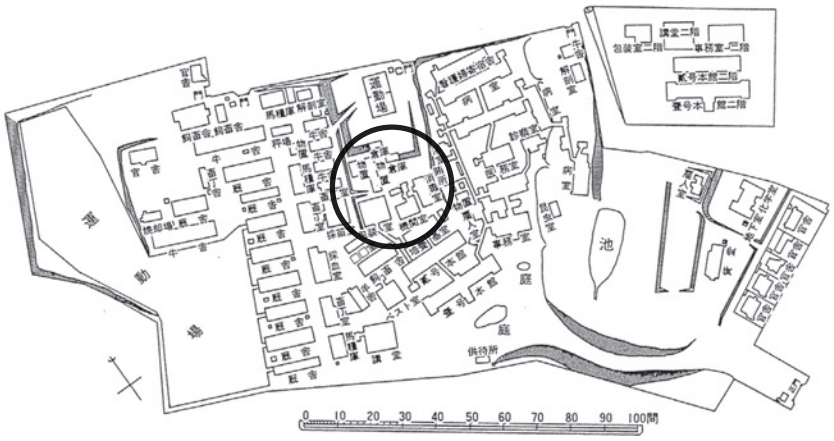
I-4図 「江戸大絵図」(明暦3年頃)
三井文庫所蔵



I-5図 「新板江戸大絵図」(寛文10～13年)

I-6図 「尾張板江戸切絵図 白金絵図」(嘉永7年)

I-7図 「東京実測図」(明治20年)
東京都港区三田図書館 1972より抜粋



I-8図 東京帝国大学伝染病研究所建物配置(大正6年)
東京大学医科学研究所 1992より抜粋

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

平成 12（2000）年度春に東京大学施設部から埋蔵文化財調査室に、港区白金台にある医科学研究所内の１号館北側に新営予定の新診療棟および総合研究棟建設に伴う埋蔵文化財調査に関する照会があった。新校舎建設予定地は、当時、周知の埋蔵文化財包蔵地としての登録はされておらず、かつ、1992 年の看護師宿舎、1994 年の MRI-CT 棟、1995 年のヒトゲノム解析センター棟建設に伴う試掘調査では､埋蔵文化財が確認されなかったが、本工事が 4,000㎡を超える開発面積を有していることで、調査区内において試掘調査を行い、埋蔵文化財の有無を確認することとなった。

試掘調査は、2000 年７月５～７日にかけて既存の建物周囲に６箇所の試掘トレンチを設定、計 60㎡に対して行った。調査の結果、２箇所の試掘トレンチから江戸時代の遺構、遺物が確認され、加えて対象地域が台地端部から谷へと続く傾斜地であることから、旧石器時代あるいは縄文時代の遺跡も想定された。

第２節　調査の方法と経過

試掘調査の結果を踏まえ、港区教育委員会と協議を行い、建築予定地域内全域について記録保存のための発掘調査を行うこととなった。本調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、同室員の堀内秀樹、大成可乃が調査担当となった。

発掘調査は､建物建設予定地全域を対象にして行った。調査面積は、4,280㎡である。調査はグリッド法を用いて行った。グリッドは、10ｍ四方のグリッドを設定し、その表記は東西方向はアルファベットを用いて東から西方へ、南北方向（真北）にアラビア数字を用いて北から南へ降順に表記した。

本調査は、同年 10 月 27 日から開始し、翌 2001 年３月９日に終了した。準備工の後、１月 30 日より重機による表土掘削を開始、調査区北西の傾斜地上部から近代以降に堆積した盛土の除去を行った。北西部では近代以降の盛土を剥がすと硬化面が検出された。硬化面にはレンガ片が含まれていたことから、近代の硬化面と推定された。硬化面以下は、関東ローム層が確認され、硬化面と共にそこから切り込まれていた落ち込みの除去も行い、ローム層上面で遺構確認を行った。重機掘削は調査区北側を先行して行い、調査区の地形傾斜および堆積層の確認しながら進めた。調査区内の地形は、西から東に緩やかに傾斜する斜面であることが確認され、おおむね E ライン付近から、ローム土上層に自然堆積による黒色土が確認され、以東の遺構確認面（東壁 sec から北半分は C 面、南半分は A 面）とした。

調査開始直後の 11 月４～13 日の間、工事をめぐり近隣住民とのトラブルが発生し、現場作業の中断を余儀なくされた。11 月 14 日に重機掘削を再開し、同時に重機掘削が終了した調査区北西側から遺構確認を開始した。重機掘削の過程で東側を中心にレンガ・コンクリートで構築された伝染病研究所時代の基礎が確認されたが、工期の関係で全ての記録を取ることができなかった。重機掘削は、調査区の傾斜を確認した後、東側から西側に向かって行い、12 月 26 日に終了した。

遺構の調査は、12 月 11 日より調査区北西側から開始、江戸時代に比定される井戸、土坑、ピットなどが比較的粗に確認された。同月 20 日に F1 ～ G2 区付近の江戸時代の調査を終了し、旧石器時代の試掘坑を設定し調査を開始した。並行して、12 月 14 日から A1 区にある共同溝竪坑（Ⅱ－１図１）の調査を開始、現表下約 6m で自然堆積の黒色土を確認、上面にて遺構確認を行ったが、遺構は確認されなかった。年末から調査区西側にあった旧動物舎によって削平を受けた E4 ～ G5 区付近の遺構確認と調査を開始し、G4 区から縄文時代の陥穴を確認した。年明けから調査区北西､および北側に範囲を広げ、縄文時代までの調査終了後、旧石器時代の調査を行い、武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅳ層から、彫器、尖頭器、剥片が出土した。

１月 19 日からは、調査区最大の遺構である SK207 とその周辺、１月 22 日からは調査区中央以東に確認された段切り、版築と建物址および周辺の調査を開始、それぞれ２月 26 日、２月 22 日に終了した。版築下および旧石器の調査を行い、３月９日に全ての野外調査は終了した。

第３節　調査の概要

発掘調査で確認された埋蔵文化財は､遺構が縄文時代、江戸時代、遺物が縄文時代、弥生時代、江戸時代に比定されるものであった。調査区は､「第Ⅰ章 第２節 遺跡の地理的・歴史的環境」でも記述したが、台地北側を東流する渋谷川から伸びる支谷の谷頭部にあたり、調査区東北側が最も低く、西側に向かって上がっている。

現状では、近代以降に谷部を埋めた盛土によって平坦化されており、それを除去すると江戸時代に旧地形を一部改変した大村藩白金邸が検出される。江戸時代の遺構の分布は調査区が傾斜地であることで総じて希薄である。調査区西側の比較的標高が高いエリアでは、SK1、SK218 など 17 世紀後半の遺構が確認されるが、傾斜地を有効利用するための段切りとその後の版築が調査区中央から谷部にかけて 19 世紀前葉ころに行われ、版築下に建物址とそれに付随する遺構群が確認された。また、その東側谷部にかけては、SK258、SX267、SK583 などの遺物が多く出土する不定形の中～大型土坑が確認され、遺物の年代から 18 世紀後半以降、藩邸内で谷部付近が廃棄の場であったと考えられる。

調査区で最も大きな遺構である SK207 は、調査区東側長屋範囲より谷側に位置し、多量の焼土、焼瓦と共に二次的に被熱した 19 世紀中葉の陶磁器・土器類が多く出土した。これらから火災による一括廃棄と判断されたが、文献史料との照射から安政元（1852）年の屋敷全焼に伴うものと推定された。火災の後始末のための廃棄土坑を空間地である谷部に作り、片付けに利用したと考えられる。

縄文時代の遺構は、G4 グリッドから陥穴が 3 基の他、不整形の落ち込みがいくつか確認されている。遺物は、前期、後・晩期と推定できる土器が少量確認されているが、いずれも遺構に伴っていない。

旧石器時代の遺物は、武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅳ層から尖頭器、彫器、フレイクがそれぞれ 1 点ずつ出土している。

第 4 節　基本層序

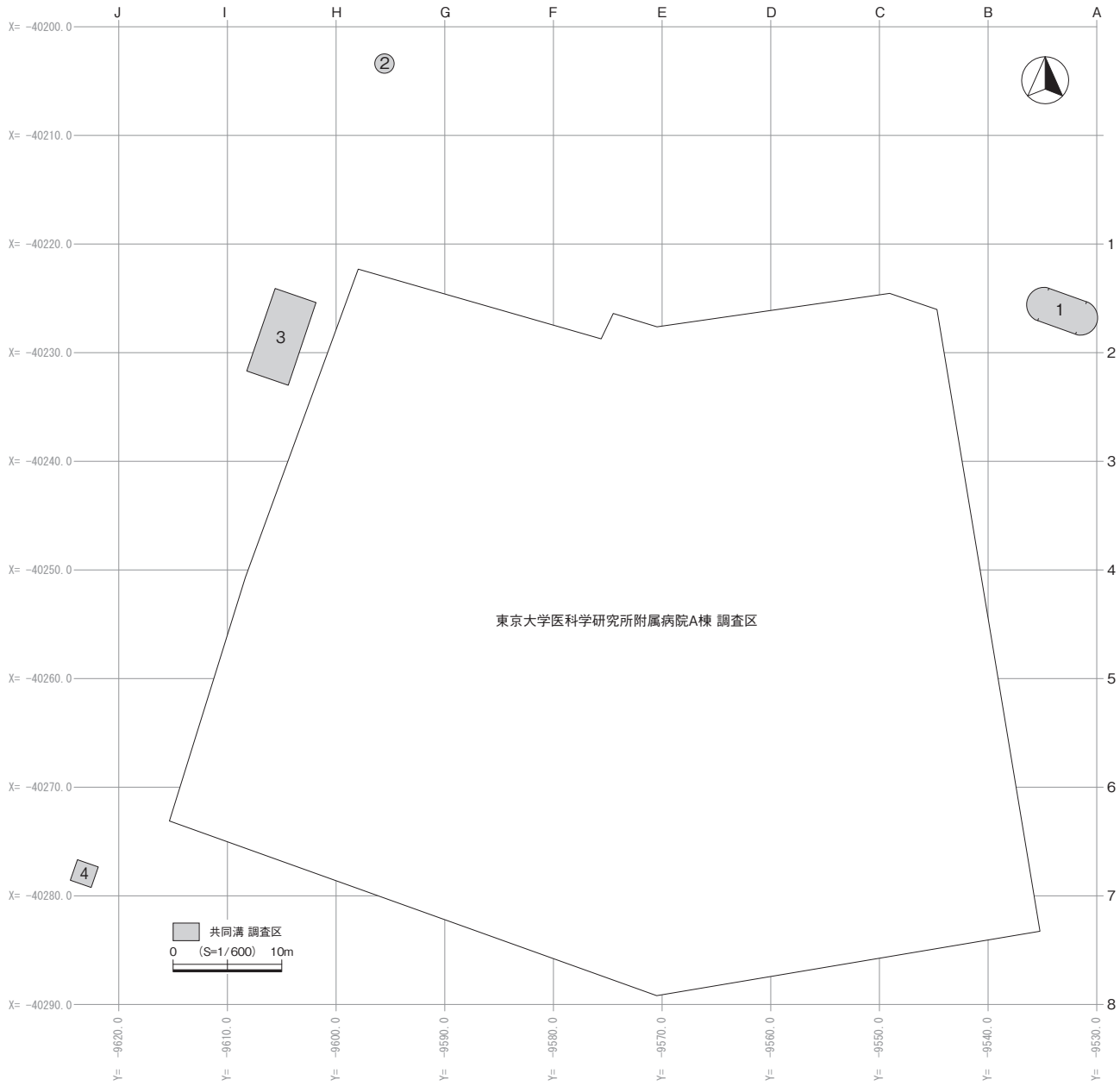
前節でも記したが、調査区は渋谷川から南へ伸びる支谷の谷頭部にあたり、調査区東北側が最も低く、西、南側に上がる地形であり、東側（谷側）下層には黒色土（自然堆積層）を中心とした土層堆積が確認されている。最も低い B ライン付近では黒色土下層から漸移する事なく明瞭にローム層との境が視認できることで、水による浸食が想定される。おおむね調査区 E ライン以西は緩やかに降る緩斜面であるが、E ラインを境に東側には急激に下がっており、標高 29m 付近で地形の転換点になっている。段切り・版築による平坦地業が、E ライン東に沿って行われたのはこうした理由による。E ライン以西は表土下は関東ローム層が現れるが、後世の削平を受けていない場所はⅢ層から確認できる。尖頭器が出土した F6 グリッド試掘坑は、調査区最東端付近にあり、最上層のソフト化したローム層中から確認された。出土層位はⅢ層に相当すると考えているが、谷側のローム層はやや土壌化しており、明確な対比は行えなかった。

本遺跡の遺構確認面

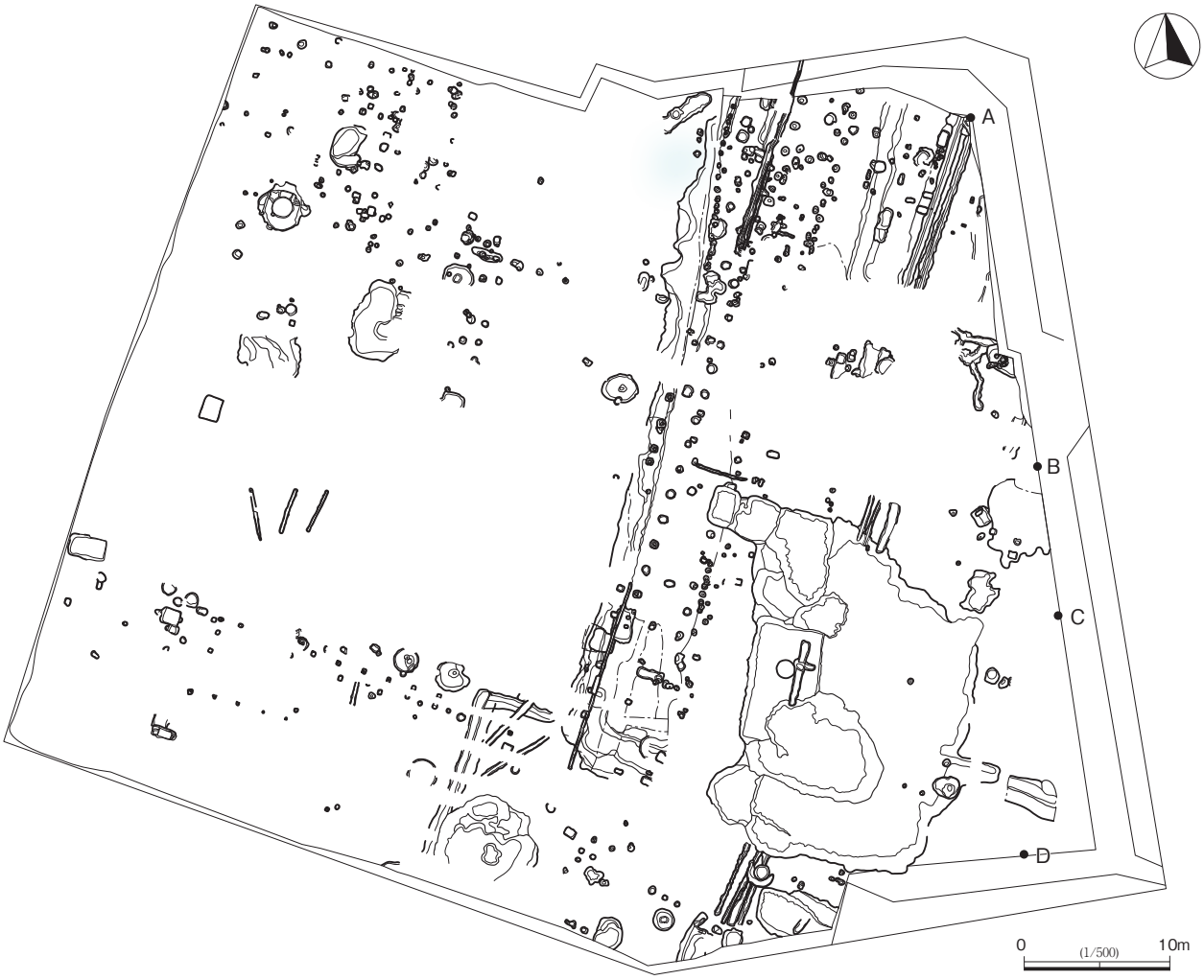
A 面：重機掘削直後の遺構検出面。調査区南東部の埋積谷部分のみで検出

B 面：おおむね F ～ D ライン付近の埋積谷西側立ち上がり付近斜面地で関東ローム層直上で検出した黒色土面。

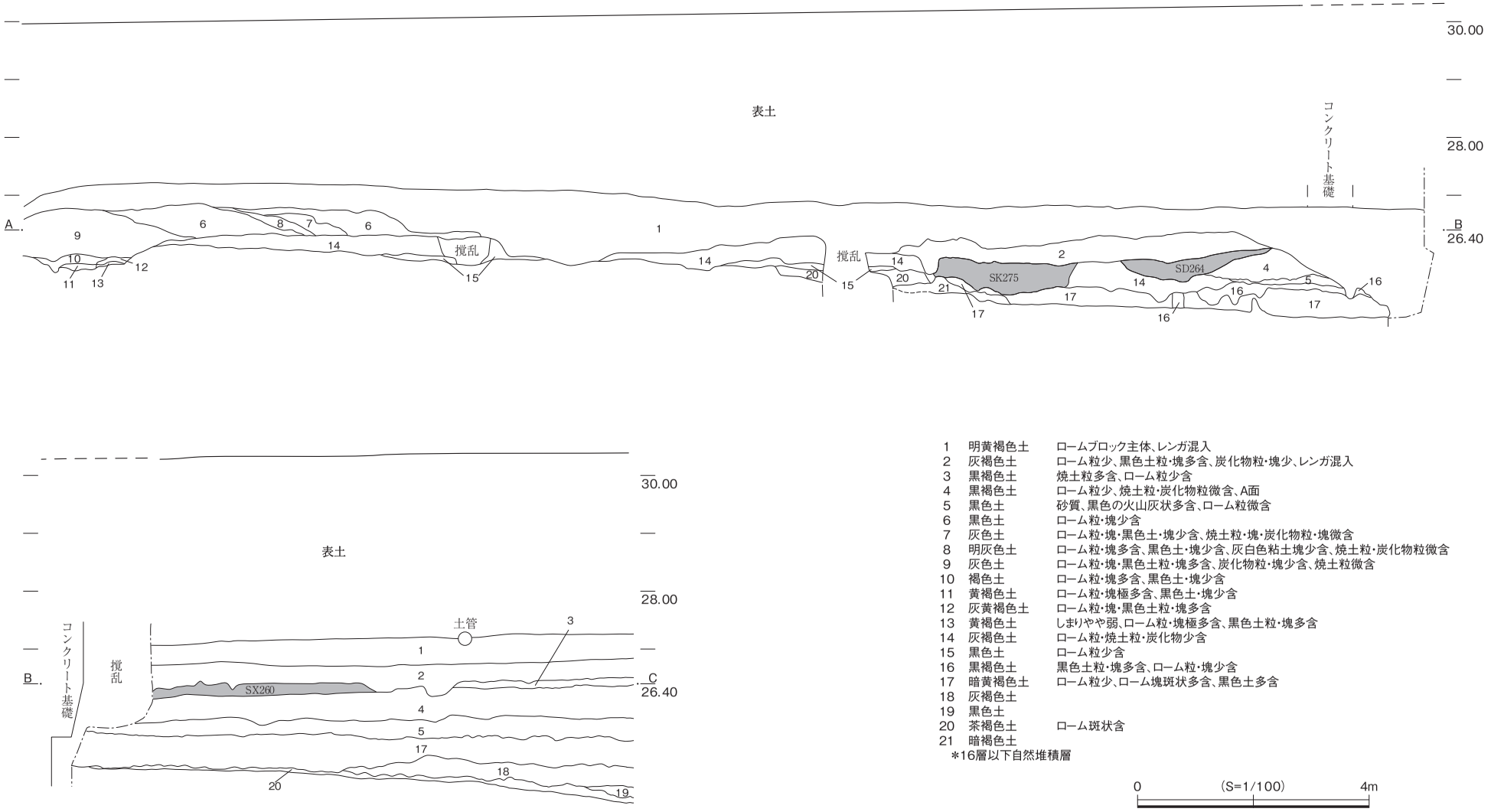
L 面：関東ローム層上面である。調査区のおおむね E ライン西側は近代以降に埋められた盛土以下はローム層が確認された。また、調査区中央おおむね E ～ C グリッド付近の版築層下にはローム層が確認された。こうした遺構の確認面を L 面と命名した。


J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
X= -40200.0
X= -40210.0
X= -40220.0
X= -40230.0
X= -40240.0
X= -40250.0
X= -40260.0
X= -40270.0
X= -40280.0
X= -40290.0
1
2
3
4
東京大学医科学研究所附属病院A棟 調査区
共同溝 調査区
0 (S=1/600) 10m
Y= -9620.0
Y= -9610.0
Y= -9600.0
Y= -9590.0
Y= -9580.0
Y= -9570.0
Y= -9560.0
Y= -9550.0
Y= -9540.0
Y= -9530.0

Ⅱ-1図　調査範囲



Ⅱ-2図　基本層序ポイント位置図

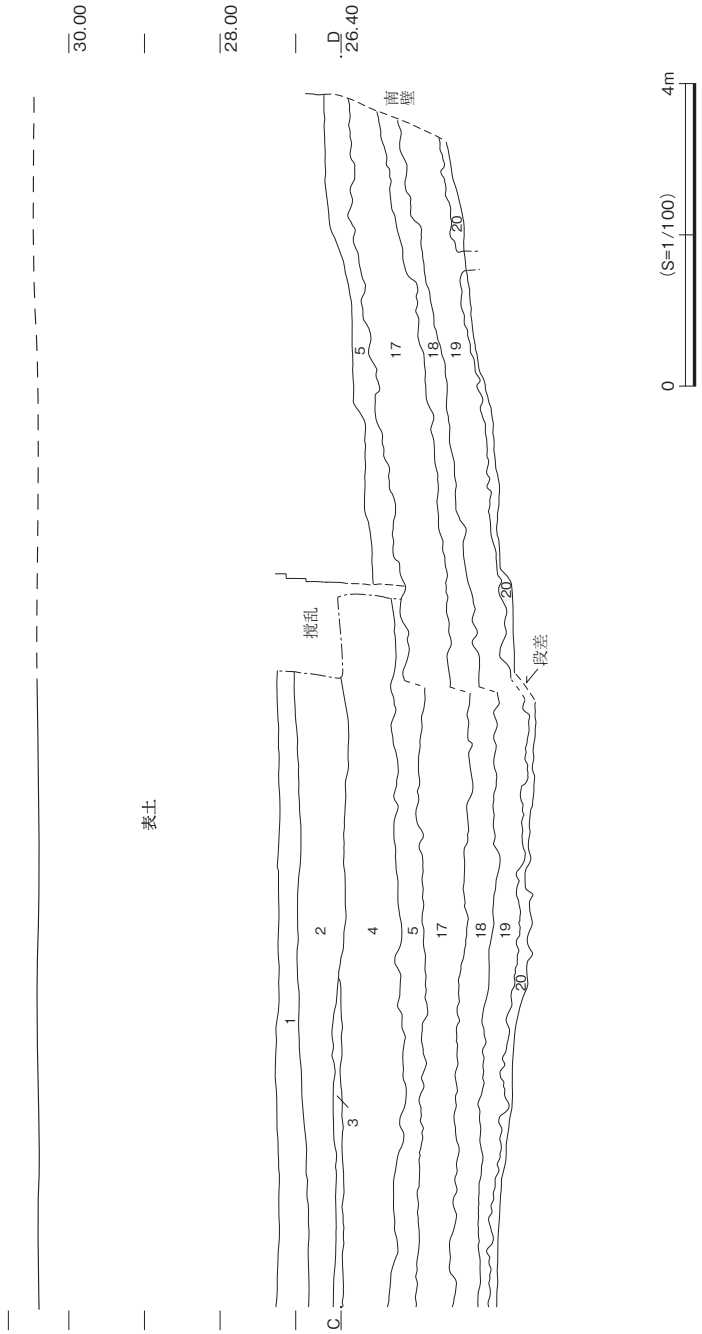


1	明黄褐色土	ロームブロック主体、レンガ混入
2	灰褐色土	ローム粒少、黒色土粒・塊多含、炭化物粒・塊少、レンガ混入
3	黒褐色土	焼土粒多含、ローム粒少含
4	黒褐色土	ローム粒少、焼土粒・炭化物粒微含、A面
5	黒色土	砂質、黒色の火山灰状多含、ローム粒微含
6	黒色土	ローム粒・塊少含
7	灰色土	ローム粒・塊・黒色土・塊少含、焼土粒・塊・炭化物粒・塊微含
8	明灰色土	ローム粒・塊多含、黒色土・塊少含、灰白色粘土塊少含、焼土粒・炭化物粒微含
9	灰色土	ローム粒・塊・黒色土粒・塊多含、炭化物粒・塊少含、焼土粒微含
10	褐色土	ローム粒・塊多含、黒色土・塊少含
11	黄褐色土	ローム粒・塊極多含、黒色土・塊少含
12	灰黄褐色土	ローム粒・塊・黒色土粒・塊多含
13	黄褐色土	しまりやや弱、ローム粒・塊極多含、黒色土粒・塊多含
14	灰褐色土	ローム粒・焼土粒・炭化物少含
15	黒色土	ローム粒少含
16	黒褐色土	黒色土粒・塊多含、ローム粒・塊少含
17	暗黄褐色土	ローム粒少、ローム塊斑状多含、黒色土多含
18	灰褐色土	
19	黒色土	
20	茶褐色土	ローム斑状含
21	暗褐色土	

＊16層以下自然堆積層

0　(S=1/100)　4m

Ⅱ-3図　調査区東壁セクション（1）



Ⅱ-4図　調査区東壁セクション（2）

遺構一覧表

＊土層注記を含む遺構一覧表は CD-ROM に収録

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SK	1		L	G2	18	1、2	315	180	76		17後		
SE	2		L	G2	18	2～5	297	295	(307)		18中～後	○	201の被熱遺物と遺構間接合
SP	3		L	G1			54	40	19				
SP	4		L	G1			60	52	28				
SP	5		L	G1			31	27	22				
SP	6		L	G1			37	22	17				
SP	7		L	G1			(29)	25	18	7>8			
SP	8		L	G1			36	33	10	7>8			
SP	9		L	G1			33	26	8				
SP	10		L	G1			27	25	32				
SP	11		L	H2			(19)	23	19				
SP	12		L	G1			27	19	12				
SP	13		L	G1			22	17	12				
SP	14		L	G2			36	28	11				
SP	16		L	G2			22	19	10				
SP	17		L	G2			29	25	7				
SP	18		L	G2			(39)	50	20				
SP	19		L	G1、H1			61	(29)	34				
SP	21		L	G1			42	40	14				
SP	22		L	G1			(50)	41	16				
SP	23		L	G1			32	25	27				
SP	24		L	G2			(20)	29	8				
SP	25		L	G2			(23)	29	11				
SP	26		L	G2			33	30	23				
SP	27		L	G2			54	33	22				
SP	28		L	F1、G1			42	31	23				
SP	29		L	F1			30	28	42				
SP	30		L	F1			25	20	7				
SP	31		L	F1			(17)	21	13				
SP	32		L	F1			46	34	35				
SP	33		L	F1			32	28	21				
SP	34		L	F1			(30)	(28)	15				江戸以前
SP	38		L	F1			34	21	8				
SP	39		L	F1			37	33	9				
SP	40		L	F1、F2			(27)	(43)	16	43と不明			
SP	41		L	F1			(11)	22	6				
SP	42		L	F1、F2			26	20	13				
SP	43		L	F2			29	28	5	44>43、40と不明			
SP	44		L	F2			(42)	24	8	44>43、45			
SP	45		L	F2			(59)	50	18	44>45			江戸以前
SP	46		L	F2			51	(24)	7				
SP	47		L	F1、F2			38	29	8				
SP	48		L	F1、G1			34	33	19				
SP	49		L	G1			41	41	9				
SP	50		L	G1			(32)	(26)	11				
SP	51		L	F1、G1			40	36	14				江戸以前
SP	52		L	F1、G1			73	50	32				
SP	54		L	F2			(29)	23	14				江戸以前
SP	55		L	F2			(26)	(31)	13				
SP	56		L	F2			(29)	(18)	15				
SP	57		L	F1			32	(24)	14	57>81			
SP	60		L	F2			36	(30)	10	88>60			
SP	61		L	F2			57	51	61				
SP	62		L	F2			36	(22)	10				江戸以前
SP	63		L	F2			62	39	8				江戸以前
SP	64		L	F2			37	36	64				
SP	65		L	G2			52	41	5				
SP	66		L	G2			37	35	16				
SP	67		L	F2、G2			62	50	14				
SP	68		L	G2			33	30	7	68>69			
SP	69		L	G2			55	39	7	68>69			江戸以前
SP	70		L	G2			(38)	33	13				
SP	71		L	G2			(44)	37	15				
SP	72		L	G2			68	62	24				
SP	73		L	G2			34	31	11				江戸以前
SP	74		L	F2			44	38	11				江戸以前
SP	75		L	F2			34	33	20				
SP	76		L	F2、G2			38	24	11				江戸以前
SP	77		L	F2、G2			30	27	13				江戸以前
SP	78		L	F2			28	28	12				江戸以前
SP	79		L	G2			35	33	39				江戸以前
SP	80		L	F1			29	27	14				
SP	81		L	F1			(46)	47	19	57>81>99			

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	82		L	F1			(37)	35	18	82>100			
SP	85		L	F2			50	(40)	14				
SP	86		L	F2			(64)	(32)	25				
SP	87		L	F2			(28)	26	15				
SP	88		L	F2			36	25	6	88>60			
SP	89		L	F2			(29)	(23)	20				
SP	91		L	F2			70	39	10				
SP	92		L	G2			35	27	9				
SP	93		L	G2			30	28	12				
SP	94		L	F2			35	28	13				江戸以前
SP	95		L	F2			29	28	16				江戸以前
SP	96		L	G2			17	17	20				江戸以前
SP	97		L	G2			(29)	(28)	14				江戸以前
SP	98		L	F2			(26)	(11)	10	67>98			江戸以前
SP	99		L	F1			71	(38)	15	81>99			江戸以前
SP	100		L	F1			(32)	29	26	82>100			江戸以前
SP	101		L	F2			(67)	58	26				江戸以前
SP	102		L	F1			26	24	18				江戸以前
SP	103		L	F1、F2			39	32	8				江戸以前
SP	104		L	F2			36	31	8				江戸以前
SP	105		L	F2、F3			43	38	27				江戸以前
SP	107		L	G1			(41)	38	15				
SP	108		L	F2			32	32	31				
SP	109		B	F2			33	30	39				
SP	110		B	F2	18	5	61	46	52				
SP	111		L	F2			54	48	19				
SP	112		B	F3			46	43	17				
SP	113		L	E3			(16)	22	11				
SP	114		B	E3			36	32	28				
SK	116		B	F2			94	87	30				
SP	118		B	F3			27	22	21	118>183			
SP	119		B	F3			49	48	36				
SP	120		B	F2			22	21	16	120>182			
SP	121		B	F2			(29)	25	16	121>122			
SP	122		B	F2			(54)	42	45	121>122			
SP	124		L	E2、E3、F2、F3			86	52	69				
SP	127		B	E3			46	39	40				
SP	129		B	E2、E3			36	34	17				
SP	130		B	E3			40	(28)	20				
SP	131		B	D3、E3			83	51	42				
SK	132		L	G3			435	(297)	102				
SP	133		L	G3			20	17	28	133>137			
SP	134		L	G3			75	(72)	35				
SP	135		L	G3			36	35	29				
SP	136		L	G3			27	20	23				江戸以前
SP	137		L	G3			55	45	22	133>137			
SP	138		L	G3			74	55	31				
SP	140		L	G2			58	57	44				
SP	141		L	G2			54	48	40				
SK	144		L	G4	19		320	27	29				江戸以前、陥穴
SP	145		L	I5			52	39	15				
SP	146		L	H5			68	60	27	146>161			
SP	147		L	H5			30	29	7				
SK	149		L	H5			177	108	59				
SP	150		L	H5			61	54	17				
SK	151		L	H5			97	90	17				
SP	152		L	H5			77	47	25				
SP	153		L	H5			92	(55)	18				
SP	154		L	H5			46	39	35				
SP	155		L	H5			34	(25)	27				
SP	156		L	H5			32	30	12				
SP	157		L	H5			34	26	24				
SP	158		L	H5			31	26	8				
SP	159		L	H5			28	26	8				
SP	160		L	G5			30	(28)	22				
SP	161		L	H5			(49)	34	10	146>161			
SP	162		L	H5			35	32	22	162>149			
SK	163		L	H6	19		(176)	(79)	99	163>164			方形土坑
SK	164		L	H6			(84)	106	31	163>164			
SP	165		L	H5			59	33	16				
SP	171		B	F2			34	29	31				
SP	172		B	F3			(34)	37	36	172>173			
SP	173		B	F3			34	(31)	37	172>173>174			
SP	174		B	F3			(55)	53	54	173>174			
SP	175		L	F3			44	38	10				
SP	176		B	F3			47	45	48				
SP	177		L	F3			21	21	17				
SP	178		L	F3			34	26	20				
SP	179		B	F3			48	40	11				
SP	180		B	F3			(41)	30	29				

遺 構 一 覧

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	181		B	E3			60	39	47				
SK	182		B	F2、F3			(219)	71	56	120>182>185、186			
SK	183		B	F3			471	(122)	24	118>183>184			
SP	184		B	F3			(28)	(27)	16	183>184			
SP	185		B	F2			(42)	(38)	19	182>185			
SP	186		B	F2			(44)	(28)	25	182>186			
SP	187		B	E3			56	(40)	12				
SP	188		B	E4			36	(26)	12				
SP	189		L	F3			34	30	22	189>190			
SK	190		L	F3、F4			156	(79)	16	189>190			
SP	191		B	G5			(31)	(11)	30				
SP	192		B	G5			(77)	(26)	13				
SP	193		B	G5			(61)	(34)	13				
SP	195		B	G5			37	28	27				
SP	196		A	G5			(43)	(17)	35				
SP	197		L	G5			(45)	33	21				江戸以前
SP	198		L	G5、F5			(65)	50	12				
SP	199		L	G5			(25)	(9)	18				
SD	200		L	G5、G6			(158)	32	7				
SK	201		L	F3、G3	19	5～10	540	(332)	138		18中	○	採土坑?
SK	202		L	H3、H4	20	11	161	126	33		18前？		方形土坑
SK	203		L	G4	20		363	26	20				江戸以前、陥穴
SK	204		L	G4	20		312	21	39				江戸以前、陥穴
SK	205		L	H4、H5、I4、I5	20	11	(257)	165	96		18後？		方形土坑
SK	206		不明	C5、D5、D6			452	150	12	206>207	18後？		
SK	207		A	B5、B6、C4、C5、C6、C7、D4、D5、D6、D7	21～22	11～69	2368	1560	200	206>207>229、237、239、261、268、269、270、594、595、596、626、629	Ⅷc	○	
SK	208		L	F5	20	70	212	205	31		18前？		植栽痕?
SD	209		B	E6、F6	23		(426)	55	29	209>214	17？		
SP	210		B	F6			29	28	21				
SP	211		B	F6			71	(44)	23				
SD	212		B	F5、F6、F7	23		(1200)	140	56	212>214、218			
SP	213		B	F6			58	51	9				
SD	214		B	E6、F5、F6	23	70	(480)	116	16	209、212>214	Ⅲb	○	平戸焼出土
SD	215		B	E6、F6			(517)	42	26				
SP	216		B	E6、F6			(47)	53	10				
SK	217		B	F6	24		200	(190)	40				植栽痕?
SK	218		B	E6、E7、F6、F7	25	71～74	(704)	(526)	176	212>218	Ⅳa		円形土坑、ごみ穴?
SK	219		B	F7			(118)	(65)	58				
SP	220		L	G6			33	28	8				
SP	221		L	G6			26	26	19				
SP	222		L	G6			30	28	4				
SP	223		L	H5			34	33	8	223>228			
SP	224	ピット列6	L	H5、H6	17		(25)	25	37				
SP	225	ピット列6	L	G6	17		(23)	19	41				
SP	226	ピット列6	L	G6	17		16	12	31				
SP	227	ピット列6	L	G6	17		15	12	36				
SP	228	ピット列6	L	H5	17		15	15	33	223>228			
SK	229		A	C4、C5、D4、D5	21～22	74～93	(765)	(520)	211	207>229>258	Ⅷc		
SP	230		B	E7			48	41	33				
SP	231		B	D7			37	34	11				
SK	232		L	E7	24	93	(197)	184	62		18前？		植栽痕?
SK	233		L	D7、E7	24		151	145	28				植栽痕?
SD	234		L	D7	24	93	(357)	177	108				
SK	235		L	D7	24		(118)	135	39				植栽痕?
SD	237		L	D7	26		(299)	41	21	207、582>237>581			SK584と同一遺構か
SD	238		L	D7	26		(325)	58	25	582>238>581、592			
SD	239		L	D7	26		(563)	34	26	207、582>239>592			
SD	240		L	D7	26		(543)	38	15				
SP	241		L	D7			34	31	13				
SP	242		L	E7			57	48	24				
SP	243		L	E7			36	33	18				
SK	244		L	E7			122	110	18				
SP	245		L	E7			59	36	18				
SP	246		L	E7			76	40	43				
SP	247		L	D7			70	49	20				
SP	248		L	E6			80	56	32				
SP	249		L	E6、E7			41	32	16				
SP	250		L	E7			35	35	14				
SP	251		L	E7			34	28	25				
SP	252		L	E7			36	36	15				

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	253		L	E7			(37)	31	15				
SP	254		L	E7			45	44	38				
SP	255		L	E6			33	24	20				
SP	256		L	E6			(68)	(52)	16				
SP	257		B	E5、E6			(56)	(36)	13				
SK	258		L	D4	21～22	93～95	(483)	312	105	229＞258＞606	Ⅷb		
SK	259		L	B4			127	124	35	259＞260、266	18後？		
SX	260		A	B4、B5	26	96	(543)	(370)	41	259＞260＞262、263、265	18後～19前？	○	焼土廃棄?
SE	261		不明	D5	27	96	124	124	(290)	207＞261	17中～後		
SP	262		A	B4			52	46	9	260＞262			
SP	263		A	B4、B5			60	51	10	260＞263			
SD	264		A	B4	27	96	(310)	98	24		19？		
SP	265		A	B4			47	43	13	260＞265			
SP	266		L	B4			(58)	(26)		259＞266			
SX	267		A	B6	27	97～101	(355)	264	63		Ⅶ		
SD	268		L	C4、C5	27	101	(362)	71	22		19前？		
SD	269		L	C4			(333)	30	25				
SD	270		L	C4			(330)	36	24	207＞270	18？		
SP	271		A	C4			25	23	23				
SP	272		A	C4			28	23	26				
SP	273		A	C4			30	26	22				
SP	274		A	C4			35	26	25				
SK	275		B	B3	28	101～102	(194)	(180)	59	275＞290、291、292、293、630	18後～19前？		配石遺構
SP	276		A	B5			80	52	30				
SK	277		A	B5			100	94	23				
SK	278		A	B5	28	102	289	227	21		18後？		
SP	279		L	C4			34	19	30				
SD	280		L	D4			365	21	6				
SP	281		L	D4			30	25	27				
SP	282		L	D4			38	30	28	282＞283			
SP	283		L	D4			29	(21)	18	282＞283			
SP	284		L	D4			52	25	29				
SP	285		L	D4			26	16	10				
SP	286	建物址	L	D4	7～12		41	40	29				建物址・Bライン
SP	287		L	D4			24	17	14				
SP	288	建物址	L	D4	7～12		49	44	30				建物址・Bライン
SP	289		L	D4			84	44	41				
SP	290		L	B3			28	24	41	275＞290			
SP	291		L	B3			44	27	33	275＞291			
SP	292		L	B3			(26)	26	27	275＞292			
SP	293		L	B3			(52)	36	52	275＞293			
SP	295		A	B5			(54)	(16)	44				
SP	296	ピット列3	B	D3	15		56	51	54				根石あり
SP	297	ピット列3	B	D4、E4	15		60	57	48				根石あり
SP	298	ピット列3	B	E4	15		52	50	47				根石あり
SP	299	ピット列3	B	E4	15	102	49	48	33				根石あり
SP	300		L	D3			78	61	20				
SP	301		L	F5、F6、G5、G6			44	40	17				
SP	302		L	F5			34	26	29				
SP	303		L	F5、F6			28	(17)	13				
SP	304		L	F6			30	28	28				
SP	305		L	F6			23	20	8				
SP	306		L	F6			(31)	33	22				
SP	307		L	F6			30	28	10				
SK	309		L	F5			171	170	28	309＞310			
SP	310		L	F5	28	102	(34)	38	8	309＞310			
SP	311		L	F5			(34)	30	15				
SP	312		L	G5			55	47	41				
SP	313		B	D2			40	37	24				
SP	314		B	D2			34	25	16				
SK	315		B	D1、D2			(372)	113	13		18？		
SP	316		B	F3			(62)	(30)	17				
SP	317		C	E5			38	31	12				
SK	319		C	E6			(153)	(62)	35				
SP	320		B	D2			40	39	11				
SK	321		C	E5			132	38	49	321＞版築			
SP	322		C	E5			28	22	19				
SP	323		C	E5			26	23	24				
SD	324		C	E5、E6	29		(1355)	26	31	324＞版築	19前？		地境?
SP	326		C	D5			37	29	21				
SP	328		L	D5			(48)	50	29	329＞328			
SP	329		L	D5			76	50	69	329＞328			

遺 構 一 覧

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	333		C	D5			29	27	24				
SP	334	ピット列2	L	D5	14		43	31	44				土留めの柵列？
SP	335	ピット列2	L	D5	14		(27)	32	27	336＞335			土留めの柵列？
SP	336	ピット列2	L	D5	14		34	(29)	61	337＞336＞335			土留めの柵列？
SP	337	ピット列2	L	D5	14		38	32	70	337＞336			土留めの柵列？
SP	338	ピット列2	L	D5	14		42	37	66				土留めの柵列？
SP	339	ピット列2	L	D5	14		(38)	38	68	340＞339カ			土留めの柵列？
SP	340	ピット列2	L	D5	14		(39)	(28)	60	340＞339			土留めの柵列？
SP	341	ピット列2	L	D5	14		(36)	(34)	63				土留めの柵列？
SP	342	ピット列2	L	D5	14		36	33	58				土留めの柵列？
SP	343	ピット列2	L	D5	14		31	30	55	343＞620			土留めの柵列？
SP	344		CorD	C2			62	57	21				
SK	345		CorD	C2			117	(67)	23		18後？		
SP	347		C	D6、E6			(61)	72	25				
SP	348		L	D6			39	33	18	348＞355			
SP	349		L	D6			28	26	45				
SP	350		L	D5、D6			23	17	17				
SP	351		L	D5			47	38	33	351＞356			
SP	352		L	D5			48	33	29				
SP	353		L	D5			36	34	28				
SP	354		L	D5			26	24	40				
SP	355		L	D6			(32)	(25)	12	348＞355			
SP	356		L	D5			(26)	22	10	351＞356			
SD	357		C	D1、D2	29		(1275)	50	83	357＞版築	19前？		
SK	358		L	E5	28		234	134	48	358＞360、380、382	18中		長方形土坑
SU	360		L	E5	28	103～104	215	194	175	358＞360	18前？		鉛ｲﾝｺﾞｯﾄ出土
SD	361		L	B2、C2、C3	30		(1241)	(88)	43				
SD	362		L	B1、B2、C1、C2、C3	30		(1235)	(70)	41	361＞362＞383、384	18後？		
SP	363	建物址	L	D5	7～12		50	43	11				建物址・Bライン
SP	364	ピット列4	L	E5	16		47	43	74				
SK	365		L	E5			(150)	68	33	366＞365			
SK	366		L	D5、E5			77	62	52	366＞365			
SP	367		L	D5			52	34	56	367＞633			
SP	369		L	E6			40	35	8				
SP	370	ピット列4	L	E5	16		64	54	79				
SP	371	ピット列4	L	E5	16		48	31	60				
SP	372	ピット列4	L	E6	16		52	46	86				
SP	373		L	E6			58	34	11				
SP	374		L	E6			(77)	67	19				
SP	375		L	E5			41	24	17				
SP	376		L	E5			57	41	36				
SP	377	建物址	L	E5	7～12		57	50	41				建物址・Aライン
SP	378		L	D5			70	48	8				
SP	379		L	E5			52	20	19				
SP	380	ピット列4	L	E5	16		(47)	41	74	358＞380			
SP	381		L	D5			29	28	20	381＞632			
SP	382		L	E5			(31)	(30)	26	358＞382			
SP	383		L	C2			(75)	41	29	362＞383			
SP	384		L	C2			72	52	32	362＞384			
SP	385		L	E6			40	27	25				
SK	386		L	C3			140	(73)	33	387＞386			
SK	387		L	C3			(255)	182	52	387＞386	18前？		
SK	388		L	C3			(125)	92	16	388＞389、391、401			
SP	389		L	C3	31	104	(55)	(51)	58	388＞389			
SP	390		L	C3			33	33	24				
SP	391		L	C3			(74)	66	26	388＞391			
SP	392		L	B2			41	21	60				
SP	393		L	B2			51	25	16				

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	394		L	B2			28	15	32				
SP	395		L	B2、C2			20	16	15				
SK	396		L	C2	31		240	88	25		18前？		溝状植栽?
SP	397		L	C2			33	19	28				
SP	398		L	C2			60	31	14				
SP	399		L	C3			(39)	38	38	400＞399			
SP	400		L	C3			62	49	19	400＞399			
SP	401		L	C3			44	(35)	31	388＞401			
SP	402	建物址	L	D3	7～12		(48)	28	60				建物址・Bライン，建物址・Dライン
SP	403	建物址	L	D3	7～12		41	40	21				建物址・Bライン
SP	404		L	D3			(27)	27	12				
SP	405	建物址	L	D2、D3	7～12		40	36	50				建物址・Dライン
SP	406		L	C2			(60)	26	21	406＞407			
SP	407	建物址	L	C2	7～12		46	42	67	406＞407＞512			建物址・Bライン
SP	408		L	C2			32	24	42				
SP	409		L	C2			31	26	10				
SP	410		L	C2			31	24	18				
SP	411	建物址	L	C2	7～12		53	45	90				建物址・Bライン
SP	412		L	D2			22	21	12	412＞413			
SP	413		L	D2			23	22	14	412＞413			
SP	414		L	D2			19	17	12				
SP	415		L	D2			(43)	27	13				
SP	416		L	D2			(30)	33	24				
SP	417		L	D2			33	19	12	417＞480			
SP	418		L	D2			50	36	12	418＞520			
SP	419		L	D2			(29)	38	37				
SP	420		L	D2			(82)	(33)	25	420＞422			
SP	421		L	D3			(34)	(29)	233				
SP	422		L	D2			(32)	31	8	420＞422＞514			
SP	423－1	ピット列1	L	D1	13		27	25	50				
SP	423－2	ピット列1	L	D1、D2	13		29	24	23				
SP	423－3	ピット列1	L	D2	13		32	27	32				
SP	423－4	ピット列1	L	D2	13		31	28	22				
SP	423－5	ピット列1	L	D2	13		48	33	34				
SP	423－6	ピット列1	L	D2	13		32	29	55				
SP	423－7	ピット列1	L	D2	13		30	26	42				
SP	424		L	D2			32	27	24				
SP	427		L	D2			27	19	26				
SK	429		L	D2	31		80	77	31				
SK	430		L	D2	31		68	60	42				
SP	433		L	D2			43	41	28				
SP	434		L	D2			30	26	38				
SP	435		L	D2			38	36	42				
SP	436		L	D2			40	(20)	16	437＞436			
SP	437		L	D2			42	33	33	437＞436			
SP	438		L	D2			60	(39)	33	439＞438			
SK	439		L	D2			(137)	57	65				
SP	440		L	D2			64	45	35	440＞515			
SP	441		L	D2			23	22	9				
SP	442	建物址	L	D2	7～12		66	60	85				建物址・Aライン
SP	443		L	D2			65	44	47	443＞515			
SP	444		L	D2			45	35	26				
SP	445		L	D2			20	19	10	445＞446			
SP	446		L	D2			(26)	25	42	445＞446			
SP	447		L	D2			66	38	26	447＞551			
SP	448		L	D2			(48)	46	22				
SP	449	建物址	L	D2	7～12		61	52	67				建物址・Aライン、建物址・Cライン
SP	450		L	D2			79	47	29				
SP	451		L	D2			51	42	25				
SP	452		L	D2			31	24	12				
SP	453	建物址	L	C2、D2	7～12		56	46	55				建物址・Cライン
SP	454		L	C2			(63)	50	28	455＞454			
SP	455		L	C2			40	31	26	455＞454			
SP	457		L	D2			27	24	21				
SP	459		L	C2			43	40	29				
SP	460	建物址	L	C2	7～12		43	43	76				建物址・Bライン
SP	461		L	D1			(78)	70	36	462＞461			
SP	462		L	D1			(57)	(35)	40	462＞461			
SP	463		L	C1			77	37	31				
SP	464	建物址	L	C1、C2	7～12		46	43	71				建物址・Bライン

遺 構 一 覧

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	465		L	C2			67	49	12				
SP	466		L	C2			34	29	15				
SP	467		L	C2			38	29	11				
SP	468		L	C2			77	36	14				
SP	469		L	C2			32	30	46				
SP	470		L	C2			36	24	41				
SP	471		L	D2			78	63	54	471＞439			
SP	472		L	D2			45	37	27				
SP	473		L	C2			49	30	44				
SP	475		L	C2			56	48	24	475＞476			
SP	476		L	C2			80	(74)	58	475＞476			
SK	477		L	D2	31	104～105	143	125	29	477＞545－7、545－8、545－9	18前～中		植栽をごみ穴に?
SP	478		L	D3			63	56	36				
SP	479		L	D3			71	52	33				
SP	480		L	D2			45	16	10	417＞480			
SP	481		L	D1、D2			32	31	22				
SP	482	建物址	L	D2	7～12		62	52	76				建物址・Aライン
SP	483		L	C1			25	21	20				
SP	484		L	C1、C2			82	65	22				
SP	485	建物址	L	C1	7～12		51	(32)	64				建物址・Bライン
SP	487		L	C1、C2			29	28	44				
SK	488		L	C2	31		121	70	45				長方形土坑
SP	489		L	C2			23	22	23				
SP	490		L	C2			31	27	33				
SP	491		L	C2			25	(20)	19				
SP	492		L	C2			35	(26)	14				
SP	493		L	C2			31	22	25				
SP	494		L	C2			27	21	21				
SP	495		L	C2			19	17	16				
SK	499		L	C2	31	105	110	97	18		18後？		
SP	501		L	C2			37	21	53				
SP	502		L	C2			46	35	19				
SP	504		L	C2			29	25	15				
SP	505	建物址	L	C2	7～12		65	42	56				建物址・Bライン
SP	506		L	C2			37	30	22				
SP	507		L	C2			43	32	14				
SP	508	建物址	L	C2	7～12		48	47	52				建物址・Bライン、建物址・Cライン
SP	509		L	C2			48	31	24				
SP	510		L	C2			48	37	31				
SP	511		L	C2、D2			50	29	32				
SP	512		L	C2、D2			40	(21)	22	407＞512			
SD	513		L	D2			120	20	6				
SK	514		L	D2			105	52	19	422＞514＞549			
SD	515		L	D2	32		(650)	25	22				
SP	516		L	D2			24	21	25	516＞517			
SP	517		L	D2			54	53	35	516＞517			
SP	518	建物址	L	D2	7～12		37	32	43				建物址・Aライン，建物址・Dライン
SP	519		L	D2			40	32	30				版築下
SP	520	建物址	L	D2	7～12		(57)	56	76	418＞520			建物址・Aライン
SP	521	建物址	L	D3	7～12		66	66	46				建物址・Aライン
SP	522		L	D3			31	30	44				
SP	524	建物址	L	D3	7～12		(51)	55	40				建物址・Aライン
SP	525		L	D3			35	(33)	12				
SP	526		L	D3			(38)	35	13				
SP	527	建物址	L	D3	7～12		47	43	32				建物址・Aライン
SP	528		L	D3			36	31	56	528＞529			
SP	529		L	D3			47	(32)	16	528＞529			
SP	530	建物址	L	D3	7～12		44	31	28				建物址・Aライン
SP	531		L	D3			30	26	20				
SP	532		L	D3			40	38	28				
SP	534	建物址	L	D3	7～12		(40)	(38)	45	539＞534			建物址・Aライン
SK	535		L	D3			226	133	48		18？		
SP	536		L	D2			36	35	17	536＞537			
SD	537		L	D2	32		(313)	35	14	536＞537			
SK	539		L	D3			134	(28)	32	539＞534			
SP	541	建物址	L	D3	7～12		60	52	38				建物址・Aライン
SP	542		L	D3			(63)	62	55				
SP	544		L	C2			67	25	21				
SP	545－1	ピット列1	L	D2	13		33	22	72				
SP	545－2	ピット列1	L	D2	13		36	28	66				
SP	545－3	ピット列1	L	D2	13		42	35	63				
SP	545－4	ピット列1	L	D2	13		43	32	54				

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	545－5	ピット列1	L	D2	13		38	28	52				
SP	545－6	ピット列1	L	D2	13		30	28	50				
SP	545－7	ピット列1	L	D2	13		44	30	62	477＞575－7			
SP	545－8	ピット列1	L	D2	13		34	28	56	477＞545－8			
SP	545－9	ピット列1	L	D2	13		(58)	35	64	477＞545－9			
SP	546	ピット列1	L	D2	13		108	41	52				
SP	547	ピット列1	L	D2	13		29	29	23				
SP	548	ピット列1	L	D3	13		55	36	16				
SK	549		L	D2			102	25	25	514＞549			便所か?
SP	550	建物址	L	C1、D1	7～12	105	65	51	70				建物址・Aライン
SP	551	建物址	L	D2	7～12		56	(45)	92	447＞551			建物址・Aライン
SK	552		L	E3	32		238	192	38				江戸以前
SP	553		L	E3			(110)	74	23				江戸以前
SP	554		L	E2	32	105	45	34	24				
SK	581		L	D7	32		106	100	36	582＞237＞581			円形土坑?
SK	582		L	D7			205	(56)	6	581＞582＞237、238、239			
SK	583		L	C7、D7	33	105～117	(550)	(350)	113	585＞583	18後葉（一部17c後葉含）	○	SK218と遺構間接合(色絵大皿)
SK	584		L	D7			(77)	(57)	26	581＞584			SD237と同一遺構か
SP	585		不明	C7、D7			(90)	50	28	585＞583			
SP	586		L	D7	33	117	32	26	21				
SP	587		L	D7			50	35	32				
SP	588		L	C7			38	24	16				
SP	589		L	C7			(20)	25	7	590＞589			
SP	590		L	C7			47	35	20	590＞589			
SP	591		L	C7			34	31	9				
SP	592		L	D7			(25)	24	16	238、239＞592			
SP	593		L	D7			31	27	12				
SP	594		L	C6			30	27	20	207＞594			
SP	595		L	C6			24	23	20	207＞595			
SP	596		L	C5			39	34	29	207＞596			
SP	597		L	B5			27	25	14				
SP	598		L	B4			60	34	22				
SP	599		L	B4、C4			49	44	12				
SP	600		L	B4			50	36	21				
SP	601		L	D4			47	31	37				
SP	602	建物址	L	D4	7～12		65	52	34				建物址・Aライン
SP	603		L	D4			45	34	38				
SP	604	建物址	L	D4	7～12		46	39	21				建物址・Aライン
SP	605		L	D4			47	36	12				
SP	606	建物址	L	D4	7～12		81	(36)	27	258＞606			建物址・Bライン
SP	607	建物址	L	D4	7～12		46	46	41				建物址・Aライン
SP	608	建物址	L	D4	7～12		52	47	13				建物址・Bライン
SP	609		L	D4			57	54	12				
SP	610		L	D4			30	22	11				
SP	611	建物址	L	D4	7～12		63	59	34				建物址・Aライン
SP	612		L	E4			27	27	19				
SP	613		L	D4			27	27	8				
SP	614		L	D5			17	17	27				
SP	615		L	D5			34	34	18				
SP	616		L	D5			25	23	22				
SP	617		L	D5			18	17	10				
SP	618	建物址	L	D5	7～12		42	40	12				建物址・Bライン
SP	620		L	D5			22	21	25	343＞620			
SP	621	建物址	L	E4	7～12		58	53	35				建物址・Aライン
SP	622	建物址	L	E5	7～12		64	54	41				建物址・Aライン
SP	623		L	D5			(38)	40	51				
SP	624		L	D5			(25)	(9)	26				
SP	625		L	D5			26	18	8				
SK	626		L	B6、C6	33		180	148	59	207＞626			江戸以前
SP	627		L	D4、E4			(43)	49	31				
SP	628	建物址	L	D4、E4	7～12		68	55	30				建物址・Aライン
SP	629		L	C6			51	48	11	207＞629			
SD	630		L	B3、B4			(585)	(300)	24	630＞275			
SP	631	建物址	L	D5	7～12		52	50	20				建物址・Bライン
SP	632	建物址	L	D5	7～12		49	(47)	32	381＞632			建物址・Bライン
SP	633	建物址	L	D5	7～12		54	(38)	42	367＞633			建物址・Bライン
SP	634	ピット列5	L	G5	17		34	30	33				

遺 構 一 覧

種別	遺構No	遺構名	面	グリッド	遺構図版Ⅲ-@	遺物図版Ⅳ-@	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	切り合い	遺物年代	火災被熱	備考
SP	635	ピット列5	L	G5	17		30	29	26				
SP	636	ピット列5	L	G5	17		33	27	25				
SP	637	ピット列5	L	F5	17		(29)	25	18				
SP	638	ピット列5	L	F5	17		(24)	28	13				
SP	639	ピット列5	L	F5、F6	17		(25)	28	19				
	版築		C	B2、B3、C1、C2、C3、D1、D2、D3、D4、D5、D6、E3、E4、E5、E6	2～4	124～131	(4800)	(2230)	360	321、324、357＞版築	18後～19前		

第Ⅲ章　遺構

第１節　遺構の概要

本地点は、帝国大学附置伝染病研究施設関連の建物基礎、あるいは東京大学附置医科学研究施設関連の建物基礎、またそれら建物に伴う埋設管などにより、調査区全体が大きく撹乱され、調査グリッドＥ～Ｆライン以西は、重機掘削後の遺構確認面が関東ローム層上面（Ｌ面）であり、江戸時代以前の遺構や層は削平を受けている状況であった。

確認された遺構数は 568 基で、覆土の状況や検出面から江戸時代以前と推定される遺構が 33 基、他は全て江戸時代以降に比定される。

前章でも触れたが、最下面のローム面を含め４枚の遺構検出面が確認され、上位からＡ～Ｃ、Ｌ面と命名した。Ａ面は調査区南東部の埋積谷部分のみで検出され、17 基の遺構が確認された。その中には大形土坑 SK207、SK229 などの平面形が不整形で、遺物が非常に多く出土するような遺構も確認された。Ｂ面はＦ～Ｄライン付近の埋積谷西側斜面地で検出され、57 基の遺構が確認された。北側では植栽痕や小ピット、南側では溝や植栽痕などが確認された。Ｃ面は後述する段切りを埋めた版築層の上位面として検出され、11 基の遺構が確認され、南北方向にのびる溝の他は小ピットが散見されるのみであった。Ｌ面の遺構には、Ｆライン以西の重機掘削後の関東ローム層上面で検出された遺構と、Ｆライン以東のＢ面あるいはＣ面下でパックされていた関東ローム層上面で検出された遺構を含むことから、Ｌ面には様々な時期の遺構が含まれている。検出された遺構数も最も多い 478 基が確認された。Ｆライン以西では南北で確認される遺構の種類が異なり、北側では小ピット、大型土坑、井戸などが、南側では方形土坑や東西にのびる柵列、植栽、そして縄文時代の陥穴と推定される遺構が検出されている。Ｆライン以東ではＣ面にパックされる形で検出された遺構が多く、段切りやそれに伴うと推定される柵列、南北方向にのびる建物址、溝、方形土坑、地下室、小ピットが確認された。

第２節　旧石器時代

(1) 調査の概要（Ⅲ－２、３図）

江戸時代の調査終了後、ローム層上面までレベルを下げ、縄文時代までの遺構確認および旧石器時代の遺構・遺物の確認を目的とした調査を行った。白金台地では旧石器時代遺構・遺物が検出された遺跡が存在していることから、台地平坦部を中心として旧石器時代試掘調査を行った。試掘坑は、２×２m の範囲を、地形変換点であるＦライン以西の台地上部には基本的に１グリッドに２箇所、Ｅライン以東には１箇所の割合で、調査可能な場所に 44 箇所に設定した。各試掘坑は、武蔵野標準層位Ⅵ層中位まで調査を行い、２箇所については土層確認を兼ねてＸ層以下まで行った。

その結果、C5 グリッドからソフトローム中から槍先形尖頭器、F6 グリッドからⅣ層上位から彫器削片、H3 グリッドⅢ層下部から使用痕のある剥片の合計３点が出土した。本格調査は、C5 グリッド試掘坑を２×２m 東側に拡張して、２×４m の範囲で実施したが、遺物は出土しなかった。

これらの石器は、調査範囲内で散漫な出土状況であり、母岩共有は無い単独資料で出土層位も異なっている。このため以下では単独出土石器として報告する。

(2) 出土遺物（Ⅲ－１図、Ⅲ－１表）

１はガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器である。横長剥片を素材としている。先端部が弾けたように欠損しており、使用時欠損の可能性もある。平面形は右側縁が緩やかな弧状であるが、左側縁は胴部下半で弱く屈曲し左右非対称である。調整加工は器体中央部まで達する丁寧な幅広剥離で全体を加工した後、基部表裏面に細か調整加工を集中させているが、裏面に素材主要剥離面を一部残している。本石器は調査範囲南東部斜面下部Ｃ６グリッドの試掘坑で、石器出土層は土壌化の進んだⅢ層中と見なされる層位から出土したものである。石器形態、石材選択、層位から武蔵野Ⅴ期（諏訪間・野口・島立 2010）の槍先形尖頭器石器群と推定される。

２は透明度の高い黒曜石製彫器削片である。厚い角柱状の石刃を素材として左側縁部にブランティング状の急斜度片面調整加工、彫刀部には素材表裏面に平坦調整を丁寧に施している。素材石刃先端部を折断後、折断面を打面として右側縁部に素材長軸と平行する彫刀面を作出した小坂型彫器の彫刀面再生時に作出された削片である。新たに右側縁部に彫刀面の作出を行った際、樋状剥離が器体を切るように大きく左側縁に抜けてしまったものである。

本石器は調査範囲南部Ｇ６グリッドの試掘坑で、石器出土層はⅣ上層中から出土した。石器形態、層位から武

蔵野Ⅳ期石器群を構成すると推定される。

3は使用痕のある剥片である。灰色縞を含む黒曜石製横長剥片の下端部に、使用痕と考えられる微細剥離痕が顕著に認められる。左側縁部と右端部を欠損する。調整打面を残している。剥離面の観察では、本石器と同様な剥片を剥離した剥片剥離作業が認められる。

本石器は調査範囲西端Ｉ3グリッドの試掘坑で、Ⅲ層下部から出土したものである。石器形態、石材選択、層位から武蔵野Ⅴ期石器群を構成する石器群と推定される。

（3）まとめ

今回の調査では、調査範囲内に散漫に分布する単独出土石器が出土したのみである。これらの石器のうち、槍先形尖頭器は単独出土する事例も多い石器である。しかし彫器削片や使用痕のある剥片などの石器は、石器群を構成して遺跡での諸活動に関わっている場合が多い石器であるので、調査範囲近辺に主体となる該期石器群が存在している可能性は高いと推定される。

黒曜石製彫器削片は小坂型彫器から剥離された削片（図Ⅲ－1－2）で、出土層位はⅣ層上部である。黒曜石産地は肉眼観察では信州系黒曜石であると推定される。Ⅳ層中から上部石器群は武蔵野Ⅳ期とされる石刃技法の卓越する砂川期石器群である。該期石器群は砂川刃器技法により作出される石刃を素材とした二側縁加工ナイフ形石器や部分加工ナイフ形石器など刺突具類に、ナイフ形石器と共通する石刃素材の先刃掻器、削器、彫器、抉入石器（ノッチ）など加工具類を伴う石器群である。これらに共伴する彫器型式は上ゲ屋型彫器、小坂型彫器などであり、今回出土彫器削片は小坂型彫器から作出された彫器削片であり、砂川期石器群を構成する石器群に含まれる石器と評価できよう。

前述した槍先形尖頭器（図Ⅲ－1－1）はⅢ層相当層中、使用痕のある剥片（図Ⅲ－1－3）はⅢ層下部の出土であり、層序から武蔵野第Ⅴ期の石器群であるととらえられる。該期は終末期ナイフ形石器群から槍先形尖頭器石器群、細石刃石器群へと変遷する時期であるとされている。この槍先形尖頭器は形態的特徴から、武蔵野第Ⅴ期石器群の内終末期ナイフ形石器群から槍先形尖頭器石器群を構成する石器であろうと推定される。また、黒曜石製使用痕のある剥片は、黒曜石産地が肉眼観察では神津島産の黒曜石であろうと考えられる。剥片から観察される剥片剥離の特徴や石材の在り方から、武蔵野第Ⅴ期石器群の内細石刃石器群に含まれる石器群であろう。

調査地点のある白金台地の周辺遺跡では今回出土した石器群と同一層序から、小規模な石器群と礫群が検出された遺跡が少数ではあるが確認されている。今回調査では少量の石器が散漫な状況で単独出土したものである。遺跡のある武蔵野台地東端部などでは、小規模石器群と礫群により構成される少数の遺跡と少量の単独出土石器からなる遺跡構成を示しており、このような遺跡の在り方は、大規模な石器群や礫群により構成される拠点的活動域から離れ衛星的に形成された縁辺部活動域での諸活動の痕跡を示しているのではないかと評価できよう。

第3節　縄文時代

江戸時代の調査終了後、ローム層上面までレベルを下げ、縄文時代までの遺構確認を行った。江戸時代より前の遺構と判断された遺構は33遺構である。多くは不整形の落ち込みで、堆積層の凹凸、自然の営為で形成されたものも含まれていると判断される。人為的な設営と判断できた遺構は5遺構である。

遺物は、調査区全域から十数点出土しているが、縄文時代前期と後期後葉から晩期前葉に比定される土器小片が数点、帰属時期不明な土器片数点、剥片が2点出土している。

SK144（遺構Ⅲ－19図）

検出面はＬ面、G4グリッドに位置する溝状土坑で、遺存規模は長軸320cm、短軸27cm、確認面からの深さは29cmを測る。主軸方向角はN-19°-Eでグリッド南北軸より東にふる。壁、坑底は凹凸を有し、壁の坑底からの立ち上がりは垂直である。覆土はローム粒主体である。本遺構と同規模、同形状のSK203、SK204が近接して確認されたが、これらの覆土もやはりローム粒主体である。形状や覆土の状況などから縄文時代のいわゆる陥穴と推定される。

遺物は、出土しなかった。

SK203（遺構Ⅲ－20図）

調査区西側G4グリッド、Ｌ面から確認された長楕円形の土坑でいわゆる陥穴として認識される遺構である。遺構の上部と中央は、調査前の建物によって大きく削平され、遺存状態は不良である。本遺構の東側には、主軸は異なるもののSK144、SK204の2基の陥穴が存在し、同時期に機能していたことも考えられる。遺構は、南北に主軸を持ち、方位はN-11°-Wである。規模は長軸350cm、短軸は最大26cm、深さは最大20cmを計測する。遺構の壁や坑底はやや凹凸を有している。覆土は3層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK204（遺構Ⅲ－ 20 図）

調査区西側 G4 グリッド、L 面から確認された端部にやや膨らみを持つ長楕円形の土坑で、いわゆる陥穴として認識される遺構である。遺構の上部は、調査前の建物によって大きく削平され、遺存状態は不良である。本遺構の西側には、隣接してほぼ同軸の SK144、軸の異なる SK203 の 2 基の陥穴が存在し、同時期に機能していたことも考えられる。遺構は、南北に主軸を持ち、方位は N-26°-E である。規模は長軸 300cm、短軸は最大 20cm、深さは最大 37cm を計測する。遺構の壁や坑底はやや凹凸を有している。覆土は 4 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK552（遺構Ⅲ－ 32 図）

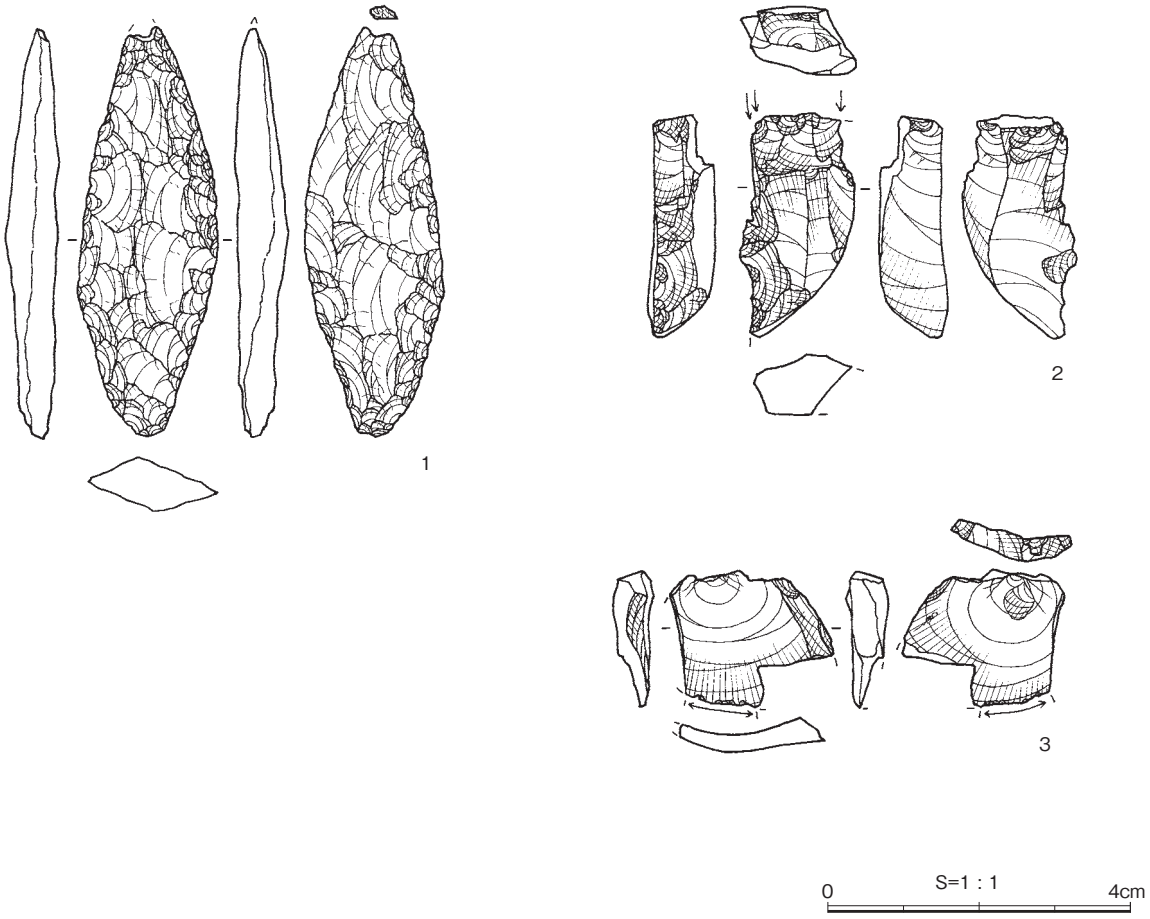
検出面は L 面、E3 グリッドに位置する不整円形土坑であり、遺存規模は長軸 238cm、短軸 192cm、確認面からの深さは 38cm を測る。坑底、壁面は比較的平滑であり、断面形は皿形を呈し、坑底中央には不整方形のごく浅い凹みを有す。覆土はローム粒・粗粒を主体とする灰黄褐色から黄褐色の均質な覆土である。

遺物は、出土しなかった。

SK626（遺構Ⅲ－ 33 図）

調査区南東側 D5、L 面から確認された不整円形を呈する土坑である。遺構の上部は SK207 によって削平され、遺構全体の様子は復元できない。遺構は、東西に主軸を持ち、方位は N-71°-W である。規模は東西 170cm、南北 150cm、中央やや東に最大深があり、深さは最大 30cm を計測する。遺構の壁や坑底は、やや凹凸を有している。覆土は 4 層に分層される。覆土の状況から、縄文期と推定される。

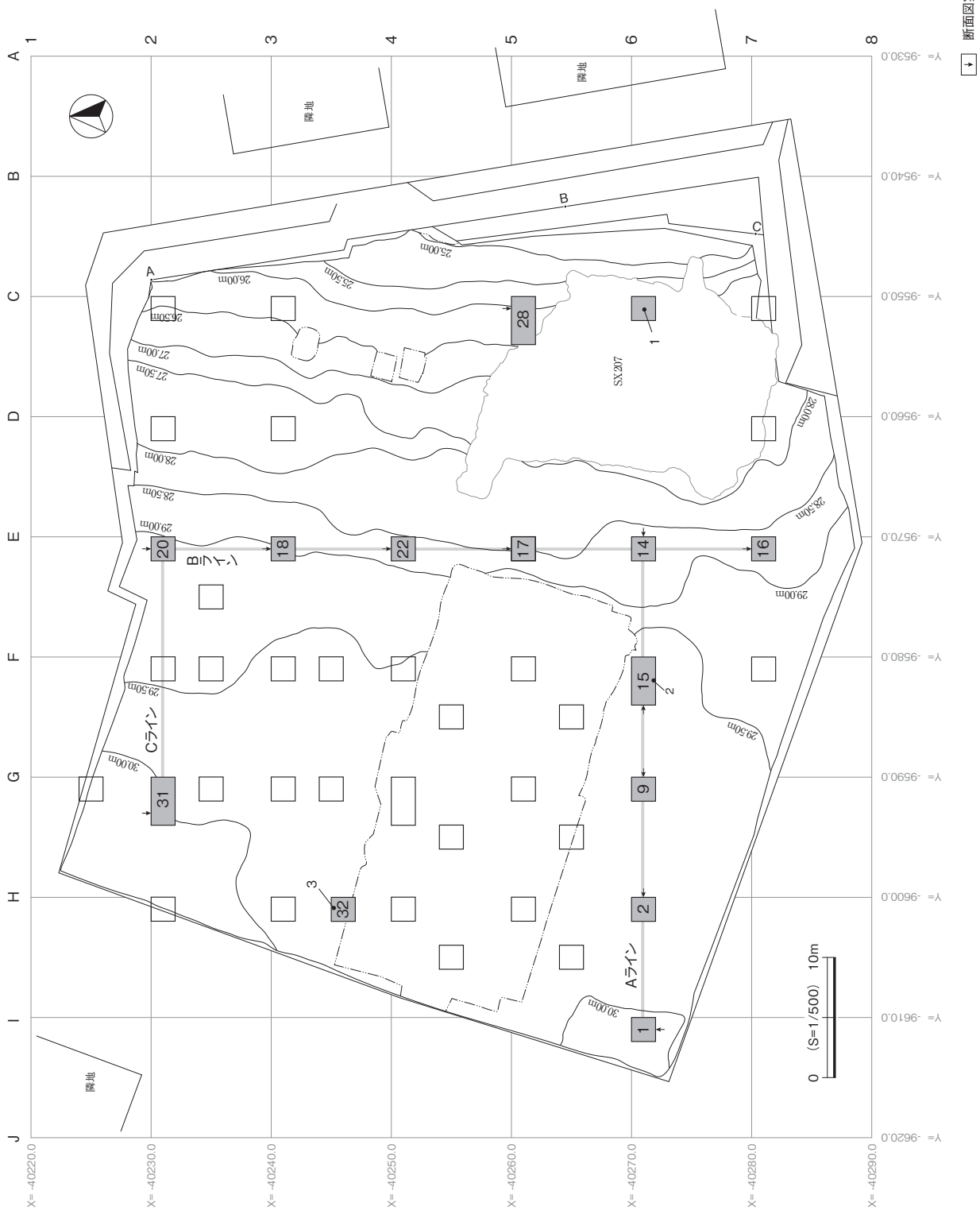
遺物は、出土していない。



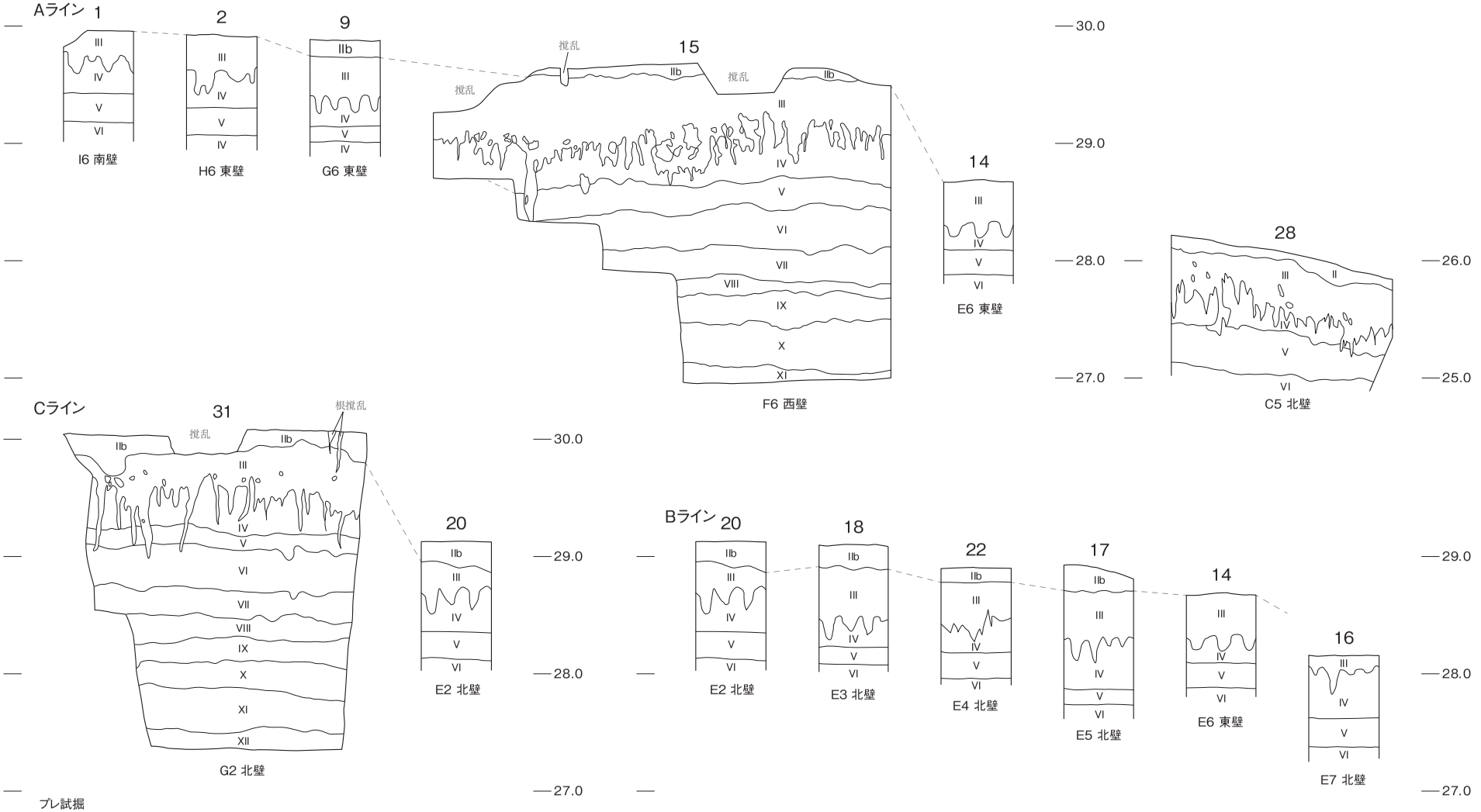
Ⅲ－１図　出土石器

Ⅲ－１表　出土石器一覧表

No.	Gr	層位	X	Y	標高	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
1	C6	Ⅲ？	-39915.48	-9844.22	25.95	尖頭器	5.41	1.82	0.69	5.57	An	ガラス質黒色
2	F6	Ⅳ上	-39916.30	-9875.09	29.07	彫器削片	2.96	1.50	0.90	3.35	Ob	小坂型彫器削片
3	H3	Ⅲ下	-39889.63	-9894.03	29.50	剥　　片	1.82	2.16	0.52	1.41	Ob	



Ⅲ-2図　旧石器時代試掘坑配置図・等高線



プレ試掘

II.	褐色ローム層	ローム漸移層。黒色土塊やや多。径1mmの赤・黒色スコリア微含。
III.	暗黄褐色ローム層	所謂ソフトローム（III）層。径1～2mmの赤・黒色スコリアを下方に少、3層の塊状のもの含。
IV.	明黄褐色ローム層	所謂ハードローム（IV）層。しまり・粘性強、径1～3mmの赤色スコリア多、径1～5mmの黒色スコリア多含。
V.	黄褐色ローム層	V層に相当。第一黒色帯。径1～3mmの赤色スコリアやや多、径1～2mmの黒色スコリア極多、径1mmの白色パミス少、径1mmの明灰色粘土粒微含。
VI.	明黄褐色ローム層	VI層に相当。AT包含層。本層がシルト化したと思われる径5mmのブロック少、径2～3mmの赤・黒スコリア極多、径1mmの明灰色粘土粒少、径1～2mmの白・赤色パミス含。
VI'	暗黄褐色ローム	しまり強、VI層に比して黒色スコリア少含。
VII.	暗黄褐色ローム層	VII層に相当。第二黒色帯上半部。径1～2mm大の赤色スコリア多、径1～3mm黒色スコリア極多、明灰色粘土粒・下方に径5mm大の白色パミス微含。
VIII.	暗黄褐色ローム層	VIII層に相当。径2mmの赤色スコリアやや多、径2～3mmの黒色スコリア多、明灰色粘土粒微含。
IX.	暗褐色ローム層	IX層に相当。第二黒色帯下半部。径1～2mm大の赤色スコリア少、径2～3mmの黒色スコリア極多、下方に9層のブロック状のもの少含。
X.	黄褐色ローム層	X層に相当。水つきローム。径1mmの赤色スコリア微、径1～3mmの黒色スコリアやや多、径1～2mm大の明灰色粘土粒微含。
XI.	黄褐色ローム層	9層よりやや暗。径1mmの赤色スコリア少、径2～3mmの黒色スコリアやや多含。
XII.	黄褐色ローム層	10層よりやや白っぽい色調。シルト質、しまり・粘性ともに極強、径2～5mmの赤色スコリアやや多、径1mmの黒色スコリア少、径2～5mmの明灰色粘土粒少含。

0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-3図　旧石器時代試掘坑土層図

第４節　江戸時代

段切り・版築（遺構Ⅲ－４～６図、遺物Ⅳ－124～131図）

近代以降の建物基礎で撹乱された部分を除き、調査区東側半分、東西グリッド軸Ｂ～Ｅライン、南北グリッド軸１～６ラインの範囲で検出された地業であり、遺存規模は長軸48m以上、短軸22.3m以上、確認面からの深さは最深部では360cmを測る。第Ⅰ章でも触れられているが、本調査区東半分には南北方向にのびる谷筋が検出され、調査区中央Ｅライン付近が谷筋の西側立ち上がりで、Ｅラインより西側と調査区東端では約3.5～4mの比高差があり、西から東へ急激な傾斜面となっていることが確認された。段切りはこのような谷の西側立ち上がり部分の関東ローム層を段切り（切土）を施し、3段の平場を作り出している。平場は西側最上段が東西幅10ｍ、中段が東西幅約2.5ｍ、最下段（調査区Ｃライン付近）は東側調査区外へ続き東西幅約５ｍ以上確認される。上段と中段との比高差は約100cm、中段と下段との比高差は約60～70cm確認され、切土した部分には崩落防止のためと推測される柵列（後述するピット列1、ピット列２など）も確認される。最上段の平場には南北にのびる建物址、溝、長方形土坑、地下室などが、中段の平場には植栽痕や小ピットが、下段の平場には南北にのびる２本の溝（SD361、SD362）以外はほとんど遺構は検出されないなど、各平場で検出される遺構に違いが認められた。

この段切りを覆う整地層が調査区東半分で検出され（Ⅲ－３～６図トーン部分）、堆積状況を調査したところ、厚いところでは約150cm厚確認された。整地層は標高の高い西側から低い東側へ流し込まれ、中位から上位層では平坦になるように版築状に叩きしめられている。整地層は主に瓦片などを多く含む灰色土、ロームブロックと黒色土ブロックを斑状に含む暗黄褐色土、ロームブロック主体の黄褐色土から構成され、遺物収納箱で約30箱分の遺物が出土した。遺物の大半をしめる陶磁器土器類は18世紀末から19世紀前葉の様相を呈すことから、段切りはこの整地層により19世紀前葉には埋められ、調査区東側の平準化が進められた可能性が高い。

建物址（遺構Ⅲ－７～12図、遺物Ⅳ－105図SP550）

検出面は、Ｌ面、C1、C2、D1、D2、D3、D4、D5、E4、E5グリッドに位置する南北方向にのびる長屋建物址であり、前述した段切りの上位平場に位置し、主軸方向角はN-18°-Eでグリッド南北軸より東にふる。ピット列は江戸間１間間隔に並び、南北方向に２列（A-A'、B-B'）確認され、西側ピット列A-A'には21基（南からSP377、SP622、SP621、SP628、SP611、SP607、SP604、SP602、SP541、SP521、SP524、SP527、SP530、SP534、SP518、SP520、SP442、SP551、SP449、SP482、SP550）、東側ピット列B-B'には18基（南からSP633、SP632、SP631、SP363、SP618、SP608、SP606、SP286、SP288、SP403、SP402、SP407、SP411、SP505、SP508、SP460、SP464、SP485）が確認される。また東西方向に２列（C-C'、D-D'）、C-C'には３基（西からSP449、SP453、SP508）、D-D'には３基（西からSP518、SP405、SP402）が確認される。ピットの平面形はいずれも不整円形を呈し、遺存規模は一定しないが、確認面からの深さを確認するとD-D'より北側では60～90cm前後と深く、南側は20～45cm前後と北側のような深いものは確認できない。また断面形状もD-D'より北側の深いピットでは断面形が細長い逆台形を呈し、南側は上部を近代以降に撹乱されているピットを除けば箱形を呈すものが多い。このようなピットの深さや形状の違いは屋根荷重を反映している可能性もあり、D-D'より北側と南側で柱筋を揃えた別建物であった事も推測される。ただピットの覆土はいずれもローム粒・粗粒、黒色土粒・粗粒を斑状にやや多く含む黒褐色土や黄褐色土で埋められており、その状況は前述した段切りを埋めていた版築層下層の状況と酷似している。

遺物は、SP464、SP524、SP534、SP551から陶磁器細片が1､2点、SP363、SP505、SP550（Ⅳ－105図キセル）からごく少量の金属製品が出土しているのみであるが、本遺構をパックしている版築層からは18世紀末から19世紀前葉の様相を呈す陶磁器土器類が出土していることから､本遺構もそれまでには廃絶していた可能性が高い。

ピット列１（遺構Ⅲ－13図）

検出面はＬ面、D1、D2、D3グリットに位置する柵列状遺構である。版築層直下で検出され、段切り（Ⅲ－７～12図）西側立ち上がりに沿うように南北方向に19基の柱穴（SP423-1～7、SP545-1～9、SP546、SP547、SP548）が確認される。各ピットの平面形や遺存規模、間尺は一定でないが、確認面からの深さが浅いピットを除けば、概ね断面形は細長いＵ字状を呈し、覆土はローム粒やブロックをやや多く含み、しまりが弱いという点は共通する。重複関係のあるものが極めて少ない事から建替などは想起されない。検出状況、遺存規模などから段切りした部分を補強するための土留めなどに伴う柵列と推定される。

遺物は出土しなかった。

ピット列２（遺構Ⅲ－ 14 図）

検出面はＬ面、D5 グリットに位置するピット列である。版築層直下で検出され、建物址（Ⅲ－７～ 12 図）の東側柱筋 SP618、SP363、SP631、SP632 の東側に位置し、南北方向に 10 基の柱穴（南から SP334、SP335、SP336、SP337、SP338、SP339、SP340、SP341、SP342、SP343）が確認される。主軸方向は N-14°-E でグリッド南北軸より東にふる。各ピットの平面形や遺存規模､間尺は一定でないが､確認面からの深さが浅いピットを除けば、概ね断面形は細長い U 字状を呈し、覆土はローム粒やブロックをやや多く含み、しまりが弱いという点は共通し、前述したピット列１と酷似する。ただしピット列１とは異なり、重複するものが多く、立替や補強などが想起される。

遺物は出土しなかった。

ピット列３（遺構Ⅲ－ 15 図）

検出面はＢ面、D3、D4、E4 グリットに位置するピット列である。南北方向に４基の柱穴（南から SP299、SP298、SP297、SP296）が確認され、主軸方向は N-18°-E でグリッド南北軸より東にふる。各ピットの平面形はいずれもやや歪な方形を呈し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。全てのピットの坑底に根石が検出され、断面調査ではその根石直上あたりに柱痕跡も認められる。間尺は SP296 と SP297 の間、SP297 と SP298 の間は江戸間１間あるが、SP298 と SP299 の間は江戸間半間になっている。対応するピット列が確認できなかったことから塀列か。

遺物は SP297 から肥前系磁器碗の細片が、SP298 から瀬戸・美濃系陶器の五合徳利の細片が出土している。

ピット列４（遺構Ⅲ－ 16 図）

検出面はＬ面、E5、E6 グリットに南北方向位置するピット列である。版築層直下で南北方向に５基の柱穴（南から SP372、SP371、SP370、SP380、P364）が確認され、主軸方向は N-16°-E でグリッド南北軸より東にふる。各ピットの平面形はいずれもやや歪な方形を呈し、多くは壁が坑底からほぼ垂直に立ち上がる。規模はバラツキが認められるが、確認面からの深さがいずれも 60cm 以上を測る深いピットである。間尺は概ね１間を測り、SP380 と SP370 の間にもう１つピットが存在した可能性もある。ただピット坑底の標高をみると、SP364、SP380 では 28m ほど、SP370、SP371、SP372 では 28.1m ほどを測り、SU360 を挟み南北で異なっている。相対する位置に対応するピット列が無いことから塀列と考えられるが、SU360 を挟み南北に２つの塀列が存在した可能性もある。

遺物は出土しなかった。

ピット列５（遺構Ⅲ－ 17 図）

検出面はＬ面、F5、F6、G5 グリットに位置するピット列である。東西方向に６基の柱穴（西から SP634、SP635、SP636、SP637、SP638、SP639）が確認され、主軸方向は E-19°-N でグリッド東西軸より北へふる。SP367、SP368、SP369 は南側を撹乱されるが、各ピットの平面形は一辺 27cm 前後の隅丸方形を呈し、壁が坑底からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。確認面からの深さは東側３基と西側３基で異なり、西側３基の方が深い。断面調査では、全てに幅 10cm 前後の柱痕跡が確認される。本遺構と相対する位置にピット列が確認されなかったことから塀列と推定される。なお周囲には同規模、同形態のピットが散見されることから、位置を変えて塀が構築されていた可能性もある。

遺物は出土しなかった。

ピット列６（遺構Ⅲ－ 17 図）

検出面はＬ面、H5、H6、G6 グリットに位置するピット列である。東西方向に５基の柱穴（西からから SP228、SP224、SP225、SP226、SP227）が確認され、主軸方向は W-17°-N でグリッド東西軸より北へふる。各ピットの平面形は不整形を呈し、壁が坑底からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は先端は尖った細長い U 字形を呈す。柵列か。

遺物は出土しなかった。

SK1（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－１～２図）

検出面はＬ面、G2 グリッドに位置する不整形土坑である。遺存規模は長軸 315cm、短軸 180cm、確認面からの深さは最大 76cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁の坑底からの立ち上がりも垂直であったり、緩やかな階段状であったりなど一律ではない。覆土は黒色から黒褐色を呈し、最上位層に遺物を多く含む。坑底や壁面に根穴状の凹みが多数確認できることから、凹地化していた植栽痕を、芥を含む土で埋め戻した可能性もある。

遺物は 17 世紀後葉に比定される陶磁器土器類が出土している。

SE2（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－２～５図）

検出面はＬ面、G2 グリッドに位置する上部施設を有す井戸であり、主軸方向は N-20°-E でグリッド南北軸

より東にふる。上部施設の平面形は南北 334cm、東西 364cm の不整方形を呈し、その内側に南北 196cm、東西 150cm の不整円形を呈す井戸枠を有す。上部施設坑底は確認面から 50 ～ 60cm を測り、北西、北東隅はさらに全体より数㎝窪む。南側では検出できなかったが、これら隅の窪みは形状から井桁が組まれていた痕跡と推定される。井戸枠内壁面は平滑で、覆土は上位 1 層～ 8 層まで確認したが、1 ～ 4 層は非常にしまりが強く、特に 1 ～ 3 層は版築状に整地された状況が確認された。遺物は 5 層に集中し、特に破砕した瓦（ほぼ桟瓦。一部被熱している）が多く含まれる。なお 5 層以下は遺物を余り含まない状況であった。以上のような覆土の堆積状況から、5 層までは井戸を埋め戻す事を意識し、比較的精良な土を入れ、それより上位は窪みを埋めるため、いわゆる芥も含む覆土も使用して埋め戻し、最終的にはこの場所が沈まないようにするために版築状の整地を行ったと想定される。

遺物は陶磁器土器が遺物収納箱 8 箱分出土しており、最も遺物が多く出土した 5 層からは肥前系磁器碗では半球碗、筒形碗、いわゆる広東碗、土器類には施釉された製品も出土していることから、18 世紀後葉には埋め戻されたと推測される。

SP110（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－ 5 図）

検出面は B 面、F2 グリッドに位置する角柱痕を有す柱穴であり、主軸方向は E-17°-N でグリッド東西軸より北へふる。遺存規模は長軸 61cm、短軸 46cm、確認面からの深さは 52cm を測る。壁、坑底は比較的平滑で、壁の坑底からの立ち上がりもほぼ垂直である。

遺物は金属製のかんざし 3 本が出土しているのみである。出土状況は未確認であるが、意図的に埋めた可能性も考えられる。

SK163（遺構Ⅲ－ 19 図）

検出面は L 面、H6 グリッドに位置する方形土坑であり、主軸方向は E-20°-N でグリッド東西軸より北へふる。北側の SK164 と重複し、SK163 が新である。遺存規模は長軸 176cm、短軸 79cm、確認面からの深さは 99cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁の坑底からの立ち上がりは南北西はほぼ垂直であるが、西側は階段状を呈す。覆土はローム粒・粗粒を多く含み、最下層はロームブロックで一時に埋まる。

遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SK201（遺構Ⅲ－ 19 図、遺物Ⅳ－ 5 ～ 10 図）

検出面は L 面、F3、G3 グリッドに位置する大形不整方形土坑であり、主軸方向は N-18°-E でグリッド南北軸より東にふる。東側は近代以降の建物基礎で撹乱されるが、北東部に 3 段分のステップが確認される。遺存規模は長軸 540cm、短軸 332cm、確認面からの深さは 138cm を測る。壁、坑底には凹凸を多数有し、壁の坑底からの立ち上がりはほぼ垂直である。覆土最下層（10 層）はハードローム主体でほぼ水平に、中位層（3 ～ 6 層）は遺物を多くむ層が北から南へ傾いて堆積し、上位層は中位層以下の窪地を埋めるように堆積している。遺物を多く含む中位層には人工遺物の他に貝骨などの動物遺体も比較的多く含まれる。掘り方、覆土の堆積状況から、SK201 は採土坑として掘削されたものが、芥溜に利用された後に埋め戻されたと推定される。

遺物は遺物収納箱 8 箱分出土しており、陶磁器土器類は 18 世紀中葉に比定される。

SK202（遺構Ⅲ－ 20 図、遺物Ⅳ－ 11 図）

調査区西側中央付近 H3、H4 グリッド、L 面から確認された土坑である。遺構の周囲は調査前の構造物によって大きく撹乱されており、遺構上部は数十 cm 以上削平されていると推定される。遺構は南北に主軸を持つ長方形を呈し、主軸は N-18°-E である。規模は長辺 150cm、短辺 120cm、深さは最大 30cm を計測する。遺構の壁、坑底は凹凸が顕著で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層され、いずれもしまりが強く、上層（1 ～ 3 層）は灰褐色粘土が多く含まれている。

遺物は 18 世紀前半の陶磁器、土器、金属製品が少量出土している。

SK205（遺構Ⅲ－ 20 図、遺物Ⅳ－ 11 図）

調査区南西壁付近 H4、H5、I4、I5 グリッド、L 面から確認された土坑である。遺構の東側は調査前の構造物によって大きく撹乱されている。遺構は東西に主軸を持つ隅丸長方形を呈し、主軸は N-78°-E である。規模は長辺 250cm、短辺 160cm、深さは最大 90cm を計測する。遺構の壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は 4 層に分層され、いずれも灰褐色粘土が多く含まれている。

遺物は 18 世紀後半の陶磁器、瓦が少量出土している。

SK207（遺構Ⅲ－ 21 ～ 22 図、遺物Ⅳ－ 11 ～ 69 図）

調査区南東側 B5、B6、C4、C5、C6、C7、D4、D5、D6、D7 グリッド、A 面から確認された大型の廃棄土坑

である。遺構は、西から東へ落ちる斜面地に位置し、地形的に屋敷地として利用していた境界付近に火災によって生じた瓦礫廃棄のために作られた遺構と考えられる。

遺構北側でSK229、SD268、SD269、SD270、南側でSD237、SD239、東側で、SP594、SP595、SP596、SK626、SP629、西側でSP206、SE261と重複し、SP206より旧である他は全ての遺構より新である。

遺構の形状は、遺構東部の長方形を呈する部分とその東側にやや深い不整形掘り込みが、その北、東、南には浅い掘り込みが拡がるような形をしている。おそらく掘削時の工程差であろうと思われるが、これらには切り合いは確認できなかったことから同時の廃絶と考えている。

規模は南北約23m、東西16m、深さは最大1.8mを計測する。遺構の壁、坑底は凹凸を有する。覆土は最下層を除いて、多量の焼土と焼瓦、陶磁器等の遺物が多く包含されており、火災の一括資料と考えられる。火災は、陶磁器の年代との対比で、安政元（1854）年のものと判断された。また、本遺構の約2m南側に位置するSK583とは24例の遺構間接合が認められた。しかし、覆土の状況が近似していないこと、遺構間接合は全てSK207側からの出土であることから、SK207掘削から埋没にいたる過程でSK583の一部も削平され、SK207の埋土に混入した可能性が高い。

遺物は東大編年Ⅷc期（1830～40年代）の二次的に被熱した陶磁器、瓦などが多量に出土した他、石製品、金属製品、骨角製品、ガラス製品などが確認されている。

SK208（遺構Ⅲ－20図、遺物Ⅳ－70図）

検出面はL面、F5グリッドに位置する不整円形土坑であり、遺存規模は長軸212cm、短軸205cm、確認面からの深さは31cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、断面形は浅いU字状を呈す。覆土は最下層はほぼローム粒・粗粒主体、上位層はローム粒・粗粒を含む黒褐色土が確認される。坑底や壁面に根穴状の窪みが多数確認できることから植栽痕と推測される。

遺物は陶磁器土器片が少量出土しており、それらは18世紀前葉に比定される。

SD209（遺構Ⅲ－23図）

調査区南側E6、F6グリッド、B面から確認された溝である。北側を旧動物舎、南側および中央を近代以降の撹乱に切られ、遺構全体の様子は復元できない。北側でSD214と重複しており、新旧は本遺構が新である。溝の主軸は、N-45°-E、遺存している規模は、長さ410cm、幅は北側がやや広く50cm、南側が35cm、深さは最大30cmを計測する。遺構の壁や溝底は、やや平滑である。北側の覆土には溝底に漆喰が確認されているが、廃棄されたものと考えている。

遺物は陶磁器、金属製品が少量出土している。

SD212（遺構Ⅲ－23図）

調査区南側F5、F6、F7グリッド、B面から確認された溝である。遺構南端および中央を横断するように5箇所を近代以降の撹乱に切られ、遺構全体の様子は復元できない。南側でSK218と重複しており、新旧は本遺構が新である。溝はやや蛇行し、東側に緩やかに広がっている。溝の北端にほぼ直角に折れるSD214が存在するが、本遺構の覆土には焼土はほとんど確認されていない。溝の主軸は、N-18°-Eで、遺存している規模は、長さ11m50cm、幅は最大1m30cm、深さは最大25cmを計測する。遺構の壁や溝底は、やや凹凸を有している。覆土は2層の分層されるが、上層はやや東に広がっている。

遺物は出土していない。

SD214（遺構Ⅲ－23図、遺物Ⅳ－70図）

調査区南側E6、F5、F6グリッド、B面から確認された浅い溝である。遺構の東端を近代以降の撹乱によって切られている。SD209、SD212と重複しており、両遺構より旧である。溝は東に少しずつ幅を減じながら、やや湾曲している。遺構の主軸は、N-17°-Wである。遺存している規模は、長さ460cm、幅は東が狭く70cm、西が120cm、深さは最大20cmを計測する。壁や溝底は平滑で、溝底と壁の境も不明瞭である。覆土は単層で、焼土を多く含んでいる。

遺物は17世紀後葉の陶磁器、瓦、石製品が出土しており、多くに二次的な被熱が確認される。

SK217（遺構Ⅲ－24図）

調査区南側F6グリッド、B面から確認された円形を呈する土坑である。遺構の南半と中央を近代以降に撹乱され、遺構全体の様子は復元できない。遺存している規模は、東西200cm、南北180cm、深さは最大40cmを計測する。壁や坑底は、やや凹凸を有し、壁はほぼ平坦な坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は4層に分層される。遺構の形態や規模、坑底や壁の状況などから本遺構は移植痕であろうと推定している。

遺物は出土していない。

SK218（遺構Ⅲ－25図、遺物Ⅳ－71～74図）

調査区南側F6グリッド、B面から確認された不整形の大型遺構である。遺構の南側を近代以降の撹乱され、遺構全体の様子は復元できない。西側でSD212と重複しており、新旧は本遺構が旧である。遺存している規模は、東西680cm、南北530cm、深さは最大170cmを計測する。平面形は、最も深く、擂鉢状に開く中央の円形土坑に北と東側に張り出しを有するような形状を呈している。壁や坑底は凹凸が顕著で、フラットな坑底から壁は直線的に開くように立ち上がっている。覆土は、12層に分層されるが、2～10層には焼土や灰褐色粘土が含まれている。

遺物は東大編年Ⅳa期（1680～90年代）の陶磁器、土器を中心に、瓦、金属製品、石製品が出土している。

SK229（遺構Ⅲ－21～22図、遺物Ⅳ－74～93図）

調査区中央やや東側C4、C5、D4、D5グリッド、A面から確認された不定形の土坑である。西側でSK258、東側でSK207と重複しており、新旧はSK258より新、SK207より旧である。遺存している規模は、東西450cm、南北600cm、深さは最大250cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、鍋底状の坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は漆喰、炭化物、焼土、灰褐色粘土、動物遺体などが含まれている層が確認されている。魚骨、貝などの動物遺体は、焼土を伴わない暗褐色土や黒褐色土中から確認されており、これらは日常の廃棄行為で堆積したものと考えられる。本遺構には隣接するSK207のように橙褐色や赤褐色を呈するような焼土や破砕瓦を多量に含む層は確認されていないことから、廃絶時期か廃棄した元の場所が異なっていることが想定され、少なくとも本遺構が埋められた後にSK207の廃棄が行われたと推定される。

遺物は東大編年Ⅷc期に比定される陶磁器、土器をはじめ、瓦、金属製品、ガラス製品、石製品が出土している。

SK232（遺構Ⅲ－24図、遺物Ⅳ－93図）

調査区南端E7グリッド、L面から確認された不整楕円形を呈する土坑である。遺構南側が調査区外のため、調査を行えなかった。遺存している規模は、東西180cm、南北190cm、深さは最大50cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、ほぼフラットな坑底より壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は4層に分層されるが、1層から遺物の出土が確認された。樹木の移植痕か？

遺物は18世紀前半の陶磁器、瓦、金属製品、石製品などが少量出土している。

SK233（遺構Ⅲ－24図）

調査区南端D7、E7グリッド、L面から確認された円形を呈する土坑である。規模は、東西140cm、南北150cm、深さは最大20cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、やや中央が盛り上がる坑底より壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は単層で、ロームを多く含んでいる。遺構の平面形、規模、坑底中央が盛り上がる坑底の状況、ロームを多く含む覆土などから本遺構は、植木の移植痕であろうと推定される。

遺物は出土していない。

SD234（遺構Ⅲ－24図、遺物Ⅳ－93図）

調査区南側D7グリッド、L面から確認された溝である。遺構東側を近代以降の撹乱によって切られ、また、南側が調査区外のため調査を行えなかったため、遺構全体の様子は復元できない。溝の断面形は上部が広がるV字状を呈している。南北方向の溝は長さ340cmで、やや湾曲しており、北端から110cmでほぼ直角に東へ折れるよう東西方向の溝へと続いている。東西方向の溝は約100cm遺存しているが、以東は撹乱されている。溝の幅は、確認された黒色土上面で250cm、溝底で20cm、深さは最大100cmを計測する。壁や溝底はやや凹凸を有している。覆土は3層に分層され、少量の焼土を含んでいる。

遺物は瓦が少量出土している。

SK235（遺構Ⅲ－24図）

調査区南端D7グリッド、L面から確認された不整形を呈する土坑である。遺構南側が調査区外のため、調査を行えなかった。遺存している規模は、東西130cm、南北110cm、深さは最大35cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、やや中央が窪む坑底より壁は開きながら立ち上がっている。覆土は3層に分層される。遺構の平面形、規模、坑底中央が窪む坑底の状況などから本遺構は、植木の移植痕であろうと推定される。

遺物は出土していない。

SD237（遺構Ⅲ－26図）

調査区南側D7グリッド、L面から確認された溝である。溝の北側をSK207によって切られ、南側はおそらく近代以降に削平を受けており、遺構の遺存状態は不良である。その他、SK581、SK582と切り合い関係にあり、SK582より旧、SK581より本遺構が新である。主

軸方位や規模からSD238、SD239、SD240との関連性が考えられるが、同時期性などの詳細は明確にできない。主軸は、N-22°-Eである。遺存している規模は、長さ500cm、幅30～40cm、深さは最大20cmを計測する。壁や溝底は凹凸が確認される。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SD238（遺構Ⅲ－26図）

調査区南側D7グリッド、L面から確認された溝である。溝の南側は近代以降に削平を受けている。SK581、SK582付近より北側は、深さが減じており、明瞭に遺構が確認できなかった。SK581、SK582、SP592と切り合い関係にあり、SK207、SK582より旧、SK582、SP592より本遺構が新である。主軸方位や規模などからSD237、SD239、SD240との関連性が考えられるが、同時期性などの詳細は明確にできない。主軸は、N-24°-Eである。遺存している規模は、長さ320cm、幅40cm、深さは10cmを計測する。壁や溝底は凹凸が確認される。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SD239（遺構Ⅲ－26図）

調査区南側D7グリッド、L面から確認された溝である。溝の北側はSK207によって切られ、南側は近代以降に削平されている。他にSK582、SP592と切り合い関係にあり、SK582より旧、SP292より本遺構が新である。主軸方位や規模などからSD237、SD238、SD240との関連性が考えられ、特にSD238とは覆土の状況が同様で同時期の埋没が想定される。また、方位などの状況からSK207を挟んでSD269と同一の可能性も考えられる。主軸は、N-27°-Eである。遺存している規模は、長さ540cm、幅20～30cm、深さは最大20cmを計測する。壁や溝底は凹凸が確認される。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SD240（遺構Ⅲ－26図）

調査区南側D7グリッド、L面から確認された溝である。溝の北側はSK207によって切られ、南側は近代以降に削平されている。主軸方位や規模などからSD237、SD238、SD239との関連性が考えられるが、同時期性などの詳細は明確にできない。また、方位などの状況からSK207を挟んでSD270と同一の可能性も考えられる。主軸は、N-24°-Eである。遺存している規模は、長さ520cm、幅20～30cm、深さは最大20cmを計測する。溝の西壁には、径10cm程度の小ピットが10数基確認されているが、間隔、軸線なども一定ではなく、性格は不明である。壁や溝底は凹凸が確認される。覆土は単層である。

遺物は出土していない。

SK258（遺構Ⅲ－21～22図、遺物Ⅳ－93～95図）

調査区中央やや東側D4グリッド、L面から確認された不定長方形の土坑である。北側でSP606、東側でSK229と重複しており、新旧はSP606より新、SK229より旧である。平面形は、隅丸長方形の2基の土坑が東西に並ぶような形状を呈しているが、両者には立ち上がりなどは確認できず、埋没は同時期と判断された。遺存している規模は、東西450cm、南北300cm、深さは最大90cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著で、坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は漆喰、炭化物、焼土、灰褐色粘土、動物遺体などが含まれている層が確認されているが、切り合っているSK229よりは低密度である。SK229同様、東側に近接するSK207のように土層が橙褐色や赤褐色となるような破砕瓦を多量に含む層は確認されていないことから、廃絶に時期差があると推定している。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、ガラス製品、石製品が出土している。

SX260（遺構Ⅲ－26図、遺物Ⅳ－96図）

調査区東端B4グリッド、A面から確認された不整形を呈する落ち込みである。遺構東側が調査区外のため、調査を行えなかった。平面形は定型的ではなく、断面形も顕著な立ち上がりもなく、東側の谷に向かって徐々に深さを増していくような形状であった。覆土は、焼土、焼瓦が下層に多く確認されていることから、SK207の覆土が流れて堆積したとも推定される。規模は、東西400cm、南北580cm、深さは東壁際で40cmを計測する。埋土は4層に分層される。

遺物は19世紀の陶磁器、金属製品が少量出土している。

SE261（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－96図）

調査区中央やや南東側D5グリッドに位置する井戸である。遺構上部をSK207に削平されている。平面形は、円形を呈し、調査を行った確認面から290cmまではほぼ垂直に落ちている。規模は直径115cmを計測する。壁は比較的平滑に調整されており、足掛けなどの施設は確認できなかった。覆土は、調査したレベルまでは10層に分層され、粒子の細かい黒褐色土あるいは暗褐色土

が中心に堆積していた。

遺物は17世紀後半の陶磁器、土器、石製品が出土している。

SD264（遺構Ⅲ－27図）

調査区東端B4グリッド、A面から確認された溝と推定される遺構である。遺構の北、南、中央は近代以降に削平され、また、東側は調査区外で遺構全体の様子は復元できない。遺存している規模は、長さ300cm、幅90cm、深さは最大20cmを計測する。覆土は単層で、焼土、炭化物、焼瓦が多く含まれている。

遺物は焼瓦が出土している。

SX267（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－97～101図）

調査区東端B6グリッド、A面から確認された不整形を呈する落ち込みである。遺構東側が近代以降に撹乱されていた。平面形は定型的ではないが、溝状を呈している。規模は、東西340cm、南北260cm、深さは最大60cmを計測する。壁や坑底の凹凸は少なく、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。埋土は3層に分層され、2層から遺物が多く出土している。

遺物は18世紀後葉の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品がコンテナ箱5箱出土している。

SD268（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－101図）

調査区東側C4、C5グリッド、L面から確認された溝である。溝の南側はSK207、北側は近代以降の撹乱によって切られ、遺構全体の様子は復元できない。主軸方位から西側のSD269、SD270との関連性が考えられるが、同時期性などの詳細は明確にできない。主軸は、N-20°-Eである。遺存している規模は、長さ350cm、幅60～70cm、深さは最大20cmを計測する。壁や溝底は、やや凹凸が確認される。覆土は単層である。

遺物は18世紀後葉から19世紀の陶磁器、瓦が出土している。

SK275（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－101～102図）

調査区東壁際B3グリッド、B面から確認された楕円形と推定される土坑である。東側が近代以降に撹乱され、遺構全体の様子は復元できない。SP290、SP291、SP292、SP293、SD630と重複しており、新旧は本遺構が全てより新である。遺存している規模は、東西170cm、南北230cm、深さは最大50cmを計測する。壁や坑底はやや凹凸が認められ、坑底からやや開きながら立ち上がっている。遺構中央には、中～大型の自然石、切石が確認されているが、配置されたような整然性はない。覆土は、3層に分層される。

遺物は18世紀後半から19世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品が出土している。

SK278（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－102図）

調査区東壁際B5グリッド、A面から確認された浅い不整形の土坑である。規模は、東西170cm、南北270cm、深さは最大20cmを計測する。壁や坑底は平滑で、坑底から壁は開きながら立ち上がっている。覆土は、暗褐色土単層である。

遺物は18世紀後半から19世紀前半の陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品が出土している。

SP310（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－102図）

検出面はL面、F5グリッドに位置するピットであり、北側に位置するSK309と重複し、本遺構が旧である。遺存する平面形は隅丸方形、断面形状は浅い皿形を呈し、規模は長軸34cm以上、短軸38cm、確認面からの深さは8cmを測る。

遺物は肥前系磁器瓶細片が出土している。

SD324、SD357（遺構Ⅲ－29図）

ともに検出面はC面の溝である。SD324はE5、E6グリッドに位置し、主軸方向はN-18°-Eでグリッド南北軸より東にふる。上部は大きく撹乱されており、遺存規模は長さ1355cm、幅26cm、確認面からの深さは最大31cmを測る。溝の断面形は箱形を呈す。坑底、壁は凹凸が顕著である。SD357はD1、D2グリッドに位置し北側は調査区外へのびる。主軸方向はN-20°-Eでグリッド南北軸より東にふる。遺存規模は長さ1275cm、幅50cm、確認面からの深さは最大83cmを測る。溝の断面形は坑底から立ち上がり中程までは箱形を呈し、それより上位ではハの字形に開く。坑底、壁には凹凸が確認される。

一見するとSD324の北側延長線上にSD357は位置する事から1つの溝かと推測したが、南北グリッド3、4ラインには確認できず、主軸方向も2°異なる事から、1つの溝ではなく、別遺構と判断した。

SD324、SD357からは遺物は陶磁器土器片がそれぞれ少量出土しており、それらは19世紀前葉に比定される。

SK358（遺構Ⅲ－28図）

検出面はL面、E5グリッドに位置する長方形土坑であり、SU360、SP380、SP382と重複し、いずれよりも

新である。主軸方向はN-17°-Eでグリッド南北軸より東にふる。遺存規模は長軸234cm、短軸134cm、確認面からの深さは48cmを測る。坑底、壁面は凹凸を有し、断面形はやや浅いU字状を呈す。覆土上位層は黒色土主体であり、下位層ほどローム粒・粗粒を多く含む。

遺物は陶磁器土器片が少量出土し、18世紀中葉に比定される。

SU360（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－103～104図）

検出面はL面、E5グリッドに位置する地下室であり、SK358と重複し、本遺構が旧である。主軸方向はE-17°-Nでグリッド東西軸より北へふる。東側に方形の入口、西側にアーチ状の天井を有す室部が拡がり、遺存規模は入口は南北120cm、東西65～70cm、確認面からの深さは110cm、室部は東西120cm、南北194cm、坑底から天井部までは175cmを測る。入口と室部の間はスロープ状に成形され、20cm程の段差が確認される。入口、室部とも壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、比較的平滑に成形されている。覆土は上位層（1、2層）は黒色土主体、下位層（3～4層）はローム粒・粗粒を多く含む黄褐色土主体で、入口から室部奥壁まで流し込まれる状況が観察された。

室部北西隅の坑底直上で鉛インゴットが重なったような状況で出土した（巻頭図版4。合計112本、総重量約20kg）。

遺物は鉛インゴット以外は陶磁器土器類が少量出土したのみであり、それらは18世紀前葉頃に比定される。

SD361、SD362（遺構Ⅲ－30図）

ともに検出面はL面、南北方向にのびる溝であり、主軸方向はSD361がN-18°-E、SD362がN-19°-Eでグリッド南北軸より東にふる。両溝とも調査区外へのびるが、北端には不整形の掘り込みがあるが両溝と同時に埋められている。両溝の関係は不明である。SD361はB2、C2、C3グリッドに位置し、遺存規模は長さ12.4m以上、幅50～88cm、確認面からの最大深度は43cmを測る。SD362はB1、B2、C1、C2、C3グリッドに位置し、遺存規模は長さ12.3m以上、幅50～70cm、確認面からの最大深度は41cmを測る。ともに断面形は坑底付近は箱形、開口部までは逆台形を呈し、坑底、壁には凹凸が確認される。覆土の堆積状況からは同時に埋められたと判断される。

SD361からは遺物は出土しなかったが、SD362からは陶磁器土器類が少量出土しており、それらは18世紀中～後葉に比定される。

SP389（遺構Ⅲ－31図、遺物Ⅳ－104図）

検出面はL面、C3グリッドに位置する柱穴である。SK388と重複し、本遺構が旧である。主軸方向はE-25°-Nでグリッド南北軸より東にふる。平面形は歪な方形を呈し、遺存規模は長軸55cm以上、短軸51cm以上、確認面からの深さは58cmを測る。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、坑底は柱痕部分が全体より一段窪む。

遺物は陶磁器土器、軒桟瓦片が少量出土している。

SK396（遺構Ⅲ－31図）

検出面はL面、C2グリッドに位置する浅い土坑であり、平面形は2つの歪な方形土坑が重複しているような形状を呈す。主軸方向はN-17°-Eでグリッド南北軸より東にふる。遺存規模は長軸240cm、短軸88cm、確認面からの深さは25cmを測る。覆土はローム粒・粗粒を多く含む黒色土主体であり、坑底や壁面に根穴状の凹みが多数確認できることから植栽痕と推測される。

遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SK429、SK430（遺構Ⅲ－31図）

検出面はL面、D2グリッドに位置するやや歪な方形土坑である。ともに主軸方向はN-30°-Eでグリッド南北軸より東にふる。遺存規模はSK429は長軸80cm、短軸77cm、確認面からの深さ31cm、SK430は長軸68cm、短軸60cm、確認面からの深さ42cmを測る。SK429の壁は坑底から僅かに開きながら立ち上がり、SK430の壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土の堆積状況は異なるが、共通するのは灰白色粘土を比較的多く含む点である。

遺物はSK429から完形土器Ⅲ1点と瀬戸・美濃系陶器Ⅲ細片が出土している。

SK477（遺構Ⅲ－31図、遺物Ⅳ－104～105図）

検出面はL面、D2グリッドに位置する不整形土坑である。遺存規模は長軸143cm、短軸125cm、確認面からの深さ29cmを測る。壁は坑底から緩やかに開きながら立ち上がり、坑底には根穴状の窪みが多数確認できる。覆土上層はしまりがやや弱く、遺物や炭化物などをやや多く含み、下層はローム粒やブロックをやや多く含む。以上のような状況から、本遺構は植栽痕と推測され、ゴミを含む土で埋め戻したと推測される。

遺物は遺物収納箱1箱分の陶磁器土器類が出土し、それらは18前～中葉に比定される。

SK488（遺構Ⅲ－31図）

検出面はL面、C2グリッドに位置する長方形土坑であり、主軸方向はN-22°-Eでグリッド南北軸より東にふる。遺存規模は長軸121cm、短軸70cm、確認面からの深さ45cmを測る。東壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、西壁は坑底付近は僅かにオーバーハングし、開口部ではほぼ垂直に立ち上がる。ローム粒やブロック主体の覆土で一度に埋められている。

遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SK499（遺構Ⅲ－31図、遺物Ⅳ－105図）

検出面はL面、C2グリッドに位置する浅い不整形土坑であり、遺存規模は長軸110cm、短軸97cm、確認面からの深さは18cmを測る。覆土はローム粒・粗粒を多く含む黒褐色から黄褐色土主体であり、坑底や壁面に根穴状の窪みが多数確認できることから植栽痕と推測される。

遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SD515、SD537（遺構Ⅲ－32図）

ともに検出面はL面、D2グリッドに位置する溝状遺構である。SD515の遺存規模は長さ650cm以上、幅25cm前後、確認面からの最大深度は22cmを測り、断面形は歪なU字状を呈す。主軸方向はN-17°-Eでグリッド南北軸より東にふる。SD537はSD515の途中から分岐する形で検出されたが重複関係は不明である。遺存規模は長さ313cm以上、幅20～40cm、確認面からの最大深度は14cmを測るが、幅、掘削深度が一定でなく、蛇行する形で検出された。

両遺構とも遺物は出土しなかった。

SP554（遺構Ⅲ－32図、遺物Ⅳ－105図）

検出面はL面、E2グリッドに位置する柱穴である。平面形は歪な小判形を呈し、北側にテラスを有す。遺存規模は長軸45cm、短軸34cm、確認面からの深さは24cmを測る。

遺物はキセル吸口など金属製品が少量出土しているのみである。

SK581（遺構Ⅲ－32図）

調査区南端D7グリッド、L面から確認された円形の土坑である。遺構の北側でSD237、南側でSK582と切り合っており、新旧は両遺構より旧である。規模は、100cm、南北100cm、深さは最大30cmを計測する。壁や坑底は比較的平滑に調整されており、壁は鍋底状の坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は、暗～黒褐色土と黄褐色土が互層となって堆積している。

遺物は陶磁器の小片が2点出土しているのみである。

SK583（遺構Ⅲ－33図、遺物Ⅳ－105～117図）

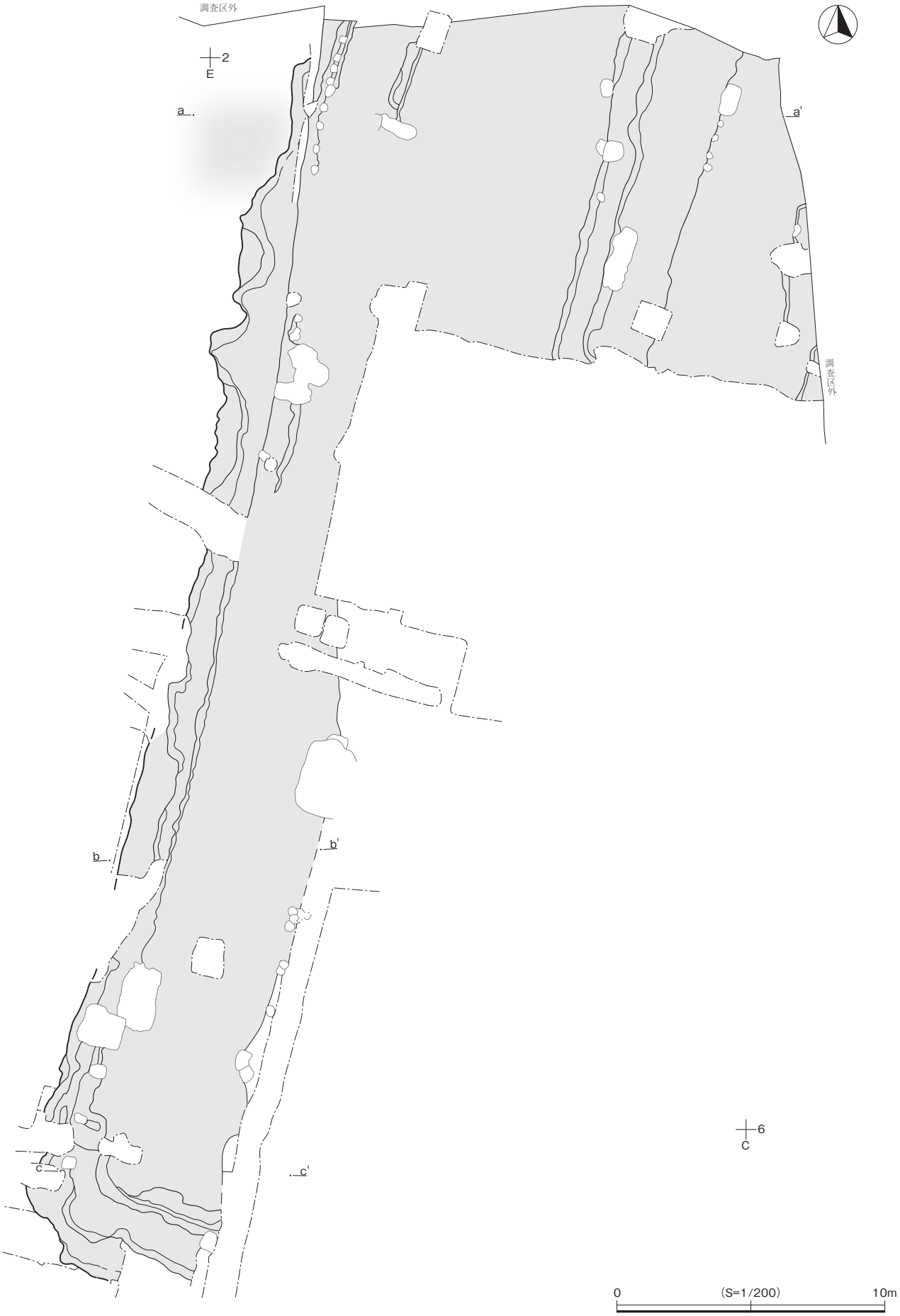
調査区南端C7、D7グリッド、L面から確認されたやや大型の土坑である。遺構の中央上部をSP585に切られている。また、南、東側が調査区外のため、調査を行えなかった。遺存している規模は、東西520cm、南北300cm、確認面からの深さは最大110cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著に確認され、壁は鍋底状の坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、6層に分層され、2、3、4、6層はほぼ水平に堆積している。遺物は、中層の2～4層から多く出土した。

遺物は多く確認され、東大編年Ⅶ期の陶磁器、土器類を中心に、瓦、金属製品、ガラス製品、石製品が出土している。

SP586（遺構Ⅲ－33図、遺物Ⅳ－117図）

調査区南端D7グリッド、L面から確認された円形のピットである。規模は、直径40cm、深さは最大20cmを計測する。最大深度はピット西側にあり、東壁は緩やかに、西壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、2層に分層される。

遺物は陶磁器3点とガラス製品1点が出土している。



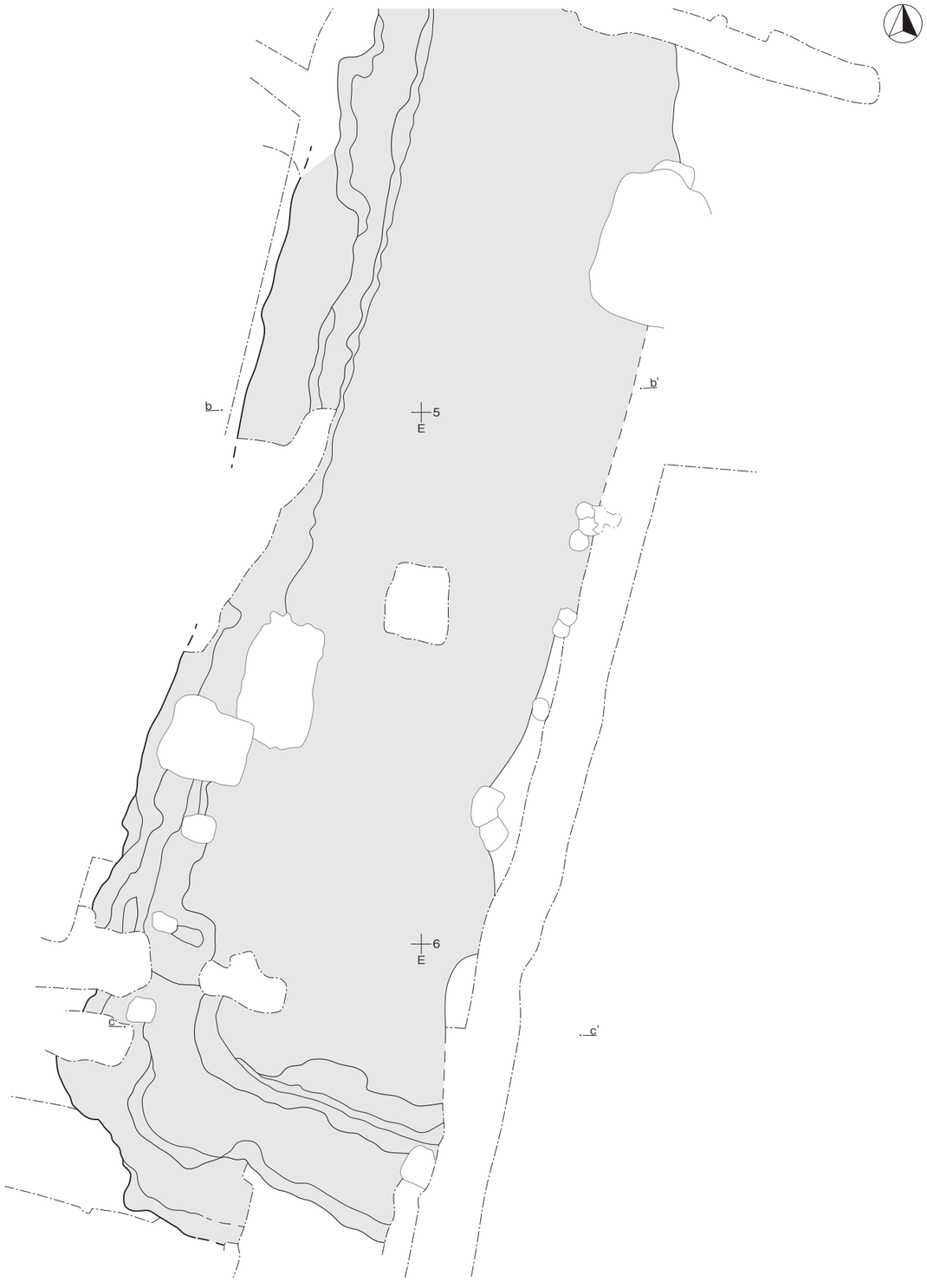
Ⅲ-4図　段切り・版築　全体図

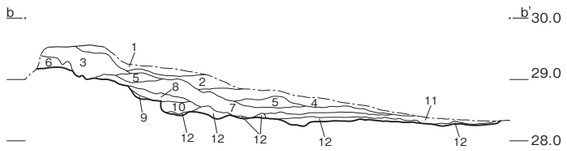
版築 a-a'

1. 暗灰色土　しまり強、ローム塊帯状に少、黒色土粒・塊やや多、焼土粒微含。
2. 黒褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒・塊・黒色土粒・塊やや多、焼土少、礫少含。
3. 暗黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒・塊斑状に多、ほぼ黒色土で構成、貝殻少含。
4. 暗褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊・焼土粒塊多含。
5. 明黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ほぼロームで構成、黒色土を斑状に多含。
6. 暗灰色土　ローム粒微、瓦片やや多含。
7. 黒褐色土　ローム粒・塊少、黒色土で構成、炭化物粒微含。
8. 黒色土　ローム粒少、黒色土で構成、黒色のガサガサとしたものやや多含。
9. 暗褐色土　ローム漸移層。
10. 暗灰色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多、焼土粒・塊やや多、炭化物少含。
11. 黒色土　ローム粒微、黒色土で構成、焼土粒・塊少含。
12. 暗赤褐色土　ローム粒微、黒色土粒・塊多、焼土粒・塊多含。
13. 黒褐色土　ローム粒・塊少、黒色土粒・塊・焼土粒・塊多、炭化物粒・塊少含。
14. 灰色土　ローム粒・塊少、焼土・炭化物粒・瓦片少。
15. 黒色土　ローム粒・塊やや多、ほぼ黒色土で構成、白色粘土粒微含。
16. 灰色土　やや砂質、ローム粒・焼土粒微含。
17. 灰褐色土　ローム粒・塊・炭化物粒・塊少、破砕礫・瓦片やや多含。
18. 暗灰色土　やや砂質、ローム粒・塊微、黒色土粒・塊やや多、炭化物粒・塊少。
19. 暗灰黄色土　しまりやや弱、やや砂質、ローム粒・塊やや多、灰白色粘土塊少、炭化物微含。
20. 灰白色土　シルト質灰白色粘土を帯状に含。
21. 黒褐色土　しまりやや弱、やや砂質、ローム粒・塊少、黒色のガサガサとしたもの含。
22. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多、灰白色シルト質粘土塊少含。
23. 暗灰色土　ローム粒微、黒色土粒・塊多、焼土粒・炭化物粒微、暗灰色土塊が斑状に多含。
24. 褐色土　ローム粒・塊多含。
25. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多、灰白色シルト質粘土塊少含。
26. 灰色土　ローム粒・塊少、焼土粒微、炭化物粒・塊少、瓦片・礫小含。
27. 黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ほぼロームで構成、黒色土粒・塊やや多含。
28. 黄褐色土　しまりなし、ローム粒極多、灰色土粒やや多含。

0　(S=1/100)　5m

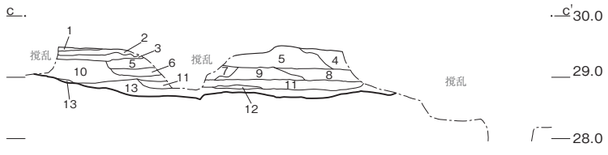
Ⅲ-5図　段切り・版築分割図(1) 北側





版築 b–b'

1. 暗黄褐色土　ローム粒・塊極多、黒色土粒・塊斑状に極多含。
2. 黒色土　しまり強、ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多、炭化物粒微含。
3. 黒色土　ローム粒少、黒色土粒・塊多、焼土粒・塊少、炭化物微、灰白色シルト質粘土粒・塊多、瓦片やや多含。
4. 黄褐色土　しまり強、ローム粒・塊多、黒色土多、焼土・炭化物粒微含。
5. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、ほぼ黒色土で構成、焼土・炭化物粒少含。
6. 黒色土　ローム粒・塊少、黒色土で構成。黒色のガサガサしたもの含。
7. 黒褐色土　ローム粒・塊少、黒色土粒・塊極多、焼土粒・塊少、炭化物微、瓦片やや多。
8. 黒褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒・塊・黒色土粒・塊やや多、焼土粒・塊少含。
9. 暗黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒・黒色土粒やや多含。
10. 黒色土　ローム粒・塊少、ほぼ黒色土で構成、炭化物粒・塊微含。
11. 灰色土　粘性やや強、ローム粒・塊多、黒色土粒・塊少、焼土粒微含。
12. 黄褐色土　しまりやや強、ほぼローム塊で構成、黒色土塊やや多含。

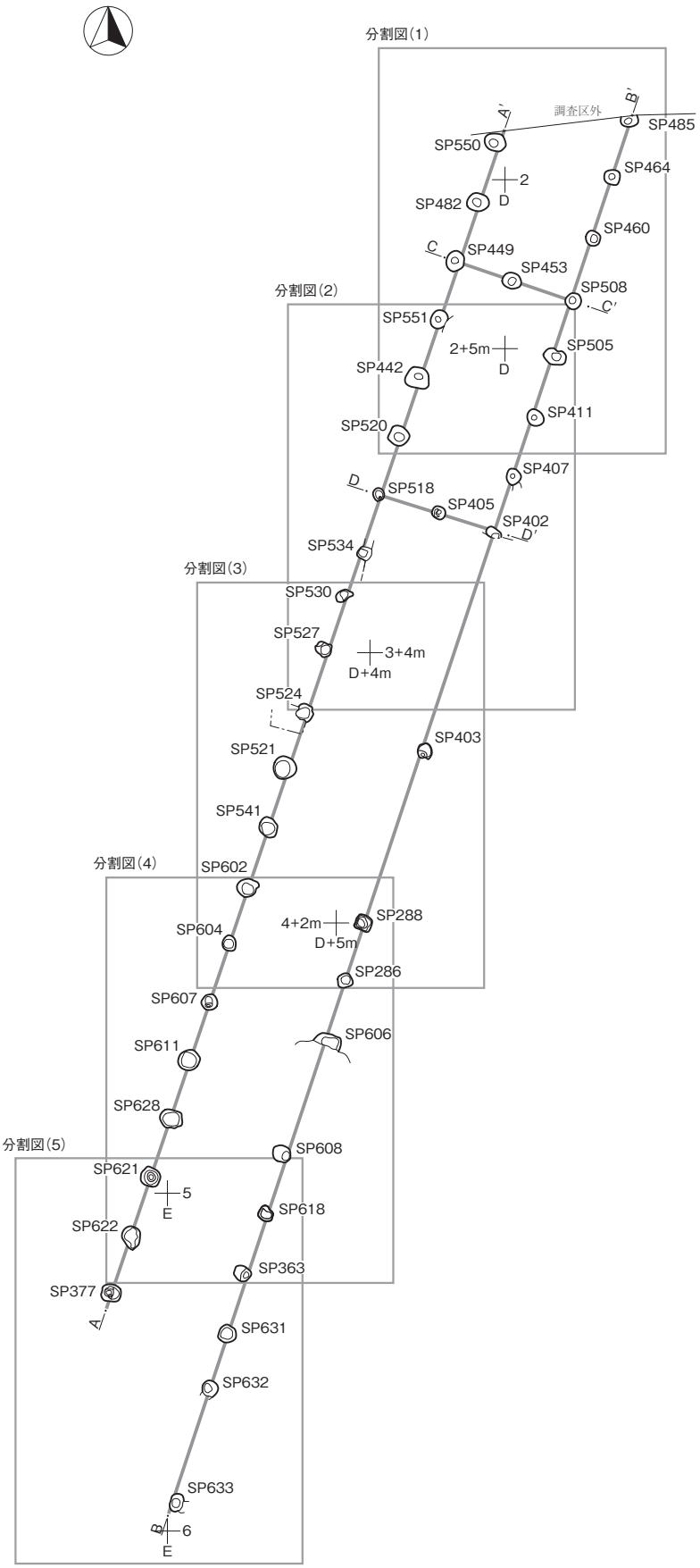


版築 c–c'

1. 黒褐色土　ローム塊少、黒色土粒・塊多、焼土粒・塊少含。
2. 明黄褐色土　ロームで構成、焼土粒・塊微含。
3. 黒褐色土　ローム粒・塊少、黒色土粒・塊多、焼土微含。
4. 暗黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒・塊極多、焼土粒・塊少、炭化物粒・塊微含。
5. 黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊多、黒色土粒・塊多、焼土粒・塊やや多含。
6. 明黄褐色土　しまりやや強、ほぼロームで構成、黒色土粒・塊やや多、焼土粒・塊少含。
7. 明黄褐色土　しまり・粘性強、ロームで構成、焼土微含。
8. 黄褐色土　しまりやや強、ロームで構成。
9. 暗黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊やや多、焼土粒・塊微含。
10. 暗灰色土　ローム粒・塊少、焼土粒微、瓦片やや多含。
11. 黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームで構成。
12. 暗黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊多、黒色土粒・塊やや多含。
13. 黄褐色土　しまり・粘性強、ロームで構成。

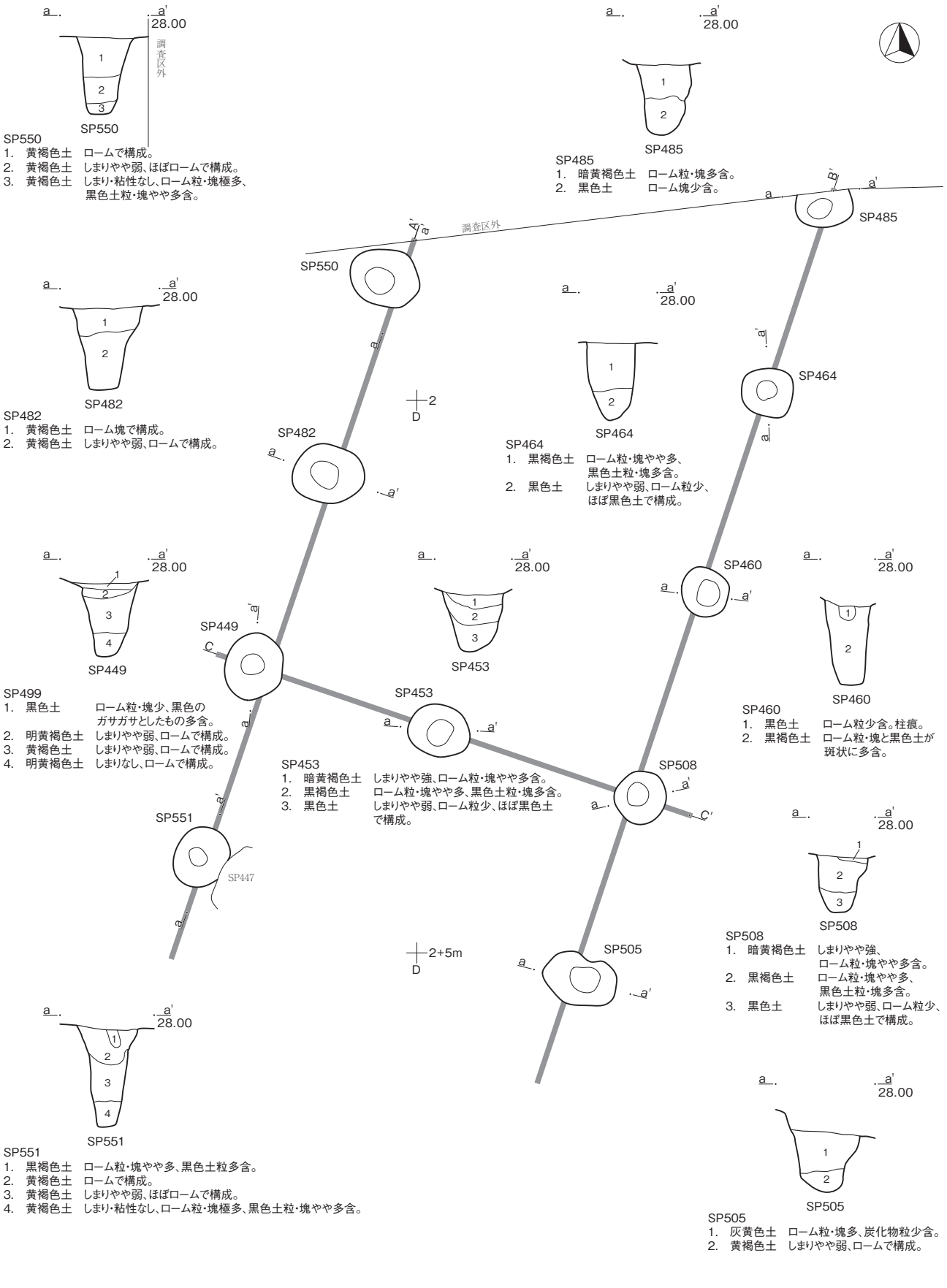
0　(S=1/100)　5m

Ⅲ-6図　段切り・版築分割図(2) 南側



Ⅲ-7図　建物址 分割配置図

分割図1



SP550
1. 黄褐色土　ロームで構成。
2. 黄褐色土　しまりやや弱、ほぼロームで構成。
3. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊極多、黒色土粒・塊やや多含。

SP485
1. 暗黄褐色土　ローム粒・塊多含。
2. 黒色土　ローム塊少含。

SP482
1. 黄褐色土　ローム塊で構成。
2. 黄褐色土　しまりやや弱、ロームで構成。

SP464
1. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多含。
2. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒少、ほぼ黒色土で構成。

SP499
1. 黒色土　ローム粒・塊少、黒色のガサガサとしたもの多含。
2. 明黄褐色土　しまりやや弱、ロームで構成。
3. 黄褐色土　しまりやや弱、ロームで構成。
4. 明黄褐色土　しまりなし、ロームで構成。

SP453
1. 暗黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊やや多含。
2. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多含。
3. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒少、ほぼ黒色土で構成。

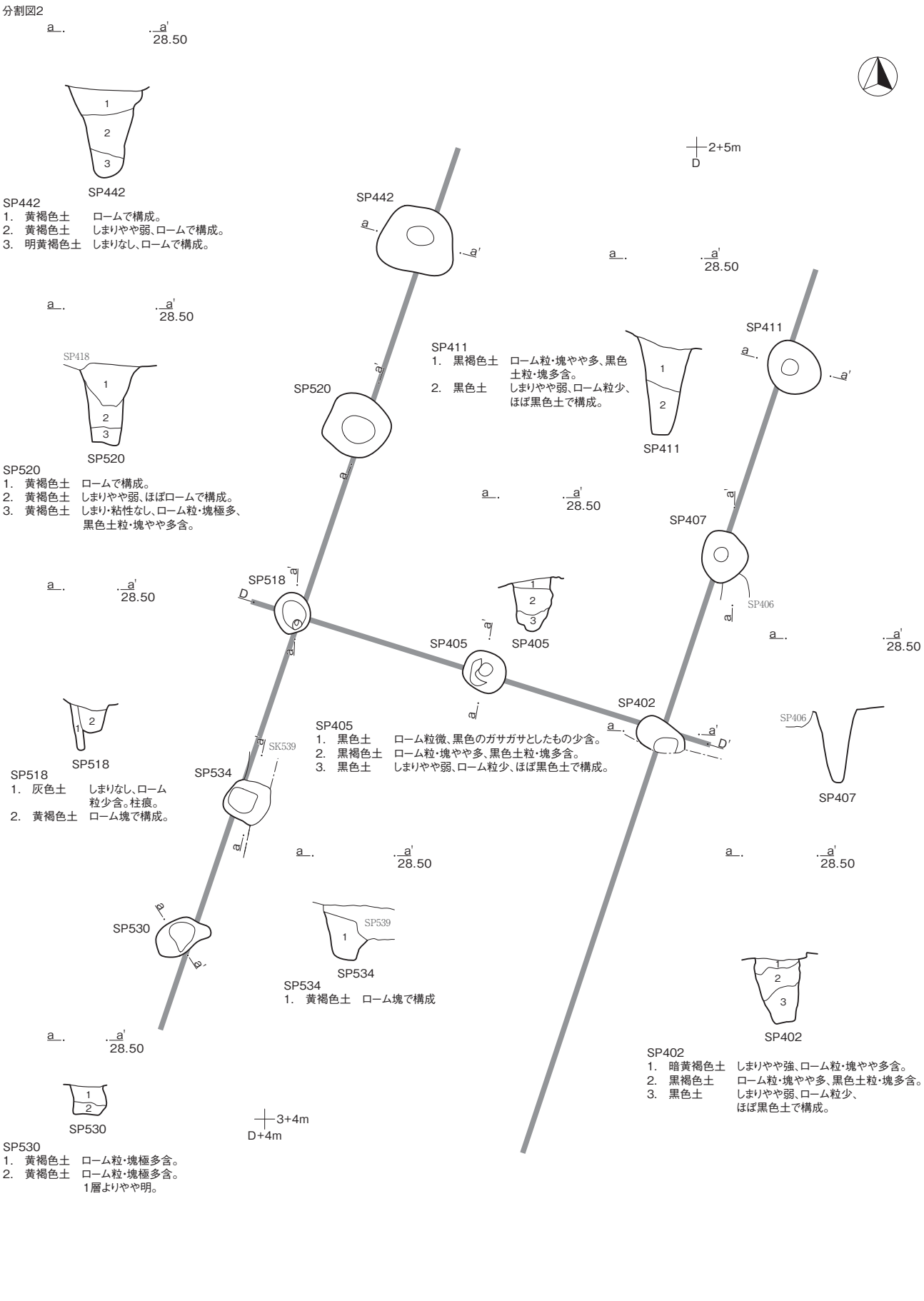
SP460
1. 黒色土　ローム粒少含。柱痕。
2. 黒褐色土　ローム粒・塊と黒色土が斑状に多含。

SP508
1. 暗黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊やや多含。
2. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多含。
3. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒少、ほぼ黒色土で構成。

SP551
1. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒多含。
2. 黄褐色土　ロームで構成。
3. 黄褐色土　しまりやや弱、ほぼロームで構成。
4. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊極多、黒色土粒・塊やや多含。

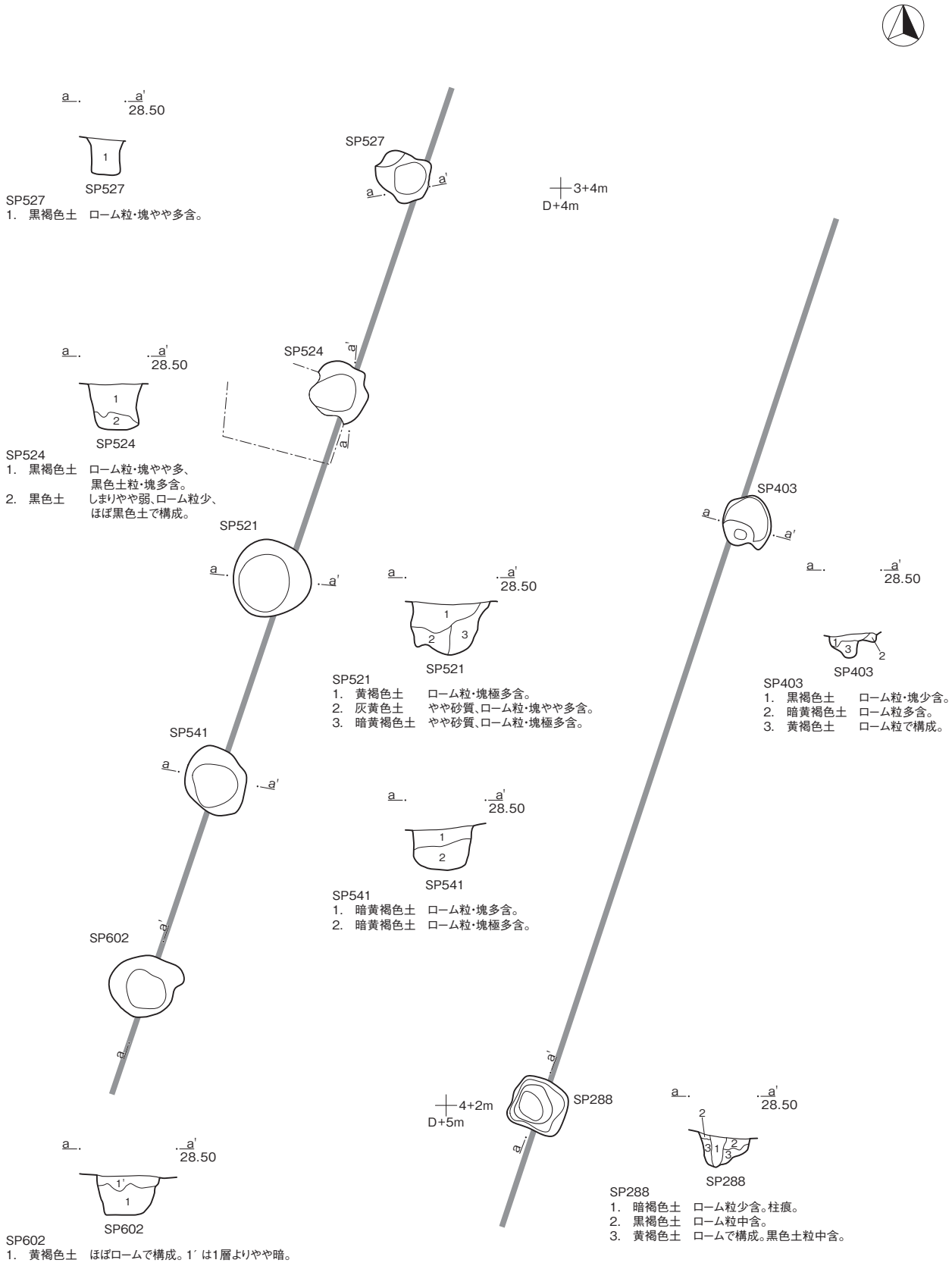
SP505
1. 灰黄色土　ローム粒・塊多、炭化物粒少含。
2. 黄褐色土　しまりやや弱、ロームで構成。

Ⅲ-8図　建物址 分割図(1)


分割図2
28.50
SP442
1. 黄褐色土　ロームで構成。
2. 黄褐色土　しまりやや弱、ロームで構成。
3. 明黄褐色土　しまりなし、ロームで構成。
SP418
SP520
1. 黄褐色土　ロームで構成。
2. 黄褐色土　しまりやや弱、ほぼロームで構成。
3. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊極多、黒色土粒・塊やや多含。
SP411
1. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多含。
2. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒少、ほぼ黒色土で構成。
SP407
SP406
SP518
1. 灰色土　しまりなし、ローム粒少含。柱痕。
2. 黄褐色土　ローム塊で構成。
SP405
1. 黒色土　ローム粒微、黒色のガサガサとしたもの少含。
2. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多含。
3. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒少、ほぼ黒色土で構成。
SK539
SP534
1. 黄褐色土　ローム塊で構成
SP539
SP530
1. 黄褐色土　ローム粒・塊極多含。
2. 黄褐色土　ローム粒・塊極多含。1層よりやや明。
SP402
1. 暗黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊やや多含。
2. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多含。
3. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒少、ほぼ黒色土で構成。
2+5m
3+4m
D+4m
0　(S=1/50)　2m

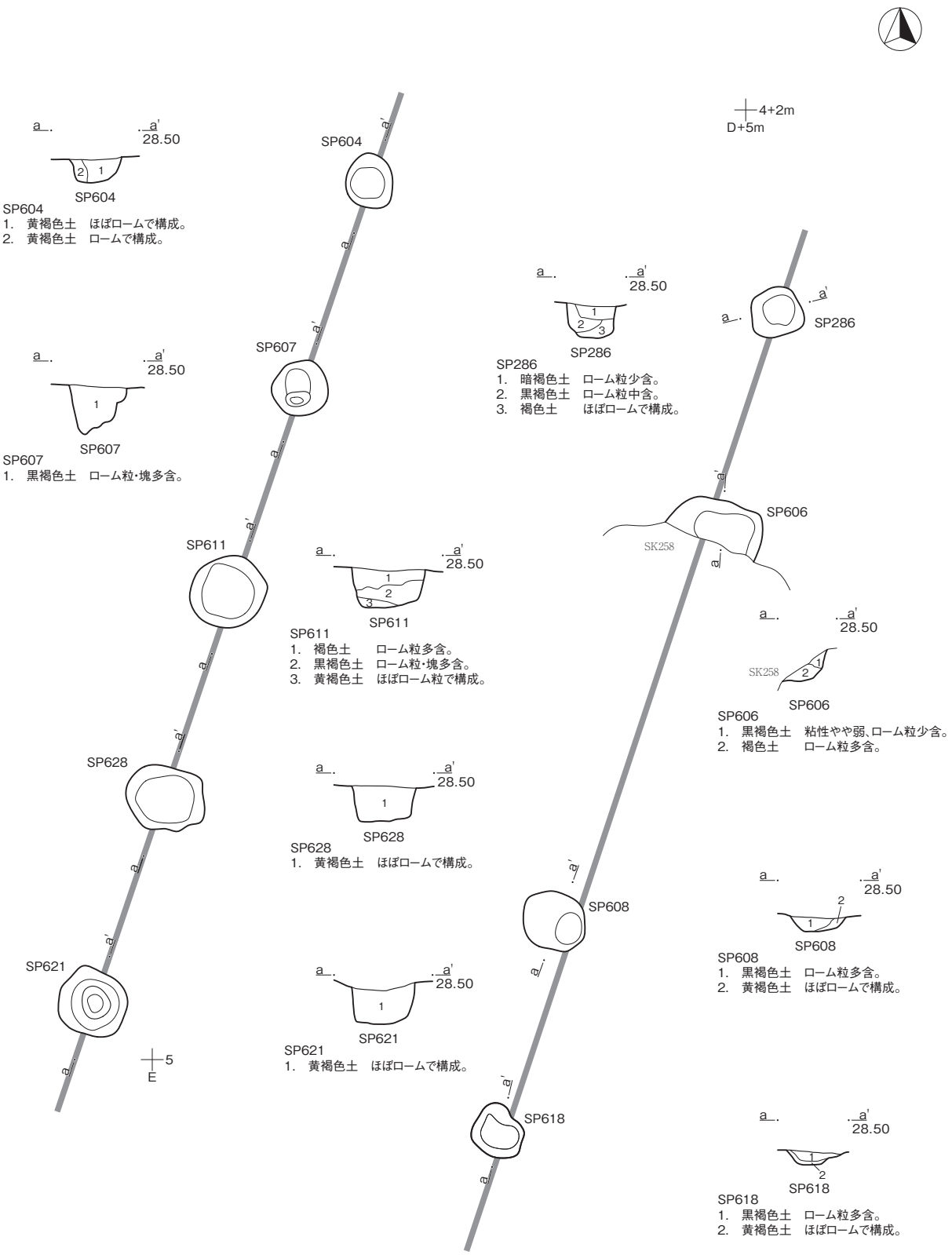
Ⅲ-9図　建物址 分割図(2)

分割図3



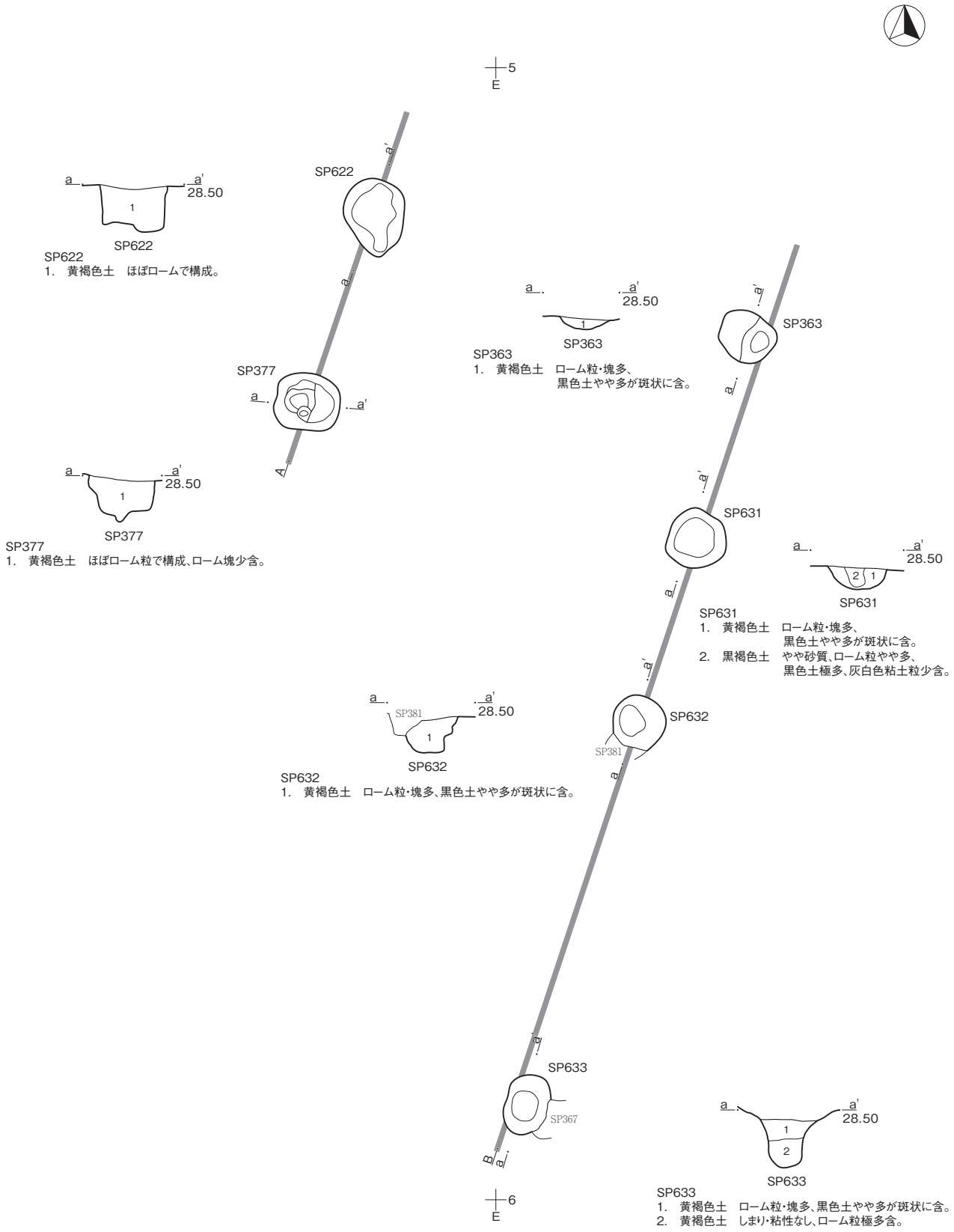
Ⅲ-10図 建物址 分割図(3)

分割図4

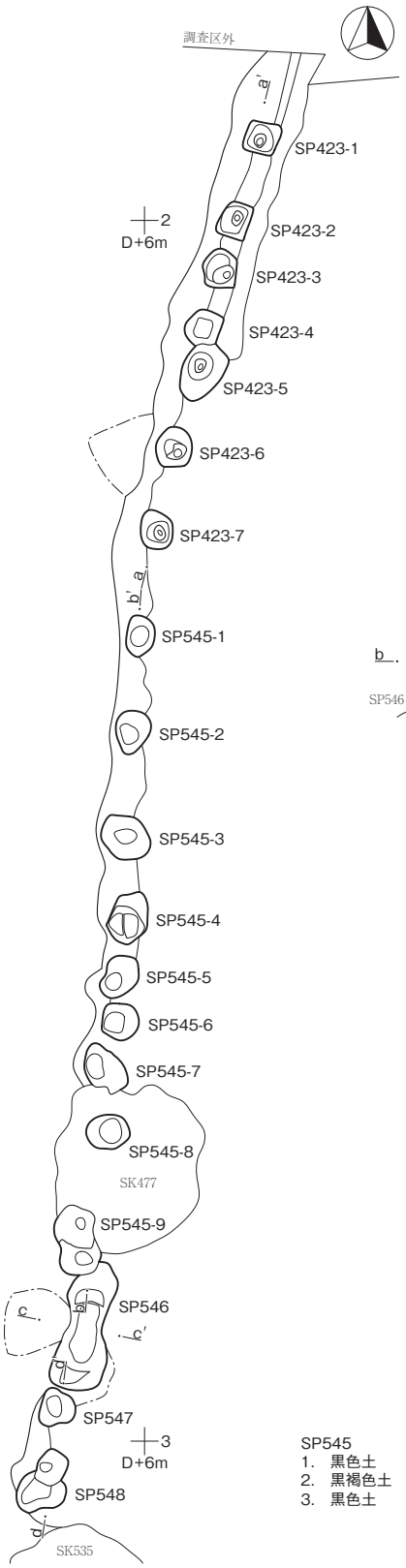


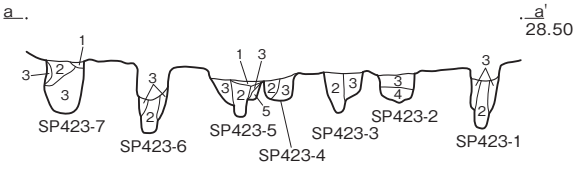
Ⅲ-11図　建物址 分割図(4)

分割図5



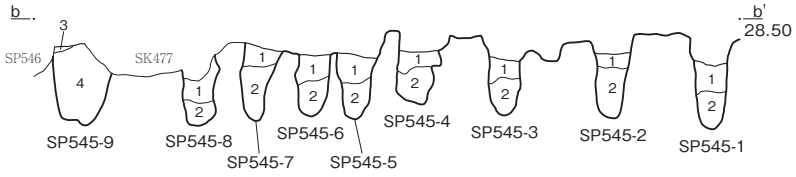
Ⅲ-12図 建物址 分割図(5)





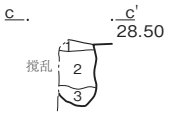
SP423

SP423
1. 黒色土　しまりやや弱、黒色のガサガサとしたものやや多含。
2. 黒色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊やや多、黒色のガサガサとしたもの少含。
3. 黒色土　ローム粒・塊少含。黒色のガサガサとしたもの少含。
4. 黒色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊少含。
5. 黄褐色土　しまりやや弱、ローム塊で構成。

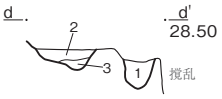


SP545

SP545
1. 暗褐色土　しまりやや弱、粘性なし、やや砂質、ローム粒やや多、黒色のガサガサとしたもの少含。
2. 褐色土　しまりやや弱、粘性なし、やや砂質、ローム粒少含。
3. 黒色土　ローム粒・塊やや多含。
4. 黄褐色土　しまりやや強、粘性やや強、ローム塊多、黒色土斑状に少含。



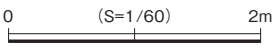
SP546



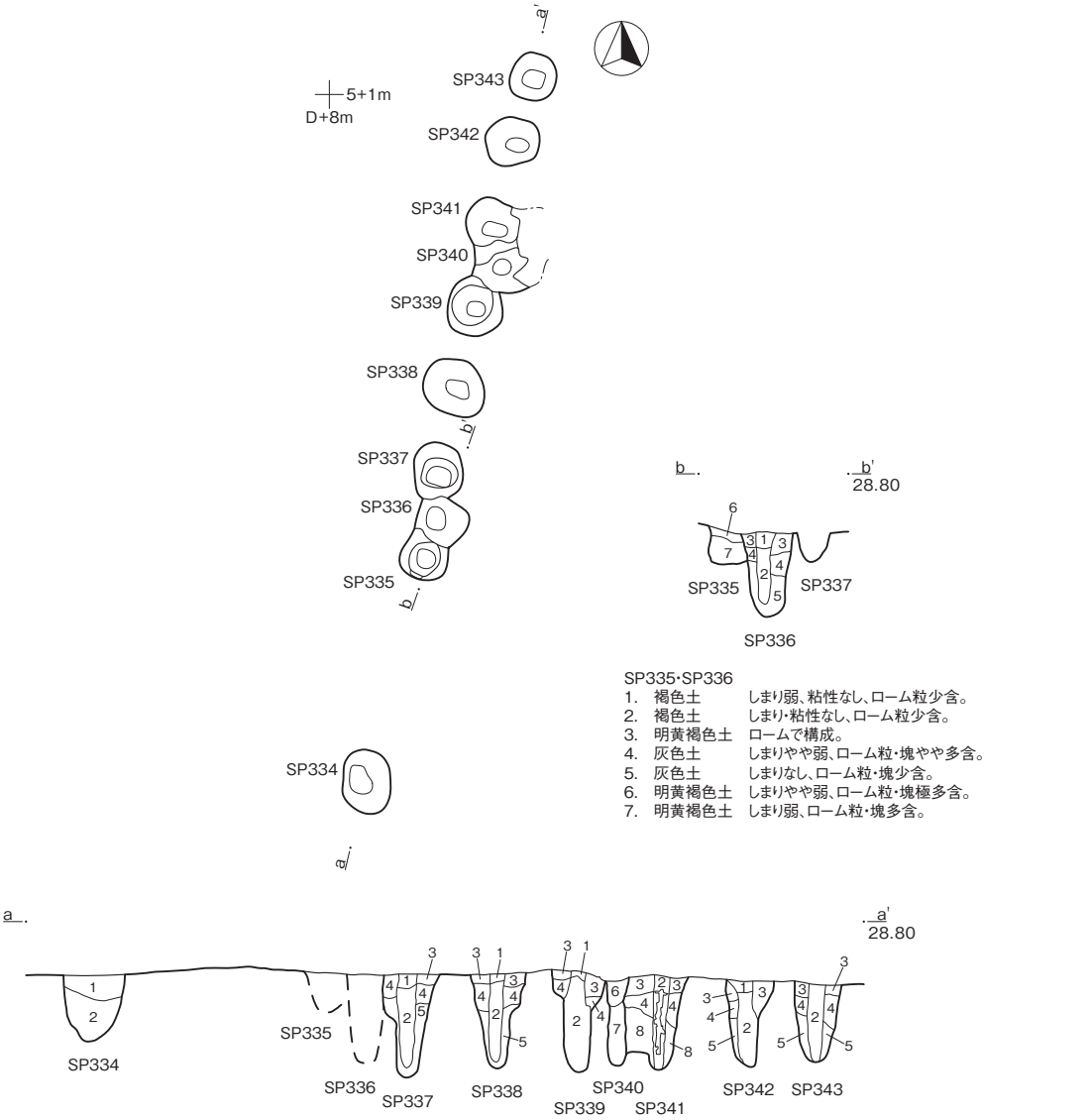
SP548　SP547

SP545
1. 黒色土　ローム粒少、黒色のガサガサとしたもの多含。
2. 黒褐色土　ローム粒・塊やや多含。
3. 黒色土　ローム粒微含。

SP547・SP548
1. 褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒微含。
2. 黄褐色土　ローム粒・塊多含。
3. 黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒極多含。



Ⅲ-13図　ピット列1（SP423、SP545、SP546、SP547、SP548）



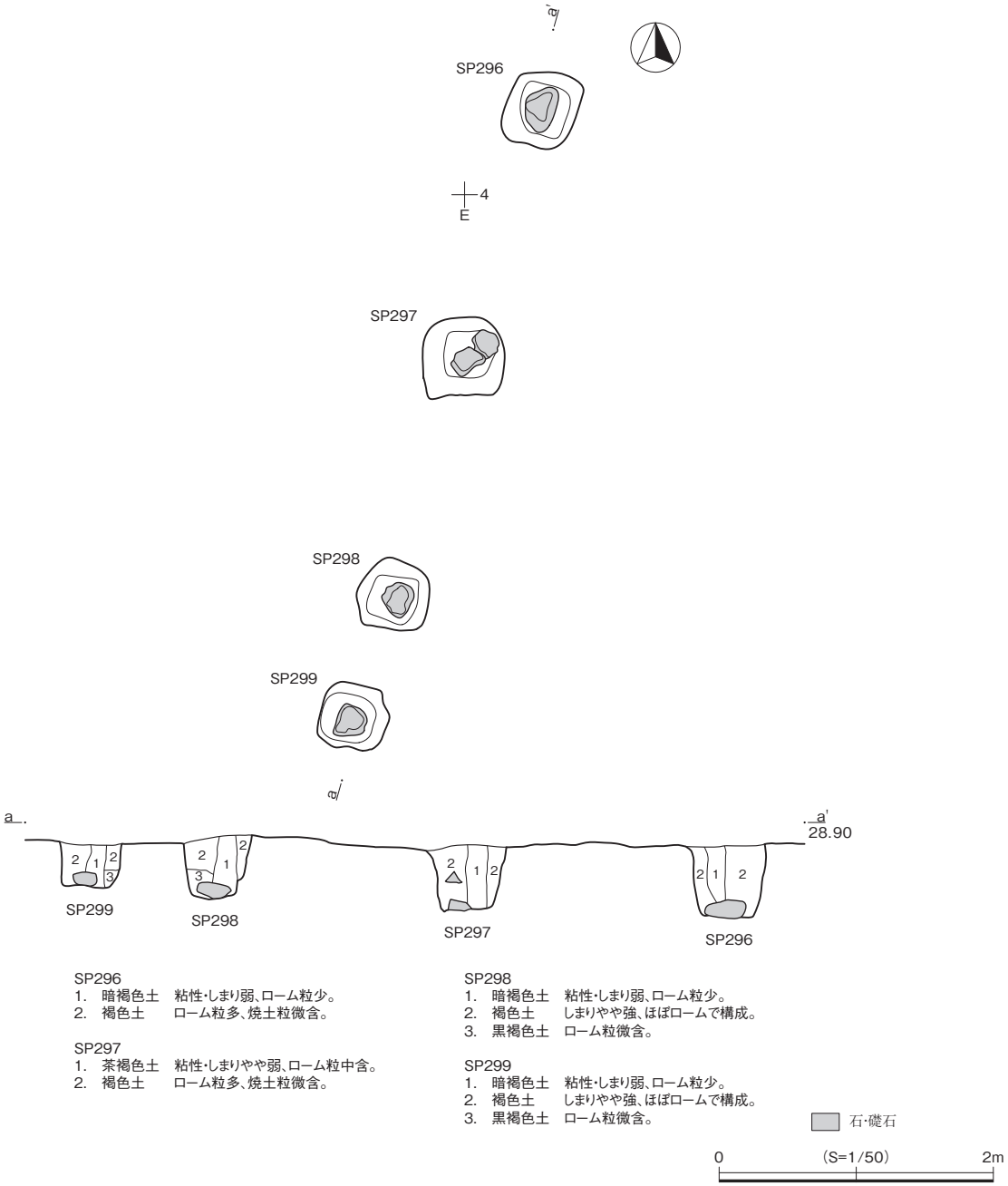
SP335・SP336
1. 褐色土　しまり弱、粘性なし、ローム粒少含。
2. 褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒少含。
3. 明黄褐色土　ロームで構成。
4. 灰色土　しまりやや弱、ローム粒・塊やや多含。
5. 灰色土　しまりなし、ローム粒・塊少含。
6. 明黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒・塊極多含。
7. 明黄褐色土　しまり弱、ローム粒・塊多含。

SP334
1. 明黄褐色土　ロームで構成。
2. 灰色土　しまりなし、ローム粒・塊少含。

SP337～SP343
1. 暗黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒多含。
2. 暗灰色土　しまり・粘性なし、ローム粒少、木片含。
3. 明黄褐色土　ロームで構成。
4. 灰色土　しまりやや弱、ローム粒・塊やや多含。
5. 灰色土　しまりなし、ローム粒・塊少含。
6. 褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒やや多含。
7. 黄褐色土　しまりやや弱、ロームで構成、焼土粒含。
8. 明黄褐色土　粘性やや強、ロームで構成。

0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-14図　ピット列2（SP334～SP343）



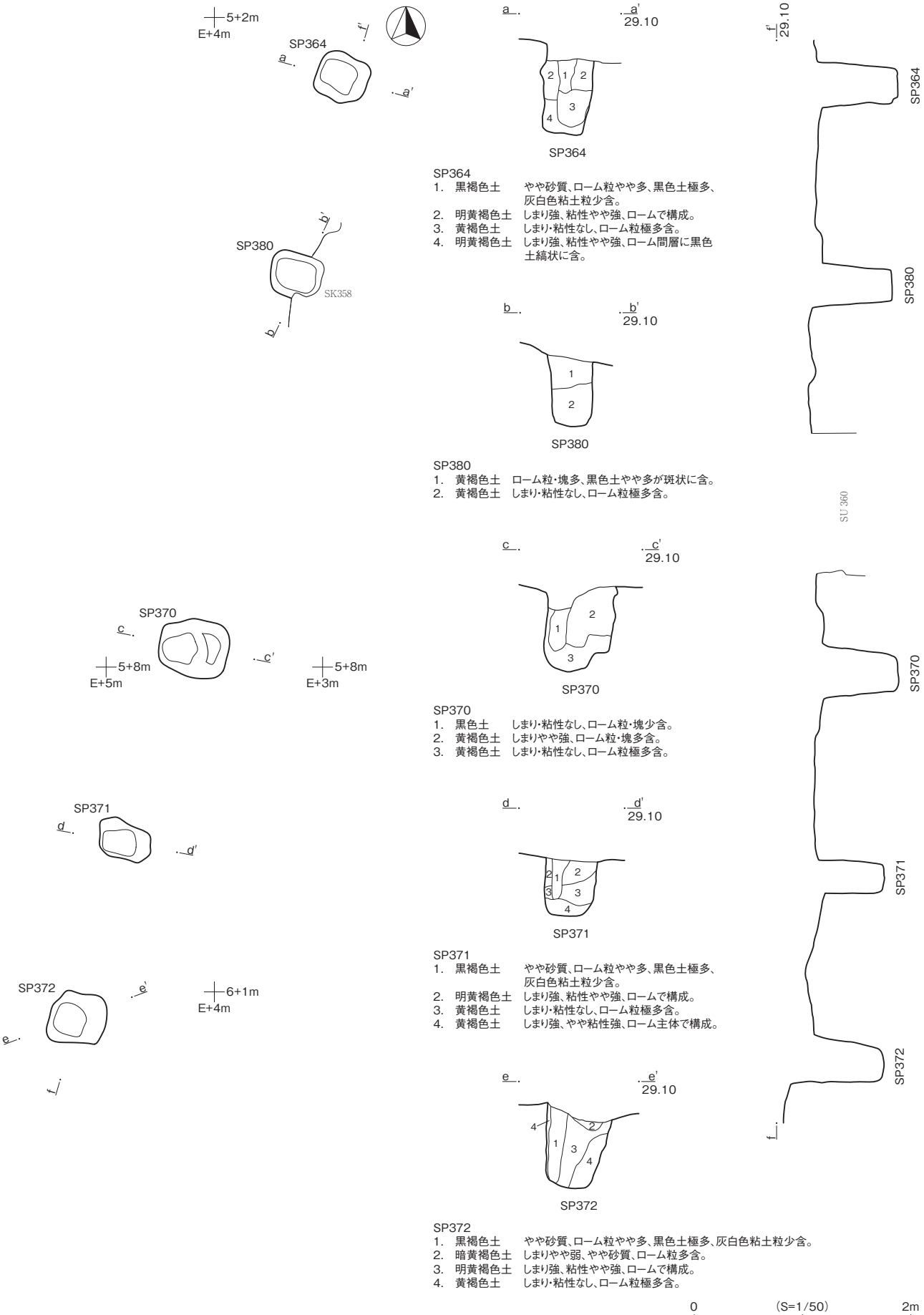
SP296
1. 暗褐色土　粘性·しまり弱、ローム粒少。
2. 褐色土　ローム粒多、焼土粒微含。

SP297
1. 茶褐色土　粘性·しまりやや弱、ローム粒中含。
2. 褐色土　ローム粒多、焼土粒微含。

SP298
1. 暗褐色土　粘性·しまり弱、ローム粒少。
2. 褐色土　しまりやや強、ほぼロームで構成。
3. 黒褐色土　ローム粒微含。

SP299
1. 暗褐色土　粘性·しまり弱、ローム粒少。
2. 褐色土　しまりやや強、ほぼロームで構成。
3. 黒褐色土　ローム粒微含。

Ⅲ-15図　ピット列3（SP296～SP299）



SP364
1. 黒褐色土　やや砂質、ローム粒やや多、黒色土極多、灰白色粘土粒少含。
2. 明黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームで構成。
3. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒極多含。
4. 明黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム間層に黒色土縞状に含。

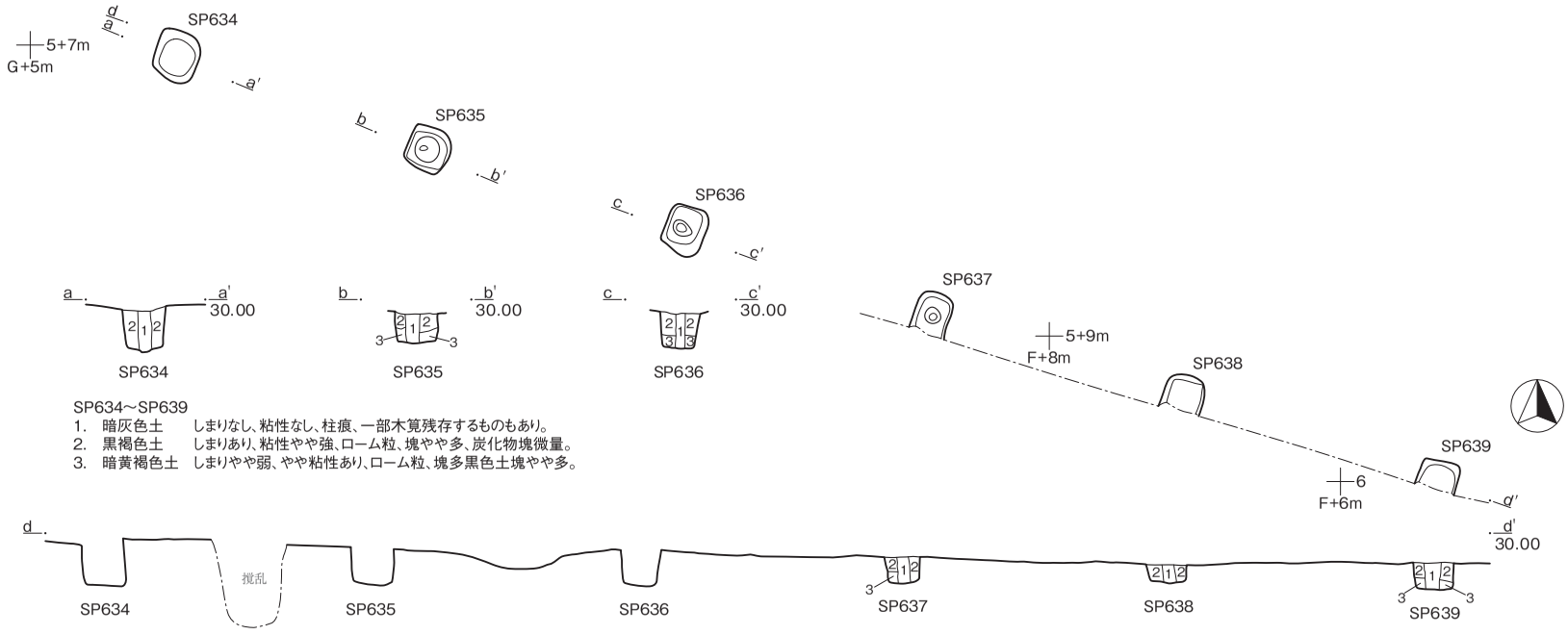
SP380
1. 黄褐色土　ローム粒・塊多、黒色土やや多が斑状に含。
2. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒極多含。

SP370
1. 黒色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊少含。
2. 黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊多含。
3. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒極多含。

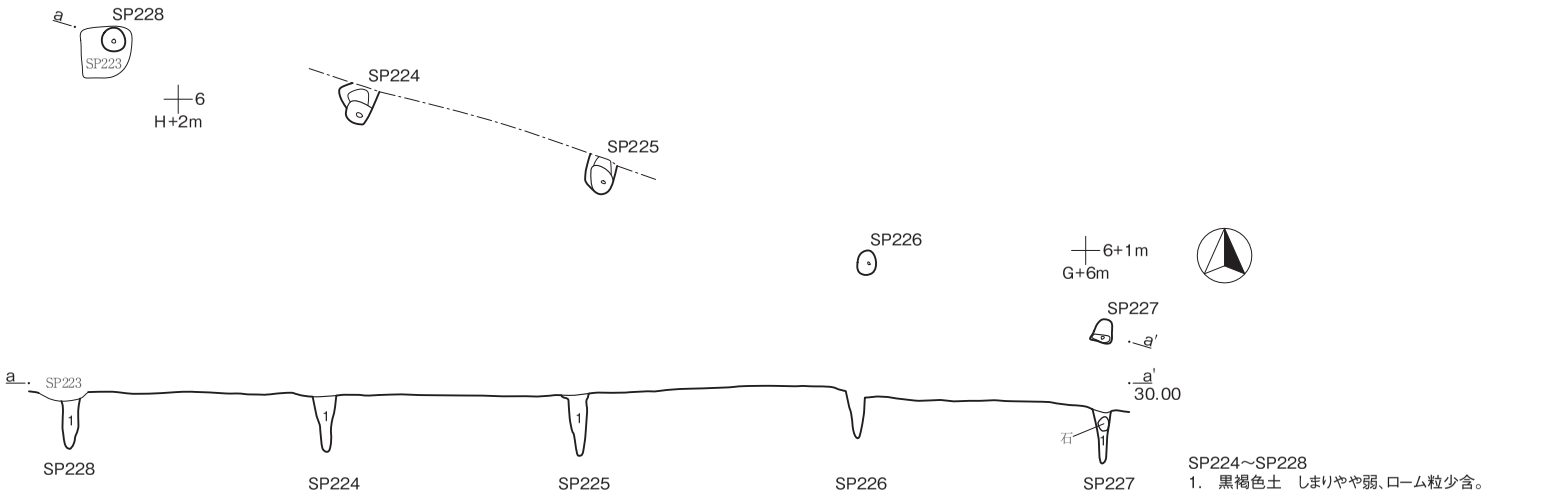
SP371
1. 黒褐色土　やや砂質、ローム粒やや多、黒色土極多、灰白色粘土粒少含。
2. 明黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームで構成。
3. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒極多含。
4. 黄褐色土　しまり強、やや粘性強、ローム主体で構成。

SP372
1. 黒褐色土　やや砂質、ローム粒やや多、黒色土極多、灰白色粘土粒少含。
2. 暗黄褐色土　しまりやや弱、やや砂質、ローム粒多含。
3. 明黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームで構成。
4. 黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒極多含。

Ⅲ-16図　ピット列4（SP364、SP370～SP372、SP380）

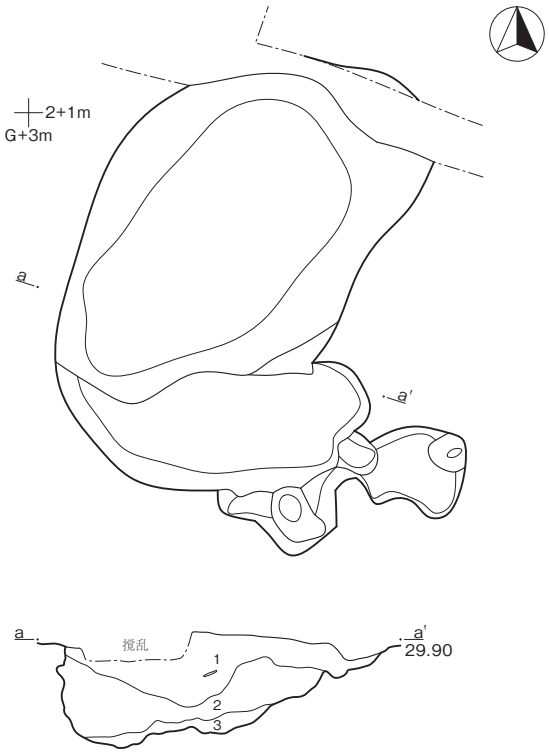


ピット列5



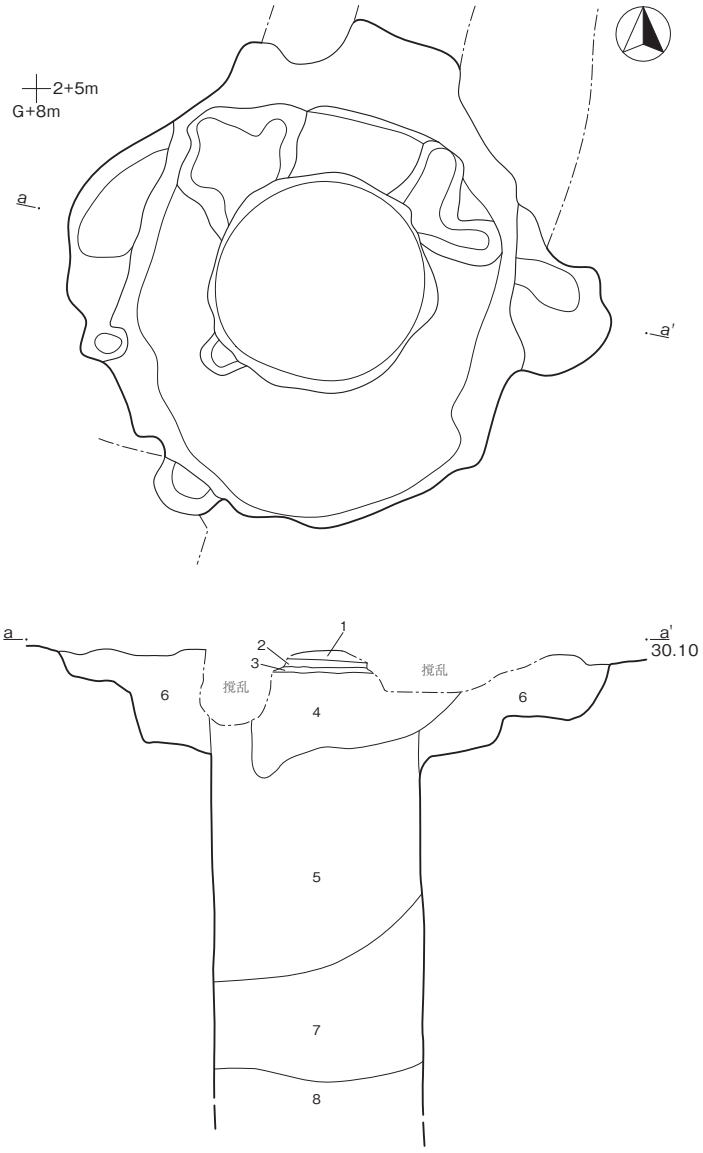
ピット列6

Ⅲ-17図　ピット列5（SP634～SP639）、ピット列6（SP224～SP228）



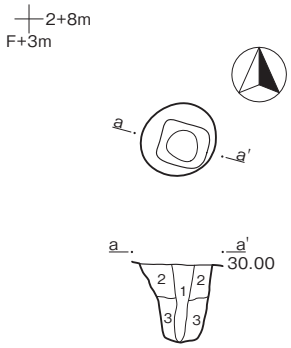
SK1
1. 黒褐色土　しまりやや強、ローム粒少、炭化物粒・塊やや多、陶磁器多含。
2. 黒色土　ローム粒・塊少、炭化物塊少含。
3. 暗黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒・塊多含。

SK1



SE2
1. 暗褐色土　しまり極強、粘性強、焼土粒微含。
2. 褐色土　しまり極強、粘性やや強、玉砂利多含。
3. 暗黄褐色土　しまり極強、粘性やや強、ローム塊多、焼土粒微含。
4. 暗褐色土　ローム粒・塊微、焼土粒少含。
5. 暗褐灰色土　しまり弱、下部にローム塊多含、遺物多含。
6. 暗黄褐色土　しまり・粘性やや強、ローム粒・塊多含。
7. 暗褐色土　ローム粒・塊少含。
8. 暗褐色土　しまり弱、ローム粒微含。

SE2

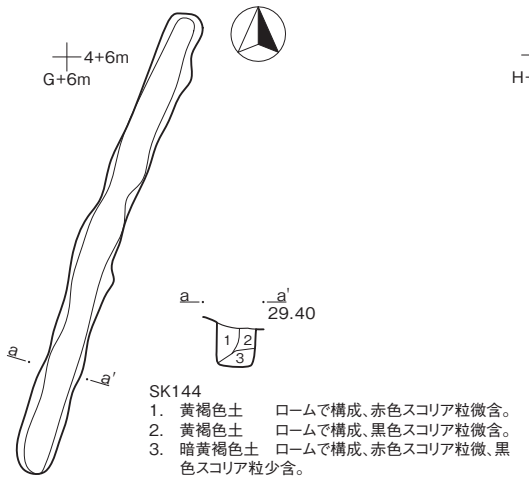


SP110
1. 暗灰色土　しまり・粘性なし、ローム粒少、炭化物粒微含。
2. 黒色土　しまり・粘性やや強、ローム塊やや多含。
3. 黒色土　しまり・粘性なし。

SP110

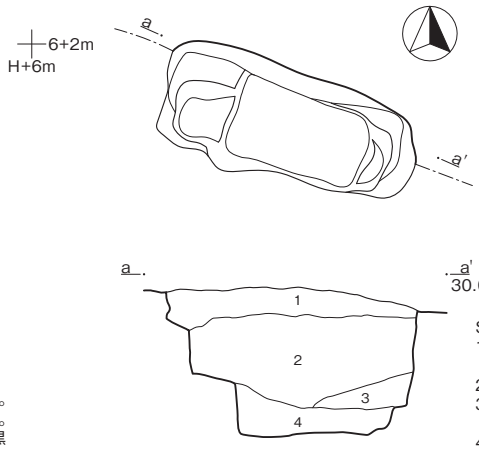
0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-18図　SK1、SE2、SP110



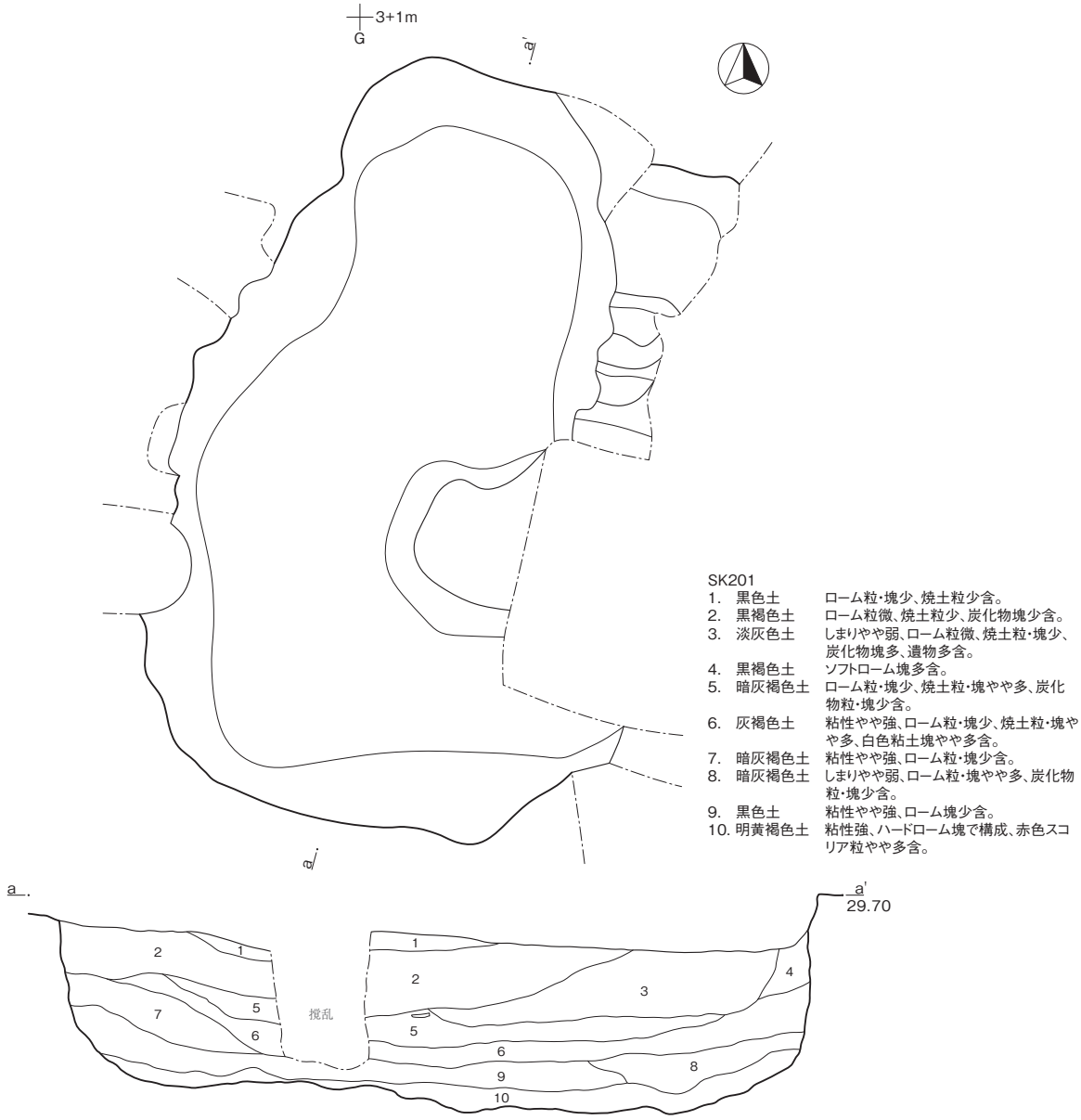
SK144
1. 黄褐色土　　ロームで構成、赤色スコリア粒微含。
2. 黄褐色土　　ロームで構成、黒色スコリア粒微含。
3. 暗黄褐色土　ロームで構成、赤色スコリア粒微、黒色スコリア粒少含。

SK144



SK163
1. 黄褐色土　　ローム粒・塊極多、赤色スコリア粒少含。
2. 暗黄褐色土　ローム粒・塊多含。
3. 暗黄褐色土　しまり・粘性なし、ローム粒・塊やや多含。
4. 明黄褐色土　粘性やや強、ローム塊で構成。

SK163

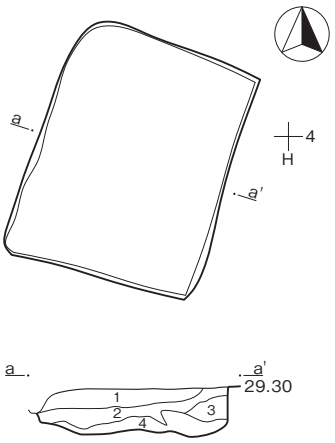


SK201
1. 黒色土　　ローム粒・塊少、焼土粒少含。
2. 黒褐色土　　ローム粒微、焼土粒少、炭化物塊少含。
3. 淡灰色土　　しまりやや弱、ローム粒微、焼土粒・塊少、炭化物塊多、遺物多含。
4. 黒褐色土　　ソフトローム塊多含。
5. 暗灰褐色土　ローム粒・塊少、焼土粒・塊やや多、炭化物粒・塊少含。
6. 灰褐色土　　粘性やや強、ローム粒・塊少、焼土粒・塊やや多、白色粘土塊やや多含。
7. 暗灰褐色土　粘性やや強、ローム粒・塊少含。
8. 暗灰褐色土　しまりやや弱、ローム粒・塊やや多、炭化物粒・塊少含。
9. 黒色土　　粘性やや強、ローム塊少含。
10. 明黄褐色土　粘性強、ハードローム塊で構成、赤色スコリア粒やや多含。

SK201

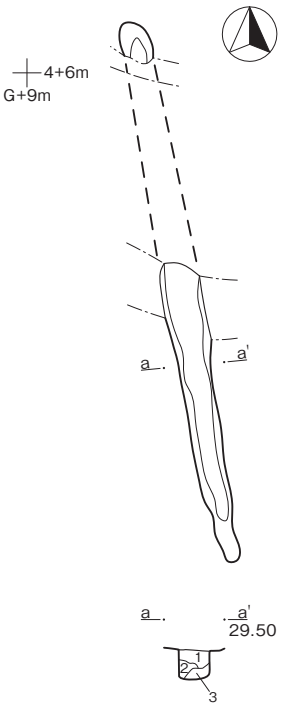
0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-19図　SK144、SK163、SK201



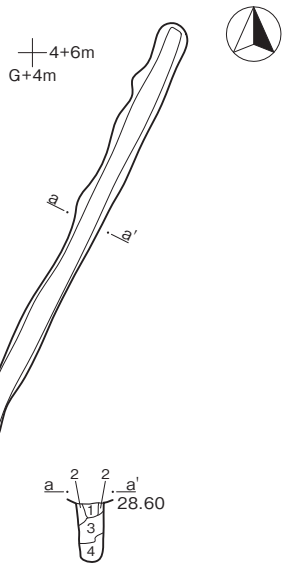
SK202
1. 暗褐色土　しまり強、ローム粒・炭化物少、灰褐色土粒多含。
2. 暗灰褐色土　しまり・粘性強、ローム粒中、炭化物微、灰褐色粘土極多、円礫微含。
3. 黒褐色土　しまり強、ローム粒・灰褐色粘土中含。
4. 黄褐色土　しまりやや強、ほぼロームで構成。

SK202



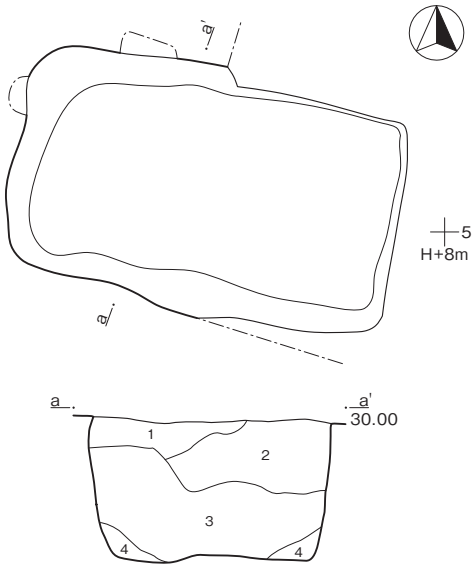
SK203
1. 褐色土　粘性やや強、ほぼロームで構成、炭化物・赤色スコリア微含。
2. 褐色土　粘性強、ローム粒極多、赤色スコリア少含、1層よりやや暗い。
3. 暗褐色土　粘性強、ローム粒多、赤色粒子微含。

SK203



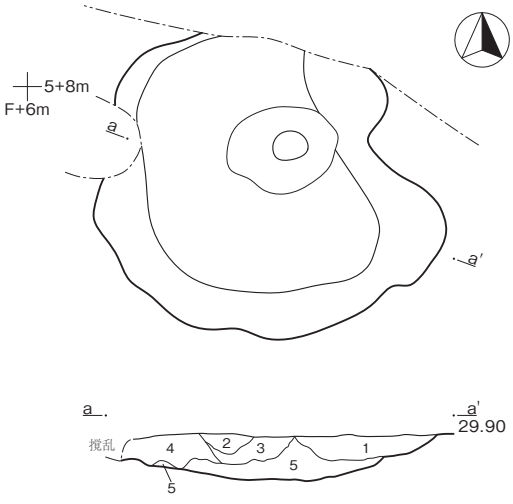
SK204
1. 暗褐色土　ローム粒多、赤色スコリア微含。
2. 褐色土　しまりやや強、ほぼロームで構成、赤色スコリア少含。
3. 茶褐色土　ローム粒多、ローム少塊少含。
4. 黒褐色土　しまり・粘性やや強、ローム粒・塊少含。

SK204



SK205
1. 黒褐色土　しまりやや強、ローム粒少、灰褐色粘土粒極多含。
2. 暗灰色土　ローム塊・炭化物微含、ほぼ灰褐色粘土粒・塊で構成。
3. 灰色土　粘性強、ローム塊・炭化物微含、ほぼ灰褐色粘土粒・塊で構成。
4. 褐色土　粘性強、ロームと灰褐色粘土が薄く互層になる。

SK205



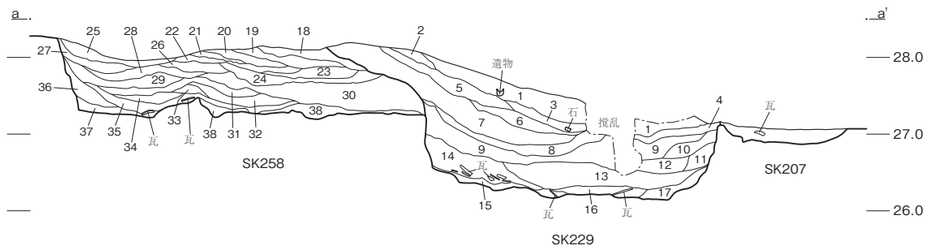
SK208
1. 黒褐色土　ローム粒少、焼土粒・炭化物微含。
2. 暗褐色土　ローム粒微含。
3. 暗褐色土　ローム粒中含。
4. 暗褐色土　ローム粒中、炭化物・焼土粒微含。
5. 茶褐色土　ほぼロームで構成。

SK208

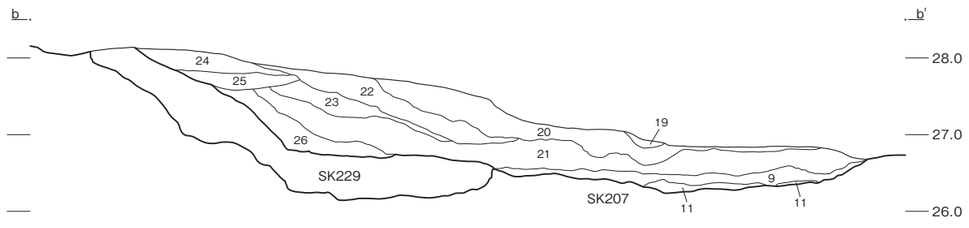
0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-20図　SK202、SK203、SK204、SK205、SK208

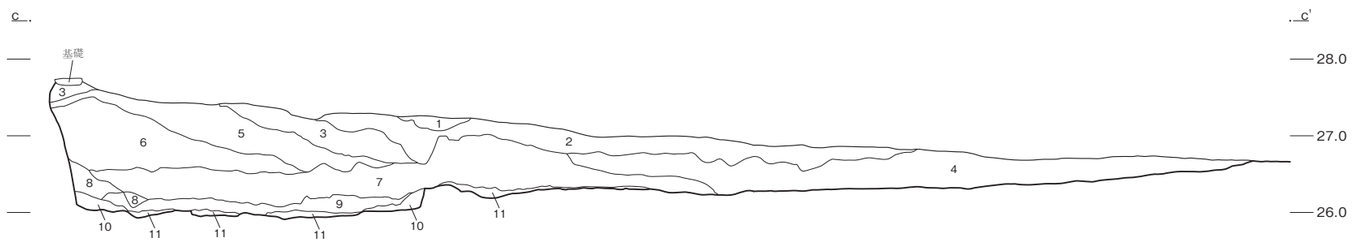
Ⅲ-21図　SK207、SK229、SK258（1）



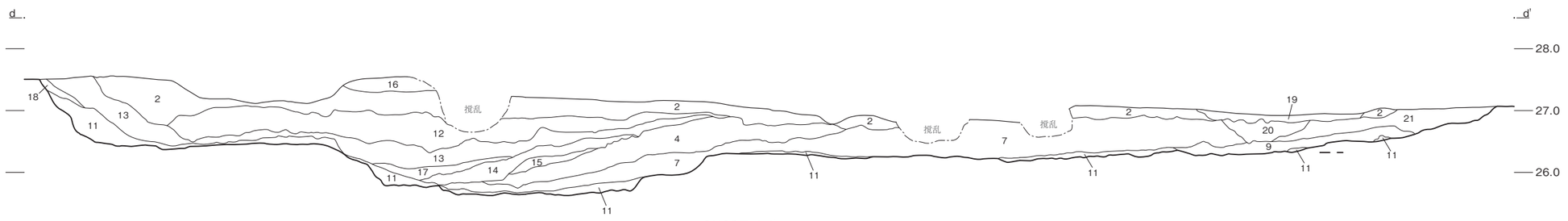
SK207･SK229･SX258 a-a'



SK207･SK229 b-b'



SK207 c-c'



SK207 d-d'

0 (S=1/80) 4m

Ⅲ-22図　SK207、SK229、SK258(2)

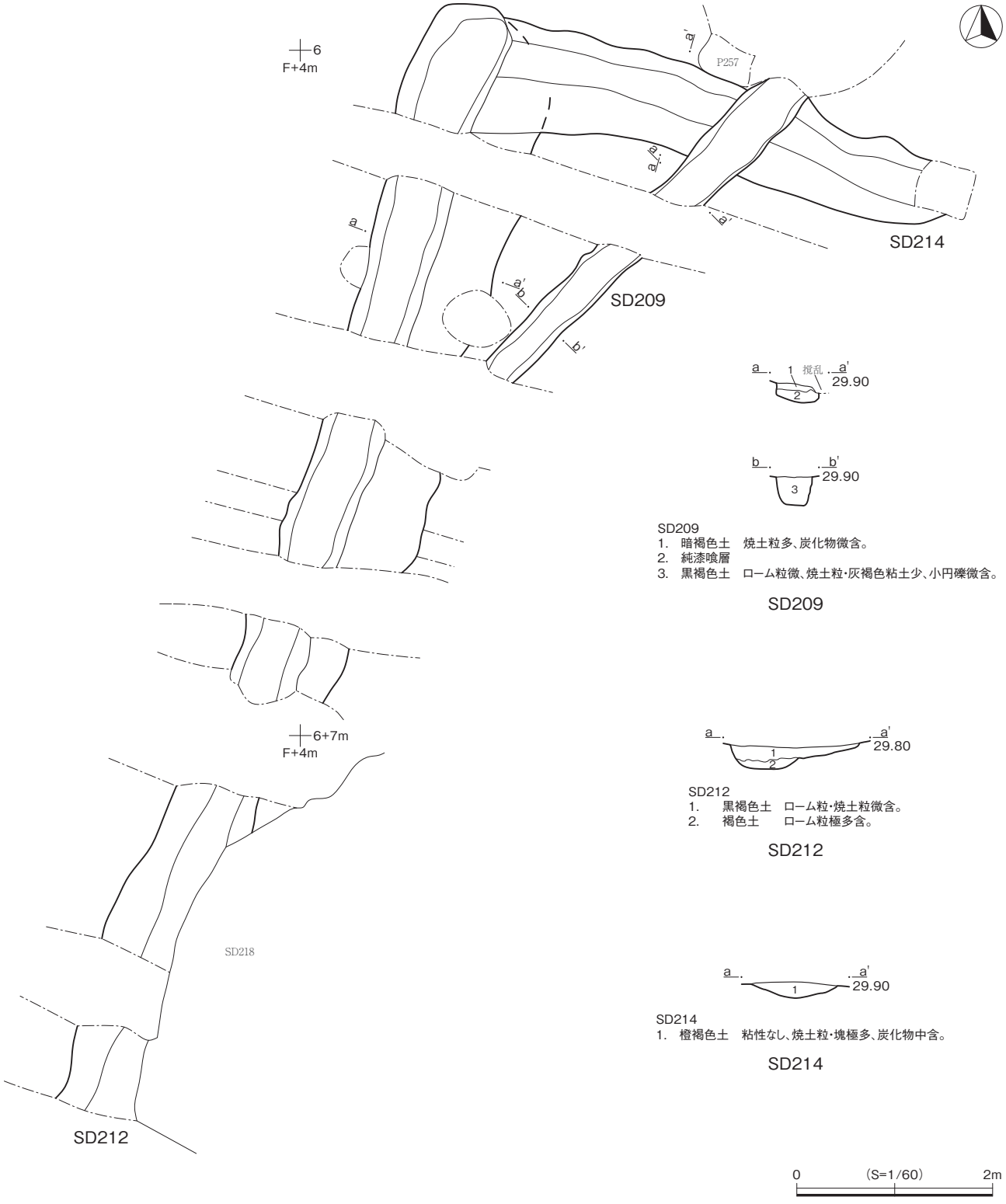
4-5図　SK207、SK229、SK258(2)

SK207、SK229、SK258　a-a'

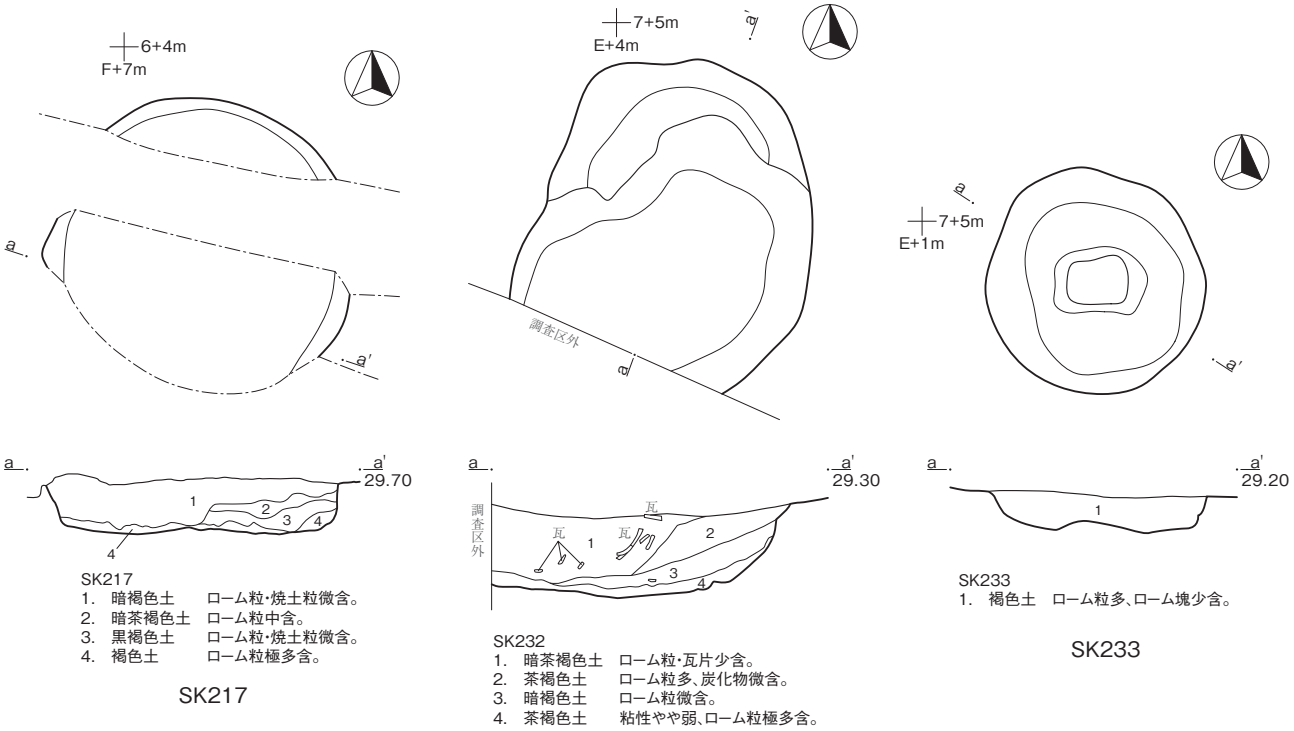
1. 暗灰褐色土　しまりやや弱、ローム粒・炭化物中、灰褐色粘土・漆喰片極多含。
2. 黄褐色土　粘性やや弱、ロームで構成される。
3. 橙白色粘土　粘性強、ローム塊多、炭化物少含。
4. 暗褐色土　しまり強、ローム粒少、焼土粒多含。
5. 褐色土　ローム塊・灰褐色粘土塊多、漆喰片少含。
6. 暗褐色土　ローム粒・焼土粒少含。
7. 暗褐色土　漆喰・破砕瓦多、炭化物・貝片中、少円礫少含。6層より暗。
8. 黒褐色土　粘性強、ローム粒・灰褐色粘土微、炭化物少含。
9. 茶褐色土　ローム粒少、焼土粒多、漆喰・瓦片少、少円礫微含。
10. 褐色土　ローム粒・塊極多、焼土粒中含。
11. 暗褐色土　ローム粒少、焼土粒多含。
12. 茶褐色土　ローム粒少含。
13. 灰白色砂　しまりなし。
14. 暗褐色土　灰白色砂多、瓦片中、炭化物・漆喰少含。
15. 黄褐色土　ほぼロームで構成。
16. 暗褐色土　焼土粒微含。
17. 褐色土　ローム粒極多、焼土粒中含。
18. 褐色土　ローム粒多、ローム塊・瓦片少含。
19. 灰褐色粘土　焼土粒・炭化物・漆喰・瓦片少含。
20. 暗褐色土　ローム粒中、焼土粒微含。
21. 黄褐色土　しまりやや弱、ほぼロームで構成。
22. 暗茶褐色土　焼土粒多含。
23. 暗茶褐色土　ローム粒少含。
24. 暗褐色土　ローム粒少、焼土粒中含。
25. 褐色土　ローム粒極多含。
26. 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微含。
27. 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微含。
28. 暗褐色土　焼土粒中含。
29. 暗褐色土　ローム粒微、焼土粒少含。
30. 暗褐色土　焼土粒微含。
31. 暗褐色土　焼土粒少含。
32. 暗褐色土　ローム粒微含。
33. 茶褐色土
34. 褐色土　ローム粒多含。
35. 暗褐色土　ローム粒微含。
36. 褐色土　ローム粒極多含。
37. 暗褐色土　ローム粒中含。
38. 黄褐色土　ほぼロームで構成。

SK207、SK229、SK258　b-b'、c-c'、d-d'

1. 橙褐色土　粘性やや弱、焼土粒多、炭化物少含。
2. 暗褐色土　焼土粒・炭化物少含。
3. 暗橙褐色土　粘性弱、しまりやや弱、焼土極多含、焼瓦中含。
4. 橙褐色土　焼土粒極多、炭化物・焼瓦少含。
5. 赤褐色土　焼土と焼瓦で構成。
6. 暗橙褐色土　焼土・焼瓦極多、炭化物多含。
7. 赤褐色土　焼土・焼瓦・炭化材で構成。
8. 黄褐色土　粘性弱、ローム粒で構成。
9. 暗褐色土　粘性強、ローム粒・焼土粒・少円礫微含。
10. 黄褐色土　ほぼローム粒で構成。
11. 黄褐色土　ローム塊で構成。
12. 橙褐色土　粘性・しまり弱、ローム塊・炭化物少、焼土粒極多含。
13. 暗褐色土　瓦片・漆喰少含。
14. 暗灰褐色土　しまりやや弱、ローム粒・焼土粒少、灰褐色粘土極多、瓦片・漆喰多含。
15. 黒褐色土　灰褐色粘土多、炭化物中含。
16. 暗褐色土　ローム粒微、焼土粒少含。
17. 灰褐色土　粘性やや強、ローム粒少、灰褐色粘土多、炭化物・漆喰中含。
18. 黒褐色土　ローム粒少含。
19. 褐色土　粘性やや弱、ローム粒・塊多含。
20. 暗褐色土　焼土粒多、瓦片少含。
21. 赤褐色土　粘性なし、しまり弱、焼土・焼瓦・炭化物で構成。
22. 橙褐色土　粘性なし、しまり弱、焼土極多、炭化物・瓦片中含。
23. 茶褐色土　粘性やや弱、焼土粒・瓦片中、炭化物微含。
24. 茶褐色土　粘性やや弱、焼土粒少、炭化物微、瓦片中含。
25. 褐色土　ほぼロームで構成。
26. 瓦層　ほぼ瓦で構成(焼瓦ではない)。



Ⅲ-23図　SD209、SD212、SD214



SK217
1. 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微含。
2. 暗茶褐色土　ローム粒中含。
3. 黒褐色土　ローム粒・焼土粒微含。
4. 褐色土　ローム粒極多含。

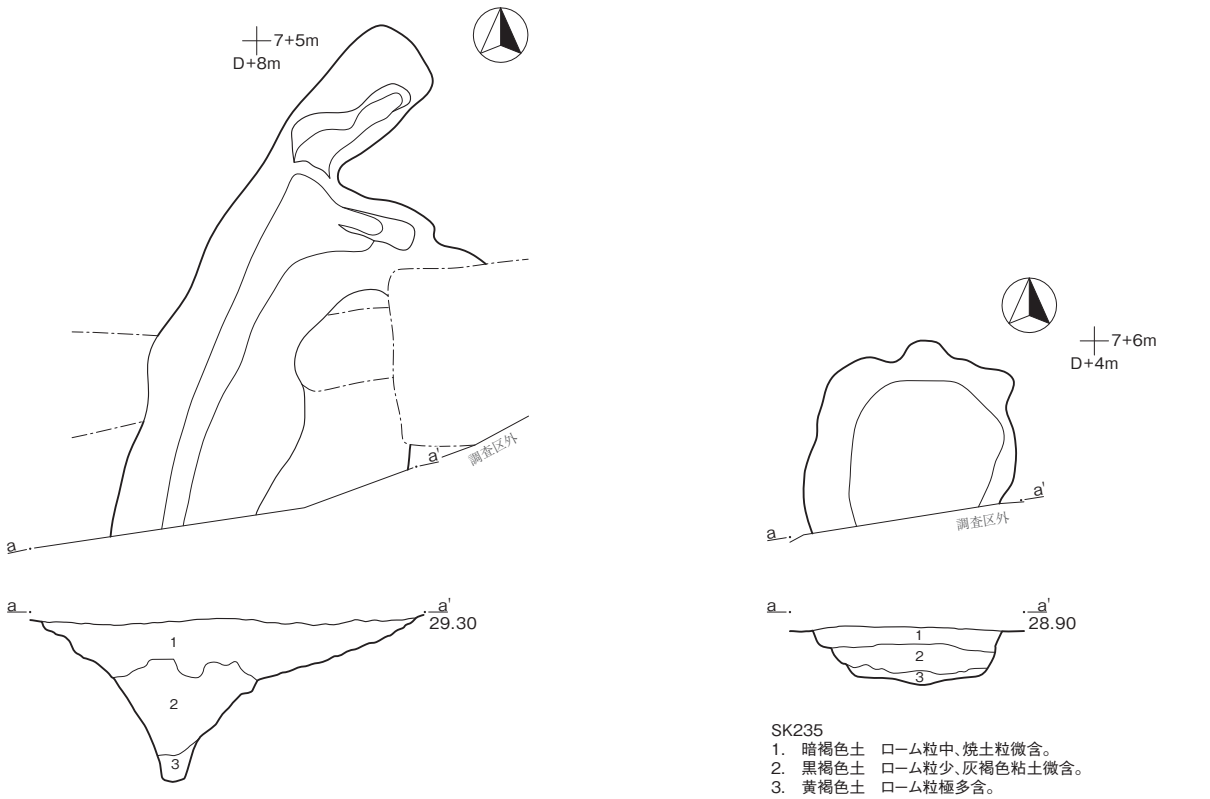
SK217

SK232
1. 暗茶褐色土　ローム粒・瓦片少含。
2. 茶褐色土　ローム粒多、炭化物微含。
3. 暗褐色土　ローム粒微含。
4. 茶褐色土　粘性やや弱、ローム粒極多含。

SK232

SK233
1. 褐色土　ローム粒多、ローム塊少含。

SK233



SD234
1. 暗黄褐色土　しまり極強、ローム粒中、焼土粒少含。
2. 暗褐色土　ローム粒少、焼土粒・炭化物微含。
3. 暗茶褐色土　しまりやや弱、ローム粒少含。

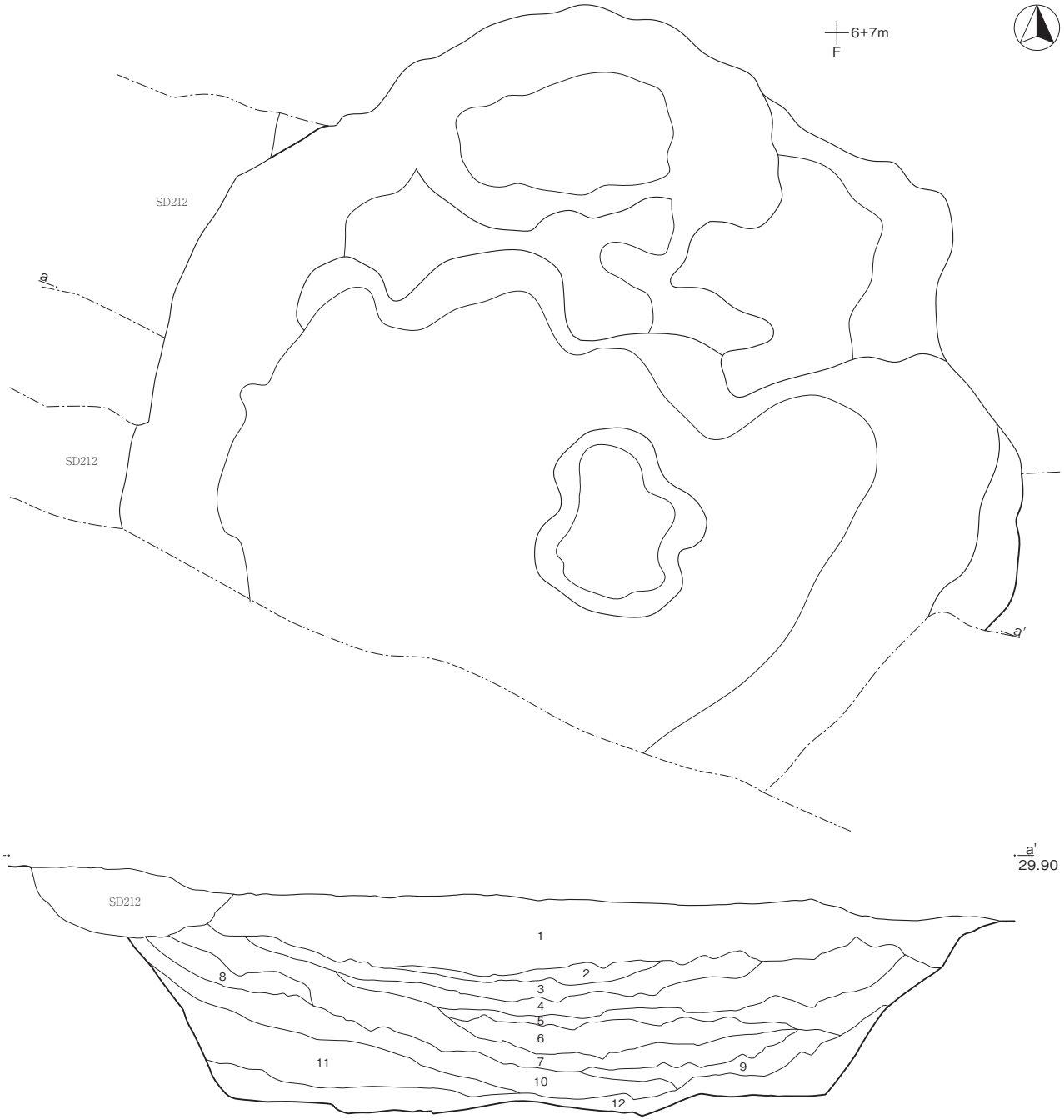
SD234

SK235
1. 暗褐色土　ローム粒中、焼土粒微含。
2. 黒褐色土　ローム粒少、灰褐色粘土微含。
3. 黄褐色土　ローム粒極多含。

SK235

0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-24図　SK217、SK232、SK233、SD234、SK235

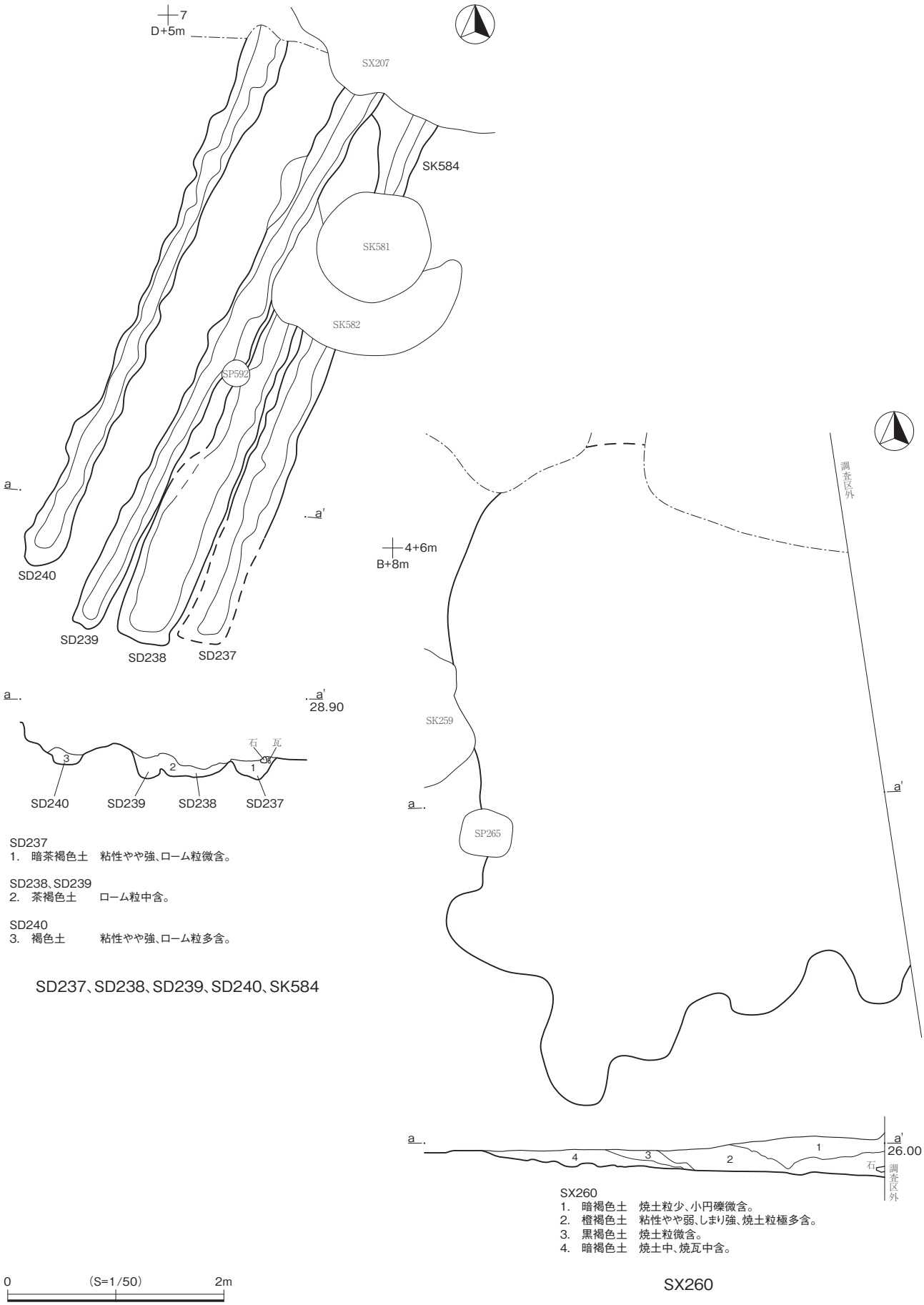


SK218

1. 黒褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物、小円礫微含。
2. 暗褐色土　ローム粒微、焼土粒多、炭化物中含。
3. 暗茶褐色土　ローム粒微、焼土粒微含。
4. 黒褐色土　ローム粒・塊微含。
5. 暗灰褐色土　ローム粒・炭化物少、灰褐色粘土中含。
6. 茶褐色土　ローム粒多、ローム塊少含。
7. 暗褐色土　ローム粒少、炭化物中、灰褐色粘土少含。
8. 黒褐色土　ローム粒・焼土粒微含。
9. 茶褐色土　ローム粒少、灰褐色粘土多含。
10. 暗褐色土　ローム粒少、灰褐色粘土多含。
11. 茶褐色土　ローム粒多含。
12. 褐色土　粘性やや強、ローム粒・塊多含。

0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-25図　SK218



SD237
1. 暗茶褐色土　粘性やや強、ローム粒微含。

SD238、SD239
2. 茶褐色土　ローム粒中含。

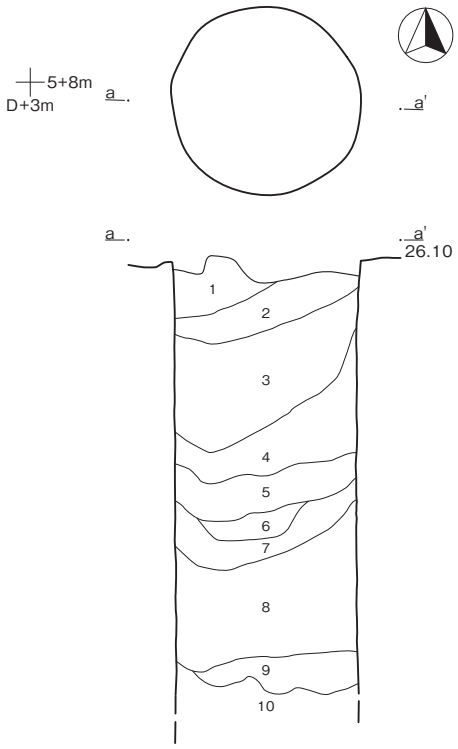
SD240
3. 褐色土　粘性やや強、ローム粒多含。

SD237、SD238、SD239、SD240、SK584

SX260
1. 暗褐色土　焼土粒少、小円礫微含。
2. 橙褐色土　粘性やや弱、しまり強、焼土粒極多含。
3. 黒褐色土　焼土粒微含。
4. 暗褐色土　焼土中、焼瓦中含。

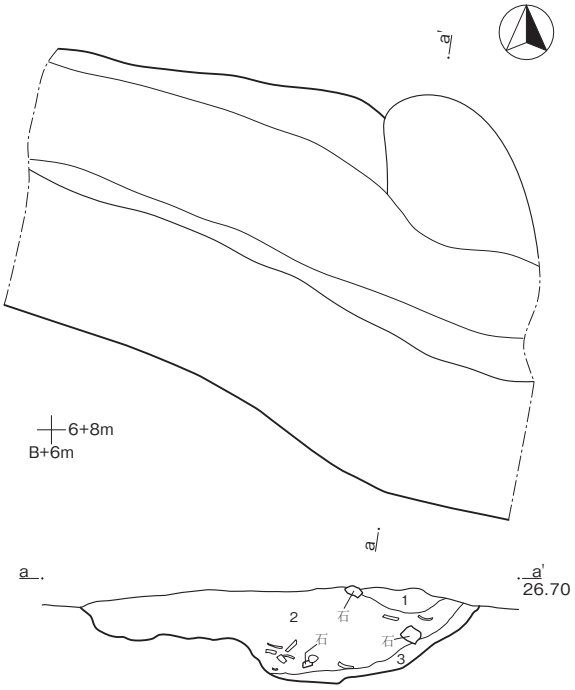
SX260

Ⅲ-26図　SD237、SD238、SD239、SD240、SK584、SX260



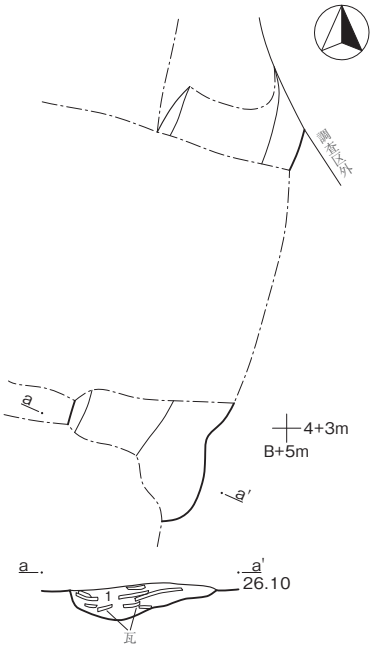
SE261
1. 暗褐色土　ローム粒微含。最上層に黄白色粘土層。
2. 暗褐色土　黄白色砂が筋状にE～Wに傾斜して含。
3. 黒褐色土　黄白色砂少含。
4. 黒褐色土　黄白色砂が筋状にE～Wに傾斜して少含。
5. 暗褐色土　黄褐色粘土塊少含。
6. 暗褐色土　黄褐色粘土粒中含。
7. 褐色土　粘性やや強、ローム粒・塊多含。
8. 暗褐色土　粘性強、ローム粒・塊微含。
9. 暗褐色土　粘性・しまり強、ローム粒微含。8層より明。
10. 暗茶褐色土　粘性極強、ローム粒少、ローム塊微、黄褐色砂少含。

SE261



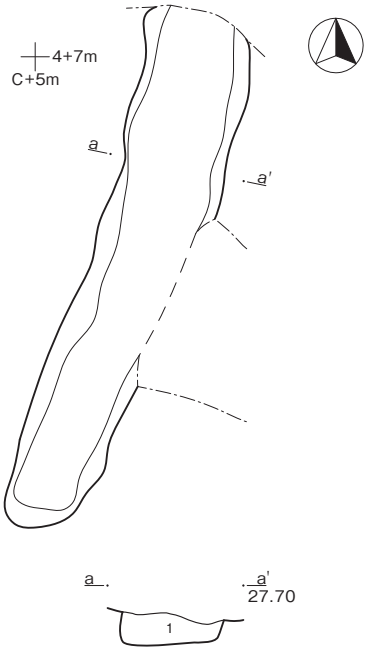
SX267
1. 黒色土　ローム粒やや多含。
2. 黒色土　ローム粒・焼土粒微、黒色のガサガサとしたものやや多、下層に遺物多含。
3. 暗褐色土

SX267



SD264
1. 橙褐色土　焼土・炭化物・焼瓦で構成。

SD264

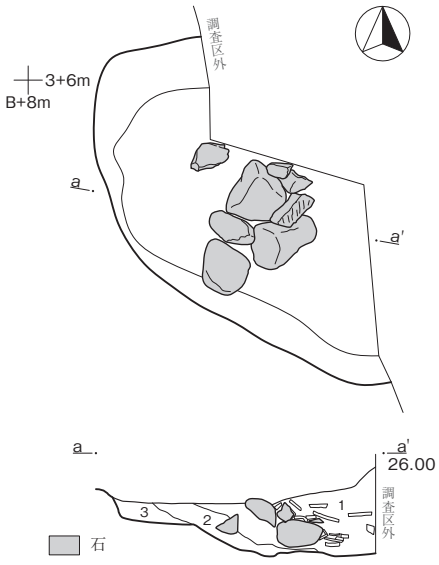


SD268
1. 暗茶褐色土　粘性弱、しまりなし、瓦片極多、漆喰片少含。

SD268

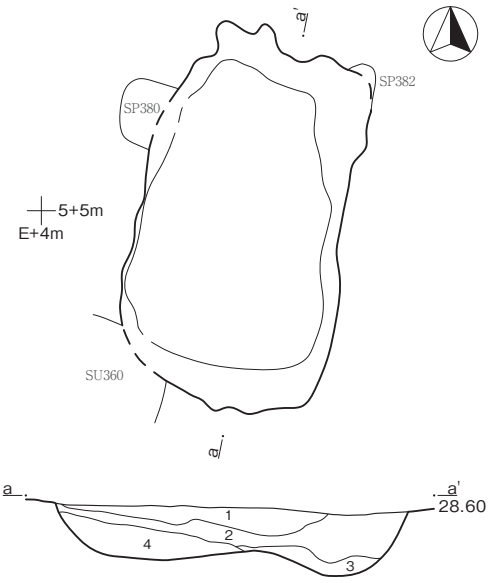
0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-27図　SE261、SD264、SX267、SD268



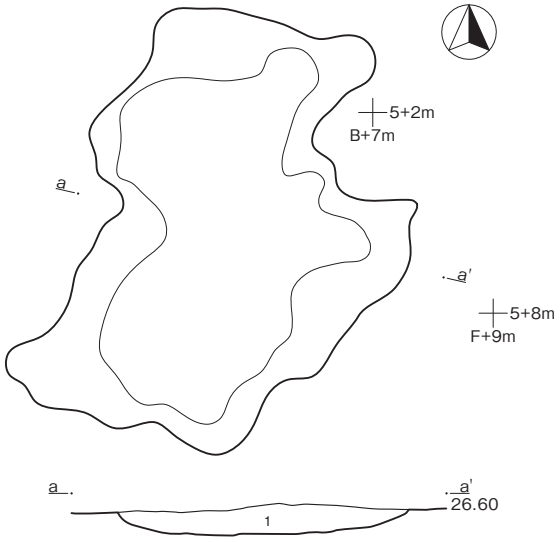
SK275
1. 暗褐色土　ローム粒・焼土粒少含。
2. 黒褐色土　焼土粒微含。
3. 暗茶褐色土　粘性やや強、ローム粒少含。

SK275



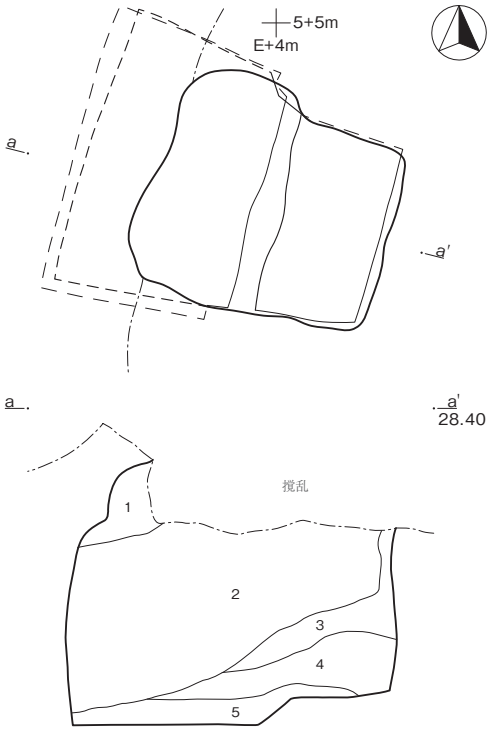
SK358
1. 黒色土　やや砂質、ローム粒少含。
2. 暗黄褐色土　ローム粒・塊やや多含。
3. 黄褐色土　粘性やや強、ローム塊多含。
4. 黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒・塊と黒色土粒・塊が斑状に多含。

SK358



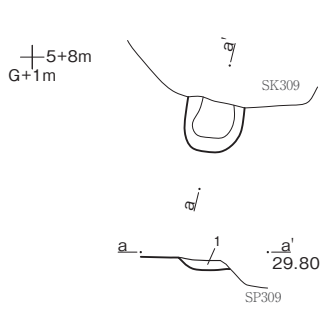
SK278
1. 暗褐色土　ローム粒・灰褐色粘土少、焼土多含。

SK278



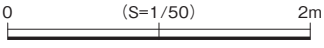
SU360
1. 暗黄褐色土　ローム塊やや多、黒色土粒・塊多含。
2. 黒色土　粘性なし、ローム粒・塊微含。
3. 暗黄褐色土　ローム粒・塊多、黒色土粒・塊極多含。
4. 黄褐色土　しまりやや弱、ローム粒・塊極多含。
5. 黄褐色土　ローム粒・塊極多含。

SU360

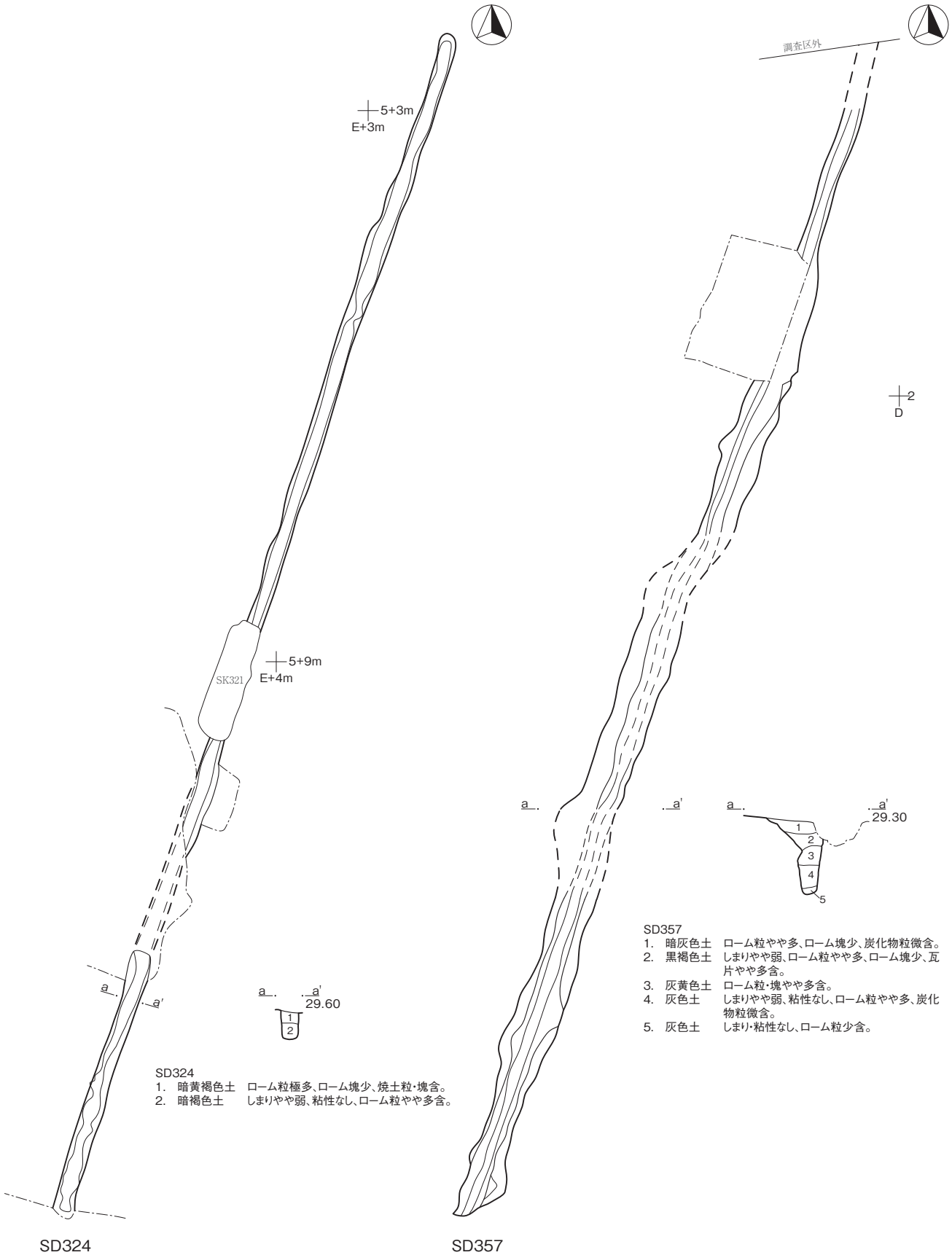


SP310
1. 黒色土　黒色土主体、ローム粒微量。

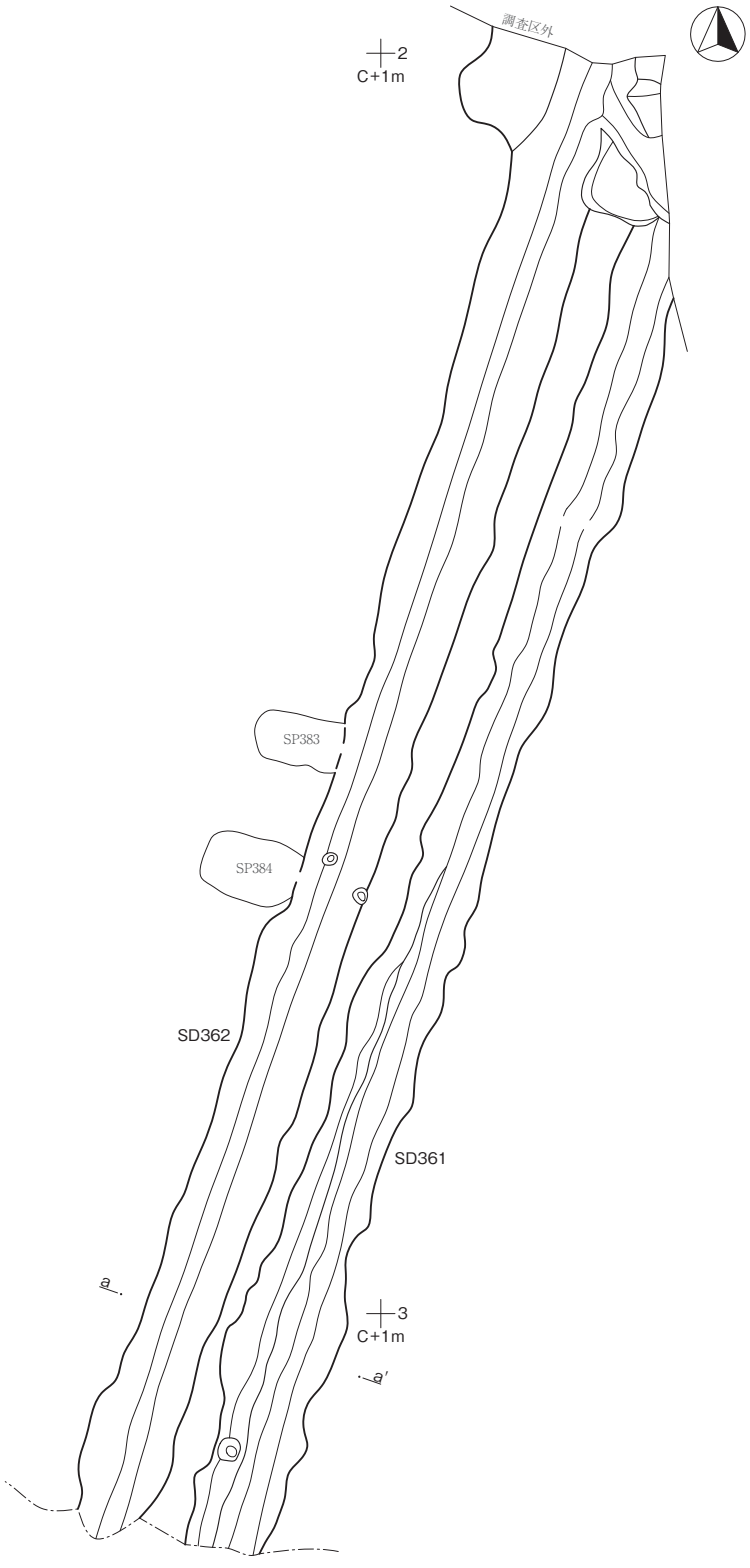
SP310

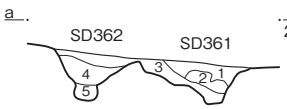


Ⅲ-28図　SK275、SK278、SP310、SK358、SU360



Ⅲ-29図　SD324、SD357

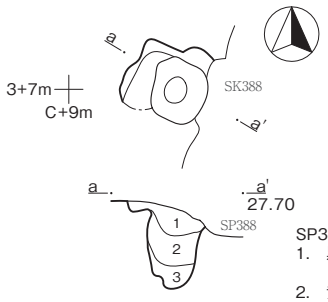




SD361、SD362
1. 黄褐色土　しまりやや強、ローム粒・塊多、炭化物粒微含。
2. 暗黄褐色土　粘性やや強、ロームで構成。
3. 暗黄褐色土　ローム粒・塊多含。
4. 暗黄褐色土　ローム粒・塊多含。
5. 暗褐色土　やや砂質、ローム粒やや多含。

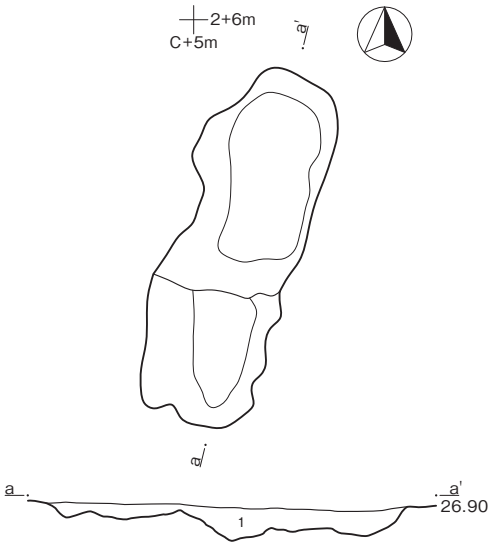
0　(S=1/60)　2m

Ⅲ-30図　SD361、SD362



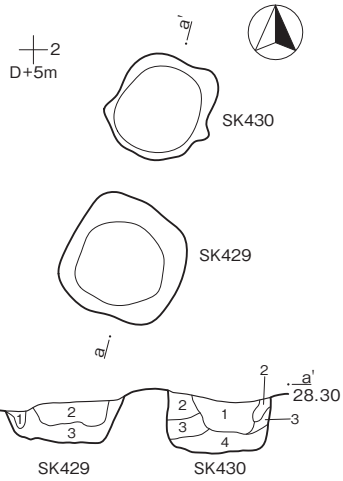
SP389
1. 黒褐色土　ローム粒・塊少。焼土粒微含。
2. 黄褐色土　ローム塊極多含。
3. 黄褐色土　ローム粒で構成。

SP389



SK396
1. 暗黄褐色土　ローム粒・塊やや多、炭化物粒微含。

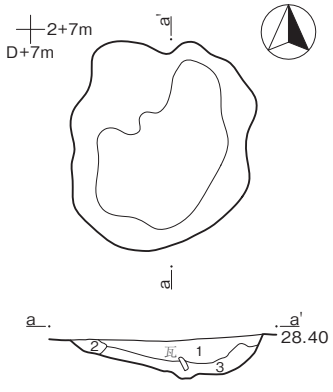
SK396



SK429
1. 黒色土　しまりやや弱、ローム粒・塊少、黒色のガサガサとしたものやや多含。
2. 暗黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒・塊やや多、黒色土粒・塊多、灰白色粘土塊多含。
3. 灰白色土　しまりやや弱、ローム粒・塊やや多、灰白色粘土塊やや多含。

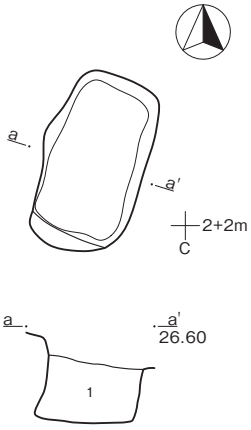
SK430
1. 灰白色土　粘性やや強、やや砂質、ローム粒・塊少、灰白色粘土粒・塊で構成。
2. 黄褐色土　ローム粒・塊極多含。
3. 灰色土　やや砂質、ローム粒・塊少含。
4. 暗黄褐色土　ローム粒・塊多含。

SK429、SK430



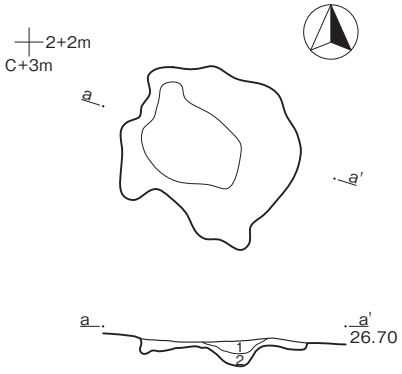
SK477
1. 灰色土　しまりやや弱、ローム粒・塊少、炭化物粒・塊やや多、遺物やや多含。
2. 暗褐色土　ローム粒・塊少含。
3. 褐色土　ローム粒・塊多含。

SK477



SK488
1. 黄褐色土　ほぼロームで構成。

SK488

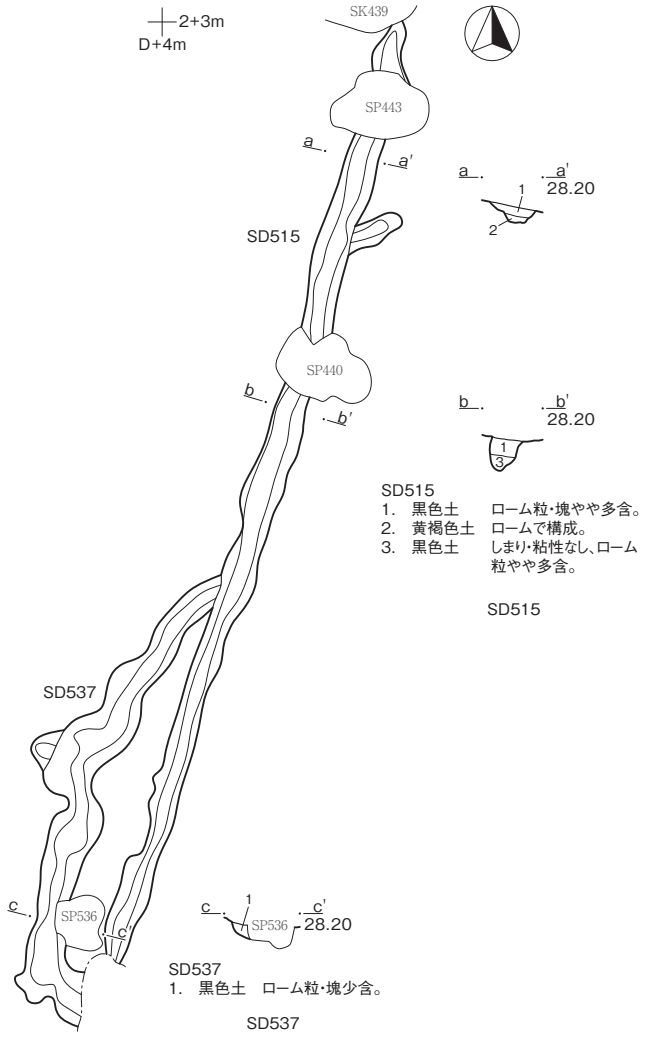


SK499
1. 黒褐色土　ローム粒やや多含。
2. 明黄褐色土　しまりやや強、ほぼロームで構成、スコリア粒微含、灰色土が層状に入る。

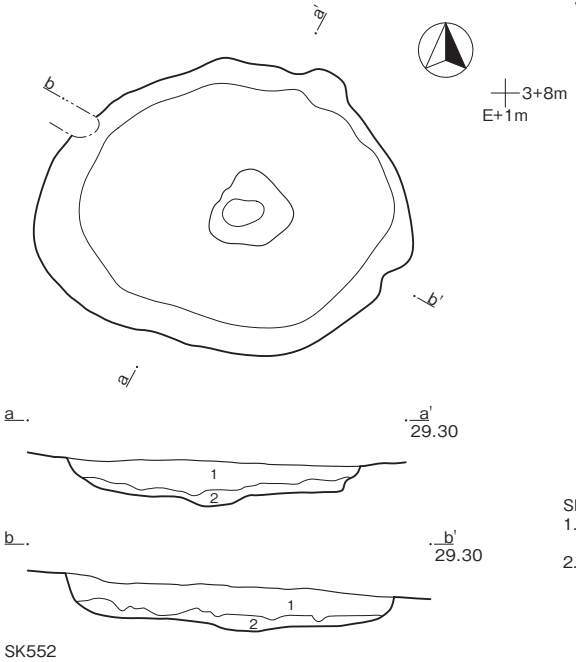
SK499

0　(S=1/50)　2m

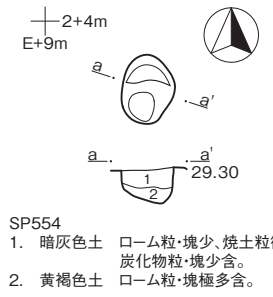
Ⅲ-31図　SP389、SK396、SK429、SK430、SK477、SK488、SK499



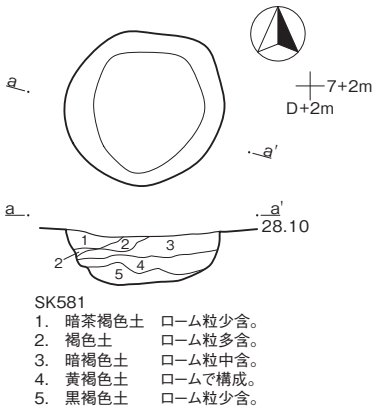
SD515、SD537



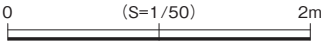
SK552



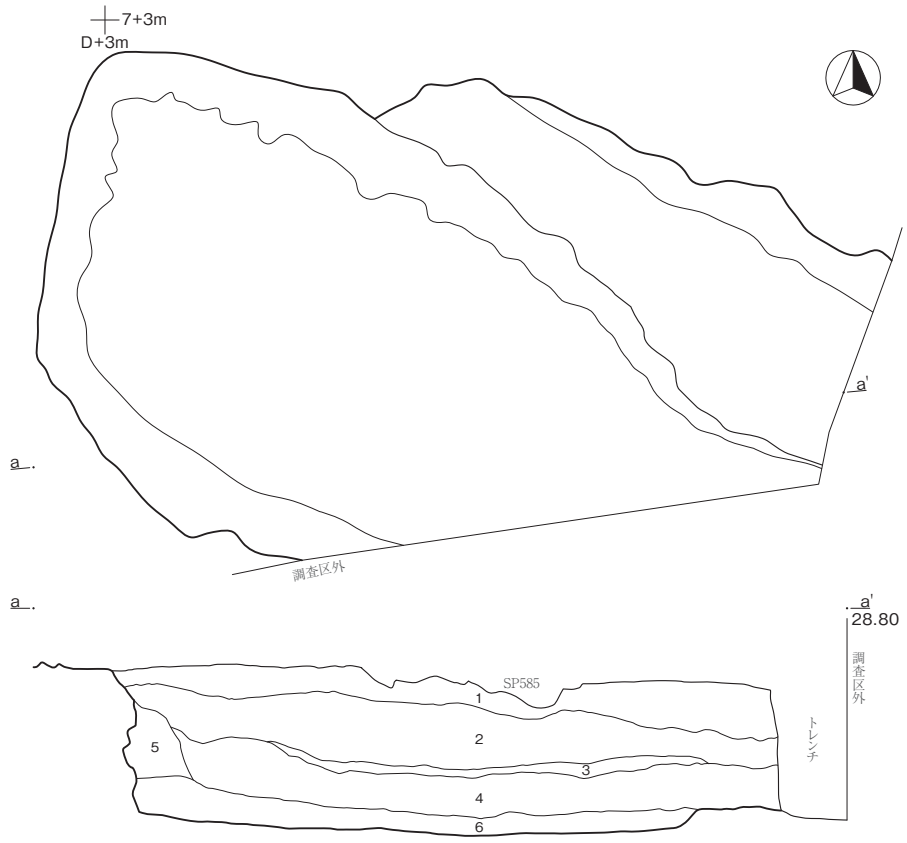
SP554



SK581

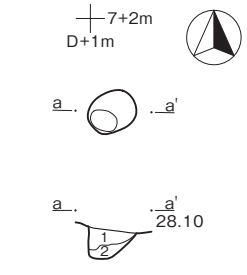


Ⅲ-32図 SD515、SD537、SK552、SP554、SK581



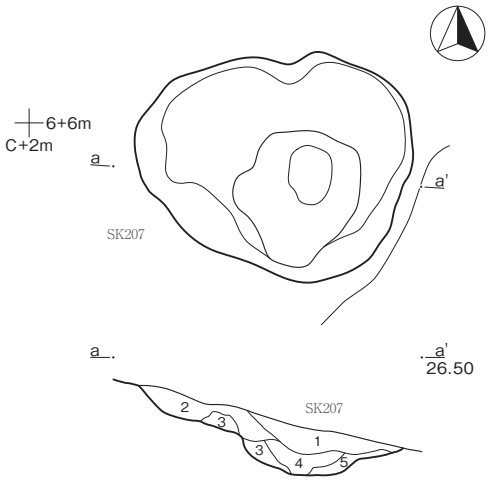
SK583
1. 暗褐色土　ローム粒・灰褐色粘土微含。
2. 黒褐色土　粘性やや強、ローム粒微、炭化物・灰褐色粘土・小円礫少・瓦片微含。遺物層。
3. 灰褐色土　粘性強、灰褐色粘土極多含。
4. 黒色土　　粘性強、ローム粒・焼土粒少、炭化物多、小円礫中含。
5. 褐色土　　ローム粒多含。
6. 暗褐色土　粘性強、ローム粒少、炭化物微含。

SK583



SP586
1. 暗褐色土　ローム粒・塊少含。
2. 黄褐色土　ロームで構成。

SP586



SK626
1. 暗茶褐色土　ローム粒少、黒色スコリア微含。
2. 褐色土　　しまりやや強、赤色・黒色スコリア微含。
3. 明褐色土　しまりやや強、赤色スコリア少含。
4. 茶褐色土　しまりやや強、赤色・黒色スコリア微含。
5. 茶褐色土　炭化物粒微含。4層より明。

SK626

0　(S=1/50)　2m

Ⅲ-33図　SK583、SP586、SK626

第Ⅳ章　遺 物

本地点からは遺物収納箱で 490 箱の遺物が出土している。本章の報告で使用している陶磁器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）を基に作成した最新版に一部修正を加えたもの（分類 Ver.4.1）に準拠している。人形・玩具の分類基準は、「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）に、瓦の分類基準は「御殿下記念館地点・山上会館地点検出の瓦について」（加藤・金子 1990）に拠っている。

また本文中の東京大学構内遺跡の段階設定や年代などの記載は「東京大学構内の遺跡における年代的考察」（堀内 1997）「東京大学構内遺跡編年修正について」（堀内 2021）を基にし、遺構の年代は、遺物個々の出土年代を推定した「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（2）」（大成 2011）を参考にしている。なお、上記分類基準は江戸時代の出土遺物を主に対象としており、近代以降の製品については基準を設定しておらず、また分類が困難な製品も多く存在することから判別が可能な製品についてのみ分類表記を行った。

SK1（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－ 1 ～ 2 図）

1 ～ 4 は磁器で、2 が景徳鎮窯系（JA1）、他は全て肥前系（JB）である。1 は高台断面形が三角形を呈す白磁碗で JB-1-c に分類される。2、3 は皿である。2 は青花皿で JA1-2。畳付から高台内までケズリが顕著、無釉である。3 は高台断面形が三角形を呈し、口縁部が僅かに外反する染付皿で JB-2-c に分類される。高台内には角枠異体字銘と目跡が 1 箇所ある。4 は脚部えぐりが浅く、畳付外周が面取りされた染付仏飯器で JB-8-c に分類される。呉須の発色は悪く、無釉の底部のケズリは粗い。5 ～ 10 は陶器で、7 は肥前系（TB）、他は全て瀬戸・美濃系（TC）である。5、6 は瀬戸・美濃系袴腰の灰釉香炉・火入れで TC-9-f に分類される。ともに無釉の底部に 3 足を有す。5 の口縁部内側には敲打痕が確認できる。7 は TB-10 である。上半が欠損しているが、内面が完全に無釉であることから瓶と判断した。外面下半部に鉄釉、上半には白土刷毛目が施され、刷毛目の上には更に緑釉が流し掛けされる。8、9 は尿瓶で TC-28 に分類される。ともに高台は削り出し高台で、無釉である。8 の高台内には半月状の溶着痕が、9 の高台内には糸切り痕が残る。10 は鉄釉蓋物の蓋か。円柱状の摘みが貼り付けられ、蓋裏も口縁部内側面以外施釉される。11 ～ 16 は土器皿（DZ-2）である。15 が DZ-2、他は全て DZ-2-a に分類される。11、13 ～ 15 の底部には左回転糸切り痕跡が、16 の底部には離れ糸切り痕跡が確認できる。13、15、16 には灯芯痕が付着する。

SE2（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－ 2 ～ 5 図）

1 ～ 14 は磁器で、1 は徳化窯系（JA3）、他は肥前系（JB）である。1 ～ 6 は碗で、1 が色絵、他は染付が施される。1 は端反碗で JA3-1。口唇部は無釉、外面には青と黒の色絵が施される。2 は丸形碗で JB-1。焼継痕跡が確認される。3 ～ 5 は筒形碗で JB-1-l に分類される。見込みにはいずれも五弁花文が施されるが、3、4 はコンニャク印判によるものであり、5 は手書きによるもので、かなり雑な絵付である。6 はいわゆる広東碗で JB-1-m に分類される。畳付内側には、敲打痕がほぼ全周確認される。7 は染付丸形坏で JB-6-a に分類される。内外面に僅かに構図を変えた楼閣山水文と思われる絵付が施される。8 ～ 11 は皿で、8、11 は JB-2-e に分類される。8 は口縁部が輪花にされ、内側面には細かい蛸唐草文が、外側面には縁取りのある如意頭唐草文が手描きで施される。高台内には「成化年製」銘を有す。11 の染付は非常に丁寧な線描きで楼閣山水文を描いたものと思われる。9 はいわゆるくらわんか皿で JB-2-g に分類される。見込みにはコンニャク印判五弁花と扇面、外面には線のみで表現され如意頭唐草文、高台内にはかなり崩れた渦福銘を有す。10 は蛇の目凹形高台で高台高の低いもので JB-2-j に分類される。蛇ノ目状の高台部にはチャツ痕と思われるごく浅い窪みが確認される。12 は染付筒形蓋物身で JB-13-b に分類される。13、14 は蓋である。13 は染付碗の蓋である。摘みが大きく外側に開いて立ち上がり、口縁部が内湾するという特徴が認められることから、いわゆる望料碗の蓋か。14 は大形染付蓋物の蓋である。15 ～ 30 は陶器である。15 ～ 17 は碗で、15、16 は京都･信楽系のいわゆる灰釉小杉茶碗で TD-1-d に、17 は瀬戸・美濃系のいわゆる太白手の広東碗で TC-1-j に分類される。16 にはわずかに錆絵染付が確認される。17 の染付の発色はやや黒ずみ、畳付の一部には敲打痕が認められる。18 は瀬戸・美濃系灰釉輪禿皿で TC-2-m に分類される。19 は京都・信楽系錆絵染付筒形蓋物 TD-13 に分類される。20 ～ 25 は瀬戸･美濃系灰釉瓶で、20 ～ 23 は容量が二合半、24 は五合、25 は一升である。20、21 は釉が浸け掛けされたもので TC-10-c、22、23

は拭き取りされたもので TC-10-a に分類される。胴部釘書きは 22 は線書きで「三キ？」、他はいずれも点刻で施され、20、21 は「井に上」、23 は 2 箇所に「万」、24 は「山」、25 は帯状に「○」に「万」「入」と判読できる。20 の高台内には径 3.5cm 程の輪状の熔着痕が残る。22 は最大径が肩部付近にあり、また釘書きが線書で施される事から、他の瓶より僅かに古手の様相を呈す。23 は肩部に熔着痕が残る。24 は TC-10-d、25 は TC-10-e に分類される。26 は京都・信楽系の色絵筆立てで TD-14 に分類される。ロクロ成形で筒状にしたものを竹のように整形し、更に三方に支脚を貼り付けている。底部無釉、内面は透明釉、外面には青、黄、緑、白絵具で盛り挙げるような上絵付けが施される。27 は肥前系長筒形花生けで TB-22 に分類される。ロクロ成形で、外面には白土象嵌が施され、内外面に透明釉が施釉される。28 ～ 30 は蓋である。28 は瀬戸・美濃系灰釉水注の蓋ある。灰釉は総釉掛けされる。29、30 は鉄釉土瓶の蓋である。胎土は比較的緻密であるが、白や黒色の微粒子をやや多く含む。29 の胎土の色は暗赤褐色を、30 は橙褐色を呈す。薩摩系土瓶蓋であろう。31 ～ 34 は土器である。31 は U 字状のスリットを有す鉢形土器で DZ-5-d に分類される。底部には左回転糸切り痕が残る。32、34 は江戸在地系（DQ）の人形・玩具である。32 はいわゆる釜形土製品で DQ_2011_W に分類される。ロクロ成形で底部に左回転糸切り痕が残る。34 は蛙をモチーフとしたもので DQ_1219_M に分類される。型作りで四肢まで成形されるが、右前足は型作りされた上に粘土が貼り付けられている。胴体は楕円形に窪まされ、内面には指頭圧痕が確認される。33 は土師質丸底焙烙で DZ-47-a に分類される。口縁部はかなり低く、内傾する後出的な様相を呈すものである。35、36 は江戸式の軒桟瓦である。35 の瓦当文様は軒丸部分は欠損し、文様は不明、軒平部分は江戸式Ⅰ Lj に分類される。瓦頭部右端が二次的にケズリ取られている。36 の瓦当文様は軒丸部分が三つ巴文 C、軒平部分は江戸式Ⅰ Li に分類される。

SE2 6 層（掘方）（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－ 5 図）

1 は肥前系磁器染付猪口で JB-7-b に分類される。

SP110（遺構Ⅲ－ 18 図、遺物Ⅳ－ 5 図）

1 ～ 3 は金属製のかんざしである。1、2 の頭部先端は耳掻き状にされている。1 の四角い部分の裏表には、一方に瓢箪形に「八代目」、もう一方にはコウモリ？と記号のようなものが刻まれている。3 の表面の塗装は浮いた状態となっている。

SK201（遺構Ⅲ－ 19 図、遺物Ⅳ－ 5 ～ 10 図）

1 ～ 16 は肥前系磁器（JB）である。1 ～ 7 は碗である。1、2 は青磁染付、3 は白磁のいわゆるくらわんか碗で JB-1-g に分類される。1 の見込みにはコンニャク印判五弁花文が、2 の見込みには手描き五弁花文が施される。3 は口銹が施される。4、5 はいわゆる小丸碗で JB-1-j に分類される。見込みには手描き五弁花文が施される。6 は染付梅樹碗で JB-1-v に分類される。高台内には銘を有す。7 は高台がかなり低い碗で JB-1-e に分類される。8、9 は坏で、8 は染付丸形坏で JB-6-a に分類される。9 は白磁坏で JB-6 分類され、胎土が薄灰色を呈し、口縁直下に 1 箇所内面から打ち欠いたような痕跡が確認される。10 ～ 13 は皿・平鉢である。10、12、13 は JB-2-e に分類される。12 の底部には 2 箇所の目跡が残る。13 は型打ち成形された青磁染付皿である。口縁部は細かな輪花にされ、内側面にはねじ花と菊花の陽刻がみられる。高台内には「太明成化年製」銘と、6 箇所の目跡がある。11 は糸切り細工の白磁皿で JB-2-r に分類され、二次的な被熱のため全体的なモチーフは判然としないが、見込みに花文様のようなものが認められる。14 ～ 16 は蓋で、14 は 1 の丸碗蓋の可能性がある。15 は青磁染付朝顔形碗蓋である。口縁部に浅い U 字状に二次調整された痕跡が 1 箇所確認される。16 は白磁壺・甕蓋であり、受け部に白色の細かい砂が一面に付着する。17 ～ 47 は陶器である。17 ～ 25 は碗である。17、18 は瀬戸・美濃系のいわゆる御室碗で TC-1-d に分類される。ともに器高が低く、口縁が内傾気味の後出的な様相を呈す。19 は瀬戸・美濃系のいわゆるせんじ碗で TC-1-l に分類される。20 ～ 22 は京都・信楽系色絵半球碗で TD-1-b に分類される。いずれも矮小化が進んだ後出的な様相を呈す。23 は畳付以外鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系の碗で TC-1-q に分類される。外面には緩やかな波状沈線を有す。24、25 は高台部以外は長石釉が厚く施釉され、器面に大きな貫入が多数確認される瀬戸・美濃系の碗で TC-1 に分類される。26 ～ 29 は皿・平鉢である。26 は瀬戸・美濃系鉄釉丸皿で TC-2-o に分類される。見込みには輪状の熔着痕が確認される。27 は見込みに鉄摺絵が施された瀬戸・美濃系のいわゆる御深井皿で TC-2-e に分類される。口縁部には浅く U 字状に二次調整された痕跡が認められる。28 は京都・信楽系の色絵皿である。二次的な火熱を受け、遺存状態も悪い。高台部は無釉、それ以外は灰釉に上絵付が施される。色絵は口唇部にも口銹状に確認される。見込みの絵付は紅葉

をモチーフとしたものと推測されるが、中央には立体的に幹を表現したパーツが貼り付けられており、パーツの先端部には径 2mm ほどの円孔が確認される。29 は瀬戸・美濃系灰釉輪禿皿で TC-2-u に分類される。30 は外面に鉄で摺絵が施された瀬戸・美濃系灰落しで TC-24-b に分類される。内面にも灰釉が施釉される。口縁部には敲打痕が確認される。31 ～ 35 は瓶である。31 は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で TC-10-a に分類される。底部釉は拭き取りされる。胴部には線書きで山に「万」の釘書きが施される。32、33 は瀬戸・美濃系灰釉五合徳利で TC-10-d。32 は二次的な火熱を受ける。釘書きは 33 のみに施される。山に「万ヤ」か。34 は瀬戸・美濃系灰釉一升徳利で TC-10-e に分類される。底部には輪状熔着痕が確認される。35 は志戸呂系の鉄釉が施釉された瓶で TF-10 に分類される。内面と底部中央は無釉であるが、底部には輪状の熔着痕が確認される。36 は瀬戸・美濃系丸形灰釉片口鉢で TC-23-b に分類される。37 は産地不明の灰釉土瓶で TZ-34 に分類される。注口内側には漉し穴状の穿孔が 6 箇所確認される。38 は堺系擂鉢で TL-29。底部は高台状に成形され、その内側には焼台痕跡が確認される。擂目は 8 条 1 単位で施される。内面にはスス状の黒色付着物が認められる。39 は柿釉が施釉された把手付き鍋で TZ-33-a に分類される。把手は口縁部を挟み込むように貼り付けられている。内面底部には目跡が 1 箇所残る。40、41 は鉄釉土瓶である。40 は底部に「音羽」の刻印のあるもので TD-34 に分類される。底部には半球形の 3 足が確認できる。41 は薩摩系土瓶で TT-34 に分類される。胎土は暗赤褐色を呈し、黒色と白色の砂粒状の混入物が多く確認される。底部には大きな円錐形の足が 3 箇所貼り付けられるが、貼付部分には縦位のやや粗い櫛目を入れ、接着面を補強している。42 は瀬戸・美濃系鉄釉油受け皿で TC-40-c に分類される。口唇部と底部には焼成時の重ね積み痕跡が残る。43 ～ 47 は蓋である。43 は瀬戸・美濃系鉄釉蓋物の蓋と思われる。44、45 は水注の蓋と思われ、44 は灰釉が施釉された京都・信楽系、45 は鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系のものである。46、47 は鉄釉土瓶蓋で、46 は薩摩系、47 は産地不明である。46 は 41 の蓋の可能性もある。48 ～ 70 は土器である。48 ～ 55 は土器皿で、48、49、52 ～ 54 は DZ-2、50、51 は DZ-2-b、55 はいわゆる上製かわらけで DZ-2-d に分類される。底部には 48、50 ～ 52 は左回転糸切り痕が、49、53、54 には離し糸切り痕が確認される。50 の口縁部には 1 箇所浅い「U」字状に二次調整したような痕跡が認められ、底部には「中」の墨書が確認される。51 は灯芯痕は認められないが、二次的な火熱により底部が赤色化している。55 の底部は平滑に成形され、見込みにはいわゆる内ぐもりがみられる。56、57 は土師質のひょうそくで DZ-44-c に分類され、灯芯痕が確認される。58 は土師質丸底の焙烙で DZ-47-a に分類される。器高が低く、口縁部が大きく内傾する後出的様相を呈すものである。59 は土師質の内部施設をもたない七輪で DZ-48-a に分類される。底部に 3 足を有す。内側面、特に底部に近い付近に成形時の指頭痕が残る。口縁部にはススが付着している。60、61 は七輪の部品で、60 は風口、61 はサナである。60 の狭端部には、二重の三角形の中に「三」の刻印を有す。円孔部分は火熱により白色化している。61 には浅い U 字状のスリットが残るが、位置関係から本来は 4 箇所にあった可能性がある。62 ～ 66 は塩壺である。62 ～ 64 は板作成形の塩壺で、62、63 は無印で DZ-51-ab に、64 は「泉湊伊織」の刻印のあるもので DZ-51-g に分類される。いずれも器高が低く、受け部がかなり退化したものである。内面には粗い布目痕、底部には外側から粘土塊を押し入れた状態が確認できる。65、66 はロクロ成形無印筒形塩壺で DZ-51-w に分類される。底部には左回転糸切り痕が残る。67 ～ 70 は塩壺蓋で、67 ～ 69 は断面形が凹型を呈すもので DZ-00-c に分類される。凹面には細かい布目痕が認められるが、68 は凹凸が顕著である。69 の外側面には幅 2mm 程の浅い窪みが全周する。70 は断面形が長方形を呈すもので DZ-00-g に分類される。71、72 は軒桟瓦である。71 の瓦当文様は軒丸部分は欠損、軒平部分は江戸式Ⅰ Jk に分類される。72 の瓦当文様は軒丸部分は三つ巴文 C、軒平部分は江戸式Ⅳ Fa に分類される。73 は砥石である。石質は流紋岩である。74 は漆こし紙で、反時計回りに捻られている。

SK202（遺構Ⅲ－ 20 図、遺物Ⅳ－ 11 図）

1 は肥前系染付磁器碗で JB-1-e に分類される。高台内には二重角枠銘の一部が認められる。2、3 は瀬戸・美濃系陶器灰釉瓶である。2 は容量一升で TC-10-e に分類される。同部には山に「本」の点刻の釘書きが確認できる。底部には外側から力が加えられ、二次的な穿孔が施される。3 は容量二合半の底部釉拭き取りのもので TC-10-a に分類される。肩部の相対する位置には、〇に「八」、「十六」という線書きの釘書きが確認できる。

SK205（遺構Ⅲ－20図、遺物Ⅳ－11図）

1は軒桟瓦である。遺存状況が悪く、瓦当の丸瓦部分の三つ巴文Cと、軒平部分の外側の子葉が僅かに確認できるのみである。

SK207（遺構Ⅲ－21～22図、遺物Ⅳ－11～69図）

SK207からは、焼土と共に陶磁器、瓦、金属製品などが多量に出土しており、それら遺物の多くは二次的な火熱を受けている。出土している磁器は、肥前系磁器小広東碗（JB-1-i）、広東碗（JB-1-m）、端反碗（JB-1-n）、湯呑碗（JB-1-o）、瀬戸・美濃系磁器端反碗（JC-1-d）、湯呑碗（JC-1-e）、直線的に開く碗（JC-1-f）、陽刻型皿（JC-2-e）、陰刻型皿（JC-2-f）などが含まれており、こうした様相は、東大編年Ⅷc期に該当する。

また、切り合っているSK229およびSK583の間には多くの遺構間接合が確認されている。SK229は遺物様相がSK207と近似していることから埋没直後にSK207の掘削によって埋土の一部がSK207に埋められたと推定される。また、SK583も同様と思われるが、同遺構の年代は東大Ⅶ期であることから、時間が経過しての再埋没と思っている。

磁器（1～219、221～386）

碗（1～66、68～73、76～86）：47は徳化窯系色絵磁器碗で、JA3-1に分類される。型作りで、畳付の他に口唇部が釉剥ぎにより露胎している。器面は二次的な火熱を受けており、上絵の青色の草花文、赤色の文字が変色している。48は景徳鎮窯系青花碗で、JA1-1に分類される。内外面仙芝祝寿文がやや緻密に描かれている。釉調はこの時期の清朝製品に多く見られる青味がかった発色している。焼成は良好である。

1は肥前系磁器染付碗で、JB-1-dに分類される。呉須の発色は良好である。2は肥前系磁器薄手の丸碗で、JB-1-eに分類される。胎土は白色、体部や高台などは薄く丁寧に作られている。釉はやや青味がかっている。3～11は肥前系磁器薄手半球碗で、JB-1-fに分類される。3の胎土はやや灰色がかるが、他は白色を呈している。呉須は、3がやや黒ずんだ青色、4～6と10、11はやや濃い青色、7～9は明るい青色に発色しており、文様は8と11が非常に丁寧に描かれている。7と9の器面は、二次的な火熱をやや強く受けている。12～22は肥前系磁器丸碗で、JB-1-eに分類される。12と13、15と16、17と18、19と20は蓋付碗で、後3者は同一個体と推定される。12と13は体部の形状、摘み外周と高台外周の圏線、摘み内の「成化年製」銘が身の高台に認められないことなどから、別個体の可能性が強い。15と16、19と20の器面には二次的な火熱をやや強く受けている。呉須は、14、15と16が濃青色であるが、その他は明るい青色に発色している。19～22はダミを用いない細線描きで描かれている。23は瀬戸・美濃系磁器丸碗で、JC-1-aに分類される。文様は丁寧に描かれ、呉須は明青色に発色している。見込みには「道□年製」、高台内には丸枠内に「青」？の銘が書かれている。24は肥前系の胎土が灰色がかる粗製の白磁碗で、JB-1-gに分類される。口唇部に口銹が確認できる。25は肥前系青磁染付筒形碗で、JB-1-lに分類される。胎土は灰色がかっており、呉須もくすんだ発色になっている。見込み中央はコンニャク印判五弁花が施されている。

26～28は、肥前系染付磁器小広東碗で、JB-1-iに分類される。26はやや焼成が不良であるが、他は良好である。26、28の内面は口縁から圏線（二重）－圏線（一重）－ワンポイントという清朝風の施文となっている。28は広東碗にも同文様が確認されることから、広東碗の生産時期と同時期と推定される。29、30は肥前系、31は瀬戸・美濃系染付磁器広東碗で、それぞれJB-1-m、JC-1-cに分類される。30の暦文は小広東碗にも同文様が確認されること、29は銘款が付され、高台にも文様が確認されることなど、広東碗生産時期のうち早い段階の製品と推定できる。29の銘款は判読できない。31の釉は、やや青味がかった発色をしている。

32～37、39～46は、おおむね10cmを測る中法量の磁器端反碗である。32～37、41は肥前系でJB-1-n、39、40、42～45は瀬戸・美濃系でJC-1-dに分類される。32、33は白色を呈する堅緻な胎土で、文様は内外面細線書きで丁寧に描かれている。34と35、36と37、39と40は蓋付碗で、同一個体と推定される。34と35の呉須は濃青色に発色しており、蓋摘み内には篆書体で「乾」の銘款が付けられている。「乾」銘は「1790年代頃から現れ、1860年代まで続く」（鈴田1995）とされ、年代的に乾の字の左側中央が「日」から「口」へと省力化されることが窺えるが、本例は「田」であることで該当しないが、省力化前のものであろうか？36と37はやや明るい青色に発色している。高台のケズリは34と35に比べるとやや粗雑である。39と40はやや青味を持つ透明釉で、呉須は輸入呉須を使っていると思われ、関西系と称される製品である。蓋には角枠銘が書かれている。41はややくすんだ胎土と呉須の発色で、文様もラフに描かれており、他の端反碗より粗雑な製品である。42の器高や高台が比較的高く、シャープに作られ、角枠銘も書かれているなどから、古い段階の製品と推定される。文様は、いわゆる地呉須で施文されてい

る。43 は赤、緑、黄などで上絵付けされているが、二次的な火熱の為に変色している。44 は 39 と 40 と同様に輸入呉須で精緻に施文されている関西系の特徴が看取される。見込みには「富貴長春」、高台内には角枠銘が書かれる。釉薬はやや青味がかった発色を呈している。45 は瀬戸の地呉須で文様がラフに描かれている。見込み中央は黒色の付着物が確認される。46 は肥前系染付磁器見込み蛇ノ目釉剥ぎされる粗製の碗で、JB-1-x に分類される。胎土は暗灰色を呈し、文様は濃青色の呉須でラフに描かれている。器面は二次的な火熱を受けている。

38、49 ～ 66 は、おおむね 8 ～ 9cm を測る小法量の磁器端反碗で、38、61 は肥前系で JB-1-n、その他は JC-1-d に分類される。38 は器壁、高台とも薄作りで、丁寧に仕上げられている。文様は明青色の呉須で描かれている。49 ～ 51 は上下二段の仙芝祝寿文が地呉須で描かれるが、49 は内外面、50 と 51 は外面のみである。49 は口銹が施されている。51 の器面は二次的な火熱を受けた痕跡が明瞭である。52、53 は区画内に草花文が地呉須で描かれている。52 の器面は明瞭に二次的な火熱を受けている。54 は区画に「福」、「禄」、「寿」字、55 は丸文、56 は区画内に草花文、57 は 54 と類似するが区画に「寿」字文が描かれている。55 の器面は、二次的な火熱を受けている。58、59 は関西系と称される輸入呉須を使用していると推定される製品である。58 の器形はやや腰が張り、高台高もやや低い。器面には二次的な火熱の痕跡が確認される。60 は外面にやや薄い瑠璃釉、内面と高台内に透明釉が施されている。61 は器壁、高台とも薄く作られ、明青色の呉須で花鳥文が描かれる。器面には二次的な火熱の痕跡が認められる。62 ～ 64 はいわゆる関西系の製品である。透明釉はやや青く発色し、呉須の発色は明青色を呈している。65、66 は白磁の見込みに白玉で精密画が描かれる。いわゆる江戸絵付であろう。共に青色と金彩で上絵付されている。金による口銹が確認される。

68 ～ 73 は腰が張りやや器高が高いいわゆる湯呑碗である。68、69 が肥前系で JB-1-o、70 ～ 73 が瀬戸・美濃系で JC-1-e に分類される。本類は器厚が厚い製品が多く、68 は典型例である。68、69 とも白色の素地に、文様は青色に発色している。両例とも二次的な火熱の痕跡が確認される。70、71 はいわゆる関西系と称される明青色の呉須で同じ文様が描かれている製品であるが、透明釉の色調は、71 の方が青味がかった発色をしていること、文様が丁寧に描かれていることなど違いが認められる。72 もいわゆる関西系の製品である。内外面には二次的な火熱の痕跡が明瞭に確認される。76 は粗製の肥前系染付梅樹文碗で、JB-1-v に分類される。高台内には判読不能の名が付されている。77 は瀬戸・美濃系染付丸碗で、JC-1-a に分類される。文様は明青色に発色し、釉薬はやや青く発色している。78 は高台はやや低いが、肥前系染付小広東碗で、JB-1-i に分類される。器面は二次的な火熱が確認される。

79 と 80 は蓋付の肥前系染付碗で、JB-1 に分類される。体部は丸碗よりやや開きが直線的であり、近代以降に普及する飯茶碗に繋がるものの可能性がある。蓋摘み内には「乾」銘が書かれるか、乾の左側が「口」であることからやや年代的に降るものと推定できる（鈴田 1995）。器面には二次的な火熱の痕跡が確認される。81 ～ 83 は体部直線的に開く瀬戸・美濃系染付碗で、JC-1-f に分類される。文様は緻密に描かれ、呉須は明青色に発色しているいわゆる関西系である。82 は見込み中央が一段窪んでいる。82 の器面は二次的な火熱の痕跡が明瞭に確認される。84 ～ 86 はやや小型の肥前系薄手半球碗で、JB-1-f に分類される。この 3 例は少しずつ器形が異なっているが、幕末期のバリエーションであろうか？84 の器面は二次的な被熱が確認される。呉須は明青色に発色している。

坏（67、74、75、87 ～ 124）：67 は瀬戸・美濃系染付端反形坏で、JC-6-b に分類される。釉薬はやや青味がかり、地呉須を使って文様が描かれる。74 は二次的な火熱によって判明しづらいが、肥前系色絵の半筒形の坏で、JB-6 に分類される。器形と腰部の面取りや胴部中位に巡る細い突帯は、漆器の坪皿を模していると考えられる。器面には「井桁に橘」紋が上絵付されるが、文様との関連性は明確ではない。あるいは大村藩菩提寺である本経寺は日蓮宗であり、その関係かも知れない。75 はやや深手の肥前系染付坏で、JB-6 に分類される。呉須は明青色に発色している。87 は肥前系染付坏で、JB-6 に分類される。明青色の呉須を用いて、主文様は見込みに描かれている。88 は粗製の肥前系染付坏で、JB-6-a に分類される。胎土はやや灰がかり、呉須の色調もややくすんでいる。

89 ～ 91、93 ～ 104 は器高がやや高い瀬戸・美濃系染付丸形坏で、JC-6-a に分類される。呉須の発色は明青色で、関西系と称される製品である。101 と 102 高台は、外周部が接地する幅広の高台である。この 2 点のみに口銹が認められる。95 ～ 99 は角枠銘が書かれているが、判読はできない。呉須の発色は良好で、102 のみやや濃い青色を呈するが、その他は明青色に発色している。93、96、98 ～ 100 は器面に二次的な火熱が確認される。92 は肥前系染付端反形坏で、JB-6-b に分類される。

呉須は明青色に発色しているが、やや焼成過多で一部文様が流れている。104は、瀬戸・美濃系色絵丸形坏で、JC-6-aに分類される。外面には青色の白玉と金彩で上絵が施されている。

105、106は瀬戸・美濃系坏で、JC-6に分類される。器形は半球形で、薄手に作られている。呉須は明青色に発色し、いわゆる関西系である。107、108は肥前系白磁丸形坏で、JB-6-aに分類される。胎土はやや灰がかり、見込みには降灰している。108の内外面には二次的な被熱が確認される。109、110は薄手丸形の瀬戸・美濃系染付坏で、JC-6-dに分類される。高台外面には明青色で櫛文が染め付けられている。109高台内には小判形の枠線内に「ヒロ」？字が書かれている。111は薄手端反形肥前系染付坏でJB-6-cに、112は薄手端反形瀬戸・美濃系染付坏でJC-6-dに分類される。111の内外面は二次的な被熱の痕跡が確認される。112の呉須は明青色に発色し、いわゆる関西系である。113、114はやや平形を呈する瀬戸・美濃系染付・色絵薄手坏で、JC-6-dに分類される。高台外面には櫛文、高台内には銘款が書かれている。113は角枠銘、114は109と同様小判形の枠線内に「ヒロ」？字が書かれている。見込みには、色絵金彩で植物文が描かれているが、共に二次的な被熱による変色で、色調は判じえない。115、116は瀬戸・美濃系薄手端反形の坏で、JC-6-dに分類される。115は色絵金彩、116は白磁である。117は瀬戸・美濃系染付筒形坏で、JC-6-cに分類される。文様は瀬戸・美濃のいわゆる地呉須を使って描かれている。内外面は二次的に被熱している。118は肥前系猪口形坏で、JB-6に分類される。内外面は二次的に被熱しており、内面底には銅が溜まっている。生産道具の可能性があるか？

119 ～ 123は瀬戸・美濃系色絵木盃形の坏で、JC-6-dに分類される。119 ～ 122は同じ文様で法量違いの坏で、120が約3.5寸、121が約3.2寸、122は約3寸である。内面には青色の白玉と金彩で鶴亀が細密に上絵付けされている。また、口唇は金で口銹状に彩色されている。木盃形の坏では大型の組物で、吉祥文が描かれていることから、祝いなどの用途で利用された可能性が考えられる。いずれも二次的な被熱を受けている。123は薄手の瀬戸・美濃系色絵丸形坏で、JC-6-dに分類される。高台外面には櫛文、高台内には角枠銘が書かれる。内面には風景が金彩と青色の白玉によって細密に上絵付けされている。124は肥前系染付・色絵坏で、JB-6-fに分類される。染付に赤絵の具で文字が書かれているが、欠損の為全体の文様が復元できない。類例などから「小町紅 京都 四条 遍〻に平」と推定される。これにより、紅皿として利用されていたと判断できる。

皿・平鉢、大皿・大平鉢（125 ～ 179）：125は徳化窯系白磁の型皿で、JA3-2に分類される。口唇部および畳付から高台内は無釉である。高台内は型に押し込んだ際にできる粘土皺が明瞭に確認される。徳化窯系の小皿の出土は珍しく、本土での白磁の類例は管見の限り知らない。二次的な被熱が顕著である。

126、127は肥前系染付輪花6寸皿で、JB-2-eに分類される。呉須は126が明青色、127は暗青色に発色し、年代的特徴が看取される。126は「成化年製」、127は「大明萬曆年製」銘が書かれている。127は高台内に3箇所のハリ支えが確認される。釉薬はやや青味がかっている。128、129は肥前系染付輪花3寸皿で、JB-2-eに分類される。共に輪花に成形されており、文様も同じ花蔓草文が描かれている。器厚は128が薄く、輪花の成形もシャープである。文様も128の方が丁寧で、裏の唐草文は128が枠線が描かれているのに対して、129は1本線である。高台内には128が「冨貴長春」、129が「成化年製」と書かれている。130は肥前系染付輪花7寸皿で、JB-2-eに分類される。文様が129と同じことから組み物の可能性もある。呉須は見込み明青色、側面やや濃い青色に発色している。高台内には「明成年製」と書かれているが、欠損していることから本来は「大明成化年製」であろう。二次的な被熱が顕著である。131は肥前系染付8寸皿で、JB-2-eに分類される。高台内には遺存している部位内に3箇所のハリ支えが確認される。釉薬はやや青味がかっており、呉須は濃青色に発色している。高台内には「大□年製」銘が書かれている。132は肥前系染付7寸皿で、JB-2-eに分類される。高台はやや高く成形されている。内外面の二次的な被熱は顕著である。133は肥前系染付6寸皿で、JB-2-eに分類される。胎土はやや灰がかっている。内外面の二次的な被熱は顕著である。134 ～ 136は肥前系染付皿で、JB-2-eに分類される。134はやや高台を高く作られている。高台内には134が「太明年製」、135が「乾」、136が「成化年製」銘が書かれている。134と135は呉須で口唇部彩色され、136は口銹が施されている。134の器面は二次的な被熱が顕著である。137 ～ 144は蛇ノ目凹形高台の肥前系染付4 ～ 5寸皿で、JB-2-iに分類される。素地はいずれも白色に発色し、ロクロ成形後、型打ちで輪花に成形されている。蛇ノ目凹形高台は、いずれも高台高が高いタイプであるが、140、141は高台幅がやや薄いのに対し、他はやや厚く作られている。137、139の高台内には「成化年製」銘が書かれている。139に

は二次的な被熱が確認される。144 の口唇部には呉須で、140、141 には鉄で口銹されている。

145、147、148 は蛇ノ目凹形高台の高台が低いタイプの肥前系染付 4 寸皿で、JB-2-j に分類される。器形は本類の典型的な深手というより、JB-2-o のような腰の張った器形に近い。JB-2-o の蛇ノ目凹形成形された製品と推定している。147 の口唇部は外側に折り返し、玉縁状を呈している。呉須は 18 世紀後半から 19 世紀初頭に多いやや濃い青色に発色している。145 の内外面は二次的な被熱が確認される。146 は肥前系器高が低く腰が張る染付皿で、JB-2-o に分類される。釉薬はやや青味がかっている。149 ～ 151 は肥前系染付 2 寸皿で、JB-2-e に分類される。149、150 は文様、呉須の発色などが近似していることから、揃いと考えられる。151 は 149、150 に比べて呉須は明るく発色している。149 ～ 151 の内外面は二次的な被熱を受けている。152 ～ 155 は 3 寸皿である。152 ～ 154 が瀬戸・美濃系で JC-2-b、155 が肥前系で JB-2-e に分類される。152 は染付で、呉須が明青色に発色するいわゆる関西系である。153 は青磁の上に青色の白玉を使用した色絵であるが､高台内には圏線と角枠銘が染付られている。口唇部に口銹が施される。154 はやや青味がかった白磁である。155 は白磁で、内外面は二次的な被熱が顕著である。156 は肥前系白磁 2 寸皿で、JB-2-e に分類される。157 は嬉野志田窯の染付輪花皿で、JB-2-p に分類される。裏側面上位には、白色のアルミナが流れた痕跡が確認される。内外面に二次的な被熱が顕著に認められる。158 ～ 163 は染付 3 寸皿で、158、159、161 ～ 163 は肥前系で JB-2-f、160 は瀬戸・美濃系で JC-2-b に分類される。158 ～ 160 は口唇部に口銹が施される。呉須は、158、159、161 はややくすんだ濃い発色であるが、162、163 は鮮青色に発色している。160 はいわゆる関西系である。160 ～ 162 の表面には二次的な被熱が認められる。

164、165 は貼付高台の肥前系染付型皿で、JB-2-r に分類される。見込み、体部は型成形、高台は糸切細工の貼付高台である。164 は見込み中央と体部間に弱い段を作っている。高台内に銘款が付されるが、欠損によって判読できない｡呉須は濃い鮮青色に発色している。165 は釉薬がやや青味がかった発色をしており、詳細に文様が描かれている。3 箇所の小さいハリ支えが確認できる。二次的な被熱を強く受けている。166 ～ 173 は型作りの皿で、型によって文様が 166 が陰刻状に、その他は陽刻状に付けられている。166 が JC-2-f、その他が JC-2-e に分類される。166 ～ 170 が染付、171、172 が白磁、173 が青磁である。167 と 168 が二次的な被熱が顕著である。174 は肥前系染付蛇ノ目凹形高台の高台高の低い皿で、JB-2-j に分類される。口唇部は輪花にしている。高台内には「富貴長春」銘が書かれている。175 は肥前系染付鍔皿で、JB-2-i 分類される。底部は蛇ノ目凹形高台であるが、分類基準で定めた一般的な製品より幅広で、器高も低い。文様は細かい吹墨が施されている。呉須はやや淡い鮮青色である。176 は蛇ノ目凹形高台の肥前系染付平鉢で、JB-2-i に分類される。文様は細線書きで描かれ、裏には「乾」の銘款が書かれている。呉須は鮮青色で､釉薬はやや青味がかっている。177 は肥前系染付平鉢で、JB-2-e に分類される。文様は細線書きで描かれ､裏には「玩」の銘款が書かれている。呉須は鮮青色で、釉薬はやや青味がかっている。178、179 は嬉野志田窯の染付大皿で、JB-3-e に分類される。裏側面上位には、白色のアルミナが流れた痕跡が確認される。内外面に二次的な被熱が顕著に認められる。高台内には複数箇所のハリ支えが確認できる。

その他磁器製品（180 ～ 219、221 ～ 386）：180 ～ 182 は瀬戸・美濃系磁器燗徳利で、JC-4 に分類される。180 は粉彩で、赤、緑、黄、紫と白土で草花文が描かれる。181 と 182 はいわゆる関西系の特徴を有する染付で、呉須は鮮青色に発色している。182 は胴部六角形を呈するが、型で作られており、胴部中位と肩部上位で接合痕が確認され、少なくとも 3 個以上のパーツを組み合わせて作られている。180 ～ 182 は二次的な被熱が確認される。

183 ～ 189、191 ～ 193 は肥前系染付薄手鉢で、JB-5-b に分類される。薄手半球碗（JB-1-f）の大型製品にあたる。比較的規格性が高く、口径は 15cm、底径は 5cm 程度である。文様も多くは内面に四方襷などの帯文と見込み中央には松竹梅が描かれ、和様の文様系統の製品である。文様は精緻に染め付けられ、胎土は白色、呉須も鮮青色を呈し、上質の製品であると考えられる。185 の釉薬はやや青味がかっている。191 の文様は型紙刷りで描かれている。186 の高台はやや高く､「冨貴長春」の銘款が付されている。183、184、187 ～ 189、191、193 は二次的な被熱が確認される。190 は粗製の肥前系染付鉢で JB-5-b に分類される。胎土は灰がかり、呉須も青灰色に発色している。角枠銘が書かれている。194 は肥前系型打ち青磁鉢で、JB-5-b に分類される。器面には二次的な被熱が認められる。195 ～ 197 は肥前系染付小型鉢で、JB-5-b に分類される。195 は「成化年製」､196 は角枠銘が書かれている。196 は二次的な被熱が顕著に認められる。198 ～ 200

は肥前系染付のいわゆる八角鉢で、JB-5-e に分類される。198、199 は蛇ノ目凹形高台である。呉須は青色に発色している。二次的な被熱が確認される。201 は肥前系染付鉢で、JB-5 に分類される。体部は六角形に型打ちされている。胎土は白色、呉須は青色に発色している。内外面は二次的な被熱が顕著に認められる。202 は肥前系染付鉢で、JB-5-b に分類される。体部下半は、面取りをして窓絵にし、上半は稜を付けて開いている。胎土は白色、呉須は鮮青色に発色し、上質の製品と推定される。内外面は二次的な被熱が顕著に認められる。203 は肥前系染付鉢で、JB-5-b に分類される。文様は細線書きで描かれ、釉薬はやや青味がかっている。器面には二次的な被熱が確認される。204 は肥前系染付盃洗で、JB-5 に分類される。胎土は白色、呉須は鮮青色に発色している。二次的な被熱が認められる。205 ～ 207 は小型鉢で、205、207 が肥前系染付、206 は瀬戸・美濃系色絵である。205 は JB-5-b、206 は JC-5、207 は蛇ノ目凹形高台で JB-5-d に分類される。205 は高台内に角枠内「青」の銘款が書かれている。206 は赤以外の顔料が剥落して、色調が確認できない。207 は二次的な被熱が顕著に確認できる。

208 ～ 210 は蛇ノ目凹形高台の肥前系染付猪口で、JB-7-a に分類される。209 と 210 は文様、法量などが同じで、揃いと推定される。209 の蛇ノ目凹形高台部には「コト」と読める文字が墨書されている。210 の底部中央には山笠に「加」と刻書されている。

211 ～ 214 は仏飯器で、211 と 212 は肥前系染付、213 は瀬戸・美濃系染付、214 は瀬戸・美濃系瑠璃釉である。211 が JB-8-c、212、213、214 が JC-8 に分類される。211 の文様はコンニャク印判で施されている。215 ～ 218 は香炉・火入れである。215 は肥前系青磁で JB-9-c、216 ～ 218 は瀬戸・美濃系染付で JC-9 に分類される。216、217 は鮮青色に発色する呉須を用いるいわゆる関西系であるが、218 は瀬戸・美濃の地呉須を用いている。いずれも二次的な被熱が顕著に確認される。219 は肥前系青磁灰落としで、JB-24 に分類される。口縁部は無釉である。220 は淡路珉平の黄釉陶器火入れで、TP-9 に分類される。胎土は磁胎である。畳付と内面下部以外は施釉されている。221 は瀬戸・美濃系壺で、JC-15 に分類される。鮮青色に発色する呉須を用いるいわゆる関西系である。二次的な被熱が確認される。222 は肥前系白磁長頸瓶で、JB-10-a に分類される。二次的な被熱が認められる。223 ～ 225 は肥前系染付御神酒徳利で、223、224 は JB-11-b、225 は JB-11-a に分類される。225 は二次的な被熱が顕著に認められる。226、227 は肥前系染付油壺で、JB-12 に分類される。226 は胎土は白色で、呉須の発色も鮮やかである。227 は二次的な被熱が認められる。

228 ～ 254 は肥前系染付蓋物で、JB-13-a に分類される。本遺構から出土した多くの蓋物類は、蓋も出土しており、蓋との関係が復元できる。このうち身に蓋受けがあるものは 233、250 の 2 例で、他は蓋にかかりが付くものである。蓋は、橋状摘みが付くものが、229、231、238、240、242、244、246、ボタン状の摘みが付くものが 236、象形摘みが 248、摘みを持たないものが 234 である。230・231、235・236、239・240、245・246、250 は比較的強く二次的な被熱が確認される。255 ～ 282、285 ～ 289 は段重である。266・267・268 と 285・286 が瀬戸・美濃系で JC-13、他は肥前系で JB-13-c に分類される。蓋に摘みが付くものは 282 のみで、他は摘みはない。255・256・257 は色絵で、染付の上に赤、黄、緑で文様（竹虎文）を描いている。266・267・268 と 285・286 は方形を呈しており、内面と底部の釉薬は青磁釉を使っている。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。全てに二次的な被熱が確認される。283・284 は染付で、JB-13 に分類される。文様は細線書きで丁寧に描かれている。二次的な被熱が確認される。290 ～ 294 は型作りの肥前系磁器蓋物で、JB-13 に分類される。290 は分銅形、291・292 は栄螺形を呈している。加飾法は 290、293・294 が染付、291・292 が褐釉瑠璃釉掛け分けである。共に二次的な被熱を受けている。293・294 は薄手で丁寧に文様が描かれる上質な製品である。身の蓋受けにはアルミナが塗布されている。295・296 は瀬戸・美濃系色絵金彩の蓋物で、JC-13 に分類される。被熱を受けて明確には視認できないが、色絵は粉彩で、緑、黄などで上絵付けされているようである。297・298 は木瓜形を呈した三田系青磁蓋物で、JR-13 に分類される。器面は型で鳳凰草花文が細かく浮文され、蓋は桃形の把手が貼り付けられている。299 ～ 302 は筒形の肥前系白磁合子で、JB-18-b に分類される。300 は二次的な被熱が顕著に認められる。303 は肥前系染付筆立てで、JB-14 に分類される。底部下端には、3 箇所の筒から張り出した脚が貼付られている。304 は瀬戸・美濃系染付筆立てで、JC-14 に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。303、304 とも二次的な被熱が顕著である。305 ～ 310 は肥前系白磁壺で、JB-15 に分類される。肩部の張り、口唇部の釉剥ぎ、底部の形態などにバリエーションがある。肩部から胴部の張り出しが最も強いものは 307 で、次いで 306、

308 で、305、309、310 の張り出しは緩やかである。また､高台は胴部下端からやや外側に張り出しを持つが、309 は張り出しと畳付が細くなっている。口唇部の釉剥ぎは、305 は頸部下端まで、306 は頸部下位、307 は頸部中から下位までであるが口唇部からアルミナが塗布されている。308 は頸部状にまでを釉剥ぎにアルミナが塗布、309、310 は内面無釉である。311 は小型の肥前系白磁水滴で、JB-19 に分類される。型成形で作られ、底部には布目痕が確認される。二次的な被熱を受けている。312 は瀬戸・美濃系染付水滴で、JC-19 に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。313、314 は染付散蓮華である。313 が肥前系で JB-20、314 が瀬戸・美濃系で JC-20 に分類される。313 の底部には角枠銘が書かれている。

315 ～ 324、326 ～ 331 は底部中央を穿孔した植木鉢である。315 ～ 317、326 ～ 330 は肥前系染付で、JB-21 に分類される。315、316 は底部無釉である。326 ～ 328 は器面、口縁鍔部、内面上位の文様がほぼ同一である。脚は 3 箇所に体部下端からはみ出すように付けられている。見込み、底部裏に数箇所のトチン痕が観察できる。呉須は鮮青色に発色している。329 は底部外周に花を浮文した脚を 3 箇所貼り付けている。見込み、底部にはそれぞれ 6 箇所のトチン痕が確認できる。底部裏には「極上」と墨書されている。318 ～ 324 は瀬戸・美濃系で、318 ～ 320 は瑠璃釉透明釉掛け分け、321、323、324 は染付、322 は青磁釉瑠璃釉掛け分けである。318 は器面に区画文、竹、波濤、鶴を、口縁鍔部に葉文を貼り付け、瑠璃釉と透明釉を掛け分けている。高台は 3 単位の装飾的な脚を貼り付け、表面は針状工具で波濤文を刻描している。見込みには 4 箇所、高台内には 6 箇所のトチンの痕跡が確認できる。319 は器面に鶴、亀の丸文、口縁上部から鍔部にかけて松竹梅の丸文を貼り付け、地を瑠璃釉、貼付部に透明釉を掛け分けている。脚は体部下端からはみ出すように 3 箇所貼り付けられている。320 は器面に鶴と波濤、内面上位から口縁部にかけて 2 種類の短冊状の貼り付けをした後、地に瑠璃釉、貼付部に透明釉を掛け分けている。脚は 3 箇所に体部下端からはみ出すように付けられている。見込みには長方形の重積痕が 10 箇所（トチンか焼台か？）、底部裏には 12 箇所のトチンの痕跡が確認される。321 は体部中位に連続した刻文を施している。見込み中央の孔は、七宝文に透かし彫りされている。322 は体部に笹とふくら雀を貼り付け、地に青磁釉、貼付部に瑠璃釉を施している。また、体部には針状工具で七宝繋文が刻まれている。脚は 3 箇所に体部下端からはみ出すように付けられている。323 は染付で、鍔部は墨弾きが認められる。脚は底部外周に 3 箇所貼り付けられている。324 は染付で呉須は鮮青色に発色する、いわゆる関西系である。325 は肥前系染付甕で、JB-15 に分類される。底部中央に穿孔がないことから植木鉢ではない。内面中位には 2 条の並行沈線が巡っている。331 は三田系青磁の植木鉢で、JR-21 に分類される。体部、底部とも型作りで、六角形に成形されている。底部は貼付高台である。

332 ～ 337 は瀬戸・美濃系染付土瓶で、JC-34 に分類される。呉須は鮮青色に発色し、いわゆる関西系である。332 は茶漉しの小穴が 7 箇所、336 は 5 箇所確認できる。333 の底部はススが付着しており、火にかけたことが想定され、煎茶器として使用された可能性がある。334･335 は呉須とイッチンで文様が描かれている。335 と 337 は空気孔が穿たれている。二次的な被熱が確認される。

338 ～ 341 は花生で JB-22 に分類される。338 は肥前系白磁、339、340 は染付、341 は青磁で、JB-22 に分類される。338 は胎土はやや軟質で、底部が貼付られた痕跡がある。また、胴部上位に楕円状の貼付痕が確認される。341 は横方向の太い沈線と花の刻印が押されている。胎土は白色で、上質の製品と推定される。338 ～ 341 とも二次的な被熱が顕著に確認される。342 は肥前系青磁湯冷ましで JB-27 に分類される。体部下半はロクロ成形後八角形にシノギを入れて整形している。青磁釉は厚く掛けられている。二次的な被熱が確認される。343 は肥前系染付である。器種は不明。横手の把手が付き、底部中央に穿孔が穿たれ、見込みは 27 箇所の円形の穿孔と 3 箇所の三角形の穿孔をした饅頭状の貼付がある。口唇部は釉剥ぎをしているので、上部に蓋などが付くと思われる。呉須は淡い鮮青色に発色している。

344 ～ 357 は碗の蓋である。352、353 以外は肥前系磁器である。344、357 は丸碗、345 ～ 347 は広東碗、348 ～ 350、352、353 は端反碗、351、354、355 は朝顔形碗、356 はハの字状に直線的に開く碗の蓋である。348 が白磁、351 が青磁染付、その他は染付である。銘款がつくものは、345 が角枠内に「青」、352 が角枠銘（福か？）と内面に「成化年製」、353 が角枠銘（乾か？）と内面に「富貴長春」、357 は「乾」である。351 と 355 が粗製である他は、質的には良好である。355 はコンニャク印判を用いて施文されている。358、359 は漆器を模した坪皿の肥前系白磁蓋である。360、361 は瀬戸・美濃系白磁にいわゆる江戸絵付

で井筒に橘紋が上絵付けされている。井筒に橘紋は日蓮宗の宗紋である。大村家はキリシタン対策として仏教復興政策を採り、領内中核寺院として大村家菩提寺の本経寺を建立した。本経寺の宗派は日蓮宗で、こうした関連の資料の可能性もある。362 ～ 374、383 は蓋物の蓋である。383 は瀬戸・美濃系、370 は景徳窯系、その他は肥前系である。362 は染錦で、染付に色絵金彩で文様が描かれている。色は赤、緑は確認できるが、剥落のため明瞭ではない。366 は染錦で、染付に色絵で文様が描かれている。色は剥落のため明瞭ではない。370 は清朝期の景徳鎮青花である。釉薬はやや青味がかっている。373 は二次的な被熱が顕著に認められる。377 ～ 382 は肥前系白磁壺の蓋である。377、378 がボタン状、379 ～ 382 がソロバン玉状の摘みである。二次的な被熱が確認される。375、376、384 は肥前系染付合子の蓋である。385 は瀬戸・美濃系壺の蓋で、221 の蓋の可能性もある。呉須は淡い鮮青色に発色し、いわゆる関西系である。386 は瀬戸･美濃系急須の蓋である。1 箇所に空気抜きの穿孔があり、内面は中央を五角形に削っている。

陶器（220、387 ～ 617）

220 は淡路珉平の黄釉陶器火入れで、TP-9 に分類される。胎土は磁胎である。畳付と内面下部以外は施釉されている。

387 は瀬戸・美濃系御室碗で、TC-1-d に分類される。底部無釉である。388 は鉄釉灰釉掛け分け、389 は緑釉灰釉掛け分けの鎧茶碗で、TC-1-r に分類される。器面には横方向のトビガンナ状押形文が付けられる。388 は鉄釉が口縁部内外面に施されるが、389 の緑釉は口縁部と内面全体に施される。390 は刷毛目碗で、TC-1-s に分類される。外面下端から底部は無釉である。高台脇は面取りしている。391 は灰釉鉄釉掛け分けの腰錆碗で、TC-1-u に分類される。扁平小型化していることで、後出的な製品と考えられる。392 は柿釉半筒碗で、TC-1 に分類される。体部下位から底部は無釉である。393、394 は京都・信楽系の小杉碗で、TD-1-d に分類される。393 は文様が確認できないが、欠損部に存在した可能性もある。394 は鉄で簡略な若杉文が描かれている。395、396 は京都・信楽系の灰釉端反碗で、TD-1-g に分類される。体部下端から底部は無釉である。397 は萩系のピラ掛け小碗で、TH-1-b に分類される。胎土は暗く、暗茶褐色を呈している。398 は楽系の軟質平碗で、TD-1-l に分類される。赤楽茶碗で、表面は鉛分が銀化している。

399、400 は瀬戸・美濃系灰釉摺絵皿で、TC-2-e に分類される。高台脇から底部は無釉である。小型で浅く、後出的なものと推定される。401 ～ 403 は瀬戸・美濃系石皿で、TC-2-f に分類される。401、402 が鍔口で、呉須で絵付けされている。403 は直口縁で、呉須と鉄で絵付けされている。高台は幅広で、高台脇から底部は無釉である。見込みにはトチンの痕跡がある。404、405 は瀬戸・美濃系馬ノ目皿で、TC-2-g に分類される。文様の渦巻きと圏線は鉄で描かれている。高台は幅広高台で、高台脇から底部は無釉である。見込みにはトチンの痕跡がある。406 は瀬戸・美濃系灰釉大皿で、TC-2-f に分類される。側面には 2 段の稜を作り、口縁部を肥厚させている。見込みには 6 箇所のトチン痕が確認される。高台は幅広高台で、高台脇から底部は無釉である。407 は瀬戸・美濃系行灯皿で、TC-2 に分類される。見込みは鉄で文様が描かれている。底部は無釉である。二次的な被熱が認められる。408 ～ 411 は京都・信楽系灰釉灯明皿である。408、410 は櫛目があるタイプで TD-2-a、409、411 は櫛目がないタイプで TD-2-b に分類される。408 ～ 410 には見込みに 3 箇所のピン痕が確認できる。410 の口唇部には灯心痕が認められる。412 はおそらく京都・信楽系の軟質施釉陶器で、TD-2 に分類される。見込みには条線と鉄、白土で文様が描かれている。413 は京都・信楽系灰釉鉄絵皿で、TD-2-c に分類される。高台は小さく、体部下半から底部は無釉である。畳付外周は面取りしている。414 は瀬戸・美濃系灰釉皿で、TC-2 に分類される。灰釉はやや緑がかっている。415 は生産地不明の鉄釉皿で､TZ-2 に分類される。胎土は堅緻で茶褐色を呈し､畳付は沈線を巡らせている。高台脇にトチン状の重積痕が認められる。416 は京都・信楽系燗徳利で、TD-4 に分類される。口唇部は注口を有する。口縁から頸部にかけて緑釉を流し掛けられている。417 は瀬戸・美濃系灰釉輪禿皿で、TC-2-m に分類される。体部下端と底部は無釉である。

418 は瀬戸･美濃系灰釉鉄絵鉢で､TC-5 に分類される。見込みにピン痕が確認される。高台脇から底部は無釉である。419 は瀬戸・美濃系刷毛目輪花鉢で、TC-5-m に分類される。畳付の他は全釉である。見込みに 5 箇所のピン痕が確認される。420 は生産地不明の樽形軟質施釉陶器である。被熱によって本来の釉調などが復元できない。胎土はやや緻密で橙褐色を呈している。421 は鉄釉小鉢で、TD-5 に分類される。あるいは把手付きの餌入れの可能性もある。内面、体部上半に鉄釉が施される。二次的な被熱を受けている。422 は瀬戸・美濃系緑釉鉢で、TC-5 に分類される。見込みに竜田川文、内側面に連続瓔珞文を押印した後、緑釉を施している。体

部下半から底部は鉄釉が掛け分けられている。緑釉は一部被熱によって赤化している。423 ～ 425 は瀬戸・美濃系蓋付角鉢で、TC-5 に分類される。いわゆる復興織部で、文様は鉄絵で描かれ、緑釉と掛け分けられている。体部は隅切りの方形を呈し、相対した面に把手状の貼付を有する。425 は下駄歯状の摘みである。焼成、胎土の類似性から、424 と 425 が対になると推定される。426 は大堀相馬の型作りの灰釉坏で、TJ-6 に分類される。見込みには鉄絵で馬が描かれている。器面は釉に含まれている銅成分が二次的な被熱によって赤化している。427 は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵火入れで、TC-9-g に分類される。内面上位、口縁から体部下端まで施釉されている。口唇部には所々にキセルによる敲打痕が認められる。二次的な被熱が顕著である。428 は瀬戸・美濃系の半菊花状のシノギを入れる灰釉香炉で、TC-9-d に分類される。内側面、見込み、高台脇は無釉である。高台脇無釉部に円形の溶着痕が認められる。429 は瀬戸・美濃系の灰釉緑釉流しの火入れで、TC-9-g に分類される。口唇部は釉剥ぎが広範囲で確認されるが、敲打によるものか二次的な被熱によるものか判断できない。口唇部から体部下端まで施釉されている。

430 ～ 449 は瀬戸・美濃系二合半灰釉徳利である。430 は体部下半から底部施釉後拭き取りで TC-10-a、他は体部下半から底部無釉で TC-10-b に分類される。430 のみ肩部から胴部に丸みを帯びるが、その他のものは寸胴形をしており、430 が時期的に古い製品と推定される。徳利には列点状の釘書きが頻度高く確認でき、430 は「△」、431 ～ 441 は菱井筒内「上」、442 は○内「松」、443 と 444 は○内「イ十」、445 は立鼓、446 は不明、447 は「小中」？、448 は「万」の下に判読できない文字、449 は「△」の下に判読できない字が書かれている。448 の底部には違山形の下に「久」の字が墨書されている。450 ～ 468 は瀬戸・美濃系五合灰釉徳利で、TC-10-d に分類される。底部は施釉後に釉を拭き取っている。胴部には列点状の刻書がみられ、判読できるものは 450 ～ 453 が○内「万」とその対面に「八」、454、455 が「万八」、456 が「万」（「万」の下は欠損）、457 ～ 459 が菱井筒内「上」、460 が「イ十」、462 が「一」の下に「△」、463 が○内「大」、467 が「三」、468 が山笠に「三」とその対面に「イセ由」ヵである。467 は頸部以上が打ち欠かれ、内面には鉄によるものと思われる錆が多く付着している。468 も頸部以上が打ち欠かれているが、内面には錆は認められない。469 ～ 475 は瀬戸・美濃系一升灰釉徳利で、TC-10-e に分類される。底部は施釉後に釉を拭き取っている。胴部には列点状の刻書がみられ、判読できるものは 469 ～ 471 が菱井筒内「上」、472、473 は「万八」、474 は「川ヵ上」、475 は縦長楕円内「二」（あるいは「目」ヵ）である。469 は頸部以上を打ち欠き、内面には鉄錆が全面に付着している。476 ～ 480 は瀬戸・美濃系柿釉徳利で、TC-10-g に分類される。胴部下位に稜と肩部に段を有し、胴部は相対して窄ませている。大型の 476、477 の胴部下端には高台状の段が設けられている。底部は施釉後、釉を拭き取っている。478 は他と比して鉄釉が黒褐色に発色している。478 の内面は灰釉、479 の内面は鉄釉で化粧掛けしている。481 は瀬戸・美濃系灰釉徳利で、TC-10 に分類される。釉薬の他は成形、器形などは 479、480 と同様である。482 は志戸呂系の鉄釉徳利で、TF-10 に分類される。胴部下位には稜が作られ、器面全体に鉄釉が掛けられている。483 は丹波系鉄釉徳利で、TK-10 に分類される。器面は鉄釉、内面に灰釉が掛けられている。胴部下位には稜が作られている。484 は備前系と思われる鉄釉徳利で、TE-10 に分類される。江戸後期の施釉製品と推定される。二次的に被熱を受けている。485 は黄釉が施された京都・信楽系の瓶（あるいは水注か）で、TD-10 に分類される。器面は針状工具で龍紋がエッチングされている。二次的な被熱が顕著に認められる。

486 ～ 489 は瀬戸・美濃系柿釉半胴甕で、TC-15-a に分類される。内面と体部下部稜まで施釉している。底部中央は裏から敲いて穿孔している。このうち 486 は器高も高く底部も厚いことから、他より古い製品と推定される。487 の胎土は多量に鉄分の黒色班が確認され、赤津の製品と考えられる。490 は小型の瀬戸・美濃系柿釉銭甕で、TC-15-a に分類される。体部下半、底部、口唇部は鉄釉の化粧掛けが施されている。胎土は鉄分の黒色班が確認され、赤津の製品と考えられる。底部中央は裏から敲いて穿孔している。491 ～ 493 は瀬戸・美濃系柿釉灰釉流しの甕で、TC-15-b に分類される。491 は大型製品で、頸部が短く、灰釉も多く流し掛けられている。492、493 の頸部はやや長く、高台はやや丸みを持っている。492 の内面には 4 箇所、493 は 3 箇所のトチン痕が認められる。二次的な被熱を受けている。494 ～ 497 は瀬戸・美濃系の灰釉双耳壺で、TC-15-f に分類される。灰釉は胴部上から中位に施釉されている。498 ～ 500 は瀬戸・美濃系の水甕で、TC-15-c に分類される。流水状の沈線と刺突で文様を付け、498 は黄瀬戸系の灰釉に鉄釉、499、500 は黄色系の灰釉に緑釉が流し掛けている。498、500 は高台脇から底部が無釉であるが、499 は高台内化粧掛けされている。498

は見込み内に6箇所（遺存部）、499は見込み内に7箇所と高台内に6箇所、500は見込みに7箇所のトチン痕が確認される。共に二次的な被熱が確認される。501は瀬戸・美濃系の灰釉に青緑釉とウノフ釉が流し掛けられる甕で、TC-15に分類される。高台脇から底部には鉄釉が施される。高台はやや丸みを有している。見込みにはトチン痕が確認できる。青緑釉は二次的な被熱のために一部赤化している。

502、503は信楽の壺で、TD-15に分類される。薄手で外面と口縁部内面に漆黒の鉄釉、502の内面は柿釉、503の内面は鉄釉の化粧掛けが施される。胎土は堅緻な灰白色で、白色の粗砂粒が多く含まれる。504、505は生産地不明の鉄絵壺で、TZ-15に分類にされる。胴部外面は、トビガンナ状の連続押型文と全体的に施し、鉄絵で文様を描いている。器面は無釉、内面は透明釉が掛けられている。胎土は堅緻な灰白色で、薄く成形されている。505も表面にはトビガンナ状の連続押型文が付けられている。京焼か？506、507は万古系型作りの急須で、TI-16に分類される。胎土は堅緻な淡茶褐色で、極めて薄作りである。急須は五角形に成形され、器面全体に地紋として沈線で細かい斜格子文を付けている。内面は全体的に布目が観察できる。内外面無釉である。把手は五角形に成形され、横手に付けられている。把手には楕円形圏内に「松山」の刻印が押されている。507は五角形で、橋状把手が貼り付けられている。1箇所に空気抜きの穿孔が確認される。万古の陶楽軒松山敬白の製品と推定される。508、509は生産地不明の素焼きの急須で、TZ-16に分類される。胴部上位には漢字が書かれるが、欠損が多く判読できない。胎土は堅緻で淡い灰白色を呈し、薄作りに成形されている。509は無縫塔状の摘みが付けられ、空気抜きの穿孔が1箇所穿たれている。510は京都・信楽系の低火度の黄釉が施された鍋で、TD-42に分類される。燗鍋か？二次的な被熱によって表面の剥落が激しいが、雲龍文が針状工具によって施文されている。口縁部は蓋受けが付いている。511、512は京都・信楽系の半筒形灰釉蓋物で、TD-13に分類される。底部無釉である。511の内面は灰釉施釉後拭き取り、512は無釉である。513は京都・信楽系の土瓶形水滴で、TD-19に分類される。あるいはミニチュアか？胴部には鉄で文様が描かれ、灰釉が施される。胎土は堅緻な橙灰色を呈し、表面には細かい貫入が認められる。

514 ～ 517、519は瀬戸・美濃系植木鉢で、TC-21に分類される。514と519は鉄釉、515は灰釉、516と517は緑釉が施される。底部には514が1箇所、515は2箇所、516は3箇所、517は4箇所の半円状の抉り込みが付けられている。519は抉りはない。516、517は文様を貼り付けられ、内面と底部下端から底部は鉄釉が化粧掛けられている。516の高台内に7箇所、517は見込みに8箇所のトチンの痕跡が認められる。518は京都・信楽系の無釉植木鉢で、TD-21に分類される。外面上位に2条、下位に2条の並行沈線とその間に鉄釉が施された型抜きの菊、桐が貼り付けられている。鍔状の口縁には波状の3条の沈線が描かれている。見込みには墨書されている。底部には3箇所の半円状の抉り込みが付けられている。521 ～ 523は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢である。521、522は丸碗形でTC-23-b、523は直線的に開くタイプでTC-23-cに分類される。高台脇から底部は無釉である。521の見込みには3箇所のピン痕、522、523にはトチン痕が確認される。523は二次的な被熱が顕著に認められる。524は備前系の小型の鉢で、TE-5に分類される。小さい注口が付けられている。内外面には鉄泥が塗布され、外面は釉様に光沢がある。類似した製品に内面に擂目を持つものがある。525は薄作りの注口を持つ産地不明の甕で、TZ-15に分類される。胎土は堅緻な濃茶色を呈し、内外面は藻掛けに近似する鉄釉が施される。526は京都・信楽系灰釉筒形水注で、TD-27-dに分類される。内外面施釉で、底部は無釉である。二次的な被熱が確認される。527、528は瀬戸・美濃系の灰釉餌入れで、TC-30に分類される。紐状の円形把手が貼り付けられている。527はやや内側に、528は全面に回転糸切り離し痕が認められる。529は京都・信楽系の灰釉鉄絵柄杓で、TD-32に分類される。体部内面中位に横方向の圏線が描かれている。底部は無釉で、高台外周は面取りされている。底部中央は内側から敲いて穿孔している。530は瀬戸・美濃系の灰釉溲瓶で、TC-28に分類される。体部下端から底部にかけて無釉の他はやや黄みがかった灰釉が施されている。531 ～ 533は生産地不明の把手付き柿釉鍋で、TZ-33-aに分類される。体部下位から底部は無釉で、底部脇には脚が貼り付けられている。見込みにはピン痕が確認される。531は二次的な被熱が顕著に確認される。532は見込みには3箇所のピン痕と底部高台脇には3箇所のトチの痕跡が確認される。底部に使用時のススは付着していない。533の底部は使用時のススが付着している。534は生産地不明の軟質陶器手付鍋で、TZ-33-bに分類される。胎土は橙褐色を呈し、外面の釉は濃臙脂色、内面は明茶色である。体部下半から底部の一部は二次的な被熱のために釉が剥落している。

535 ～ 538は堺系擂鉢で、TL-29に分類される。体

部内面には擂目が底部境から引き上げられている。体部上端で擂目を横方向に強くはないが消し揃えている。縁帯上部内面の圏線は536と538は強く引かれているものの、外側の張り出しは536はやや弱い。見込みの擂目は535、536、538が三角状、537は放射状に付けられている。535～538の見込みは焼台の痕跡が認められる。535、536の底部外周やや内側に高台状に幅広の沈線が浅く付けられている。

539、540、542は瀬戸・美濃系の柿釉土瓶で、TC-34に分類される。539は内面と外面底部および胴部下端無釉である。胴部下端にはボタン状の脚が3基貼り付けられている。また、底部脇には角枠内に「タチ」、その下に「丸源」と読める印が施されている。二次的な被熱が確認される。540はいわゆる糸目土瓶である。内面は鉄釉の化粧掛け、外面底部および胴部下端無釉である。胴部下端にはボタン状の脚が貼り付けられている。3箇所の茶漉しの孔が穿たれている。また、底部脇には角枠内に判読不明の文字（屋号か？）の下に「駄知」と読める印が施されている。二次的な被熱が確認される。542は内面施釉、外面底部および胴部下端無釉である。胴部は浅い碁笥底状を呈している。脚はない。注口はS字状を呈し、3箇所の茶漉しの孔が穿たれている。二次的な被熱が確認される。541は鉄釉灰釉流し掛け土瓶で、TZ-34-eに分類される。胎土は堅緻で暗灰色を呈している。内面は灰釉、外面は底部および胴部下端無釉である。注口はS字状を呈し、2箇所の茶漉しの孔が穿たれている。543、544は薩摩苗代川系の鉄釉土瓶で、TT-34に分類される。543が「丸形」、544が「ソロバン玉形」を呈している（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003）。釉は543は内面と口唇部から胴部下端まで、544は内面と口唇部から胴部中位まで施されている。両者とも注口はS字状を呈し、茶漉しの孔は3箇所確認される。胎土は白色細砂粒を含んだややザラつきがある。544は底部に使用時のススの付着が明瞭に確認できる。545～549は器面に青緑釉が施されるいわゆる青土瓶で、TZ-34-aに分類される。胎土は堅緻で、545と548は淡黄色、その他は白色を呈している。内面は無釉で、外面は青緑釉が口唇部から胴部中位まで掛けられている。注口が遺存している545～548は直線的な鉄砲口を呈し、茶漉しの孔は全て3箇所開けられている。全ての底部には使用時のススの付着が確認される。550、551は薄手の灰釉鉄絵土瓶で、TZ-34に分類される。器面は白土の上に鉄絵を描き、灰釉を掛けているが、一部褐釉も認められることから三彩であった可能性が高い。内面は550、551共に無釉である。底部は饅頭状に成形されているが、明確な使用の痕跡は確認できない。蓋は球状の摘みが付けられ、1箇所穿孔されている。全体に二次的な被熱が確認される。552は550・551と同様に白土の上から鉄絵を描き、灰釉、緑釉、褐釉の三彩で彩色されている土瓶で、TZ-34-cに分類される。白土は550・551よりかなり灰色がかり、文様もラフに描かれている。内面下位は化粧掛けされている。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔が3箇所に穿孔されている。553は生産地不明の灰釉土瓶で、TZ-34-gに分類される。胎土はややガサついた暗灰色を呈し、釉は器面にやや緑がかった灰釉、内面中位以下に鉄釉が化粧掛けられている。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔は3箇所穿孔されている。554～556は生産地不明の鉄釉灰釉流し土瓶で、TZ-34-kに分類される。554、555は胴部中位が膨らむソロバン玉状、556は茶釜状を呈している。近年、常陸北部の松岡で類似した製品が生産されていることが判明している。胎土はややガサついた明褐色から暗灰色を呈し、器面には藁灰分の多い鉄釉あるいは鉄釉に藁灰釉を流し掛けられている。内面は554、555は中位以下に鉄釉が施されるが、556は無釉である。中央は鉄砲口で、茶漉しの孔が3箇所に穿孔されている。557はいわゆる青土瓶で、TZ-34-aに分類される。器面口縁部から胴部中位までに掛けられた青緑釉は、545～549よりやや透明感がある。内面は無釉である。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔が3箇所穿孔されている。口唇部は幅広に成形されている。底部はほぼフラットで、底部脇にはボタン状の脚が貼り付けられている。底部には使用時のススが付着している。558は薄手の鉄絵三彩土瓶で、TZ-34-cに分類される。器面の一部と花などの下に白土を塗布し、松竹梅文を描いている。胎土は堅緻な明茶褐色を呈し、外面は灰釉、褐釉、緑釉で文様に沿って掛け分け、内面中位から下位には灰釉が施される。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔は3箇所穿孔されている。底部は使用時のススの付着が確認される。京焼か？559は生産地不明の灰釉鉄絵土瓶で、TZ-34に分類される。器面は白土を打刷毛目状に施し、鉄で文様を描いている。胎土は堅緻な淡茶色で、釉は口縁部から胴部中位、内面は中位から下位に鉄釉が化粧掛けられている。器厚は薄く、蓋受は身につけられている。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔は3箇所穿孔されている。底部は使用時のススの付着が確認される。560は薄手の白土に灰釉が施された土瓶で、TZ-34に分類される。胎土は堅緻な暗灰色で、内面には鉄釉が施される。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔は2箇所穿孔されている。底部脇には3箇所円錐状の脚が付けられている。底部は使用時のススの付着が確認され

る。561 は横手が付く無釉の急須で、TZ-16 に分類される。胎土は堅緻は淡茶色で、器壁は極めて薄く作られている。器面は白土（イッチン）で描かれている。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔が穿孔されている。

562 は京都・信楽系の灰釉脚付油受皿で、TD-40-a に分類される。底部無釉である。563 は京都・信楽系の灰釉油受皿で、TD-40-b に分類される。底部および外側面は無釉である。564 は瀬戸･美濃系鉄釉ひょうそくで、TC-44 に分類される。底部は糸切り離し後、中央にひょうそく台にはめ込む孔を作っている。565、566 は飯能系の行平鍋で、TS-42 に分類される。565 は器面をトビガンナ状の連続文で刻文し、内面は灰釉が掛けられている。亀が浮文された把手が貼り付けられ、把手から直角に付けられた注口の痕跡が確認できる。566 は外面にはトビガンナ状の連続刻文と草花文がイッチンで描かれている。内面には鉄釉が施されている。567 は生産地不明のトビガンナ状の連続刻文の行平鍋で、TZ-42-c に分類される。胎土は粒子の細かい明褐色を呈し、器面には鉄釉、内面には灰釉が施されている。把手は四方繋ぎと菊花文が浮文された把手が貼り付けられている。底部は使用時のススの付着が確認される。568、569 は生産地不明の灰釉行平鍋で、TZ-42-a に分類される。内面および外面中位までには灰釉が掛けられている。欠損により、注口は 568、把手は 569 しか遺存していない。底部脇の脚は、568 はないが、569 は貼り付けられている。見込みには重ね積みのピン痕が確認できる。568、569 共底部には使用時のススの付着が観察される。570 は生産地不明の行平鍋で、TZ-42 に分類される。器面は青緑釉の乱掛け、内面は灰釉が掛けられている。注口の取付法は、568、569 と共通である。底部には使用時のススの付着が観察される。571 は生産地不明の軟質行平鍋で、TZ-42-d に分類される。胎土は軟質で、橙褐色を呈する。器面には濃臙脂、内面は濃茶色の釉が施される。外面の一部に把手が取り付けられた痕跡が確認される。

572 は宜興の急須蓋である。胎土は堅緻で、表面は濃茶色に梨皮状の小斑が確認される。摘みは球状を呈し、摘み中央は内側から穿孔されている。蓋内面には角枠刻印が押印されている。573 ～ 577 は灰釉壺の蓋である。いずれも橋状把手が貼り付けられる。内面は 573 が糸切り離し後に回転ヘラケズリ、574 ～ 577 は回転糸切り離しである。578 は瀬戸・美濃系の糸目土瓶蓋である。内面には角枠内に「タチ」の下に「丸源」の刻印が押されている。539 の蓋か？二次的な被熱を受けている。579 は京都・信楽系灰釉蓋物の蓋である。二次的な被熱が観察される。581 は京都・信楽系灰釉土瓶の蓋である。型抜きの文様が貼り付けられている。582 は京都・信楽系灰釉急須の蓋である。型抜きの文様が貼り付けられている。空気抜きの孔が穿たれている。583 は生産地不明の灰釉土瓶蓋である。把手は植物（葵か？）を模したものを橋状に貼り付けている。穿孔されている。584 ～ 587 は青土瓶の蓋である。菊花状の摘みが付けられている。588、589 は三彩土瓶の蓋である。588 は球状、589 は擬宝珠状の摘みが付けられている。白土の上に鉄で文様を描き、灰釉に緑釉を散らしている。590 は瀬戸・美濃系の糸目土瓶の蓋である。内面に角枠内に「小キ」の刻印が押印されている。591 は生産地不明の透明感の強い青緑藁灰釉土瓶の蓋である。近年、常陸北部の松岡で類似した製品が生産されていることが判明している。592、593 は薩摩苗代川系鉄釉土瓶の蓋である。内面無釉である。593 の内面には「ふじや」の墨書が確認される。594 は生産地不明の灰釉イッチン描きの土瓶蓋である。摘みは渦巻き状に成形されている。器面外周付近 3 箇所にピン痕が確認できる。二次的な被熱を受けている。595 は灰釉、596 ～ 598 は鉄釉の落とし蓋タイプの土瓶蓋である。生産地は不明である。596、597 は菊花状の摘みが付けられている。599 はトビガンナ状の連続文とイッチンで施文した行平鍋の蓋である。外面は蛇ノ目状に錆釉、内面は鉄釉が施される。600、601、603 は生産地不明の青緑藁灰釉土瓶の蓋である。近年、常陸北部の松岡で類似した製品が生産されていることが判明している。602 は生産地不明の鉄釉土瓶蓋である。胎土はザラついた明茶色を呈し、鉄分が黒斑として浮き上がっている。604 は生産地不明の鉄釉土瓶蓋である。胎土は堅緻な濃灰色である。605 は生産地不明の鉄釉急須の山形蓋である。内面無釉である。類例が少なく、量産品ではないと推定される。穿孔が確認できる。606 は生産地不明の三彩急須である。白土の上から鉄で文様を描き、灰釉に緑釉を散らしている。穿孔が 1 箇所確認される。607 は生産地不明の白土、呉須絵の灰釉土瓶の蓋である。穿孔が 1 箇所確認される。608 は京都・信楽系灰釉急須の蓋である。内面中央はロクロ成形後、方形にカットされている。穿孔が 1 箇所確認される。609 は生産地不明の急須蓋である。型作りで、蝉を象った摘みが貼り付けられている。内面および外面に布目痕が観察できる。京焼か万古か？ 610 は香炉の蓋か？無釉で器面外周付近には細かい雷文が浮文されている。中央は穿孔され、2 個の摘みがつけられている。611 は京都・信楽系の灰釉土瓶蓋である。白土の上に灰釉が掛けられている。612 は生産地不明の白

土鉄絵土瓶蓋である。二次的な被熱を受けている。613は灰釉土瓶の蓋である。胎土は明褐色を呈し、やや軟質であるが緻密である。穿孔が1箇所確認される。614は生産地不明の三彩急須蓋である。白土と鉄で文様を描き、灰釉に緑釉を散らしている。穿孔が1箇所確認される。615は生産地不明の灰釉鉄絵急須蓋である。白土の上から鉄で文様を描いている。穿孔が1箇所確認される。616は京都・信楽系の漆器平皿を模した製品の蓋である。器面には貫入が認められる。二次的な被熱を受けている。617は生産地不明の合子の蓋か？二次的な被熱を受けている。

土器（618 ～ 652）

618はDZ-2-b、619、620はDZ-2に分類される。621は施釉土器皿で、DZ-2-hに分類される。糸切りの回転方向は左回転である。622はロクロ成形土師質鉢で、DZ-5に分類される。糸切りの回転方向は左回転である。623は京都・信楽系急須で、DD-16に分類される。底部は渦巻き状に沈線がめぐる。器面は丁寧に磨かれ、光沢がある。横手に付けられた把手下方には楕円圏内「音羽」と角枠内「乾」が押印されている。624 ～ 628は植木鉢である。625は土師質でDZ-21-a、624と626 ～ 628は瓦質でDZ-21-bに分類される。624の底部は糸切り離し後に糸切り痕をナデ消しているが、その他は左回転の回転糸切り痕が確認できる。624は体部中位で口縁を作り出す再調整した痕跡が確認される。625は底部中央の孔を拡張した調整痕が認められる。629、630は土師質の丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。629は足が付いていた痕跡が、630は遺存部分にやや小型の足が2箇所に貼り付けられている。629の内面上位には使用時に付いたと思われるススが付着している。630の口唇内側はキセルによると推定される敲打痕が多く確認される。631、632は施釉の脚付油受け皿で、DZ-40-aに分類される。脚内面は平刃工具で円錐状に抉られるが、631の方がやや深い。633 ～ 637は脚なしのひょうそくである。636、637は無釉でDZ-44-a、633 ～ 635は施釉でDZ-44-bに分類される。いずれの底部も左回転の回転糸切り痕が確認できる。633、635、636は灯火の痕跡が明瞭に観察される。638は施釉の手付カンテラで、DZ-46に分類される。欠損によって手が相対していたかは不明である。手の受部には灯火の痕跡が確認される。639 ～ 641は板作りの塩壺である。639、640は角枠内「泉湊伊織」の刻印でDZ-51-g、641は無印でDZ-51-abに分類される。内面には布目が付いている。642は無印のロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。口縁内側の受けは、やや張り出している。643 ～ 645は板作成形の塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。643は上面端部など全体的に丸味を帯びている。内面はいずれも布目痕が確認される。646 ～ 651は断面逆台形を呈するロクロ成形の塩壺蓋で、DZ-00-dに分類される。648 ～ 650は蓋受けが痕跡的に遺存している。652はあんかの蓋である。全体に研磨され、光沢が看取される。二次的な被熱を受けている。

人形・玩具（653 ～ 668）

653 ～ 656はミニチュアの器物。653は色絵皿でJC_2002_Wに分類される。見込みに金彩で草花文が描かれる。高台は無釉である。654は磁器の碗でJB_2001_Wに分類される。型作り。口縁部は平坦で、外面に菊花状のしのぎを施している。紅皿を模したものか。655は涼炉でJC_2014_Bに分類される。板作りで各側面には草花が描かれている。非常に丁寧な作りである。656は碗でTD_2001_Wに分類される。高台脇から高台内にかけて無釉である。657は人物座像でDZ_1100_Hに分類される。手びねり成形で、挿し首、着物は上から貼り付けており、底部中央寄りに穿孔が1カ所みられる。胎土は赤褐色で、比較的緻密である。658は狐でDQ_1206_Mに分類される。前後2枚の型合せ成形である。台座を持つ狐は底部開口だが、本資料は頭部のみのため不明である。659は鶏。DQ_1215_M2eに分類される。前後2枚の型合わせ成形で胎土は鈍い橙褐色で、ボソボソしている。660は摺鉢でDQ_2012_Mに分類される。櫛目は7条、胎土は赤褐色。661は小判包でDQ_2020_Mに分類される。1枚の型成形で、底部はなし。槌目、「大」「吉」を陽刻している。小判の裏面に押される験極印が「大」と「吉」のものは大吉小判と呼ばれ、献上品と偶然の組み合わせでできたものがあり、大変人気があった。662は鳩笛でDQ_4003_Mに分類される。上下2枚の型合わせ成形で、尾と底部に穿孔がある。胎土は橙褐色。背に白色、緑色で梅花を描き、全体に透明釉をかけている。663は泥面子でDQ_4006_Mに分類される。型抜き成形で、胎土は橙褐色。丸に橘。664 ～ 668は碁石状土製品でDQ_4004_Hに分類される。手捻り成形で665は胡粉が残る。

瓦（669 ～ 711）

669 ～ 672は左巻きの連珠三つ巴文軒丸瓦である。669、670が巴文と連珠の間に圏線が巡るA類、671、672が圏線を巡らさないC類である。連珠の数は669が16、他は14である。672は外側面に漆喰が張り付いている。

673 ～ 680は軒平瓦あるいは軒桟瓦である。673は

江戸式の軒平瓦で、中心飾りⅡ類、唐草Ｌ類、子葉ｊ類（以下、同様に「中心飾り」「唐草」「子葉」の順に記載する）に分類される。674 は江戸式の軒桟瓦で、Ⅰ Lj 類に分類される。桟部は連珠三つ巴文で、連珠数は 8 である。桟部と平部の外側には漆喰が付着する。二次的に被熱している。675 は江戸式の軒桟瓦で、Ⅰ 4Ki に分類される。桟部は三つ巴文である。二次的に被熱している。676 は江戸式の軒桟瓦で、Ⅱ Lj 類に分類される。677 は江戸式の軒平瓦で、Ⅱ Lj 類に分類される。瓦当文様右側に○に「ト」の刻印が押されている。678 は江戸式の軒桟瓦で、Ⅲ Lj 類に分類される。桟部は連珠三つ巴文で、連珠数は 9 である。679 は軒桟瓦で、加藤が分類した江戸式の範疇に含まれていない。金子Ｂ類に相当する（金子 1994）。680 は東海式の軒瓦である。瓦当文様右側に角枠内に「∧」の下に「本」とその左側に不明字の刻印が押印されている。681 ～ 683 は丸瓦である。内面は、681 が布目、682 が布目と 4 本の棒状圧痕、683 が布目と 2 本の棒状痕跡が確認される。682 は体部頂部に 2 箇所穿孔され、うち 1 箇所には鉄釘の痕跡がある。すべて体部周囲には漆喰の付着が認められる。683 は二次的に被熱している。

684 ～ 693 は平瓦である。684 は外側縁に連続調整をして、角を打ち落としている。内面には波状櫛書文が施される。685 は両外側縁に連続調整をして、角を打ち落としている。狭端部面には横位に長方形内「瓦源」の刻印が押印されている。二次的な被熱を受けている。686 は大型の平瓦で、狭端部面には横位に長方形内「瓦宗」の刻印が押印されている。687 は横楕円形内「瓦熊」、688 は横長方形内「美濃∧三」（「三」は「∧」の下）の刻印が押されている。「∧」の上部には小さい△が 3 箇所確認できる。689 は横長方形内「橋藤」の刻印が押印されている。二次的な被熱を受けている。691 は外側面に漆喰が付着している。692 は○内「久」の刻印が押印されている。693 は 677 と同じ○内「ト」の刻印が押印されている。694 ～ 707 は桟瓦である。狭端部面に刻印が確認できるものは、694 が横長方形内「浅草／瓦六／今戸」、695 が横長方形内「玉傳」、696 が横長方形内「本瓦三ト」、697 が横長方形内不明、698、699 が「柴安」、700 が横位に長方形内「丸安」、701 が 686 と同じ横位に長方形内「瓦宗」、702 が横位に「瓦青助」、703 が横位に長方形内「瓦傳」、704 が横位に長方形内「∧キ彦」（「キ」は「∧」の下）、705 が「○」である。なお、「柴安」刻印の瓦については、研究編を参照されたい。694、699、705、706 は二次的な被熱が顕著である。708 覆輪付き鬼瓦である。頭には文様が貼り付けられていない。二次的な被熱が確認される。709 は家紋が貼り付けられている鬼瓦である。家紋は大村家定紋の大村瓜である。二次的な被熱が確認される。710、711 は鯱瓦である。710 が頭部、711 が鰭が接続する部分である。710 の鯱瓦は大型品である。

金属製品（712 ～ 794）

712 ～ 719 はキセルで、712 ～ 717 は雁首、718、719 は吸口である。712 は銀製、その他は真鍮製である。雁首は脂返しがほとんどなく、火皿は胴本体に直接接続されている。716 は胴に縦方向の条線が刻まれている。716、717 は雁首の胴部分が一段太くなっている。713 は竹製ラウが雁首に刺さるように一部遺存している。718 は吸口の胴部分が一段太くなっている。720 は真鍮製の甕型合子である。子亀が乗る甲羅部分が蓋になっている。721 は真鍮製、722、723 は銅製の水滴である。やや大きい上部中央の注入口と端部の細い管状の抽出口が付けられている。724 は銅製の棒状製品である。端部には擬宝珠状の装飾がつく。火箸か？ 725、726 は銅製のヘラ状製品である。725 は湾曲した木の葉状製品で、先端を針状に尖っている。726 は端部がやや巻き込んだように作られる木の葉状製品で、先端を針状に尖らせている。装飾品か？ 727 は羽子板状銅製品で、やや先細りの円筒状の基部が取り付けられている。装飾品か？ 728 は真鍮製、729 は銅製の蓋である。受けが付いている。730 は真鍮製の蓋で、きわめて薄作りである。731 は銅製皿（あるいは碗蓋か？）である。高台内に「極上長光」と浮文されている。732 は棒状木製品の取付金具である。銅製で、表面には菊花のエッチングが確認できる。733 は銅製の鉢である。口縁部には区画内に七宝文が浮文されている。734 は銅製の杓子である。柄には木部に巻くように成形され、固定の釘穴が開けられている。735 ～ 737 は銅製引手である。735 は隅切りの長方形を呈し、座、胴、底の 3 つの部材を組み合わせて作られている。底には流水文がエッチングされている。胴には留具が刺さった状態である。736 は楕円形を呈し、座、胴、底の 3 つの部材を組み合わせて作られている。座には波濤文がエッチングされている。胴上下には留具を刺す孔が開けられている。737 は円形を呈し、座、胴、底が一体に接合されている。座は輪花に成形され、小孔が巡る。座には相対して留具を刺す孔が 2 箇所に開けられている。738 は真鍮製の蝶番である。擬宝珠状の金板に小孔が 4 箇所ずつ開けられている。739 は銅製の隅金具である。他面は欠損している。5 箇所に開けられた小孔には鋲が遺存している。

740 は銅製の固定金具である。欠損のため全体は復元できない。遺存部分に 4 箇所の小孔が開けられ、うち 3 箇所に鋲が遺存している。741、742 は銅製の吊金具である。断面円形のリングに先端が尖った打込金具が取り付けられる。743 は銅製のリングで、断面は円形である。744 は真鍮製の灯心押さえである。輪状にした断面長方形の基部と上に持ち上げた部分は 1 回転ひねっている。745 は銅製はさみ金具である。746 は銅製の引手である。片方の取付部には、木部への打込金具まで遺存している。747 は銅製の吊金具と推定される。実測図右側端部は尖らせている。748 は銅製の吊金具である。基部は小穴を設け、そこに小さなリングを通している。全体の形状は捻りながら J の字状に曲げ、湾曲部より先端を尖らせている。749 は銅製の留金具である。座部は菊花状に象られている。750 は留金具、吊金具などの一部と推定される。詳細は不明である。751 は銅製の持手である。端部が細くなっている。752 は器種不明の銅製品である。753 は銅製の打ち込み式の釘金具の主座である。中央には長方形の孔が開けられている。754、755 は銅製の鋲である。釘部の断面は方形を呈している。756 はボタン状の鉛製品である。器種は不明。表面は白色化している。757 は鉄製の灯心押さえである。断面長方形をしている。758 は鉄製鍋の鍔縁である。錆が顕著である。759 ～ 765 は鉄製の和釘で、759 ～ 761、763、765 は頭巻釘である。766 は鉄製の直角に曲げられた両釘である。

767 ～ 784 はさし状で確認された背面十一波の明和千田新田銭である。767 は重なった状態で出土したが、剥がすことが出来なかったため、3 枚が癒着している。782、784 は錆による腐食のため、状態は不良である。785、786 は古寛永、787 ～ 794 は新寛永である。

石製品（795 ～ 804）

795、796 は硯である。795 は陸、海、縁の成形から近江高島産の硯であろう。陸側裏面には浅くくぼみが付けられている。797 は獅子の摘みが付けられた角印である。印銘は篆書で彫られている。798 は長方形の小型石板である。表は長方形枠内にランダムに筋状の、裏面は横方向と文字のような彫痕が確認できる。完成前に廃棄された未製品と推定される。799 は平棒状の石製品である。器種、用途は不明である。800 は石英製の火打ち石である。稜の一部に敲打痕が確認される。801 は中砥あるいは仕上砥である。使用面は一面のみある。802 は大型の砥石で、石材から中砥であろう。使用面は図中表面と左側面である。上面は砥石切断の際の直刃のノミ痕が確認される。803、804 は七輪である。使用時および二次的な被熱を受けている。

骨・貝製品（805、806）

805 はアワビの貝殻を円形に加工、表面凸部分をフラットに削り、中央を穿孔した貝製品である。用途は不明である。806 は用途不明の小型骨製品である。

ガラス製品（807 ～ 809）

807、808 は鉛ガラスの簪である。表面には鉛分が白色化している。807 は淡黄色、808 は飴色を呈している。809 はガラス瓶の蓋（栓）である。上部は輪花を呈しており、ボトルとの接点は磨りガラスにしている。欧米産か？

SK208（遺構Ⅲ－ 20 図、遺物Ⅳ－ 70 図）

1 はキセルの吸口である。ほぼ完形である。

SD214（遺構Ⅲ－ 23 図、遺物Ⅳ－ 70 図）

1、3 ～ 5 は肥前系磁器の壺・甕で JB-15 に分類される。形状、大きさの違いはあるが、口縁部と胴部の 2 つのパーツから構成される。いずれも口縁部が盤状に大きく開き、3 のみ丸形の胴部が遺存する。いわゆる「唾壺」か。1、3 は色絵、5 は染付、4 は白磁である。1 は口唇部が垂直に小さく立ち上がる。胴部との接合部分まで施釉される。火熱を受け、上絵部分の色調は不明である。3、4 は口縁部が方形を呈す。3 も二次的な火熱を受けるが、上絵付の赤い色は残り、また畳付以外、内面も含め施釉される。4 の口唇部は平滑にされ、口錆が施される。胴部との接合部分も含め、透明釉が施釉される。5 は最も遺存状況が悪いが、同一個体と思われる破片が後述する版築層から 1 点出土している。2 は胴部に三つ葉葵文と花唐草文が交互に施文された染付香炉・火入れで JB-9 に分類される。胴部中程に少なくとも 2 箇所スリットが確認されることから、香炉・火入れと判断した。二次的な火熱を受ける。1 ～ 5 は大橋氏によるといずれも平戸焼磁器の盃台の可能性があり、三つ葉葵文の表現からは 17 世紀末に遡る可能性が高く、年代的には 1680 年代の鶴姫（五代将軍綱吉娘）の資装（嫁入り道具）献上に伴う可能性のあるものだとの指摘を頂いた（大橋 2017）。

6 は丹波系？の壺・甕で TK ？ -15 に分類される。口縁部は完全に折り返され、小さな帯状を呈す。内面と外面の口縁部から頸部付近は自然釉が認められない状況であることから、口縁部に鉢のような別の器種あるいは降灰を防ぐ窯道具を被せ焼成した可能性がある。

SK218（遺構Ⅲ－ 25 図、遺物Ⅳ－ 71 ～ 74 図）

1 ～ 18 は肥前系磁器である。1 ～ 8 は碗で、1 ～ 3 は高台断面形が三角形を呈すもので、1 は JB-1、2、3 は JB-1-c に分類される。1 は染付に口銹、上絵付けが施された碗である。上絵付けには赤、青、黄、緑、黒が用いられ、赤色の上絵には赤で、それ以外には黒色で縁取りされている、いわゆる柿右衛門様式のものである。2 も色絵碗であるが色絵の遺存状況が悪く、赤、青、緑の三色がかろうじて確認できるのみで、1 のような縁取りは未確認である。モチーフは口縁部に注連縄状の文様と、体部に渦を巻く流水文の痕跡が確認できる。3 は染付碗で、高台内には銘の一部と思われる染付による文字が僅かに確認できる。4、5、7 は染付が施された碗で JB-1-d に分類される。4 は口銹が施され、高台内には「大明成化年製」と推測される銘を有す。6 は青磁染付碗で JB-1-u に分類される。8 はやや小振りな染付碗で JB-1-e に分類される。9 ～ 12 は坏で、11 が白磁、他は染付が施される。9、10 は体部丸形で JB-6-a、11、12 は端反形で JB-6-b に分類される。12 の内面には赤色付着物が確認される。ベンガラか？ 13 ～ 15 は染付皿である。13 は南川原窯ノ辻窯の製品で JB-2-d に分類される。絵付は非常に精緻で、高台内には二重角枠渦福銘を有す。14 は高台断面形が三角形を呈すもので JB-2-c に分類される。高台内にはピン痕が 1 箇所遺存する。15 は JB-2-e に分類される。高台脇の釉ムラが顕著である。16 は染付仏飯器で、JB-8-b に分類される。17 は白磁鉢で JB-5-b に分類される。畳付釉は内外ともシャープにケズリ調整されている。18 は色絵油壺で JB-12 に分類される。

19 ～ 26 は陶器である。19 ～ 21 は京都・信楽系碗で、20 は灰釉、他は色絵が施される。19 は半球形碗で TD-1-c に分類される。色絵は青、赤、緑が確認され、無釉の高台内には、小判形に行書で「清□」刻印がある。20 は TD-1 に分類される。21 は平碗で TD-1-h に分類され、高台内に行書「清」の銘を有す。22 は肥前系青緑釉輪禿皿で TB-2-a に分類される。見込み、高台、割れ口部分にまでスス状の付着物が確認できる。23 は瀬戸・美濃系灰釉坏で TC-6 に分類される。24 は京都・信楽系灰釉香炉・火入れで TD-9-b に分類される。削り出し高台であるが、高台脇のケズリ痕が顕著で、その部分が釉飛びしている。口縁部外側に僅かに敲打痕が、口縁部内側に薄い帯状にススが付着する。25 は京都・信楽系軟質施釉の鬢水入れで TD-25 に分類される。型打ち成形で、外面には三重の亀甲紋が口縁直下に巡る。また内面には長軸方向のナデの痕跡が顕著である。26 は瀬戸・美濃系鉄釉壺・甕蓋である。裏側には右回転糸切り痕が遺存する。口縁部には局所的に敲打痕が確認される。

27 ～ 48 は土器である。27 ～ 41 は土器皿で、27、28、30 ～ 32、34、35、38 は DZ-2-a、29、36、37、39 は DZ-2-b、33、40 は DZ-2、41 は DZ-2-d に分類される。27、31、33、34、39、40 は底部に離し糸切り痕が、28 ～ 30、32、35 ～ 38 は左回転糸切り痕が確認される。42、43 は土師質丸底焙烙で DZ-47-a に分類される。44 ～ 46 は塩壺で、44、45 は板作成形、46 は輪積成形である。44 は底部が 2 ピースで成形され、小枠の「泉州麻生」の刻印のあるもので DZ-51-h に分類される。刻印の右側に強く火熱を受けた痕跡がある。45 は底部が 3 ピースで成形され、刻印は不鮮明であるが「御壺塩師堺湊伊織」の刻印のあるもので DZ-51-f に分類される。46 は輪積成形で二重枠「天下一堺ミなと籐左右衛門」の刻印の確認されるもので DZ-51-c に分類される。47、48 は断面凹形を呈す塩壺蓋で DZ-00-c に分類される。凹面には細かい格子状の布目が確認できる。

49、50 は人形・玩具である。49 は肥前系の型押し成形された白磁碗のミニチュアで JB-2001-M に分類される。無釉の底部には縮れが顕著である。50 は江戸在地系土師質の西行で DQ-1109-M2o に分類される。前後型押し成形時の表面のキラが顕著である。開口した底部付近の器厚を薄くするためか横位にケズリ調整した痕跡が確認できる。二次的な火熱を受け、背面には斜めの古い割れ口が確認できるが、割れ口断面はミガキ調整され、その表面は丸味を帯びる。51、52 は瓦である。51 は軒平瓦で、瓦当部分の唐草と子棄文様は江戸式 Kl か。瓦当部分の上辺隅が小さく斜めにカットされている。52 は遺存状態が悪いが、平瓦か。遺存する端部には○とその中央に径 1mm 程の小さい丸が確認される。53 は表面に緑青が確認されるキセルの雁首である。火皿の下には小さな補強帯が確認できる。

SK229（遺構Ⅲ－ 21 ～ 22 図、遺物Ⅳ－ 74 ～ 93 図）

SK229 からは、多量の陶磁器、瓦、金属製品などが出土している。遺物は本遺構を切って構築される SK207 から出土した遺物と遺構間で接合関係を有する。ただし、SK207 出土遺物の多くは二次的な火熱を受けているのに対して、本遺構出土遺物は被熱していないことから、本遺構埋没後 SK207 掘削時に本遺構の埋土と共に SK207 に再埋没した可能性がある。ただし、下記のように含まれている遺物の年代的様相は近似している。

出土している磁器には、肥前系磁器端反碗（JB-1-n）、

湯呑碗（JB-1-o）、瀬戸・美濃系磁器端反碗（JC-1-d）、湯呑碗（JC-1-e）、直線的に開く碗（JC-1-f）、陽刻型皿（JC-2-e）などが含まれており、東大編年Ⅷc期に該当する。

本遺構の年代的下限は安政元（1854）年と判断していいだろう。

磁器（1 ～ 118）

1 は肥前系染付半球碗で、JB-1-f に分類される。胎土はやや灰がかり、呉須もやや黒くくすんでいる。2 ～ 6 は肥前系染付丸碗で、JB-1-e に分類される。胎土は白色で、呉須は鮮青色に発色している。2 は高台内に焼継時のマークと思われる「二」？と赤で書かれている。3 ～ 6 は細線書きで文様が描かれている。5 と 6 は内外面の文様が同じで蓋付き碗と考えられる。7 は中国景徳鎮系の青花端反碗で､JA1-2 に分類される。釉薬は青味がかっている。高台内には判読不能な角枠銘が書かれている。8 ～ 10 は肥前系染付端反碗で、JB-1-n に分類される。胎土は白色で、呉須は鮮青色に発色している。8 の高台は内側が丸く成形している。9 は細線書きで施文されている。10 はやや扁平な器形であるが、こうした器形は近代以降に増加する。11 ～ 27 は瀬戸・美濃系染付端反碗で、JC-1-d に分類される。11 ～ 20、23 ～ 27 は瀬戸・美濃の地呉須、21、22 は輸入呉須を使って施文している。21、22 はいわゆる関西系である。11 の釉薬は白濁し、焼成不良であると考えられる。12、13 は花区画に福禄寿の文字文様、15、16 は捻花区画に草花文様、24、25、27 は表裏面いわゆる蕎麦文様で、同一文様の製品である。27 は高台内に角枠銘が書かれ､また、高く尖るような高台であることから古い段階の端反碗と考えられる。28 ～ 32 は肥前系湯呑碗で、JB-1-o に分類される。28 ～ 30、32 は染付、31 は染付の上に色絵、金彩を施した染錦である。28、31 は高台脇に一段稜を有している。胎土は 31 は白色、その他はやや灰がかっている。呉須はやや黒みかがった青色に発色している。28 のみ内側面に帯文が巡る。31 は高台、口唇部幅がやや広く成形されている。33 ～ 35 は瀬戸・美濃系染付湯呑碗で、JC-1-e に分類される。呉須は鮮青色に発色し、いわゆる関西系である。33、35 の釉薬はやや青がかっている。36、37 はハの字状に開く肥前系染付碗で、JB-1-p に分類される。胎土は白色で、呉須は鮮青色に発色する。36 は角枠銘が書かれている。38 ～ 40 はハの字状に開く瀬戸・美濃系の染付碗で、JC-1-f に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。41 は肥前系染付端反碗で、JB-1-n に分類される。呉須は濃青色に発色する。42 は肥前系染付丸碗で、JB-1-e に分類される。胎土はやや灰色がかっている。見込み中央にはコンニャク印判五弁花が施文されている。43、44 は瀬戸・美濃系染付丸碗で、JC-1-a に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。43 の見込みには「化製」の銘が書かれるが､「成化年製」と推定される。45 は粗製の肥前系染付丸碗で、JB-1-g に分類される。胎土は灰色がかっている。46 と 47 は瀬戸･美濃系染付丸碗で、JC-1-a に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。法量、文様から身と蓋の関係にあると推定される。48 は半球形の瀬戸・美濃系染付丸碗で、JC-1 に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。49 は瀬戸・美濃系染付丸広東碗で、JC-1-c に分類される。呉須は濃青色に発色する地呉須を使っている。

50 ～ 53 は瀬戸・美濃系染付丸形坏で、JC-6-a に分類される。呉須は鮮青色に発色するいわゆる関西系である。50、51 の釉薬はやや青味がかっている。52 の高台内には角枠銘が書かれている。52、53 の畳付は、内側に小さい段が付けられている。54 は肥前系白磁薄手端反坏で、JB-6-c に分類される。55 ～ 62 は瀬戸・美濃系薄手坏で、JC-6-d に分類される。55 ～ 61 は色絵、62 は染付である。色絵は細線で細かく描くいわゆる江戸絵付で、55、60 が青色白玉、59、61 が青色白玉と金彩、その他は上絵あるいは金彩である。56 ～ 58 の口唇部は釉剥ぎしている。59、60 は風景画が描かれ、土産品の可能性が高い。59 は「東都飛鳥山□□」、60 は「東都梅屋鋪」と書かれている。62 の高台は内側に小さい段が付けられ、高台内には角枠銘が書かれている。

63 ～ 65 は肥前系染付輪花皿で JB-2-e に分類される。胎土は白色、呉須は青色に発色している。高台内には、63 が「成化年製」、64、65 が「太明年製」銘が書かれている。64、65 は焼継が確認できる。64、65 は揃いであろう。66 ～ 72 は肥前系の高台高が高い蛇ノ目凹形高台輪花皿で、JB-2-i に分類される。66 ～ 71 が染付、72 が白磁である。66、67 の高台内には「成化年製」銘が書かれ、これらは揃いであろう。68、72 の口唇部には口錆が施される。68、69 の釉薬はやや青味がかっている。70、71 の呉須は鮮青色に発色している。66 と 70 は焼継痕が確認できる。73 は嬉野志田窯の染付皿で、JB-2-p に分類される。周縁部文様は墨弾きが使用されている。高台内には 3 箇所のハリ支えが確認できる。74 ～ 77 は肥前系染付輪花 3 寸皿で、JB-2-e に分類される。76 は胎土が白色で、文様も鮮青色の呉須を用いて丁寧に描かれている。74、76 の口唇部には口錆

が施される。77 の高台内には「成化年製」銘が書かれている。78、79 は瀬戸・美濃系輪高台の丸皿で、JC-2-b に分類される。78 は白磁、79 は染付である。79 は呉須が鮮青色に発色するいわゆる関西系である。80 は蛇ノ目凹形高台の瀬戸・美濃系染付皿で、JC-2-a に分類される。釉薬はやや青味がかり、呉須は地呉須を使っている。81、82 は瀬戸・美濃系型皿で、JC-2-e に分類される。81 は八角形の白磁、82 は四角形の染付である。83 は三田系青磁型皿で、JR-2 に分類される。全体に貫入が入っている。84 は嬉野志田窯の染付輪花大皿で、JB-3-e に分類される。文様は墨弾きを使用している。外側面は志田窯に多い白泥が流れ、高台内には 7 箇所のハリ支えが確認できる。

85 は瀬戸・美濃系染付鉢で、JC-5 に分類される。呉須が鮮青色に発色するいわゆる関西系である。呉須や釉薬の発色、口縁部形状、輪花の成形など、景徳鎮の芙蓉手鉢を正確に写している。86 ～ 88 は肥前系染付鉢で、JB-5-b に分類される。胎土は白色、呉須は鮮青色に発色し、上質な製品に作られている。薄手碗（JB-1-f）の大型品である。86 の高台内遺存部分に「明製」とあり、「大明年製」銘が書かれていたと思われる。89 は三田系青磁型鉢で、JR-5 に分類される。口縁は 6 単位の大きな輪花に成形している。見込みは浮文で草花文が型作りされている。

90 は肥前系染付仏飯器で、JB-8-c に分類される。文様はややラフに描かれている。

91 ～ 93 は肥前系染付丸碗形蓋物で、JB-13-a に分類される。91・92 は一富士二鷹三茄子の縁起文である。93 は見込み中央を円形に釉剥ぎしている。呉須はやや濃青色に発色し、文様は枠線を描いていない。94、95 は肥前系色絵金彩の段重で、JB-13-c に分類される。染付の上から赤、緑、金で上絵付けしている。二次的な被熱を受けている。

96 は肥前系染付筒形合子で、JB-18-b に分類される。胎土はやや灰色がかっている。

97 ～ 100 は肥前系染付丸碗の蓋である。98 は摘み内に「成化年製」銘が書かれている。101 は瀬戸・美濃系染付丸碗の蓋である。釉薬はやや青味がかり、呉須が鮮青色に発色するいわゆる関西系である。102 は肥前系染付広東碗の蓋である。103 ～ 108 は端反碗の蓋である。103 ～ 105、107、108 が肥前系、106 が瀬戸・美濃系である。摘み内の銘は、103 が角枠銘、104 と 105 が「乾」、107 が「成化年製」である。104 の摘み高は低く作られている。106 は瀬戸の地呉須を使って文様を描いている。109 ～ 114、116 は肥前系染付蓋物の蓋である。109、114 はボタン状、110 ～ 113 と 116 は橋状の摘みが付けられている。109、110 の胎土は白色、呉須は鮮青色に発色し、文様も丁寧に描かれている。111 は焼継と焼継屋の印がある。115、117、118 は肥前系染付合子の蓋である。115 は蓋受けが付くタイプ、117、118 は覆蓋のタイプである。117 の胎土は白色、呉須は鮮青色に発色し、文様も丁寧に描かれている。

陶器（119 ～ 222）

119 は瀬戸・美濃系刷毛目碗で、TC-1-s に分類される。丸碗タイプで、高台脇は面取りされていない。120 は瀬戸・美濃系刷毛目碗で、TC-1-z に分類される。見込みは白土を塗布した上に施釉している。梅花折枝文なども描かれる端反小碗のバリエーションと推定される。121 は瀬戸・美濃系灰釉杉形碗で、TC-1-w に分類される。遺存部分には若杉文は描かれていない。122 は京都・信楽系色絵筒形碗で、TD-1-j に分類される。胎土は堅緻で、畳付外周は面取りされている。器面には赤、緑で花文が描かれる。内面中位には薄く横線が確認できる。把手部分が欠損した柄杓の可能性もある。123 は腰の張る大振りの大堀相馬系灰釉鉄絵碗で、TJ-1 に分類される。器面と見込みには駒絵が描かれている。高台は右回転の渦巻高台で、畳付外周を面取りしている。

124、125 は京都・信楽系の内面灰釉、外面無釉の坏で、TD-6 に分類される。胎土は堅緻で、124 の畳付外周は面取りされている。器面下位に茶色の吹きつけを行っている。酒坏あるいは煎茶碗か？

126 は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵染付のいわゆる石皿で、TC-2-f に分類される。鉄絵は濃い発色をしている。見込みにはトチンの痕跡が確認される。127 は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵のいわゆる馬ノ目皿で、TC-2-g に分類される。渦巻きは 5 単位か？見込みにはトチンの痕跡が確認される。128、129 は櫛目のない灰釉油皿で、TD-2-b に分類される。見込みには 3 箇所のピン痕が確認できる。129 の内面の一部に緑釉が掛けられている。129 の口縁部には灯火の痕跡が付着している。

130 は生産地不明の軟質施釉鉢（蓋付きの可能性もある）で、TZ-5 に分類される。表面は緑色の低火度釉が掛けられているが、変質のため元の色調は不明である。高台は 2 本を下駄歯状に並行して貼り付けられている。胎土は軟質で白色砂粒を含み、褐色から灰褐色を呈している。板作りであろう。

131 ～ 162 は底部無釉の瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で、TC-10-c に分類される。全て胴部に列点状の釘書きが付けられている。釘書きは、131 ～ 133、135 ～

138、140 ～ 154 が菱井筒内「上」、155 は「二△」？、156、157 は「三川」？、158 は「内田ヤ」（裏面○に不明）、159 は「大池」、160 は「∧三」とその対面に「いセ由」？、139 は菱井筒内「上」？、134、161、162 は不明である。141 は底部に「極上」、142 は「一」と墨書されている。131、133、134、138 ～ 149、151、154 ～ 157、159、161、162 は破損もしていない完形である。163 ～ 176 は瀬戸・美濃系灰釉五合徳利で、TC-10-d に分類される。全ての胴部に列点状の釘書きが付けられている。釘書きは、163 ～ 171 は菱井筒内「上」、172 は「∧三」とその対面に「いセ由」、173 は「｜｜」の下に「上」、174 は違山形の下に「加」、175 は「∧」の下に「イ」、176 は不明である。163 ～ 165、167、169、170、173、174 は口唇部がわずかに欠損しているだけでほぼ完形、166 は破損もしていない完形である。177 ～ 187 は瀬戸・美濃系灰釉一升徳利で、TC-10-e に分類される。全ての胴部に列点状の釘書きが付けられている。釘書きは、177、179、181 が菱井筒内「上」、178 が○に「万」とその対面に「二」、180 は「八キ」とその対面に「小」、182 は「万」の対面に「八」、183、186 は「万」、184、187 は「万八」、185 は「∧十口」？と書かれている。179 は口唇部がわずかに欠損しているだけでほぼ完形、180、181 は破損もしていない完形である。177 の頸部は打ち欠かれて調整されている。188 は瀬戸・美濃系柿釉徳利で、TC-10-g に分類される。胴部下位に稜と肩部に段を有し、胴部に相対して窪ませている。底部は施釉後釉を拭き取っている。189 は薄手の布袋徳利で、TZ-10 に分類される。備前あるいは常滑か？胴部中位に稜を設け、稜より上を糸目状の連続沈線と中央に布袋を貼り付けた 3 箇所の窪みを付けている。器面は鉄釉が施され、肩部と胴部の一部が藻掛け状になっている。底部は右回転の回転糸切り離し痕が残る。内面は無釉である。

190、191 は瀬戸・美濃系柿釉半胴甕で、TC-15-a に分類される。胴部上位に 2 条の沈線と下端に稜を有する。釉は内面と器面胴部下端まで施される。190 の胎土は鉄分が斑状に吹き出し、赤津の製品と推定される。191 は口縁部にトチン痕跡がある。190、191 とも底部中央を底裏から敲いて穿孔している。

192 は京都・信楽系の小型鉄釉植木鉢で、TD-21 に分類される。釉は内面上位と外面下位まで施されている。底部は右回転の糸切り離し痕が確認できる。底部中央は穿孔されている。

193、194 は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢で、TC-23-b に分類される。193 は内面上位に返しが付き、注口は口縁を上から切り欠いて取り付けられている。釉は器面高台脇から内面に掛けられている。畳付外周は面取りしている。見込みにはピン痕が確認される。194 は注口は口縁を上から切り欠いて取り付けられている。釉は器面高台脇から内面に掛けられている。見込みにはトチン痕が確認される。二次的な被熱を受けている。

195、196 は堺系の焼締擂鉢で、TL-29 に分類される。縁帯の張り出しはやや丸みを帯びている。擂目は体部下端から引き上げられ、口縁部で弱く揃えられている。見込み中央は 195 は 3 条、196 は 2 条付けられている。196 は見込み、底部外周に焼台の痕跡が明瞭に残る。

197 は瀬戸・美濃系灰釉餌入れで、TC-30 に分類される。リング状の把手が付くと思われるが、欠損している。底部は外周面取りされ、糸切りは消されている。

198 は京都・信楽系の灰釉鉄絵の柄杓で、TD-32 に分類される。高台外周は面取りされている。内面中央には鉄絵で横位に圏線が入る。

199 は瀬戸・美濃系の柿釉手付鍋で、TC-33 に分類される。釉は内面と外面体部下位まで施されている。体部下端無釉部には 3 箇所に脚が取り付けられている。見込みには 5 箇所のピン痕が確認できる。底部は使用時のススが付着している。

200 ～ 202 は京都・信楽系脚付きの灰釉油受け皿で、TD-40-a に分類される。胎土は堅緻な淡黄色である。脚部外周は面取りされている。受けの 1 箇所は半月状に切り込まれている。203、204 は京都・信楽系の灰釉油受け皿で、TD-40-b に分類される。胎土は堅緻な灰白色を呈する。受けの 1 箇所は半月状に切り込まれている。

205 は生産地不明の青緑釉乱掛けの行平鍋で、TZ-42 に分類される。体部は幅広の連続したシノギを入れ、青緑釉を横位に乱掛けしている。把手は型抜きしたものを貼り合わせている。注口は体部上位を逆かまぼこ状にくり貫き、取り付けられている。見込みにはピン痕が確認される。底部は高台状に作られるが、一部をアーチ状にくりを入れている。底部は使用時のススが付着している。206 は生産地不明の灰釉行平鍋で、TZ-42-a に分類される。注口は体部上位を逆かまぼこ状にくり貫き、取り付けられている。見込みにはピン痕が確認される。底部は使用時のススが付着している。

207 は瀬戸・美濃系鉄釉ひょうそくで、TC-44-a に分類される。底部は回転糸切り離し、中央には燭台固定のため棒状工具による刺突が認められる。208 は瀬戸・美濃系鉄釉ひょうそくで、TC-44 に分類される。底部は右回転糸切り離し、中央には燭台固定のため棒状工具による刺突が認められる。

209 は瀬戸・美濃系灰釉壺の蓋である。橋状把手が付けられている。裏は回転糸切り離し痕が観察される。210 は瀬戸・美濃系灰釉合子蓋である。内面は無釉である。211、212 は生産地不明のいわゆる青土瓶の蓋である。胎土は堅緻な灰白色を呈する。213 は生産地不明の藁灰釉土瓶蓋である。胎土はやや粗く、明褐色を呈する。214 は生産地不明の三彩土瓶あるいは急須の蓋である。胎土は堅緻で、暗灰色を呈する。器面は白土を塗布し、鉄絵に灰釉と緑釉を散らしている。215 は薩摩苗代川系の鉄釉土瓶蓋である。所々に鉄分が斑点状に浮いている。216、217 は生産地不明の灰釉土瓶の落とし蓋タイプの蓋である。胎土は堅緻で灰白色を呈する。摘みは 216 が菊花状に、217 が円盤を折り曲げた様に貼り付けられる。218 は生産地不明の鉄釉イッチンの行平鍋蓋である。二次的な被熱を受けている。器面にはトビガンナ状の連続文様が付けられており、鉄釉と蛇ノ目状を呈している。ボタン状の摘みが付き、内面鉄釉が施される。219 は京都・信楽系の灰釉錆絵土瓶の蓋で、ある。胎土は堅緻で、淡黄白色を呈する。220 は生産地不明の白土・鉄絵急須蓋である。胎土は堅緻で、暗灰色を呈し、1 箇所に空気抜きの孔が穿たれている。221 は生産地不明の鉄釉土瓶蓋である。器面はトビガンナ状の連続文の上から鉄釉を施している。摘みは菊花状に成形している。222 は生産地不明の白土に灰釉緑釉掛け分け土瓶蓋である。

土器（223 ～ 257）

223 は左回転糸切りのかわらけで、DZ-2 に分類される。いわゆる江戸式の特徴である底部外周の折り返し、見込み底体間の窪んだ調整痕は認められない。器厚はやや厚い。

224 は腰が膨らむ器形の小鉢である。DZ-5 に分類され、底部は左回転の糸切り離しである。

225 は硬質瓦質火鉢で、DZ-31-d に分類される。外面は丁寧にミガキを施した後、細かい不連続の刺突文を胴部に施し、地文としている。内面上位には瓶掛け状の突起が貼り付けた痕跡が確認される。器厚はやや薄い。226 は土師質の火消壺で、DZ-31-i に分類される。底部には断面逆台形状のやや小型の脚を付け、外周は面取りされている。239 は土師質の風炉で、DZ-31-h に分類される。口縁部、胴部、脚が別パーツで接合されている。胴部には大きな風口とその脇に円形の孔が開けられている。肩部と風口縁部に丁寧にミガキを施し、胴部は細かい不連続の刺突文を施して地文としている。内底面は使用時の被熱の痕跡が確認できる。240 は土師質の風炉で、DZ-31-h に分類される。底部外周と風口縁は丁寧にミガキを施し、胴部は研磨した後に細かい不連続の刺突文を施して地文としている。内底面には輪状の溶着痕が確認されるが、内部施設のものか焼成時の積み重ねによるものか不明である。胴部中位以上は欠損しているが、欠損部は打ち欠いて二次的な調整をしている。

227、228 は施釉の油受け皿である。227 は脚付きで DZ-40-a、228 は脚なしで DZ-40-b に分類される。227 は脚内面は無釉、228 は全釉である。

229、230 は透明釉のひょうそくで、DZ-44-b である。中央の突起部分には灯火の痕跡が認められる。

231 は土師質のほうろくで、DZ-47-a に分類される。体部は短く、丸底の底部にはちぢれが認められる。

232 は硬質瓦質七輪で、DZ-48-a に分類される。内部施設は付属しない。内側に折れた口唇部と外側に張り出した口縁部表面は丁寧に研磨され、胴部はトビガンナ状の連続文様帯と研磨帯とが交互に割り付けられる。胴部中位には風口が開けられている。233 は瓦質七輪で、DZ-48-a に分類される。内部施設は付属しない。器面には全面にトビガンナ状の連続文様が施される。底部外側には取り付けられた脚が剥落した痕跡が確認される。232 とは器厚が異なることから、別個体と判断される。234 は硬質瓦質七輪で、DZ-48 に分類される。内側に折れた口唇部と外側に張り出した口縁部表面は丁寧に研磨され、それ以下の胴部は全面にトビガンナ状の連続文様が施される。235 は土師質七輪の風口である。底面は図上方からのケズリ、他の器面はナデが施される。底面は火熱によって一部が白化している。236、237 は七輪のさな（目皿）である。236 は灰落としの小孔が伴うタイプで、237 は別部品で小孔を持つ板と組み合わせるタイプである。236 の器面中位は横方向のやや深い沈線が巡る。236 と 237 の内面は使用時の二次的な火熱によって白化している。

238 は涼炉の内部品で、DZ-49 に分類される。胎土は淡褐色を呈している。風口がついた円筒部の上部に円形の穿孔を持つ鉢状のものが接合される。接合部にはさな受けが付いている。内面は使用時の火熱を受けている。

241 ～ 247 は無印ロクロ成形の塩壺で、DZ-51-w に分類される。241 は糸切り痕が確認できず、消されている可能性がある。その他は左回転の糸切り離し痕が認められる。248 ～ 256 はロクロ成形の塩壺の蓋で、DZ-00-d に分類される。249、254、256 の内面には布目痕が確認される。250 ～ 252 は内面のかかりが痕跡的に残っている。257 は硬質瓦質の火消壺蓋である。器面は細かい不連続の刺突文を施して地文としている。

人形・玩具（258 ～ 262）

258 は恵比寿で DZ_1102_M2f に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で中実である。胎土は橙褐色だが表面は黒色で光沢があり、堅緻である。259 は子ども虚無僧で DD_1115_M2f に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で中空。胎土は淡黄色で緻密。小袖を朱色で彩色している。無釉。260 は蓋で DQ_2013_M に分類される。型押し成形で胎土は橙褐色。261、262 は泥面子で DQ_4006_M に分類される。型抜き成形で胎土は橙褐色。261 は鶴、262 はサイコロ。

瓦（263 ～ 271）

263 ～ 265 は左巻きの連珠三つ巴文軒丸瓦である。263 は巴文と連珠の間に圏線が巡る A 類、264、265 は圏線を巡らさない C 類である。連珠の数は、263 が 14（推定）、264 が 13、265 が 14 である。263 は円筒半裁の体部で、玉縁は短く、頂部には釘孔が開けられている。266 ～ 269 は江戸式の軒桟瓦である。266 は中心飾りが欠損しているが、唐草と子葉は Kg か？。267 はⅢ Lj 類である。268 はⅡ Lj 類、269 はⅢ Lj 類である。270 は平瓦である。271 は覆輪付き鬼瓦である。頭には文様が貼り付けられていない。裏面には取り付け用の把手が付いている。吹き流し部には漆喰が付着している。

金属製品（272 ～ 279）

272 は銅製の火箸である。基部は球状になっている。先端は欠損している。273 は銅製の吊り金具である。基部は輪状に曲げられている。274、275 は鉄釘である。274 は頭巻釘である。276 は鉄製の丸鍬である。錆が顕著である。277 は鉄製のさなである。錆が顕著である。278 は碗形滓である。279 は寛永通宝で、背面十一波の明和千田新田銭である。

石製品（280 ～ 282）

280、281 は陸、海、縁の成形から近江高島産の硯である。陸側裏面には浅い窪みが付けられている。280 は、窪みに「□井保三郎」と刻書されている。281 は石の特徴から高嶋虎班石と推定される。側縁には墨が付着している。282 は石英製の火打石である。火打金で打った稜が潰れている。

ガラス製品（283 ～ 287）

283 は鉛ガラスの簪である。淡黄色を呈しており、表面には鉛分が白色化している。284、285 はおはじきで、青味がかった透明なガラスである。286 は器種不明の黒色鉛ガラス製品である。表面は銀化している。287 は器種不明の S 字状に曲がる透明感のある鉛ガラス製品である。表面は銀化している。

SK232（遺構Ⅲ－ 24 図、遺物Ⅳ－ 93 図）

1 はキセルの雁首である。頸部に敲打痕が確認できる。2 は軒桟瓦で、軒丸部分は三つ巴紋 C に、軒平部分は江戸式Ⅰ 2Ja に分類される。

SD234（遺構Ⅲ－ 24 図、遺物Ⅳ－ 93 図）

1 は軒丸部分が欠損しているが、その割れ口の状況から軒桟瓦と推測される。遺存する軒平部分の文様は江戸式Ⅳ Ha に分類される。文様の笵の彫りが深く、全体的に線が太い。

SK258（遺構Ⅲ－ 21 ～ 22 図、遺物Ⅳ－ 93 ～ 95 図）

1、2 は瀬戸・美濃系染付端反碗で、JC-1-d に分類される。1 は不明字銘が書かれている。呉須は瀬戸・美濃の地呉須を使っている。3、4 は瀬戸・美濃系染付湯呑碗で、JC-1-e に分類される。呉須は瀬戸・美濃の地呉須を使っている。4 の釉薬は焼成不良で透明になっていない。5 は肥前系白磁小碗で、JB-1 に分類される。胎土は白色である。6 は肥前系白磁薄手坏で、JB-6-c に分類される。7 は肥前系染付輪花皿で JB-2-q に分類される。口唇部には口銹が施されている。焼成はやや不良で、器面全体に貫入が入っている。8 は蛇ノ目凹形高台の肥前系染付鉢で JB-5-d に分類される。胎土はやや灰がかっており、呉須はやや黒ずんでいる。焼成時に温度の上がりすぎで、呉須が流れている。高台内には昆虫文が描かれている。9 は肥前系染付丸碗あるいは望料碗の蓋である。10 は瀬戸･美濃系色絵碗の蓋である。呉須、赤、青、緑で絵付けられている。

11 は京都・信楽系灰釉端反碗で、TD-1-g に分類される。高台脇から底部は無釉で、畳付外周は面取りされている。12 は瀬戸･美濃系柿釉皿で、TC-2-o に分類される。13 は底部無釉の瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で、TC-10-c に分類される。欠損のため判読できないが、胴部には列点状の釘書きで「□□キ」と彫られている。内面は無釉である。14 は瀬戸・美濃系灰釉一升徳利で、TC-10-e に分類される。欠損のため判読できないが、胴部には列点状の釘書きで「三□」と彫られている。内面は灰釉が化粧掛けされている。15 は生産地不明の鉄釉鉢で、TZ-5 に分類される。胴部下位から底部にかけて無釉である。胎土は比較的堅緻で、濃茶色を呈している。底部には楕円内「柳原」の刻印が押されている。独特の「柳」の字体は、久留米藩 9 代藩主有馬頼徳の御庭焼である柳原焼と推定される。16 は瀬戸・美濃系長石釉餌入れで、TC-30 に分類される。底部脇には稜を作り出し、白濁した透明感の無い釉が施されている。体部上位に小型の輪

状把手が付けられる。底面は糸切りを消している。17は瀬戸・美濃系柿釉水注の蓋である。菊花状の摘みが付くが、小型で機能しない。内面無釉である。18は生産地不明の落とし蓋タイプの柿釉土瓶蓋である。内面無釉である。

19は江戸式のかわらけで、DZ-2-bに分類される。左回転の糸切り痕、内面底体境の凹み、底部脇のいわゆる折り返しなどの特徴が看取される。20は透明釉が施される油受け皿で、DZ-40-aに分類される。胎土は赤褐色を呈する。

21、22は泥面子でDQ_4006_Mに分類される。型押し成形で胎土は橙褐色。21は大黒で、22は恵比寿。23は七輪でDQ_2014_Mに分類される。火皿と胴部は別作り。火皿の三徳は貼り付け、六角形の胴部は前後2枚の型合わせ成形で、風向は刳り抜き。各面に植物が陽刻されている。胎土は橙褐色で緻密。24は泥面子でDQ_4006_Mに分類される。型抜き成形で胎土は橙褐色、文様は三巴。

25、26は江戸式の軒桟瓦である。軒平部の文様は、25がⅡLj類、26が中央飾りは欠損しているが、唐草と子葉はLj類である。27は平瓦、28は桟瓦である。29は鬼瓦で、横に付く蕨手である。

30～36はキセルの雁首、37～39は吸口である。雁首はほぼ脂返しの付かない新しいタイプである。30、36、39はラウの竹が遺存している。全てに全面に錆が浮いている。40は銅製小柄である。木口には錆びた小刀部の鉄が確認される。沈線文様が彫金されている。41は銅製の吊り金具か？42は銅製の襟止めである。43は銅製の杓子である。木部がわずかに遺存している。44は古寛永通宝である。遺存状態は良好である。

45は碁石である。扁平で、表裏均等に成形されている。

46は鉛ガラスの簪である。器面は鉛分が白化している。47は色調は鮮かな水色でガラス製の簪である。

SX260（遺構Ⅲ－26図、遺物Ⅳ－96図）

1はキセル吸口である。全体に緑青が葺き、中にラウが遺存している。ラウは竹製か。

SE261（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－96図）

1～5は肥前系磁器である。1、2は高台断面が三角形を呈す染付碗でJB-1-cに分類される。ともに高台内に1は「宣徳年製」、2は「宣明」の銘を有す。3は染付磁器皿でJB-2-cに分類される。畳付は内外とも釉がシャープに削り取られ、体部には釉下に横位のケズリ痕が遺存する。4は白磁坏でJB-6-bに分類される。高台付近の釉飛びが顕著。5は瑠璃釉が施釉された蓋物蓋と推測される。6～9は陶器である。6は肥前系のいわゆる呉器手碗でTB-1-aに分類される。畳付のケズリ調整が雑である。7は瀬戸・美濃系灰釉碗でTC-1-aaに分類される。8、9は京都・信楽系で8は丸碗でTD-1-c、9は僅かに残る体部立ち上がりから平碗と推測され、TD-1-hに分類される。ともに内外面に透明釉が施釉される。高台内に8は行書で「清」、9は小判形内に行書で「清閑寺」の刻印が確認できる。10、11は塩壺の身と蓋であるが、セットか否かは不明。10は輪積成形で、二重角枠「天下一堺ミなと藤左衛門」の刻印があるものでDZ-51-cに、11は断面ドーム形の蓋でDZ-00-cに分類される。ともに表面には不定方向にナデの痕跡が認められる。

SD264（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－96図）

1は軒桟あるいは軒平瓦であり、江戸式に分類される。遺存状況が悪いが、中心飾りと唐草部分はⅣLに分類されるものか。2は新寛永通宝である。

SX267（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－97～101図）

1～42は磁器で、14、33が景徳鎮窯系、他はすべて肥前系である。1～18は碗である。1は高台断面が三角形を呈す染付碗でJB-1-cに分類される。見込みにも僅かに染付による文様が遺存する。2～4は染付半球形椀でJB-1-fに分類される。いずれも器高が低く、立ち上がりが内傾気味の後出的様相を呈す。5、6はいわゆるくらわんか碗で、5は染付、6は白磁でJB-1-gに分類される。7～10はいわゆる染付小広東碗であり、JB-1-iに分類される。9、10は器高、口径ともに通常の小広東碗より小形のものである。11は染付筒形碗でJB-1-lに分類される。器高が低く、立ち上がりが内傾する後出的様相を呈す。見込みには潰れたコンニャク印判による五弁花文が施される。12はいわゆる染付広東碗でJB-1-mに分類される。13は高台が外側にハの字状に開く、いわゆる染付望料碗でJB-1-qに分類される。染付には濃淡のムラが目立つ。14は景徳鎮窯系の粉彩が施された碗である。JA1-1。外面全体が淡い桃色、その下に赤で唐草のような絵付が確認される。高台内には呉須で「乾隆年製」角枠銘を有す。15は染付端反形碗でJB-1-nに分類される。器厚が薄く、絵付も精緻なものである。16は器形はいわゆる小広東碗であるが、畳付が幅広高台を有す。JB-1に分類される。17は梅寿文が施された染付碗でJB-1-vに分類される。高台内には記号のような銘を有す。18は白磁碗でJB-1に分類される。

器形、外面のシャープなケズリが見られるなど、漆器の平皿を模したものか。19、20 は坏である。19 は染付半球形坏で JB-6-f に、20 は白磁坏で JB-6 に分類される。20 は二次的な火熱を受ける。21 は輪高台の小型白磁猪口で JB-7-b に分類される。22、23 は蛇ノ目凹形高台を有す染付皿・平鉢である。22 は高台が高いもので JB-2-i に分類される。蛇ノ目部分には輪状に砂粒が付着する。23 は高台が低いもので JB-2-j に分類される。24 は染付大皿・平鉢で JB-3-b に分類される。高台内にはピン痕が 2 箇所遺存し、二重角枠の「寛政年製」銘を有す。小さい方の破片のみに二次的な火熱の痕跡と焼継痕跡が確認される。25 は染付半球形鉢で JB-5-b に分類される。26 は染付仏飯器で JB-8-c に分類される。絵付はコンニャク印判と手描きを併用している。27 は染付猪口で JB-7-b に分類される。28 は鶴首の染付御神酒徳利で JB-11-b に分類される。29 は染付油壺で JB-12 に分類される。30 ～ 32 は染付蓋物で、30 が丸形で JB-13-a、31 は筒形で JB-13-b、32 は段重で JB-13-c に分類される。32 の底部合わせ目は無釉にされ、細かい砂粒が付着する。33 は青花碗の蓋で、摘み端部外側がシャープに削られる。34、35 は染付丸碗の蓋である。34 は二次的な火熱を受ける。36 は染付広東碗の蓋で、摘み内に「大明年製」銘を有す。37 ～ 39 は染付蓋物蓋である。40 は染付合子蓋である。41 は白磁壺・甕蓋である。42 は白磁の被せ式蓋で、二次的な火熱を受ける。

43 ～ 69 は陶器である。43 ～ 46 は碗、43 ～ 45 は瀬戸・美濃系である。43 はいわゆる柳茶碗で TC-1-g、44 はいわゆる鎧茶碗で TC-1-r、45 はいわゆる太白手の丸碗で TC-1-m に分類される。46 は京都・信楽系灰釉碗で TD-1-g に分類される。47 は産地不明の坏で TZ-6 である。胎土は緻密で灰色を呈す。畳付以外の外面は白化粧、透明釉が施釉されるが、内面は無釉である。口縁が小さく外反し、器形的には坏に近い。48 ～ 53 は皿・平鉢である。48 ～ 52 は瀬戸・美濃系で、48、49 はいわゆる石皿で TC-2-f、50 はいわゆる馬ノ目皿で TC-2-g、51、52 は鉄釉丸皿で TC-2-o に分類される。48、49 は同じ石皿でも口縁形状が異なる。ともに見込みにはトチン痕が残り、48 は径 2cm 弱のものが 1 箇所、49 は径 5mm ほどのものが 5 箇所遺存する。49 のみ高台内に墨書痕跡が認められるが、判読できない。50 の見込みにもトチン痕が 3 箇所遺存し、高台内には墨書が遺存する。51 は見込みに、52 は底部に熔着痕が残る。53 はやや幅広の輪高台を有す京都・信楽系色絵皿で TD-2-c に分類される。54 は瀬戸・美濃系片口鉢で TC-23-b に分類される。見込みには最大径 6cm ほど円盤状の拭き取りと、その周囲に 2 箇所のトチン痕が残る。55、56 は瀬戸・美濃系二合半灰釉徳利で、55 は TC-10-a、56 は TC-10-c に分類される。ともに列点状の釘書きが施されるが、55 は 2 箇所に施される。57、58 は瀬戸・美濃系灰釉筒形蓋物で TC-13 に分類される。高台、受け部とともに、内面中央付近が円形に無釉にされる。59 は瀬戸・美濃系灰釉餌入れで TC-30 に分類される。把手が 1 箇所とれた痕跡と、底部には右回転糸切り痕跡が残る。60 は瀬戸・美濃系錆釉油受け皿で TC-40-c に分類される。61 は瀬戸・美濃系鉄釉脚付ひょうそくで TC-44-a に分類される。底部には右回転糸切り痕が残る。タール状のものが灯芯部分と底部に付着する。62 は瀬戸・美濃系灰釉こね鉢で TC-5-l に分類される。内面に径 4 ～ 5cm の団子状トチン痕が残る。63 ～ 69 は蓋で、63 は瀬戸・美濃系灰釉水注蓋、64 は萩系藁灰釉碗蓋、65 は薩摩系鉄釉土瓶蓋、66 ～ 68 は土瓶蓋、69 は青土瓶蓋である。63 の外面にはピンが 2 箇所残る。69 の裏側は畳付以外施釉される。

70 ～ 80 は土器である。70 ～ 72 は土器皿で、70 のみ口縁部に灯芯痕が確認できる。70 は腰折れ状痕があるもので DZ-2、71 は底部平滑に成形された上製かわらけで DZ-2-d、72 は透明釉が施釉されたもので DZ-2-h に分類される。70 の底部には右回転糸切り痕が残る。71 の見込みには内ぐもりが 1 箇所認められる。73 は 3 足を有す土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。内側面に縦位の指頭圧痕が確認できる。74 は透明釉が施釉された油受け皿で DZ-40-a に分類される。灯芯痕はアーチ状のスリット付近の受け部にわずかに確認できる。75、76 は透明釉が施釉されたひょうそくで、ともに DZ-44-b に分類されるが、両者は灯芯部のスリットの入れ方が異なり、75 は灯芯途中を逆三角形に、76 は灯芯上端から箱形にスリットが入れられる。77 ～ 80 は塩壺身と蓋である。77 は板作成形で DZ-51、78 はロクロ成形筒形無印のもので DZ-51-w に、79 は断面凹形を呈す蓋で DZ-00-c、80 は断面逆台形を呈す蓋で DZ-00-d に分類される。77 の底部には外側から粘土塊で蓋をしたような痕跡が残る。78 の底部には左回転糸切り痕が残る。80 は二次的な火熱を受け赤色化している。

81 ～ 85 は瓦で、81 は軒丸、82、84 は軒桟、83 は軒桟あるいは軒平、85 は平瓦である。81、83 は瓦当文様から連珠三つ巴文 C に、82 は軒丸部分の瓦当文様が三つ巴紋 C に、84 は軒平部分の瓦当文様から江戸式 I La に分類される。85 には四角に「橋藤」の刻印がみられる。86 は新寛永である。87 は粘板岩製の硯である。

SD268（遺構Ⅲ－27図、遺物Ⅳ－101図）

1は瀬戸・美濃系陶器碗のいわゆる拳骨茶碗でTC-1-pである。畳付に熔着が確認されるが、その熔着の盛り上がりを削り落とすような二次調整が認められる。2は瀬戸・美濃系陶器二合半灰釉徳利でTC-10-cに分類される。3は鉄釉土瓶蓋である。4は軒桟瓦で瓦当文様は江戸式ⅢＫｊに分類される。

SK275（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－101～102図）

1は瀬戸・美濃系染付磁器の湯呑碗でJC-1-eに分類される。染付されたコバルトが器面より盛り上がる。2は肥前系染付磁器の蛇ノ目凹形高台を有す高台高の低い皿・平鉢でJB-2-jに分類される。見込みには雑な手描き五弁花文が施される。3は産地不明の陶器碗でTZ-1に分類される。胎土は比較的緻密で、うすい橙色を呈す。畳付脇は小さく面取りされ、見込みには小さな目跡が3箇所認められる。京都・信楽系陶器碗か。4は板作成形塩壺で「泉湊伊織」の刻印を有すものでDZ-51-gに分類される。内面にはわずかに粗い布目が認められる。底部外側には粘土を押し込み平滑にした痕跡、内側には盛り上がった粘土塊が確認される。5は常滑系甕でTG-15に分類される。口唇部1箇所に焼成時重ね積みした際の粘土塊が付着し、内面には指頭圧痕が僅かに確認される。6、7は軒桟瓦と思われる。6の軒平部分の瓦当文様は江戸式で、軒丸部分の瓦当文様は三つ巴紋Cに分類される。7の軒丸部分の瓦当文様は連珠三つ巴紋Cに分類される。

SK278（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－102図）

1、2は肥前系染付磁器で、1は皿・平鉢でJB-2-e、2は段重でJB-13-cに分類される。1の高台内には「成化年製」銘を有す。畳付に白色のアルミナ砂がわずかに遺存する。3、5は瀬戸・美濃系陶器で、3は鉄釉油皿でTC-2-o、5は漆黒釉ひょうそくでTC-44-aに分類される。3の見込み、底部には輪状の熔着痕が認められる。5の底部には右回転糸切り痕が遺存する。4は産地不明の軟質施釉行平鍋でTZ-42-dに分類される。把手表面に爪状のもので数箇所浅く窪めたような痕跡が確認される。6は軒丸瓦で瓦当文様は連珠三つ巴紋Cに分類される。

SP299（遺構Ⅲ－15図、遺物Ⅳ－102図）

1は貝柄杓である。片側に二次的な穿孔が5箇所外から内側へ穿孔されている。

SP310（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－102図）

1はガラス製の試薬瓶か。全体的には透明なガラスであるが、口縁部直下から頸部付近はそれが白色になるほど擦った痕跡が認められることから、栓のようなものがあった可能性が高い。

SU360（遺構Ⅲ－28図、遺物Ⅳ－103～104図）

1、2は肥前系磁器で、1は染付碗でJB-1-uに分類される。畳付内側に砂粒が付着する。2は口縁部が欠損しているが、内面が施釉されていることから青磁蓋物か。JB-13。3は板作成形2ピースの大枠「泉州麻生」の刻印を有す塩壺で、DZ-51-iに分類される。底部内面に、内側から外側へ粘土塊を押し込んだ状況が看取される。外面には二次的な火熱が看取される。4～12は鉛インゴットである。これらはSU360の坑底直上から112個体（総重量約20kg）まとまって出土したものの一部である。表面は酸化し、白色化しているが、ICP-MS分析やPIXE分析した結果、高純度鉛であることが明らかになった（原2002、「研究編」に再掲）。4～8のような単独のものが最も多いが、9～12のように2個ないし3個が端部で連結したものも認められる。平面形状は両端部が幅広く、中央部は括れ、断面形はかまぼこ形を呈す。いずれも長さ22cm前後（7寸2分前後）を測るが、厚さを観察すると全て一方の端部付近の厚さが全体よりやや薄い。

SP389（遺構Ⅲ－31図、遺物Ⅳ－104図）

1は軒桟瓦である。軒平部分の1/3ほどが遺存し、その部分の瓦当文様をみると江戸式と判断される。

SK477（遺構Ⅲ－31図、遺物Ⅳ－104～105図）

1～5は肥前系磁器である。1、2は碗で、1はいわゆるくらわか碗でJB-1-g、2は青磁染付の朝顔形碗でJB-1-rに分類される。1の高台内には崩れた「大明年製」銘を有す。2の見込みには手描き五弁花文、高台内には二重角枠渦福銘を有す。3、4は染付皿・平鉢で、3はJB-2-g、4はJB-2-oに分類される。ともに高台内に銘を有すが、3は欠損部にかかり判然とせず、4は二重角枠渦福銘である。3の畳付には砂粒が付着する。5は染付大型長頸瓶でJB-10-aに分類される。高台脇には線書きの釘書きが認められる。6～9は陶器である。6、7は京都・信楽系陶器のいわゆる小杉碗でTD-1-dに分類される。6の方がやや大型で、若杉文が比較的しっかりと鉄と呉須で描かれており、7よりやや古手の様相を呈す。8、9は瀬戸・美濃系灰釉徳利で、8は容量が二合半のものでTC-10、9は五合でTC-10-dに分類される。

ともに釘書きは線書きで、8は2箇所に施されているが文字は判然としない。9の線書きは8より細いものであるが、文字は同じく判然としない。10は江戸在地系土器の七輪部品で、いわゆるさなである。浅いU字状の削り込みが1箇所残る。

SK499（遺構Ⅲ－31図、遺物Ⅳ－105図）

1は四隅と中央が穿孔された飾金具と推定される。

SP550（遺構Ⅲ－7～8図、遺物Ⅳ－105図）

1は金属製品のキセル吸口である。ラウが遺存している。

SP554（遺構Ⅲ－32図、遺物Ⅳ－105図）

1は金属製品のキセル吸口である。

SK583（遺構Ⅲ－33図、遺物Ⅳ－105～117図）

SK583は、陶磁器、土器の他に瓦、金属製品、石製品、ガラス製品と多くの遺物が出土している。遺物のほとんどは二次的な被熱を受けておらず、火災などによる非日常的な廃棄とは異なる廃棄が想定される。ここで含まれる磁器製品も波佐見地方で生産される粗製製品はそれほど多くないことは注目される。

肥前系磁器碗では小広東碗（JB-1-i）、小丸碗（JB-1-j）、筒形碗（JB-1-l）、広東碗（JB-1-m）、望料碗（JB-1-q）また、高台高が低い蛇ノ目凹形高台皿（JB-2-j）、高台高が低く腰が張る皿（JB-2-o）が含まれ、瀬戸・美濃系磁器（JC群）が含まれていないことから、東大編年Ⅶ期の陶磁器様相である。

本遺構と遺構間接合する例は多い。特にSK207とは後に示したⅣ-119～123図など多く確認されているが、接合資料をみるとSK207廃棄の契機となった安政元（1854）年の火災に年代的に近い資料でない。こうしたことから接合資料は当初SK583に廃棄されていた遺物が、火災の後始末を行う掘削によってSK207に再埋没したと考えられる。

磁器（1～63）

1、2は三角形で尖る高台断面を呈する碗で、JB-1-cに分類される。1は色絵、2は白磁である。1は表面の剥落が顕著であるが、わずかに赤、青が確認できる。見込み中央には多くの擦痕が円形になるように付いている。2はやや軟質で、全体に貫入が看取される。3～9は肥前系薄手半球形碗で、JB-1-fに分類される。いずれも白色の胎土である。3、5は器面全体に細かい貫入が看取される。3～5は若松文が描かれるが、3の高台脇には渦巻繋ぎ文が描かれ、4、5とは異なっている。6は表裏面氷裂文と割菊文が描かれている。9の内面は降灰によって所々茶斑状になっている。10は粗製の肥前系白磁碗で、JB-1-gに分類される。胎土はやや灰がかり、口唇部には口錆が施されている。11、12は幅広高台の肥前系染付碗で、JB-1-sに分類される。見込み文様は、二重圏線、圏線、ワンポイント、外面文様は11は連弁文、12は細線書きで、器形も小広東と類似し、同時期の製品と推定される。胎土は白色、呉須も青色に発色している。13は粗製の肥前系丸碗で、JB-1-gに分類される。内面と高台内外面には鉄分が多く付着している。14は肥前系染付碗で、JB-1-cに分類される。高台内には遺存部で「明製」が確認でき、「大明年製」であろう。15～18は肥前系染付小丸碗で、JB-1-jに分類される。見込み中央は16、18は手描きで五弁花、17は不明字が書かれ、前者は和風、後者は中国風の施文パターンである。17は胎土がやや灰がかり、呉須も黒みかがった青色である。19は肥前系染付筒形碗で、JB-1-lに分類される。見込み中央は昆虫文が描かれ、昆虫文を多用する小広東碗と同時期の製品と推定される。高台脇も文様が描かれ、古手の製品である。20は肥前系染付広東碗で、JB-1-mに分類される。胎土は白色で、呉須は青色に発色しており、上質の製品と推定される。高台外面の文様、銘款があることから古手の製品と推定される。21は肥前系染付碗で、JB-1-eに分類される。胎土は白色で、呉須は濃青色に発色している。22～25は高台がハの字状に開くいわゆる望料碗で、JB-1-qに分類される。22～24はやや灰がかった白色、25は白色を呈している。22の見込みにはコンニャク印判五弁花が付けられている。25は高台内に「富貴長春」銘が施される。25は濃青色の呉須を用いて、細密に文様が描かれ、上質の製品であろうと推定される。26は朝顔形の肥前系青磁染付碗で、JB-1-rに分類される。胎土はやや灰がかった白色を呈し、青磁は淡青色に発色している。高台内には二重角枠内渦福銘が書かれている。体部下端の稜は、二重になっている。27は肥前系染付小広東碗で、JB-1-iに分類される。胎土は白色。呉須は青色に発色している。高台内は二重角枠銘が書かれている。28～30は粗製の肥前系染付碗で、28がJB-1-g、29と30がJB-1-vに分類される。28はコンニャク印判で絵付けされる。29、30は手描きで梅樹文が描かれている。28、29は判読不能の文字銘が記されている。31、32は肥前系染付杯で、JB-6-bに分類される。31の表面は二次的な被熱を受けている。32は白色の胎土で薄作りである。33は小型の猪口で、JB-7-aに分類される。

34は漳州窯系青花皿で、JA2-2に分類される。釉薬

は厚く、やや白濁している。呉須はややくすんで発色している。高台内から畳付には、白色のソバ殻状粒が付着している。35 ～ 46 は肥前系磁器皿である。35 は型打ちの白磁皿で、JB-2-c に分類される。高台内に 1 箇所ハリ支えが確認される。36 は染付輪花皿で、JB-2-e に分類される。見込み中央は手描き五弁花、高台内に二重角枠内渦福銘が書かれている。ハリ支え痕が 4 箇所認められる。37 は深手の染付皿で、JB-2-f に分類される。胎土は白色で、呉須は鮮青色に発色している。文様も精緻に描かれ、上質の製品である。高台内にはハリ支えが 1 箇所確認される。38 は粗製厚手の染付皿で、JB-2-g に分類される。見込み中央はコンニャク印判五弁花、高台内に二重角枠内渦福銘が書かれている。胎土は灰がかった白色を呈している。39、40 は高台高が低い蛇ノ目凹形高台皿で、JB-2-j に分類される。呉須は 39 が青色、40 が濃青色に発色している。39 の釉薬はやや青みがかっている。41 は高台径が広いタイプの見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2-m に分類される。見込み中央にはコンニャク印判五弁花が描かれている。42 は色絵鍋島の 3 寸皿で、JB-2-n に分類される。染付の上に赤、黄、緑で上絵付けされている。裏面は無文である。43 は腰の張る染付皿で、JB-2-o に分類される。高台内には「冨貴長春」銘が書かれている。44 は高台高の低い蛇ノ目凹形高台皿で、JB-2-j に分類される。器高が低く腰が張り、43 と近似している。見込み中央には手描きで五弁花が描かれている。45 は腰の張る染付皿で、JB-2-o に分類される。釉薬は青みがかっている。高台内には 3 箇所のハリ支え痕が確認できる。46 は貼付高台の染付型皿で、JB-2-r に分類される。文様は細かく丁寧に描かれている。器面は二次的な被熱が顕著である。

47 は肥前系染付猪口で、JB-7-b に分類される。呉須は濃青色に発色している。

48 は肥前系青磁香炉で、JB-9-a に分類される。高台内には鉄泥が掛けられ、その他は内外面全釉される。49 は肥前系青磁香炉で、JB-9-f に分類される。見込みは無釉で、内底面にはアルミナが塗布される。畳付外周は面取りされている。

50 は鶴首状の肥前系染付御神酒徳利で、JB-11-b に分類される。

51 は肥前系染付鉢で、JB-5-b に分類される。胎土はやや灰がかった白色を呈している。

52 ～ 56 は肥前系磁器丸碗形の蓋物で、JB-13-a に分類される。52 ～ 55 は染付、56 は白磁である。胎土は、52 ～ 54 はやや灰がかっているが、55、56 は白色である。55 の釉薬は青みがかっている。

57 は肥前系白磁壺で、JB-15 に分類される。内面は透明釉が化粧掛けされている。高台の外側への張り出しは小さい。

58 ～ 60 は肥前系染付碗の蓋である。58 が丸碗、59 が望料碗、60 が広東碗である。58 の摘み内には二重角枠内渦福銘が書かれている。61 ～ 63 は蓋物の蓋である。3 つとも橋状把手が付けられている。

陶器（64 ～ 108、110 ～ 118）

64 は瀬戸・美濃系灰釉染付御室碗で、TC-1-d に分類される。高台脇から底部は無釉である。65 は瀬戸・美濃系色絵碗で、TC-1-m に分類される。上絵は赤、緑で描かれている。高台脇から底部は無釉である。66 は瀬戸・美濃系灰釉平碗で、TC-1-n に分類される。見込みには鉄と呉須で文様が描かれている。高台脇から底部は無釉である。67 は瀬戸・美濃系刷毛目碗で、TC-1-s に分類される。高台脇は面取りされている。高台脇から底部は無釉である。68、69 は京都・信楽系小杉茶碗で、TD-1-d に分類される。68 は鉄と呉須で若松文、69 は鉄で稲束？が描かれている。畳付外周は面取りされている。胎土は 68 が黄白色、69 が淡褐色を呈する。70 は京都・信楽系黒楽茶碗で、TD-1-l に分類される。内面は黒釉に金を散らしたように発色している。見込み中央にはいわゆる茶溜まりが設けられている。総釉で、畳付には目跡が確認される。71、72 は京都・信楽系半球碗で、TD-1-b に分類される。高台脇から底部は無釉である。71 が鉄絵に灰釉、72 は灰釉が施されている。73 は京都・信楽系の灰釉碗で、TD-1 に分類される。胎土は堅緻な半磁器質で、釉薬がやや青みを持っていることで青磁のような釉調となっている。器面全面に細かい貫入が入っている。

74 は瀬戸・美濃系灰釉坏で、TC-6 に分類される。内面から外面体部中位まで施釉されている。

75 は肥前系青緑釉蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TB-2-a に分類される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に砂目痕が確認される。76 は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵皿で、TC-2-e に分類される。鉄絵は摺絵によって描かれている。畳付以外総釉である。77 は瀬戸・美濃系灰釉輪禿皿で、TC-2-m に分類される。中央の輪禿げは、釉剥ぎではなく、体部中位と見込み中央の釉は別に施釉される。高台脇から底部は無釉である。

78 は肥前系陶胎染付鉢で、TB-5 に分類される。胎土はやや粗い暗灰色を呈し、文様は素地の上に白土を施し施文される。79 は瀬戸・美濃系灰釉鉢で、TC-5-f に分類される。底部は碁笥底で、口縁部の窪みは 2 箇所付けられている。体部下位から底部は無釉である。見込みに

は3箇所のピン痕が確認される。

80は瀬戸・美濃系灰釉捏鉢で、TC-5-lに分類される。高台脇から底部は無釉である。見込みには3箇所のトチンを置くための円形釉剥ぎがされている。

81、82は二合半の瀬戸・美濃系灰釉徳利で、TC-10-aに分類される。胴部下位から底部は灰釉施釉後、拭き取られている。胴部には、81は「イ一」と対面に「一又」、82は「∧万」と対面に「八」と釘書きされている。82は全く欠損していない完形である。83～85は五合の瀬戸･美濃系灰釉徳利で、TC-10-dに分類される。胴部には、83が「万や」と対面に「八」「ト」、84が「久」、85が「山二｜」「ヨ二十」?と釘書きされている。83は全く欠損していない完形である。86は一升の瀬戸・美濃系灰釉徳利で、TC-10-eに分類される。胴部には「北」と間隔の狭い列点状の釘書きが付けられている。87は瀬戸･美濃系柿釉舟徳利で、TC-10-fに分類される。内面は鉄釉の化粧流し掛けである。胴部には欠損のため判読できないが、釘書きされている。

88は瀬戸・美濃系灰釉合子で、TC-18である。体部は灰釉、体部稜以下と底部は無釉、内面灰釉化粧掛けである。

89は京都・信楽系色絵段重で、TD-13-bに分類される。外面は白土を塗布した上に灰釉を施し、赤で菊花文などを上絵付けしている。内面と底部は灰釉が施される。胎土はやや軟質な褐色を呈している。90は京都・信楽系の蓋物で、TD-13-dである。器面は格子状に沈線を入れ、白土、鉄、呉須で梅花折枝文が施文されている。胎土は堅緻で、灰白色である。見込みは灰釉が施され、中央に3箇所に小さいピン痕が確認できる。高台脇から底部は無釉である。畳付外周は面取りされている。

91は瀬戸・美濃系柿釉半胴甕で、TC-15-aである。高台脇から底部は無釉である。底部中央は裏側から敲いて穿孔されている。口縁部は、一定の高さで二次的に調整している。

92は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。高台脇から底部は無釉である。見込みには3箇所トチン痕が確認される。

93は京都・信楽系の灰釉錆絵水注で、TD-27に分類される。胴部上位には、呉須、鉄で菊花が描かれる。釉は内外面に施され、高台脇から底部は無釉である。畳付外周は面取りされている。見込みには小さいピン痕が3箇所確認される。注口に相対して橋状把手が貼り付けられる。94は瀬戸・美濃系柿釉水注で、TC-27-aに分類されている。内面は鉄釉が化粧掛けされている。高台脇から底部は無釉である。

95は瀬戸・美濃系灰釉餌入れで、TC-30に分類される。体部一方に橋状把手が貼り付けられた痕がある。底部は稜がなく､糸切り痕がついている。底部無釉である。

96は京都・信楽系の色絵柄杓で、TD-32に分類される。器形は筒形を呈し、体部下端は面取りされる。体部一方には柄を付ける逆かまぼこ形の張り出しが付けられている。高台脇から底部は無釉である。体部内面中位には鉄で横線が描かれている。

97～100は堺系焼締擂鉢で、TL-29に分類される。縁帯上部の沈線は強く入れられ、外側の張り出しはやや強い。擂目は全て底体境よりやや内側から引き上げられ、97～99の上端部は強く引き消している。100の擂目上端部の引き消しは、やや弱い。97の見込みの擂目は、△に引かれている。97、98の底部外周には高台状の幅広の弱い沈線が巡っている。

101～103は柿釉手付鍋で、TZ-33-aに分類される。101、102は脚が貼り付けられる。103の底部は使用時のススが付着している。

104～107は土瓶である。104は薩摩系鉄釉土瓶で、TT-34に分類される。注口はS字状に曲げられ、茶漉しの孔は3箇所に開けられている。105は生産地不明の灰釉土瓶で、TZ-34-gに分類される。内面は灰釉が施されるが、掛かっていない部分がある。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔が開けられている。106は鉄釉灰釉流し土瓶で、TZ-34-eに分類される。肩部は細かい糸目が付けられる。内面は全体に鉄釉が化粧掛けされている。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔が開けられている。107は鉄釉土瓶で、TZ-34-eに分類される。内面は鉄釉が化粧掛けされている。器厚、釉調から106の底部の可能性が高い。「勢ヵ惣」の刻印が押印されている。使用時のススが付着している。

108は瀬戸・美濃系鉄釉油受皿で、TC-40-cに分類される。受けの1箇所に垂直に縦方向に2本切ってから横方向に切り欠いている。裏面は鉄釉が化粧掛けられている。

110、111は薩摩系土瓶蓋である。内面は無釉で、表面には鉄分が吹き出した黒斑が観察できる。112は白土と鉄絵で文様が描かれる灰釉土瓶の蓋である。内面は施釉される。胎土は堅緻で、灰色を呈している。113は瀬戸・美濃系柿釉蓋物の蓋である。胎土は堅緻で、濃灰色を呈している。内面は無釉である。上面には受け、内面には摘みと同じ径の溶着痕があり、同タイプの蓋を重ね積みして焼成していたと思われる。114～116は落とし蓋タイプの鉄釉土瓶蓋である。摘みは菊花状に成形されている。胎土は堅緻な黄褐色を呈している。内面

は無釉である。117 は京都・信楽系色絵土瓶蓋である。竹の上絵は変質と剥落のために赤のみ確認できる。内面は施釉される。118 は瀬戸・美濃系灰釉合子蓋である。

土器（109、119 ～ 138、140 ～ 160）

109 は透明釉が掛けられるひょうそくで、DZ-44-b に分類される。底部は左回転の糸切り痕が観察され、中央には固定のための刺突がされている。119、120、122、123、126、134 は左回転の糸切り痕があるかわらけで DZ-2、121、124、125、127 ～ 133 は DZ-2-b に分類される。123 はやや弱いが、内面底体境の窪みと底部外周のいわゆる折り返し痕が確認される。121、123、131 の口唇部には灯火の痕跡が確認される。119 は内面体部上位に円圏状の墨書が、124 は「ア」？、125 と 126 は「中」の墨書が確認される。134 は底部中央に径 3mm 程度の孔が穿たれている。135、136 は磨きかわらけで、DZ-2-d に分類される。外面が内面より丁寧に研磨されている。137 は透明釉が掛けられた土師皿で、DZ-2-h に分類される。口唇部には灯火の痕跡が確認される。底部は左回転の糸切り離し痕がついている。140 は DZ-2-a に分類される。

138 は土師質の小型鉢で、DZ-5-a に分類される。底部は左回転の糸切り離し痕が確認される。

141 は土師質丸火鉢で、DZ-31-a に分類される。脚は欠損するが、取り付けられた痕跡が確認される。口唇部内外側はキセルによると推定される敲打痕が多く確認される。142 は硬質瓦質の風炉で、DZ-31-h に分類される。外面は丁寧に研磨され、光沢を有している。体部下位に稜を有し、底部には脚が 3 箇所に取り付けられている。143 は土師質の火入れで、DZ-9 に分類される。底部は幅広の碁笥底に作られ、高台内は回転ケズリ、畳付はナデ、器面はミガキ調整している。口唇部は敲打痕が確認される。畳付には槌内「や」の刻印が押印されている。

144 は硬質瓦質の手焙りで、DZ-38 に分類される。表面は丁寧に研磨されている。胴部上位に円形の孔が開けられている。

145 は無釉の脚付き油受け皿で、DZ-40-c に分類される。受け部を中心に灯火の痕跡が確認できる。

146、147 は土師質のひょうそくで、DZ-44-c に分類される。147 の灯心立て上部には灯火の痕跡がついている。底部は左回転の糸切り痕が確認される。

149 は土師質のあんかで、DZ-63 に分類される。胴部下端は面取りされ、器面は丁寧に横方向にナデられている。

148 は土師質七輪の風口である。さなが接続する頭部側は、被熱によって白化している。

150 ～ 152 は板作り成形の塩壺で、150 は大枠内「泉州麻生」印で DZ-51-i、151 と 152 は「泉湊伊織」で DZ-51-g に分類される。内面は、150 は粗い、151 と 152 は細かい布目が付いている。胎土は 150 は淡褐色、151 と 152 は金雲母が混入する明茶褐色を呈する。153 ～ 157 は無印ロクロ成形の塩壺で、DZ-51-w に分類される。底部の糸切り痕は、表面が摩耗して判然としない 153 以外は左回転である。158 ～ 160 は無印の板作りの塩壺蓋で、DZ-00-c に分類される。158 は蓋のかかりの 1 箇所がアーチ形に抉られている。全ての内面には布目痕が観察される。

人形・玩具（161 ～ 168）

139 は土師質の釜形土製品で、DQ_2011_W に分類される。底部は左回転の糸切り離し痕がついている。

161 はミニチュアの碗で JB_2001_W に分類される。染付で高台無釉。162 は袴人形で DQ_1110_M2e に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で中空。底部に 1 カ所穿孔がある。胎土は橙褐色。163 は塔で DD_3002_M に分類される。台部、屋根部別作りの型押し成形。胎土は淡黄色で全体に緑釉をかけている。164 は七輪で DQ_2014_M に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形、胎土は橙褐色。無釉。165 は芥子面で DD_4006_M に分類される。モチーフは恵比寿か。型押し成形で裏面を窪めている。胎土は橙褐色で烏帽子は黒、顔面は赤の彩色が残る。非常に丁寧な作りである。166 ～ 168 は土鈴で DD_4001_H に分類される。手びねりで胎土は淡黄色である。

瓦（169 ～ 171）

169 は江戸式の軒桟瓦で、軒丸部は左回転三つ巴文、軒平部はⅠ Fg 類である。170 は軒板桟瓦である。平瓦部右側には側縁と平行な沈線が刻まれている。171 は鬼瓦を載せる柄振台である。頭部と両側面下部に穿孔されている。

石製品（172 ～ 177）

172 は小型の硯である。色調は橙褐色を呈する。173 ～ 177 は砥石である。173 ～ 175 は中砥、176 は仕上げ砥、177 は中砥と仕上げ砥の中間の粗さを有している。砥面は 173 が 5 面、174 が 4 面、175 が 3 面、176 が 2 面、177 が 2 面である。

ガラス製品（178 ～ 180）

178 ～ 180 は鉛ガラスの簪である。ガラスの色調は飴色を呈し、特に 180 の表面は鉛成分の銀化が顕著である。

SP586（Ⅳ－ 117 図）

1はガラス製の簪である。

SE2とSK207遺構間接合（Ⅳ－118図）

1は景徳鎮窯系青磁染付碗で、JA1-1に分類される。見込み雲龍文様はダミの無い細線書きで描かれている。高台内には銘が書かれるが、欠損のため不明である。見込みの釉薬は青みがかっている。2はやや胎土が粗いが、釉薬は萩の土灰釉に近似している。TH-1か？。胎土は通常の土灰釉の碗よりやや粗く、暗灰色を呈している。体部下位から底部は露胎しており、茶褐色を呈している。3は瀬戸･美濃系鉄釉香炉で、TC-9-bに分類される。器面下位から底部と見込み中央は無釉である。高台内には「ニセ」？と墨書されている。4は生産地不明の小型手付鍋で、TZ-33-aに分類される。体部下位から底部は無釉である。体部下端には円錐状の脚を3箇所貼り付けている。脚の間には円形の重ね積み痕が確認できる。

SK207とSX267遺構間接合（Ⅳ－118～119図）

1は肥前系染付広東碗で、JB-1-mに分類される。見込みは細線書きで文様が描かれる。2は肥前系染付望料碗で、JB-1-qに分類される。見込み五弁花はコンニャク印判で描かれる。3は肥前系染付蛇ノ目釉剥ぎ皿で、JB-2-mに分類される。胎土はやや灰がかり、呉須はくすんだ濃青色に発色している。4は肥前系染付大皿で、JB-3-eに分類される。高台内には「冨貴長春」銘が書かれている。外側面上位に白泥が確認できること、文様の描き方、釉薬の色調から志田窯の可能性も考えられる。5、6は肥前系染付鉢で、JB-5-bに分類される。5は釉薬が十分に溶けておらず、焼成はやや不良である。6はやや大型で端反るいわゆる広東碗に近い碗形をしており、肥前広東碗の初現的な製品の可能性が高い。高台内には「太明年製」銘が書かれている。描かれる竹文様は、天明～寛政期に多用される。7は瀬戸・美濃系染付油壺で、JC-12に分類される。胴部上半と下半を型を用いて別パーツで作り、成形時に接合している。地呉須を使用している。8は瀬戸・美濃系灰釉緑釉掛け分けの鎧茶碗で、TC-1-rに分類される。体部にはトビガンナ状の連続文が巡る。内面から外面上位が緑釉、外面中位から底部がやや飴色の灰釉が掛かっている。9は瀬戸・美濃系柿釉銚甕で、TC-15-aに分類される。内面および外面体部中位まで柿釉が、口唇部と体部下位から底部には鉄釉が化粧掛けされている。底部裏は左回転の糸切り離し痕が確認される。10は瀬戸・美濃系柿釉半胴甕で、TC-15-aに分類される。底部中央は外から内側に打撃を加えて、穿孔している。内面および外面下位の稜まで施釉されている。

SK207とSK583遺構間接合（Ⅳ－119～123図）

SK207とSK583との遺構間接合する例は多い。前述の様に最終廃棄年代は、SK207が東大編年Ⅷc期、SK583がⅦ期である。ここで呈示した接合資料をみるといずれもSK207廃棄の契機となった安政元（1854）年の火災に年代的に近い資料でない。こうしたことから接合資料は当初SK583に廃棄されていた遺物が、火災の後始末を行う掘削によってSK207に再埋没したと考えられる。

1、2は肥前系染付薄手半球碗で、JB-1-fに分類される。胎土はやや灰がかり、呉須もややくすんだ発色をしている。3は肥前系染付丸碗で、JB-1-eに分類される。胎土は白色、呉須は濃青色に発色している。4、6、7は肥前系染付小広東碗で、JB-1-iに分類される。3点とも体部が丸い点などから古い段階の製品と推定される。4の慶字文、7の暦文などは広東碗と共通するが、6の七宝繋文は共通しないことから広東碗が焼かれる天明期以前の製品と推定される。5は粗製の肥前系白磁碗で、JB-1-gに分類される。口唇部には口錆が施される。胎土はやや灰がかり、厚く成形されている。8は高台高の低い肥前系染付蛇ノ目凹形高台皿で、JB-2-jに分類される。高台内には二重角枠内に簡略化した渦福が書かれている。蛇ノ目部内側にはチャツの痕跡が残る。9は肥前系染付大平鉢で、JB-3-bに分類される。内面は型によって中央に獅子、側面に花唐草の凹凸が付けられ、それに沿って呉須で文様が描かれている。口縁は隅を輪花状にした方形を呈している。高台内は二重角枠内渦福が書かれている。小さいハリ支え痕が1箇所に残っている。10は肥前系染付蓋物の蓋である。橋状の把手が付けられている。11は瀬戸・美濃系灰釉鉄絵のいわゆる柳茶碗で、TC-1-gに分類される。器面には鉄絵で柳文が描かれている。高台脇の稜はない。12、13は瀬戸・美濃系灰釉輪禿皿で、TC-2-mに分類される。輪禿げ部は施釉後の拭き取りではなく、中央の無釉部に小さく円形に施釉し、輪禿状にしている。口縁部は三角状に外に張り出している。14は肥前系陶胎染付大鉢で、TB-5に分類される。胎土はやや粗い灰色を呈し、文様は素地の上に白土を施し施文される。見込み中央は擦痕が顕著で、捏鉢として利用されていた可能性が考えられる。15は瀬戸･美濃系灰釉緑釉散らし捏鉢で、TC-5-lに分類される。緑釉は口唇部数箇所に散らされている。見込みには重ね積みのトチンを置くための円形の釉剥ぎが残っている。高台脇から底部は無釉である。16は瀬戸美濃系灰釉一

升徳利で、TC-10-e に分類される。胴部には釘書きで、違山形の下に「万三」と刻まれている。内面全体に鉄分が付着しており、鉄奨などを作っていた可能性がある。17 は京都・信楽系灰釉錆絵筒形蓋物で、TD-13-c に分類される。口唇部と高台脇から底部は無釉である。畳付外周は面取りしている。18、19 は京都・信楽系水注で、TD-27 に分類される。18 は錆絵染付、19 は色絵で赤、緑で上絵付けされている。蓋受けと高台脇から底部は無釉である。畳付外周は面取りしている。19 の見込みには小さなピン痕が確認できる。20、21 は薩摩系鉄釉土瓶で、TT-34 に分類される。20 の胴部やや丸みを帯び、上半には太い沈線が渦巻き状に巡る。21 はそろばん玉状を呈している。注口はＳ字状を呈し、茶漉しの孔は 3 箇所開けられている。21 は使用時に付着したと思われるススが確認できる。22 は鉄釉灰釉流し土瓶で、TZ-34-e に分類される。肩部は細かい糸目が付けられる。内面は全体に鉄釉が化粧掛けされている。注口は鉄砲口で、茶漉しの孔が 4 箇所に開けられている。23、24 は堺系焼締擂鉢で、TL-29 に分類される。擂目は底体境から引き上げられ、上端は強い沈線によって揃えられている。縁帯外側の張り出し、擂目の入れ方から 19 世紀前半ころの製品と判断できる。底部外縁部付近には太い沈線を巡らせ、高台状に成形している。23 の底部中央は外側からの打撃で穿孔されている。

SK207 と SE261 遺構間接合（Ⅳ－ 123 図）

1 は生産地不明の柿釉手付鍋で、TZ-33-a に分類される。体部下位から底部は無釉である。体部下端には円錐状の脚が貼り付けられる。見込みにはピン痕が遺存部で 4 箇所確認できる。底部は使用時についたと思われる被熱痕が確認できる。

SK218 と SK583 遺構間接合（Ⅳ－ 123 図）

1 は肥前系色絵芙蓉手大皿で、JB-3-b に分類される。胎土は灰がかった白色を呈し、釉薬は焼成不良から透明になっていない。文様は、赤、青、緑、紫、黄、呉須で上絵付けされている。

SX267 と版築遺構間接合（Ⅳ－ 123 図）

1 は京都・信楽系灰釉鉢で TD-5 に分類される。高台は貼付輪高台で、高台内から畳付は無釉である。体部全体の形状は不明であるが、非ロクロ成形で、胴部に緩やかな窪みを有す。また実測出来なかった口縁部破片は、口縁が見込み側に緩やかに折り返されていることから、変形鉢であった可能性もある。見込みには赤と黒で分かち書きされた和歌のようなものが確認できる。

版築（遺構Ⅲ－ 4 図・灰色、Ⅳ－ 124 ～ 131 図）

出土した陶磁器・土器類は、最小個体数 334 点を数える。器種組成をみると、肥前系磁器碗に半球碗、いわゆるくらわんか碗などの器形が矮小化した後出的な様相を呈すものと、いわゆる広東碗、小広東碗なども一定量認められ、また塩壺はロクロ成形のものを中心に、板作成形の塩壺なども僅かに認められることから 18 世紀後葉に比定される一括資料である。なお一部瀬戸・美濃系磁器の碗や瓶、青土瓶やイッチン掛けされた行平鍋の蓋など 19 世紀代の遺物も含む。

磁器（1 ～ 54）

1 ～ 21 は碗である。16、17 は景徳鎮窯系（JA1）、それ以外はすべて肥前系磁器（JB1）で、1、16、17 は色絵、8 は白磁、13 は青磁染付、他は染付が施される。1 ～ 5 は半球碗で JB-1-f に分類される。4 以外は器高がやや低く、半球碗の中でも後出的な様相を呈すものである。6 ～ 8 はいわゆるくらわんか碗で JB-1-g に分類される。8 は口錆が施されるが、その鉄絵具が滲み、口縁部外側にまで及んでいる。9 ～ 11 はいわゆる小広東碗で JB-1-i に分類される。12、13 は矮小化した筒形碗で JB-1-l に分類される。ともに見込みにはワンポイントの絵付が施されるが、12 は手描きで五弁花文を意識した花文が、13 はコンニャク印判による潰れた五弁花文が施される。14、15 はいわゆる広東碗で JB-1-m に分類される。15 の高台内には「太明年製」銘を有す。16、17 は景徳鎮窯系端反碗で、ともに口錆と、高台内には呉須で「大清乾隆年製」銘を有す。JA1-1 に分類される。18 は大振りの端反形碗で、高台も一般的な端反形碗より外側に開き気味である。JB-1-n に分類される。19 は高台がハの字状に開くいわゆる望料碗で JB-1-q に分類される。20 は梅樹文、雪輪文が描かれた粗製碗で JB-1-v に分類される。透明釉が厚く施釉されているため、呉須がやや白濁している。21 は下半が大きく欠損しているが丸碗あるいは半球碗か。JB-1 に分類される。

22 ～ 27 は坏で、26 は瀬戸・美濃系（JC6）、他は肥前系（JB6）である。22 がは色絵半球形坏で JB-6-f に分類される。23 は染付丸形坏 JB-6-a に分類される。外面の染付はコンニャク印判によるものである。24 は白磁坏で JB-6 に分類される。25 は器厚が極薄い坏で JB-6-c に分類される。26 は染付丸形坏で、JC-6-a に分類される。高台内には角枠銘を有す。27 は白磁端反形で、JB-6-b に分類される。

28 ～ 36 肥前系皿・平鉢で、32 が青磁染付、36 は

白磁、他は染付が施される。28、35 は高台断面形が U 字状を呈す皿・平鉢で JB-2-e に分類される。28 の見込みにはコンニャク印判五弁花文、高台内には二重角枠渦福銘を有す。29 は呉須が黒ずむいわゆるくらわんか手の皿で JB-2-g に分類される。見込みにはコンニャク印判五弁花文、高台内にはかなり崩れた福字銘を有す。30 ～ 32 は蛇ノ目凹形高台を有し、高台高の低いもので JB-2-j に分類される。30 の見込みには手描き五弁花文、32 の高台内には二重角枠筒江銘を有す。33 は器高が低く腰が張る皿で JB-2-o に分類される。高台内には二重角枠渦福銘を有す。34 は志田窯と推定される皿で JB-2-p に分類される。底部裏にはピン痕が 1 箇所確認され、僅かに遺存する口縁部は緩やかな輪花にされる。36 は糸切り細工貼付高台の製品で JB-2-r に分類される。内面は型打ちで菊花状にされ、貼付高台付近は無釉である。

37 は体部が型打ち成形で輪花にされた染付鉢で JB-5-b に分類される。高台内には「冨貴長春」と思われる銘を有す。38 は染付御神酒徳利で JB-11-b に分類される。

39 は染付小瓶で JB-10 に分類される。

40 ～ 42 は肥前系染付蓋物で、40、42 は体部が丸形のもので JB-13-a に、41 はいわゆる段重で JB-13-c に分類される。40 は蛇ノ目高台である。41 の底部は幅広の蛇ノ目状に釉剥ぎされるが、その部分に輪状の熔着痕が確認される。

43 は肥前系白磁筒形合子で JB-18-b に分類される。底部無釉である。

44 ～ 54 は蓋である。44 は白磁碗蓋、45 ～ 47 は染付広東碗蓋、48 は高台がハの字状を呈す染付碗蓋、54 は青磁染付朝顔形を呈す碗の蓋である。46 は摘み内に二重角枠福字銘？、48 は篆書体の「乾」字銘を有す。49 ～ 52 は蓋物蓋、53 は合子蓋である。54 は口縁部に敲打痕がみられる。

陶器（55 ～ 89、96、105）

55 ～ 58 は碗である。55、56 は瀬戸・美濃系で、55 はいわゆる柳茶碗で TC-1-g、56 はいわゆる鎧茶碗で TC-1-r に分類される。57、58 は京都・信楽系のいわゆる小杉茶碗で TD-1-d に分類される。

59 ～ 61 は皿・平鉢である。59、60 は瀬戸・美濃系で、59 は灰釉輪禿皿で TC-2-m、60 は柿釉油皿で TC-2-o に分類される。60 は内外面に輪状の溶着痕が認められる。61 は志戸呂系把手付き皿で TF-2 に分類される。口縁部に灯芯痕が認められる。

62 ～ 66 は瀬戸・美濃系灰釉瓶である。62 ～ 64 は容量が二合半のもので、62、63 は TC-10-a、64 は TC-10-c に、65 は容量五合で TC-10-d に、66 は容量一升で TC-10-e に分類される。胴部釘書きは 62 のみが線書きで、他は列点状に施され、62 は「井」、64、65 は山に「小」と判読できる。66 の内面には赤色付着物が認められる。ベンガラか。

67 ～ 69 は壺・甕である。67、69 は瀬戸・美濃系壺・甕で、67 は灰釉水甕で TC-15-c に分類される。67 の底部には 5 つの目跡と、二次的な穿孔が 1 箇所確認される。69 は柿釉に鉄釉が流し掛けされた器高が低い小壺で TC-15-b に分類される。68 は壺・甕の高台部の破片で TZ-15 に分類される。胎土はややにぶい橙褐色を呈し、白色あるいは黒色細粒子を多く含み、少し粗い。内面には黒釉、外面に鉄釉が確認される。内面に紐状の粘土塊が遺存し、畳付には方形の熔着痕がの 1 箇所確認できる。高台内には角枠に「玉川」の刻印が確認される。玉川焼か。

70 は切り株状のものにサル？がしがみついてる水滴で TZ-19 に分類される。胎土は淡黄白色を呈し、緻密である。型作りで、4 つのパーツから構成される。側面を貼り合わせ、上部と底部に外側から円盤状の粘土を貼り、中空に成形、さらに手捻り成形のサル？が貼り付けられ、注口、空気孔が外側から穿孔されている。内面には指頭圧痕が遺存する。

71 ～ 73 は土瓶であり、72 と 73 は直接接合はしないが本来は 1 個体であった可能性が高い。底部外面以外は施釉され、口唇部釉は拭き取られる。71 と 72 の漉し穴は 3 個穿孔されている。71 は TT-34、72、73 は TZ-34-l に分類される。

74 はロクロ成形のおろし皿で TZ-39 に分類される。底部は碁笥底に削り込まれる。おろし目は内側面にまで及ぶ。

75 は錆釉が施釉された瀬戸・美濃系油受け皿で TC-40-c に分類される。底部外面に輪状の熔着痕、見込みと受け部に灯芯痕が確認できる。

76 は鉄釉が施釉された瀬戸・美濃系ひょうそくで TC-44-a に分類される。底部には右回転糸切り痕が確認される。

77 ～ 89 は蓋である。77 は京都･信楽系蓋物蓋である。78、79 は瀬戸・美濃系壺・甕蓋であり、ともに底部には右回転糸切り痕が確認される。80 は瀬戸・美濃系掛分丸碗蓋である。81 ～ 86、88 は産地不明の土瓶蓋である。87 はイッチン・トビガンナで装飾された行平鍋蓋である。口縁部を除く内側には鉛釉が施釉される。飯能か。89 は急須蓋である。

96 は内外面鉛釉で施釉された壺・甕または火入れと思われる。内画面施釉され、胴部外面には小判形、底部には方形の押印が認められるが、判読は困難である。

105 は鉛釉が内外面施釉された蓋である。摘みが欠損している。

土器（90 ～ 95、97 ～ 104、106 ～ 108）

90 ～ 95 は土器皿である。90 の体部内側面にはやや顕著な凹凸が認められる。95 の底部穿孔は内側から二次的に穿孔されたものである。92 の底部には離し糸切り痕、他はすべて底部に左回転糸切り痕が確認でき、灯芯痕は 90、92、93 に認められる。90 ～ 92、94、95 は DZ-2、93 は DZ-2-b に分類される。

97 は土師質筒形火鉢で DZ-31-l に分類される。円盤状に成形された底部と輪積み成形された胴部との繋ぎ目が遺存している。割れ口には敲打痕が認められ、胴部外面には細い線刻が確認できる。

98 ～ 101 は油受け皿である。98 は無釉、脚付で DZ-40-c、99 は施釉、脚付で DZ-40-a、100、101 は施釉、無脚で DZ-40-b に分類される。98 の脚部内側には反時計回りに削り込まれた痕跡が顕著に残る。99 は受けの U 字状スリットと相対する位置の口縁部が二次的にアーチ状に削られている。

102 ～ 104 は施釉、無脚のひょうそくで DZ-44-b に分類される。いずれにも灯芯先端付近にはススの痕跡が確認されるが、103 はそれが内側全体に及ぶ。

106 ～ 108 は塩壺蓋である。106 は断面が長方形のもので DZ-00-g、107 は断面が逆台形のもので DZ-00-d、108 は断面が凹形のもので DZ-00-c に分類される。106 内面には粗い格子状の布目痕が顕著に認められる。

人形・玩具（109 ～ 115）

109 は肥前系磁器、110 は京都・信楽系土器、他は江戸在地系土器である。109 は型作りの碗のミニチュアで JB_2001_M に分類される。110 は型作りの人形で、着物の裾部分と足のみが遺存する状況であり、DD_1100_M2e に分類される。内側裾付近には指頭圧痕が確認できる。111 は手ひねりの建造物のミニチュアで DQ_3000_H に分類される。底部以外の外面は白色と緑色で彩色され、透明釉が施釉される。112 は型作りの土鈴で DQ_4001_M に分類される。上部は摘まれ、その部分に横位に穿孔を施している。ヒモ状のものを通すための孔か。113 は手ひねりの碁石状土製品で DQ_4004_H に分類される。外面は丁寧にナデ調整される。114、115 は型作りの泥面子で DQ_4006_M に分類される。ともに外面にはキラが散見される。114 の文様は菊、115 の文様は「小□」の文字か。

瓦（116 ～ 129）

116、117 は軒丸瓦であり、瓦当文様は連珠三つ巴文 C に分類される。巴文と連珠の間に圏線が巡らない。116 の巴の頭部から尾の中程までが平らに押されている。内面には僅かであるが粗い布目痕が残る。118 ～ 122 は軒桟瓦である。118 の瓦当文様は軒丸部が三つ巴文 C、軒平部が江戸式Ⅰ Ki に分類される。119 の瓦当文様は連珠三っ巴文 C、軒平部が江戸式Ⅱ Li に分類される。表側の銀化が顕著である。120 の瓦当文様は軒丸部が三つ巴文 C、軒平部が江戸式Ⅳ Fb に分類される。121、122 の軒丸部は欠損するが、遺存する軒平部の瓦当文様はいわゆる「江戸式」とは異なるものである。121 の軒平部瓦当文様と類似するものが御殿下記念館地点の瓦Ⅳ期で検出されている（東京大学埋蔵文化財調査室 1990、597 頁 8 図）。122 の軒平部瓦当文様は、樹枝と点珠からなる中心飾りの文様と、その両脇に唐草 2 対が配される「東海式」の特徴を有す。桟部分の凸面の縦位の削りが顕著である。123 は軒丸部を中心に、軒平部が両側に開くように付く形態の瓦であり、その形態から屋根の隅の軒先に使われる廻隅瓦と推測される。軒平部の瓦当文様は江戸式Ⅰ Lj に分類される。表面には軒平部に対して斜め 45 度ほどの角度の稜線と、その延長上には山形の凹みが認められる。直径 1cm 弱の孔が裏側から穿たれている。124 も軒平部を有す破片であり、軒平部の瓦当文様は江戸式Ⅲ Kj に分類される。123 と同じく斜め軒平部に対して 45 度ほど角度の稜線が確認できることから、廻隅瓦の可能性もある。125 は完形の丸瓦である。内面の粗い布目痕と棒状圧痕が認められる。126 は完形の平瓦である。両端部凸面には 2 ～ 3cm 幅で漆喰が遺存している。127 は桟瓦であり、桟部と平部の切込が遺存する。128、129 は鬼瓦であるが、ともに部分的な遺存にとどまり、文様は不明である。128 の側面には漆喰が遺存する。二次的に火熱を受け、内外面は灰褐色からにぶい橙を呈す。129 の側面には、先端が尖ったもので内外から穿った孔が 1 箇所確認できる。

金属製品（130 ～ 145）

130 ～ 144 はいずれも表面に緑青がふいている。130 ～ 139 はキセルで、130 ～ 134 は雁首、135 ～ 139 は吸口である。130 以外はいわゆる脂返しはなく、火皿立ち上がりが垂直に近い小さなものである。132 は火皿から小口部分にかけて灰状のものが詰まっている。133 は細身の雁首であり、ラウが遺存している。140 は火箸であり、端部は欠損している。141 は小判形の襖引き手と思われる。142 は環状の把手と思われ

る。143、144 は寛永通宝である。143 は背面に「文」のあるいわゆる文銭である。144 は遺存状態はあまり良くないが、新寛永であることは確認できる。145 は椀形鉄滓である。これ以外には鍛冶滓、坩堝や羽口なども出土していない。

石製品（146 ～ 150）

146 は頁岩製の硯である。背面が浅く削り込まれている。硯として使用が困難となった後、砥石に転用された痕跡か。147、148 は火打石である。ともに石質は脈石英である。147 は一辺が最長でも 2.5cm 程の不整直方体であるが、3 つの角に使用された痕跡が確認できる。148 は一辺が最長 5.4cm 程もある大形のものである。使用された痕跡は少し尖った部分の角のみで確認される。149、150 は凝灰質砂岩（房州石）製の火鉢または七輪か。酷似するが、胴部径が異なることから 2 個体分か。ともに胴部内側は強い二次的な火熱を受け、赤褐色から白色を呈し、口縁部内側はススが付着し黒色を呈す。149 の外面角部分はわずかに敲打痕のようなものが確認できる。

ガラス製品（151 ～ 153）

151 ～ 153 は断面方形のガラス製の棒状製品である。笄または簪の一部か。いずれも表面に不規則な細かい凹凸が確認される。152 の斜めにみえる先端の切断面は非常にフラットであり、意図的に切断、調整された可能性もある。

表土（Ⅳ－ 132 ～ 133 図）

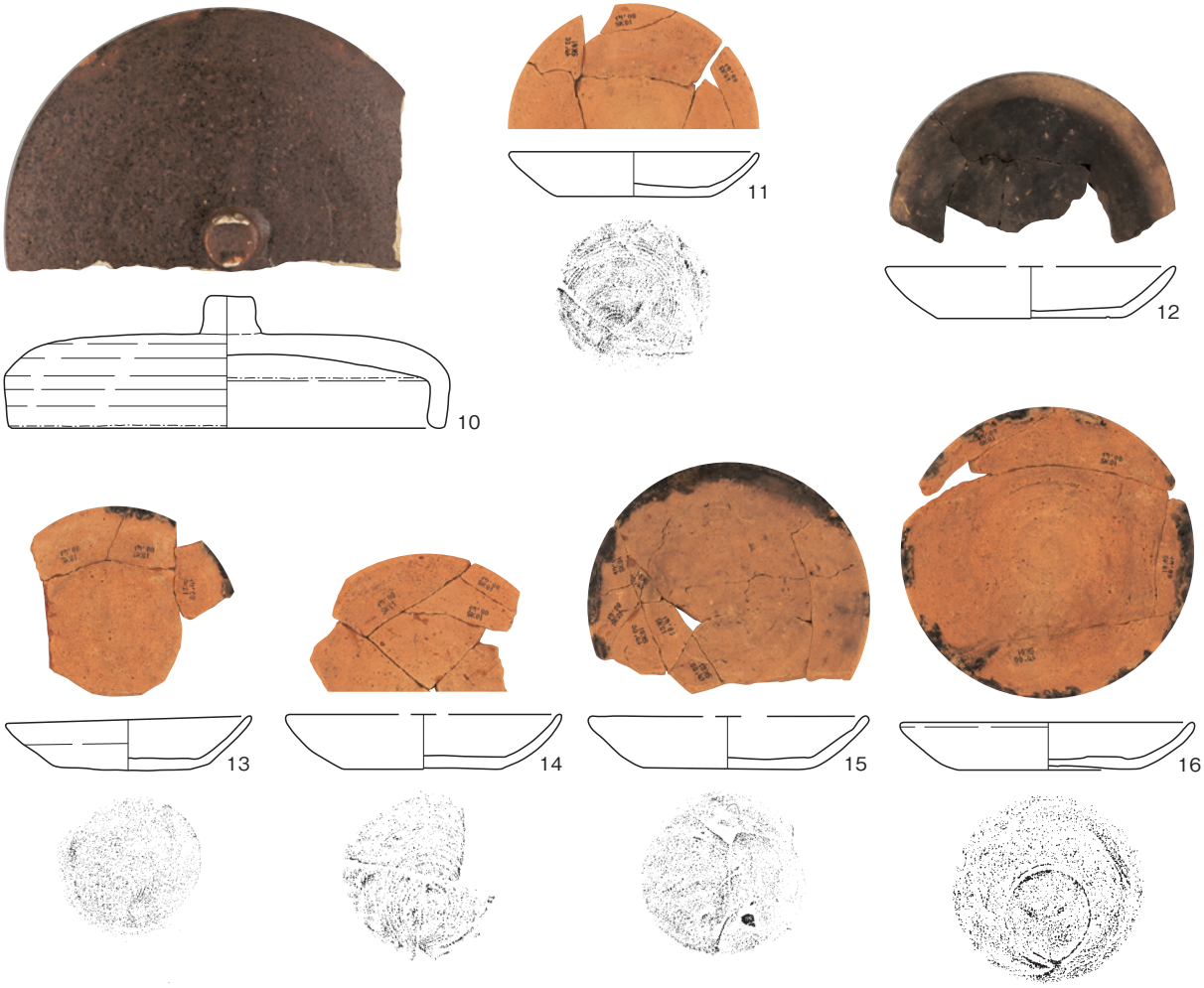
1 は真鍮製キセルの吸口である。全長は短く、基部には細かい圏線が巡っている。2 ～ 5 は銅銭の寛永通宝である。2 ～ 4 は寛永通宝四文銭の背面十一波明和千田新田銭である。5 は新寛永。

6、7 はやや青がかった透明の瓶である。所々に気泡が入っており、底部には○に星のマークがエンボスで付けられている。形態から、薬品瓶であろう。8 はやや緑がかった透明の瓶である。胴部下端に「登録　商標　日本麦酒鑛泉株式會社」、底部には「3.5」がエンボスで付けられている。「登録」と「商標」間のマークから大正 11（1922）年から販売した三ツ矢サイダーの瓶であると考えられる。口唇から底部まで金型の合わせ目が確認される。9 は茶色瓶である。底部に菱形内に「TM」の銘がエンボスにより付けられている。形態からビール瓶であろう。口縁部の形態から機械栓であったと推定される。口唇から底部まで金型の合わせ目が確認される。10 は無色透明の瓶である。底部にエンボスで「AICHITOMATO.CO 4」と中央に籠目文が書かれており、愛知トマト株式会社（現在のカゴメ）のケチャップあるいはソースの瓶であろう。○に籠目文は同社サイトでは大正 6（1917）年から使用するマークとされる。口唇から底部まで金型の合わせ目が確認される。11 は無色透明の瓶である。胴部表面には縦に「神山内科醫院」、裏面胴部下端には「柴田納」ヵ？、側面には計量メモリがエンボスされている。口唇から底部まで金型の合わせ目が確認される。12 は緑色透明の瓶である。胴部側面には「ヘチマコロン」、底面には「登録商標 180300」とエンボスされている。大正 4（1915）年発売の化粧瓶である。13 は乳白色の隅丸方形の瓶である。口縁部にはネジ山が確認される。形態、瓶の色調から化粧クリームなどに使用する瓶であろう。14 は茶色透明な瓶である。底面には「東京 萬」とエンボスされている。口唇から底部まで金型の合わせ目が確認される。色調、形態から薬品瓶であろう。15、16 は無色透明の瓶である。所々に気泡が入っており、頸部から底部まで金型の合わせ目が確認される。色調、形態から薬品瓶であろう。17 ～ 19 は青色半透明の瓶である。所々に気泡が入っている。金型の合わせ目が確認されず、吹きガラスである。色調、形態から薬品瓶であろう。20 は茶色半透明の瓶である。金型の合わせ目が確認されず、吹きガラスである。色調、形態から薬品瓶であろう。21 は褐色の棒状のガラスである。断面形は円形を呈し、径は実測図下方に向けて徐々に減じていく。

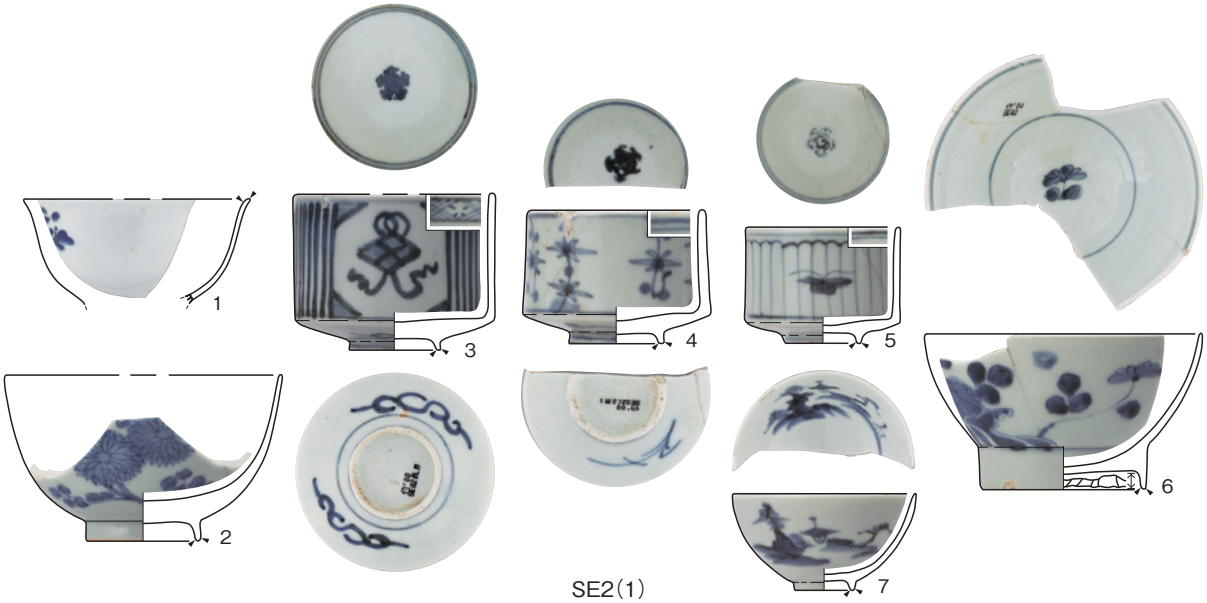
共同溝（Ⅳ－ 133 図）

1、2 はやや青がかった透明の瓶である。所々に気泡が入っており、底部は 1 が中央に小さな窪み、2 が○内に小さな窪みがエンボスで付けられている。金型の合わせ目が確認されず、吹きガラスである。色調、形態から、薬品瓶であろう。3 は濃茶色半透明の瓶である。所々に気泡が入っている。金型の合わせ目が確認されず、吹きガラスである。色調、形態から、薬品瓶であろう。4 はやや青がかった透明の瓶である。口唇部に 1 箇所小さい鳶口状の張り出しが付けられている。所々に気泡が入っており、金型の合わせ目が確認されず、吹きガラスである。色調、形態から、薬品瓶であろう。

Ⅳ-1図　SK1（1）出土遺物



SK1(2)

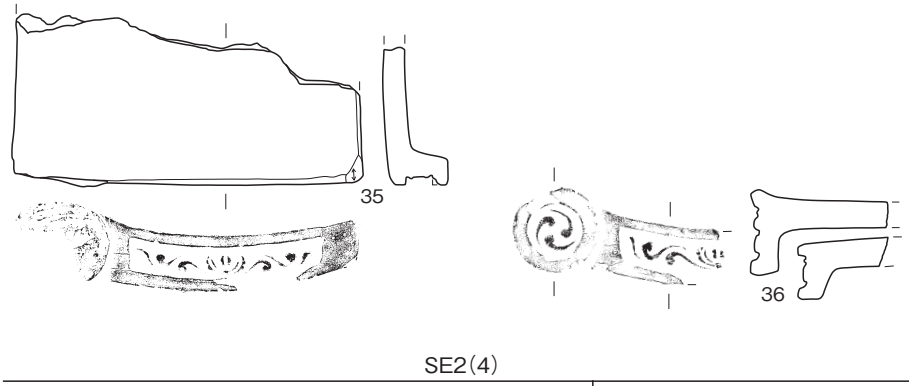


SE2(1)

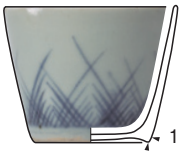
Ⅳ-2図　SK1(2)、SE2(1)出土遺物

Ⅳ-3図　SE2(2)出土遺物

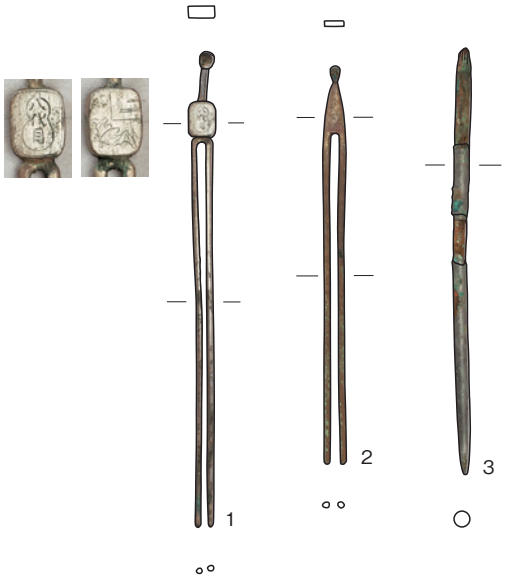
Ⅳ-4図　SE2(3)出土遺物



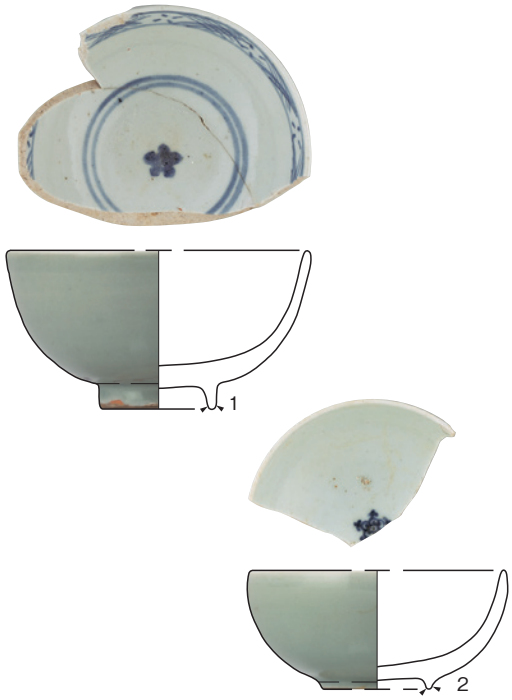
SE2(4)

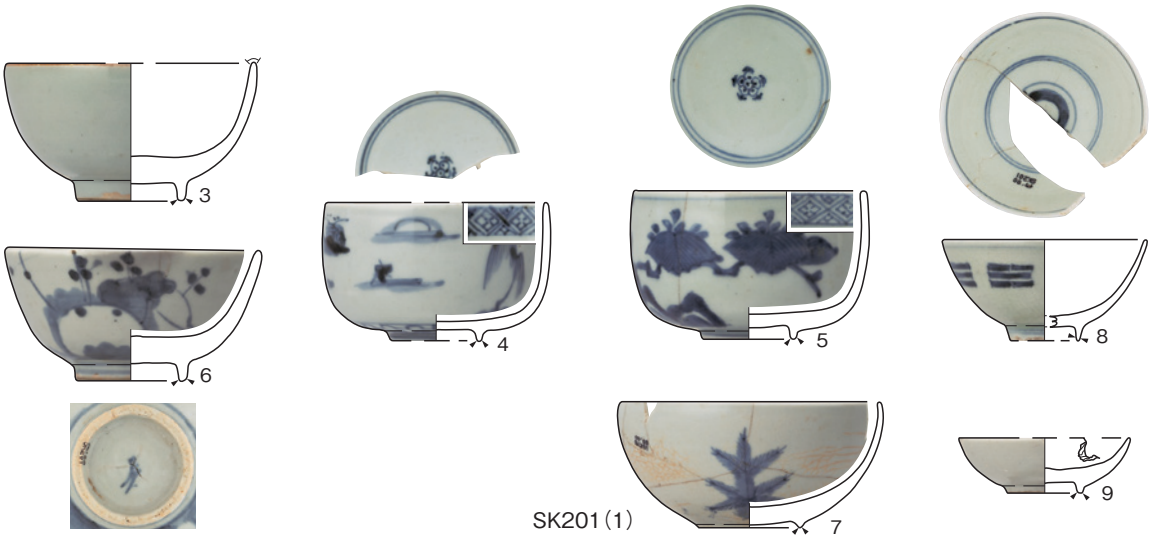


SE2堀方



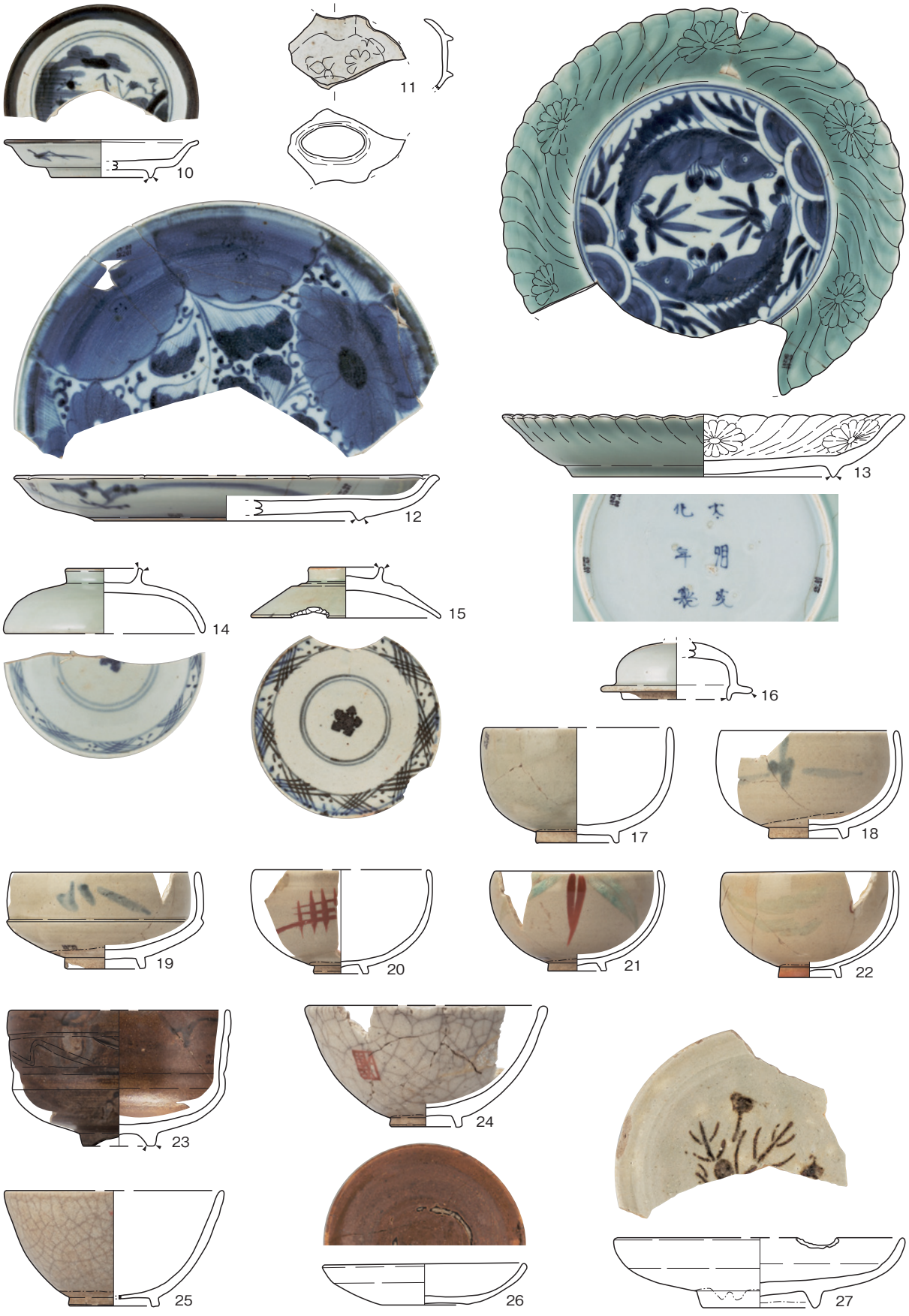
SP110





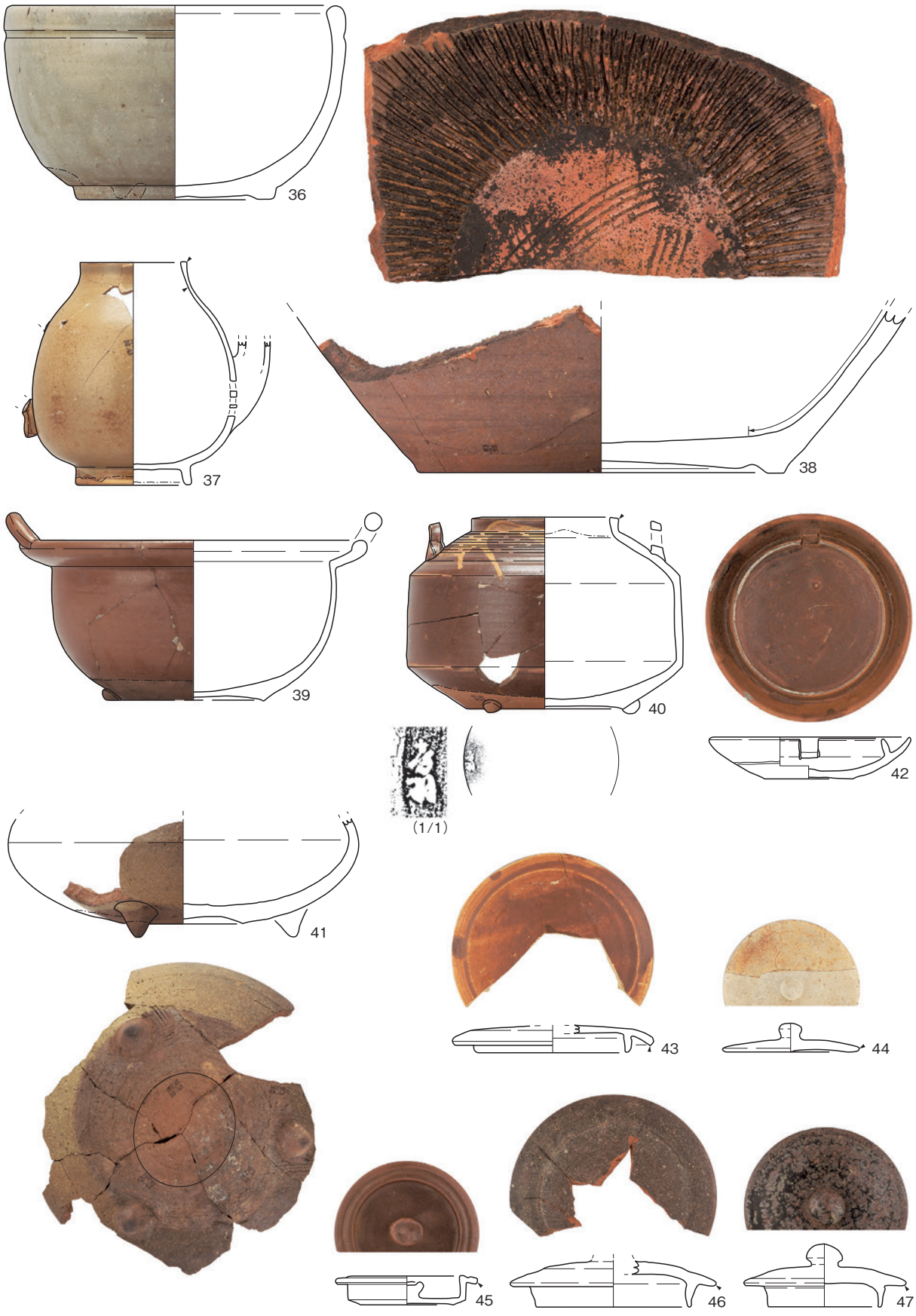
SK201(1)

Ⅳ-5図　SE2(4)、SE2堀方、SP110、SK201(1)出土遺物

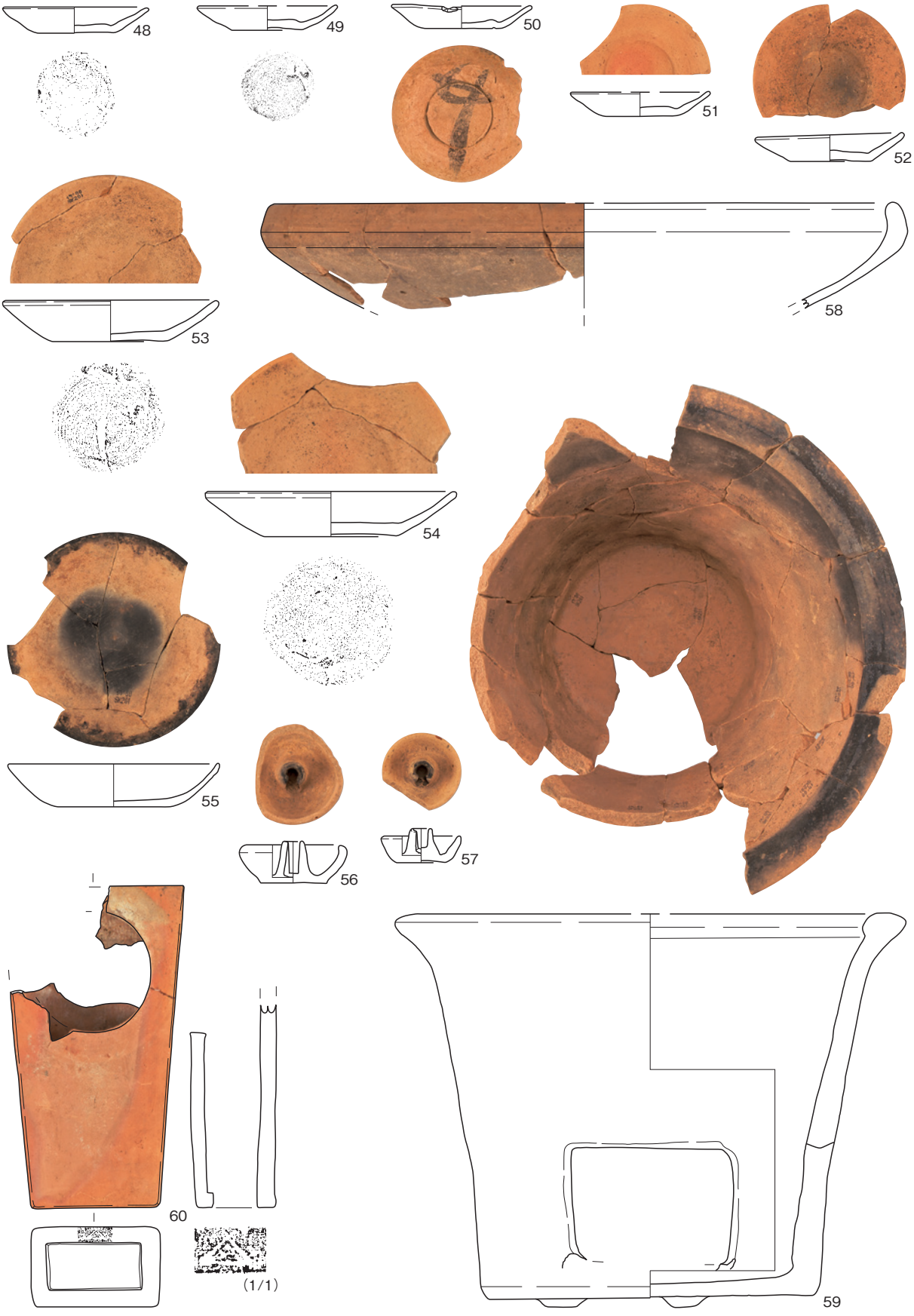


Ⅳ-6図　SK201(2)出土遺物

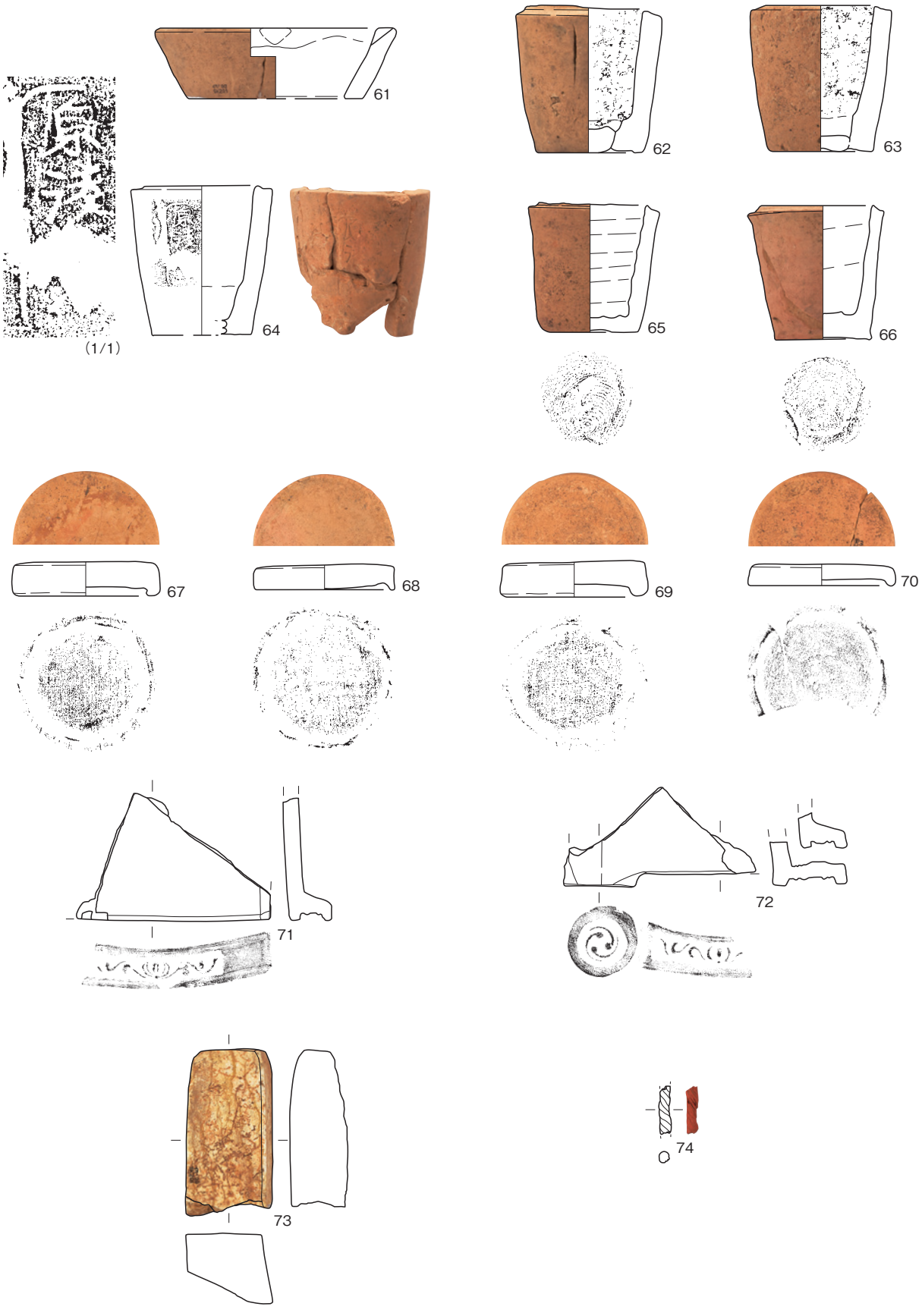
Ⅳ-7図　SK201(3)出土遺物



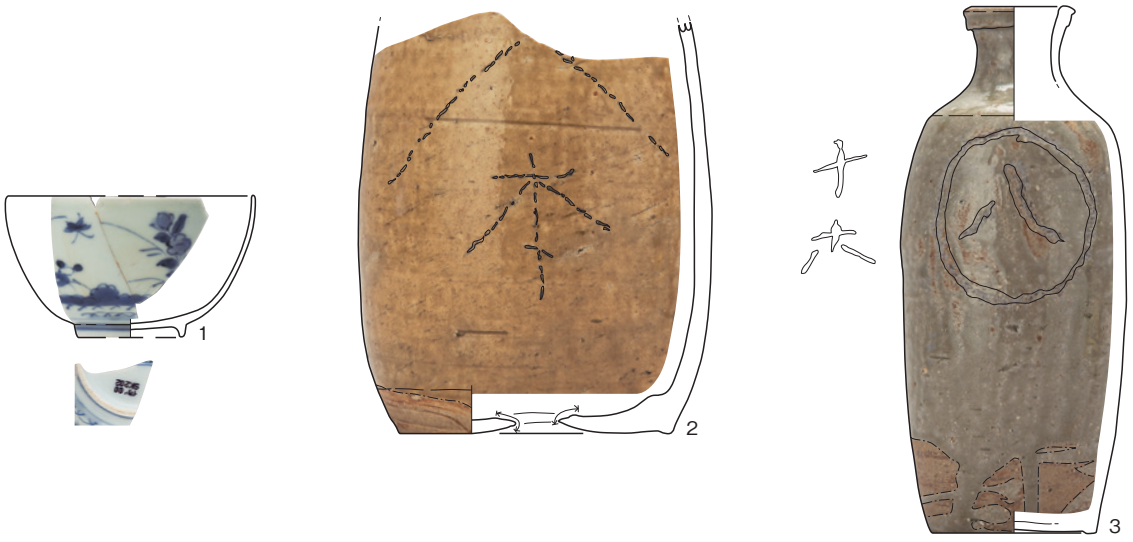
Ⅳ-8図　SK201(4)出土遺物



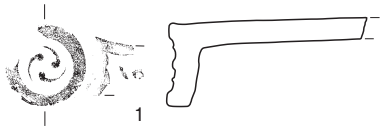
Ⅳ-9図　SK201(5)出土遺物



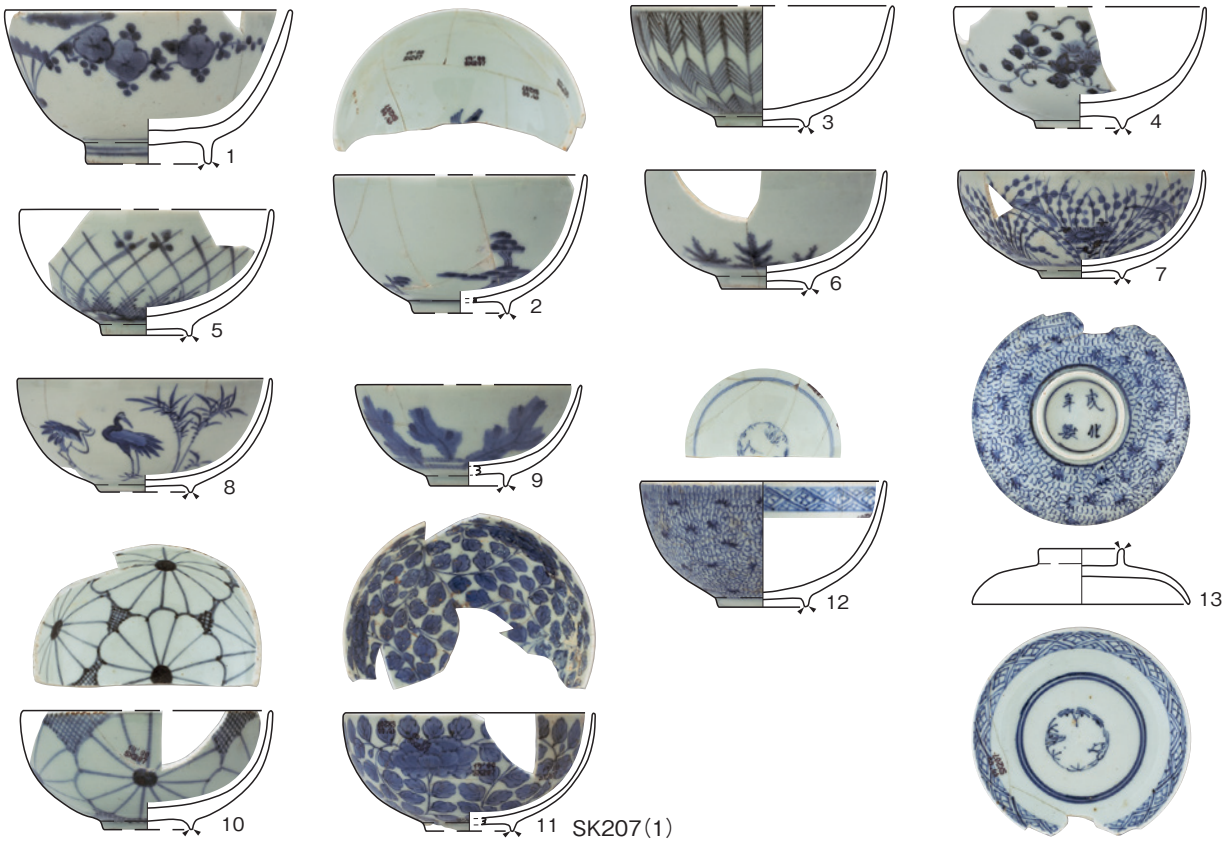
Ⅳ-10図　SK201(6)出土遺物



SK202



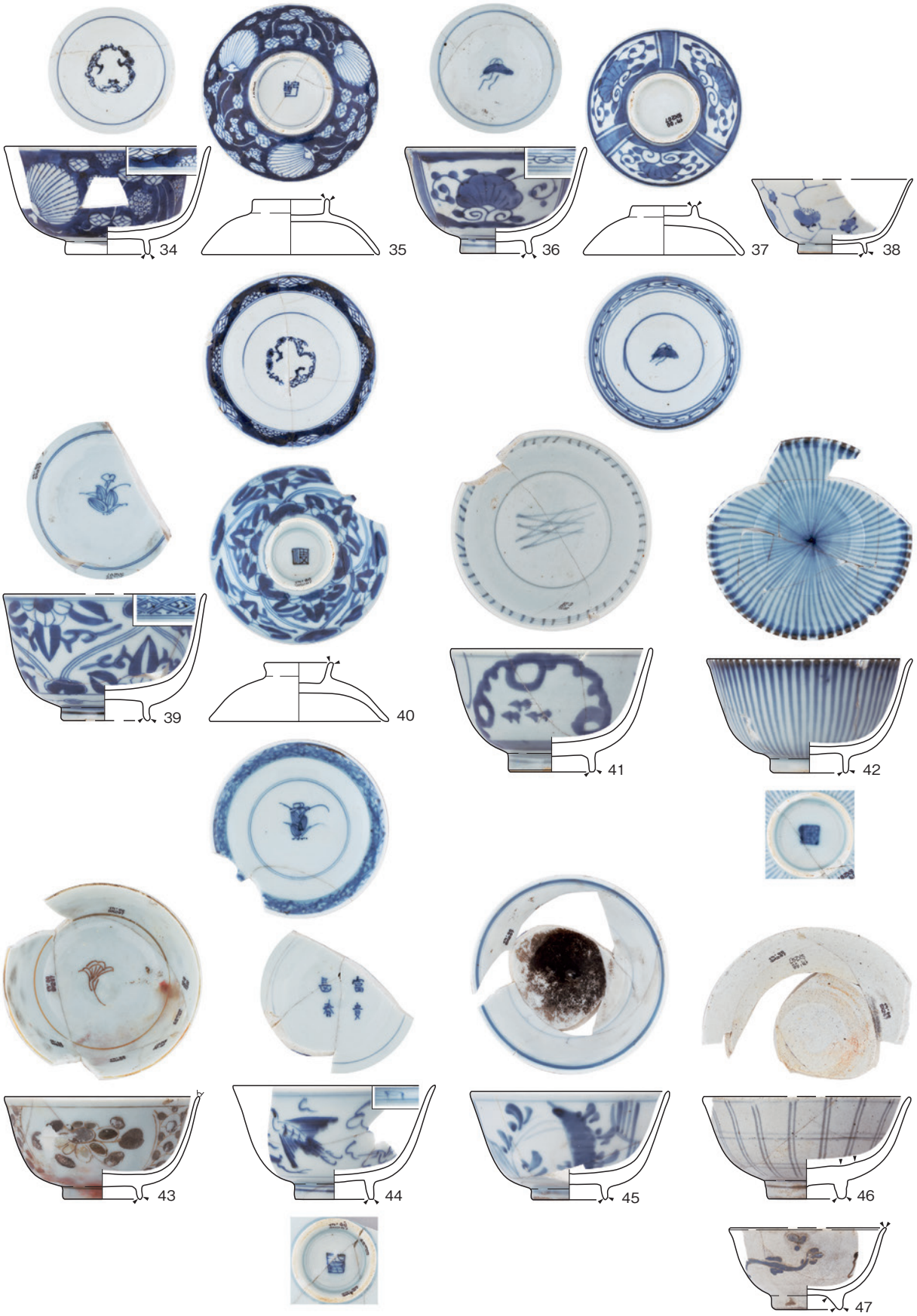
SK205



SK207(1)

Ⅳ-11図　SK202、SK205、SK207(1)出土遺物

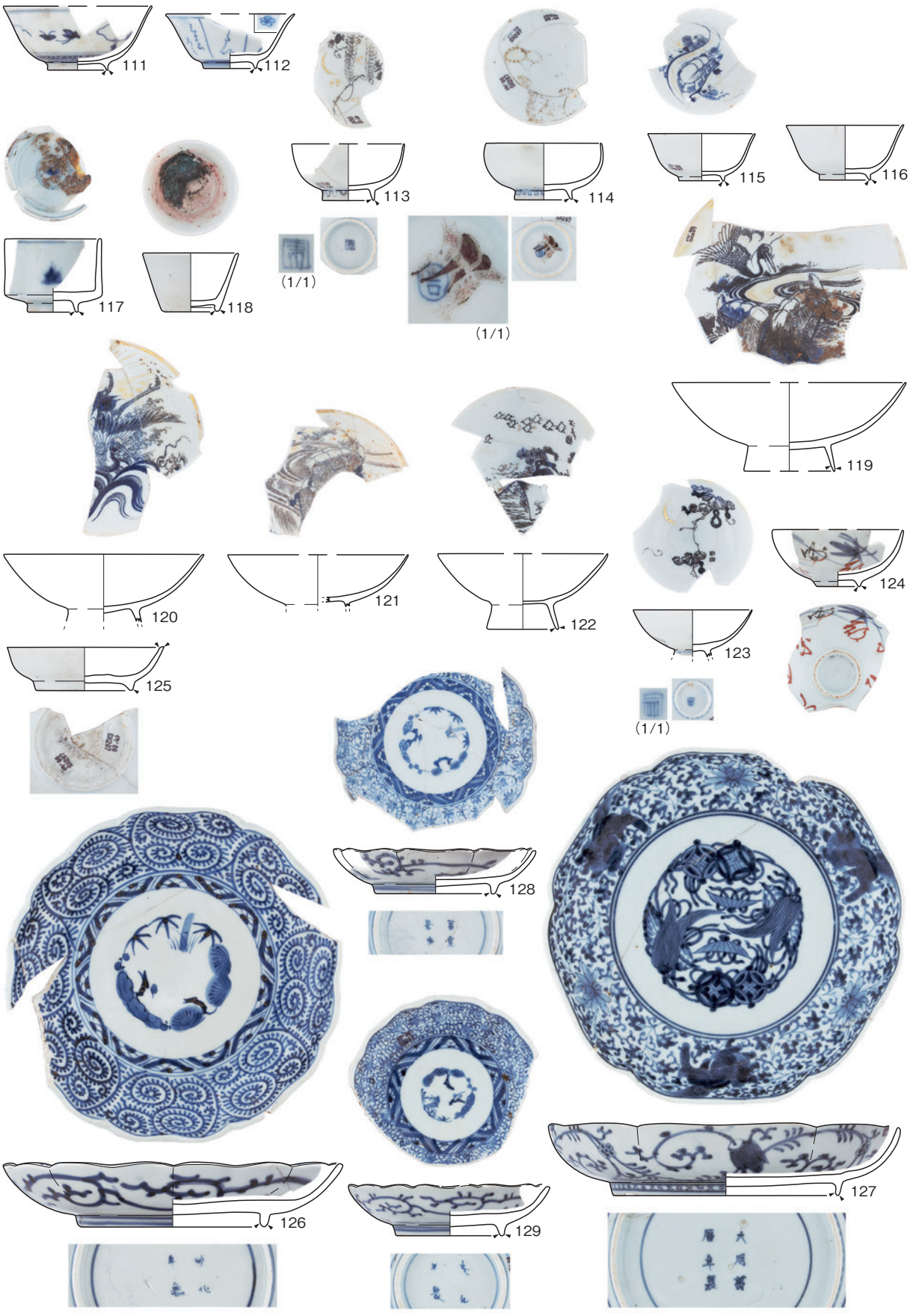
Ⅳ-12図　SK207(2)出土遺物



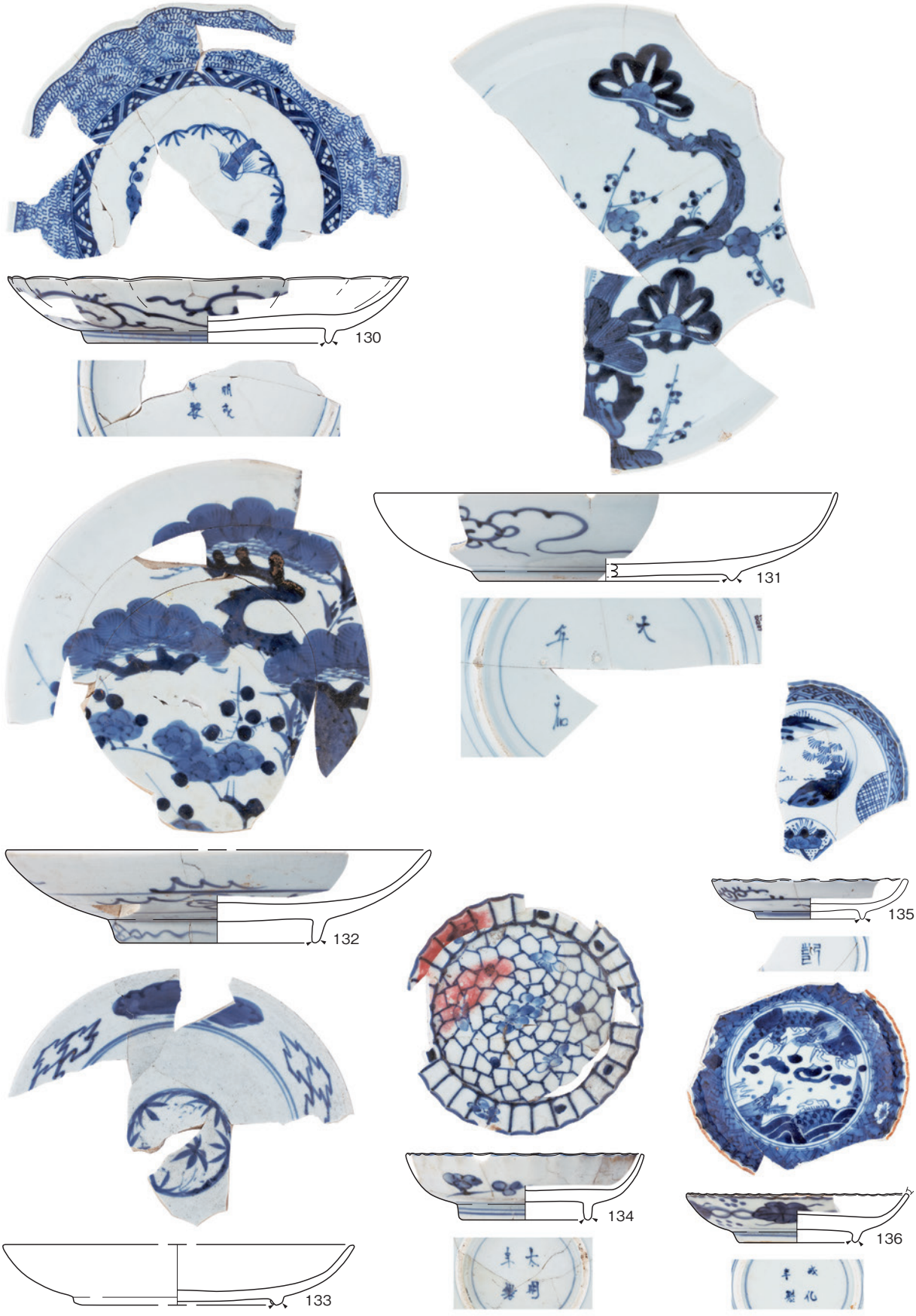
Ⅳ-13図　SK207(3)出土遺物

Ⅳ-14図　SK207(4)出土遺物

Ⅳ-15図　SK207(5)出土遺物

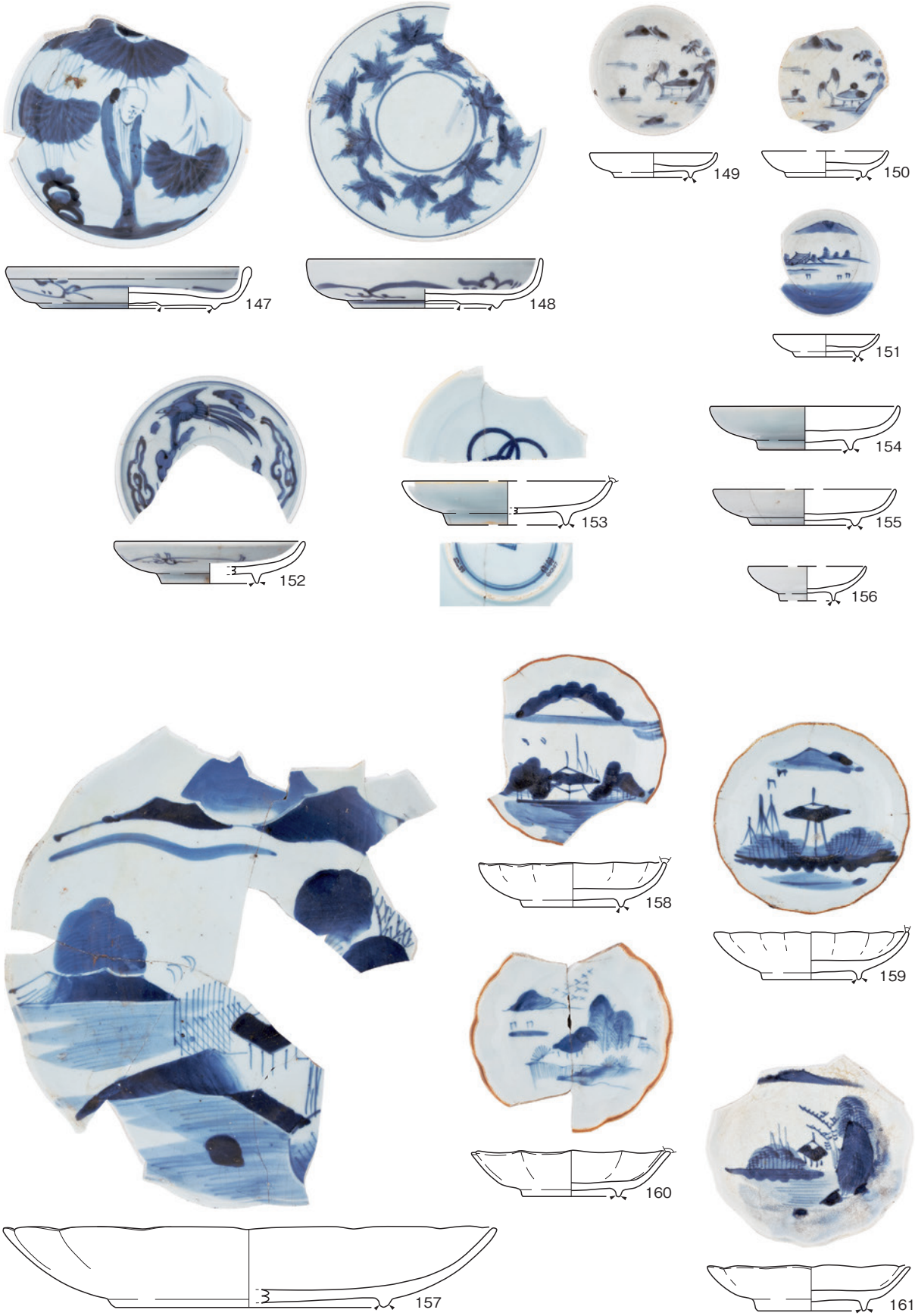


Ⅳ-16図　SK207(6)出土遺物



Ⅳ-17図　SK207(7)出土遺物

Ⅳ-18図　SK207(8)出土遺物

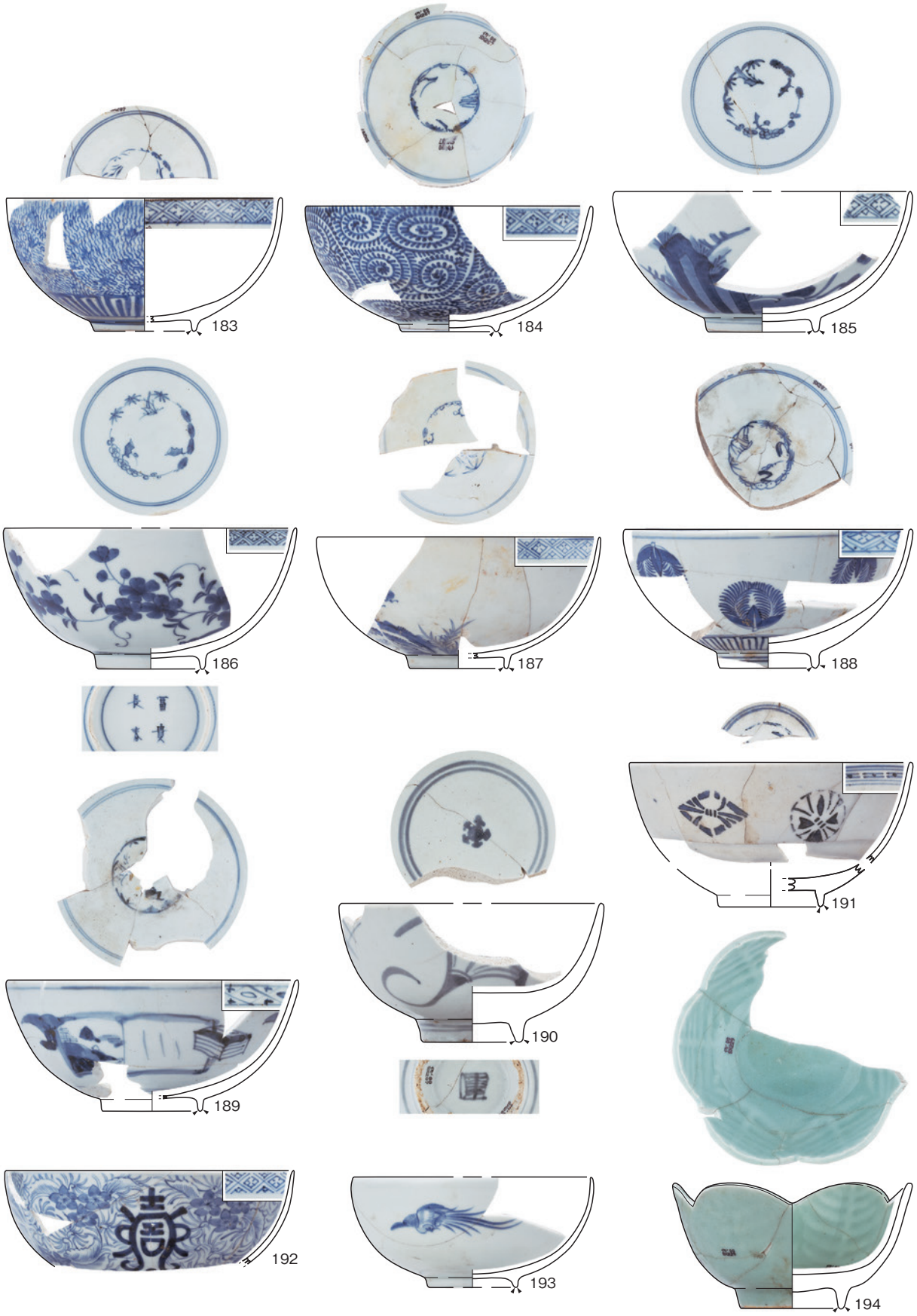


Ⅳ-19図　SK207(9)出土遺物

Ⅳ-20図　SK207(10)出土遺物

Ⅳ-21図　SK207(11)出土遺物

Ⅳ-22図　SK207(12)出土遺物

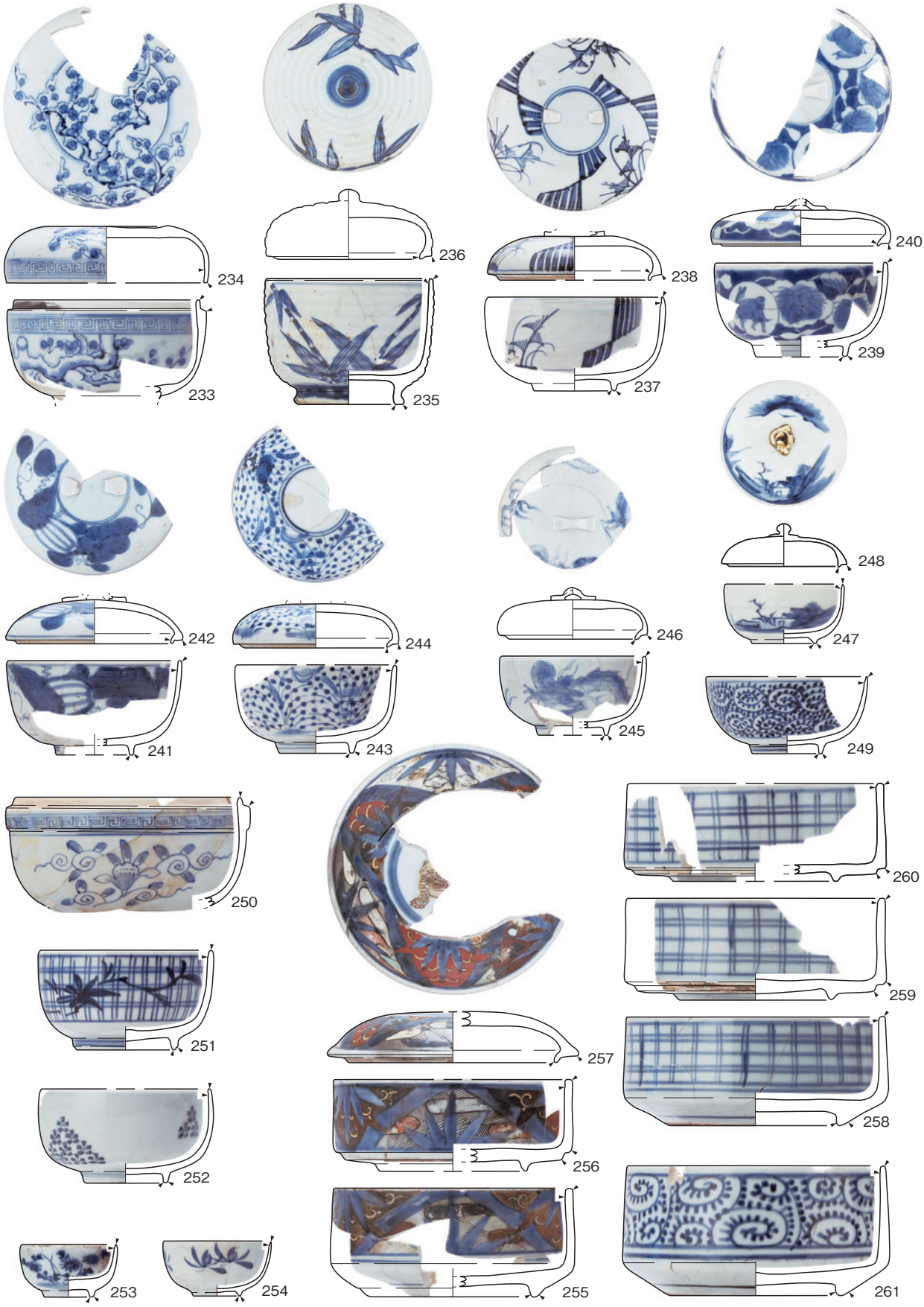


Ⅳ-23図　SK207(13)出土遺物

Ⅳ-24図　SK207(14)出土遺物

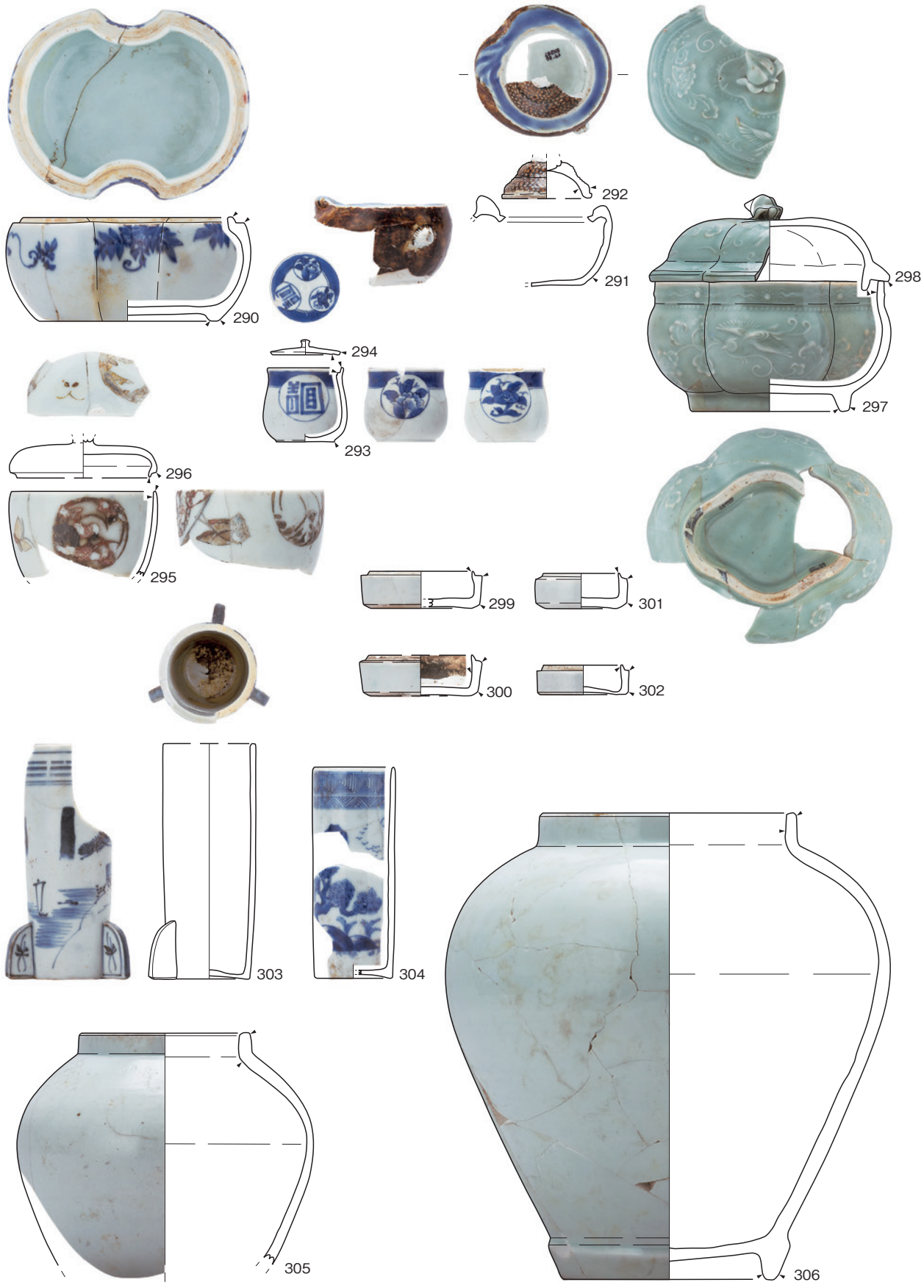
Ⅳ-25図　SK207(15)出土遺物

Ⅳ-26図　SK207(16)出土遺物

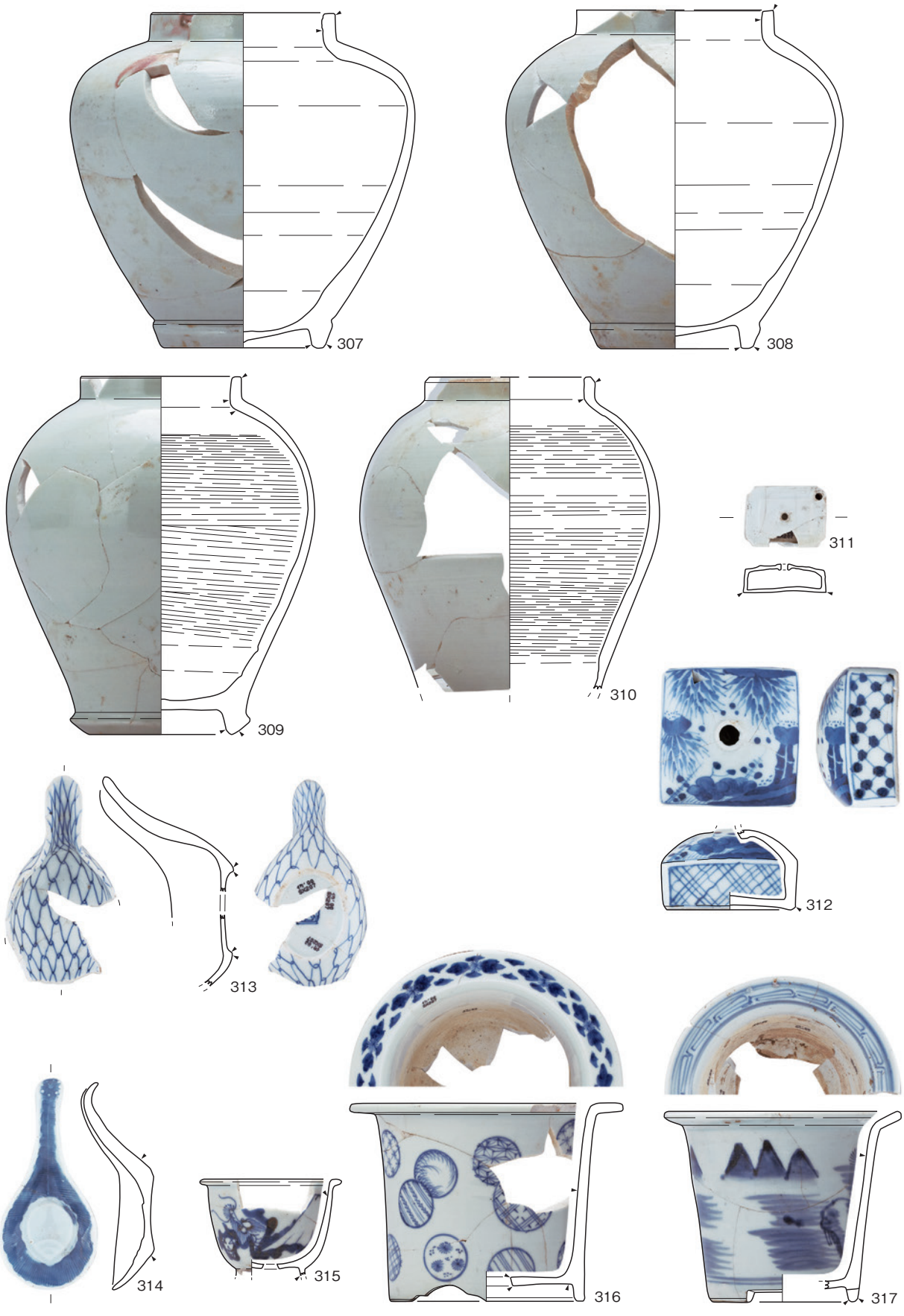


Ⅳ-27図　SK207(17)出土遺物

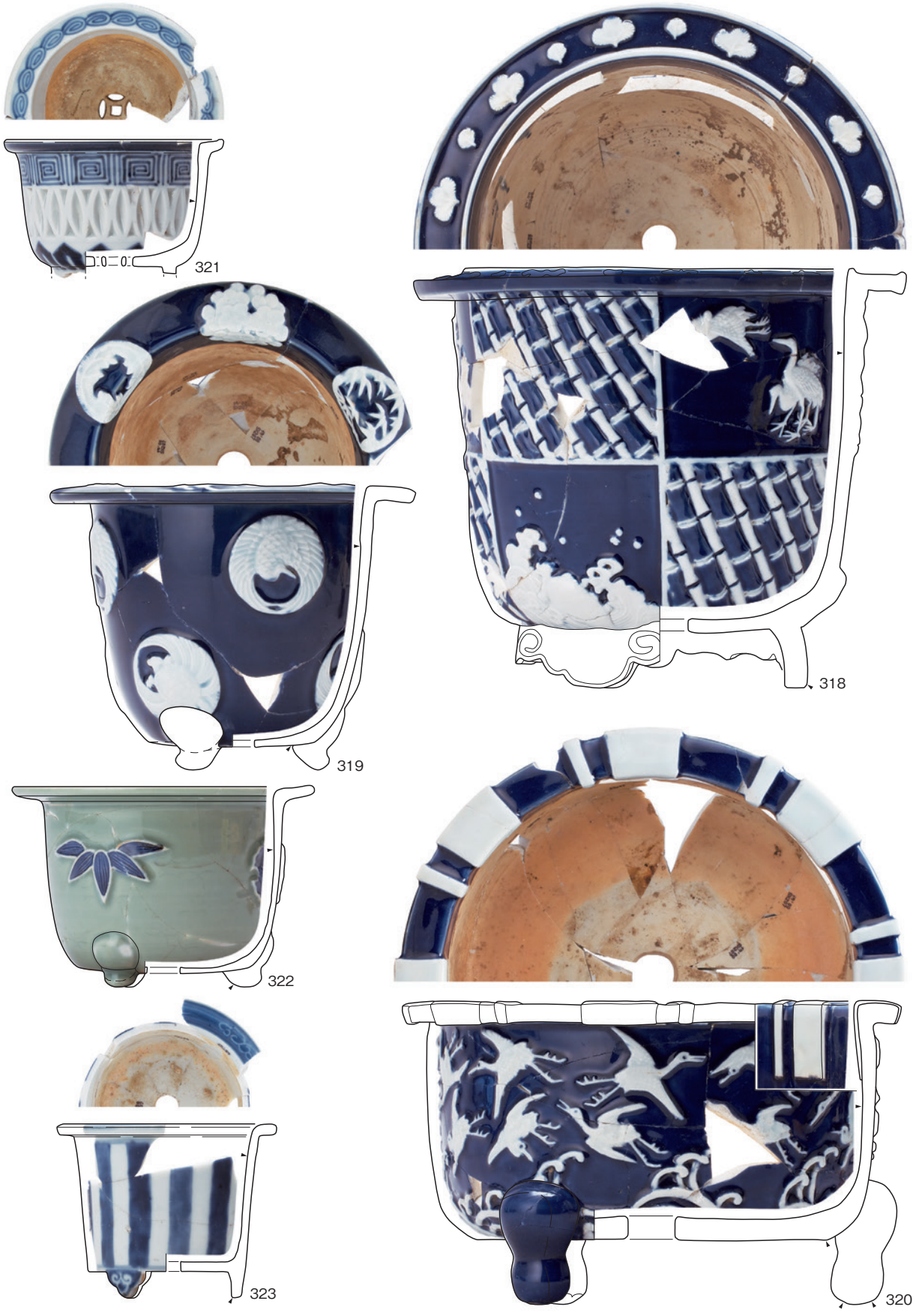
Ⅳ-28図　SK207(18)出土遺物



Ⅳ-29図　SK207(19)出土遺物



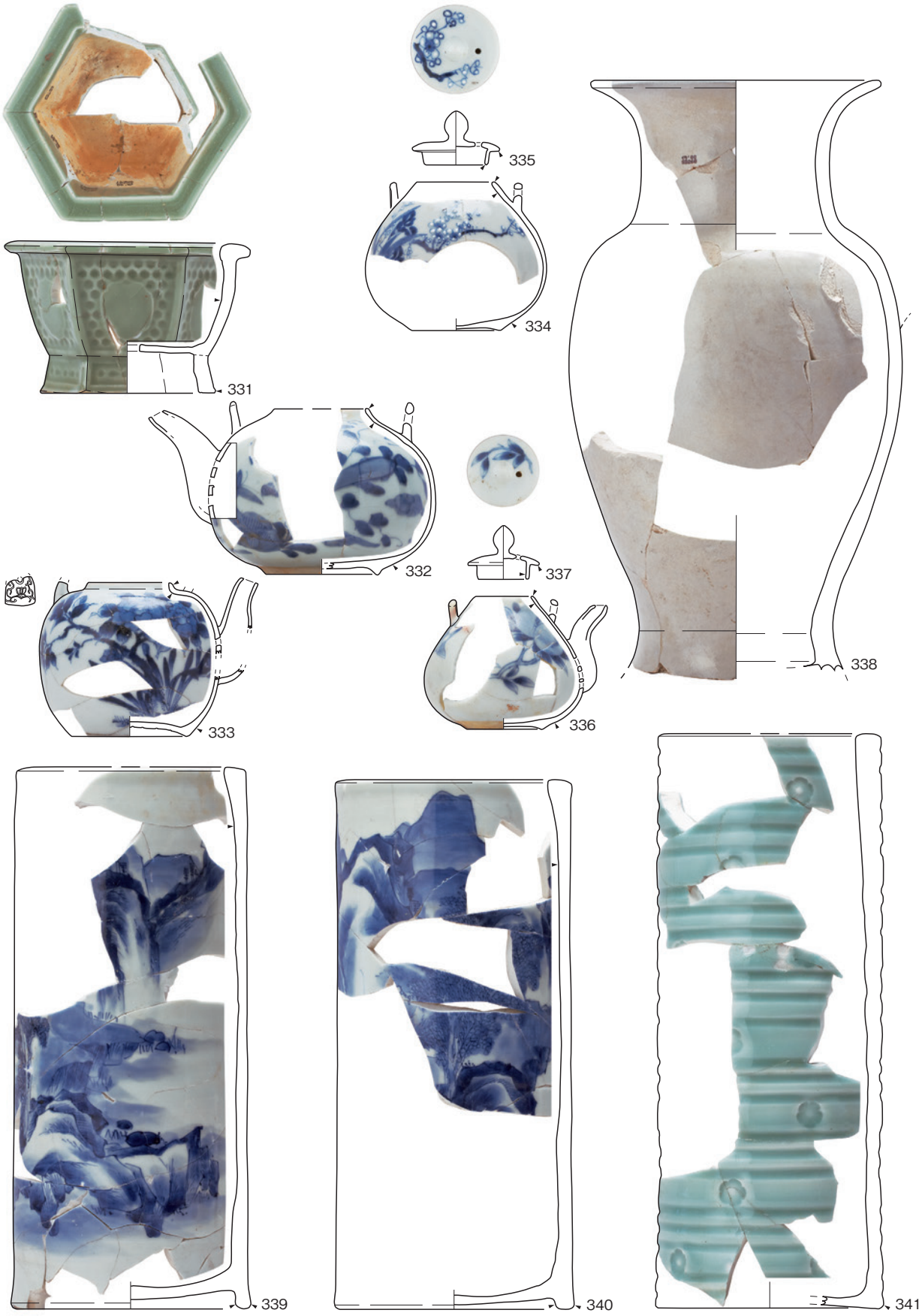
Ⅳ-30図　SK207(20)出土遺物



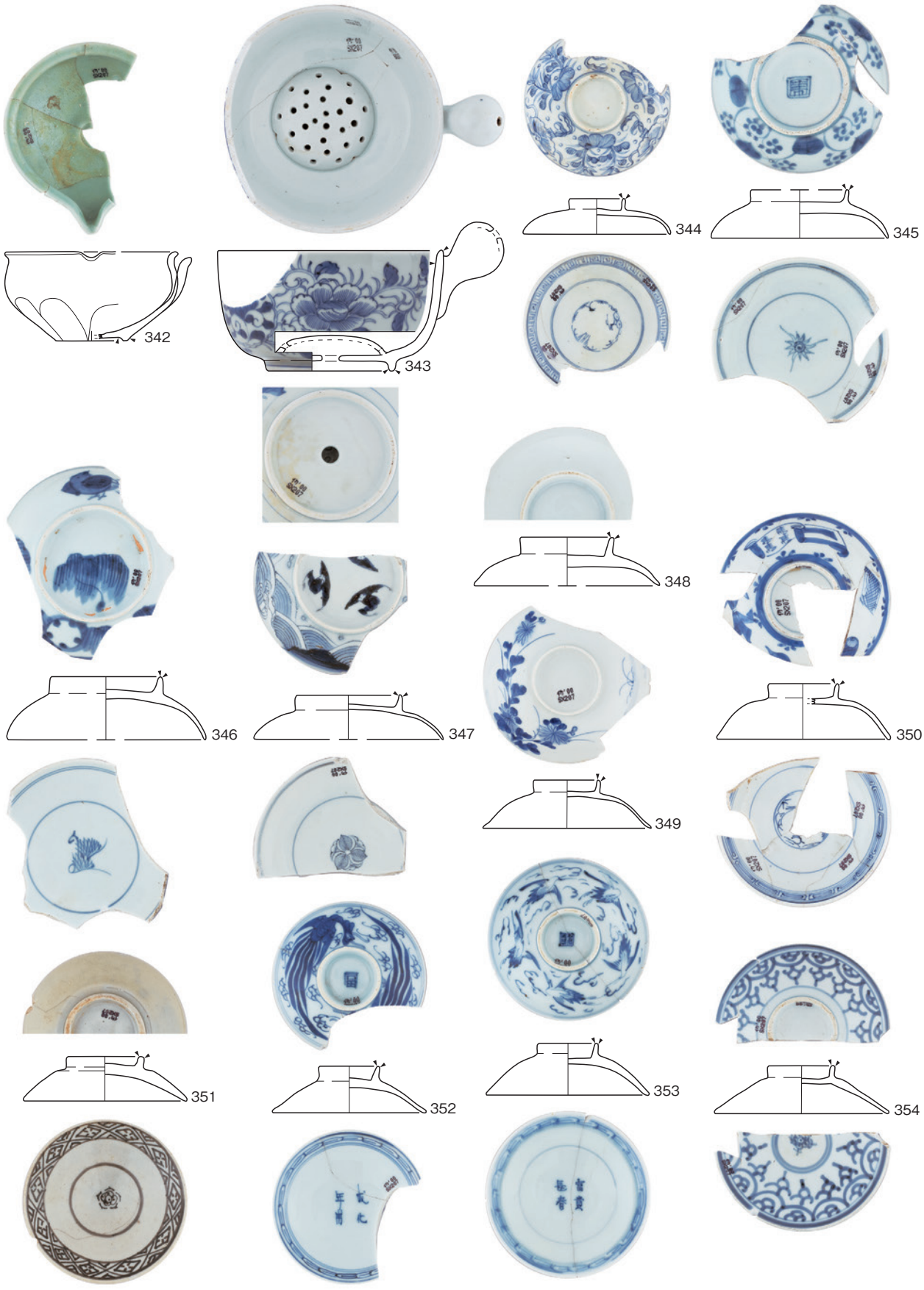
Ⅳ-31図　SK207(21)出土遺物

Ⅳ-32図　SK207(22)出土遺物

Ⅳ-33図　SK207(23)出土遺物

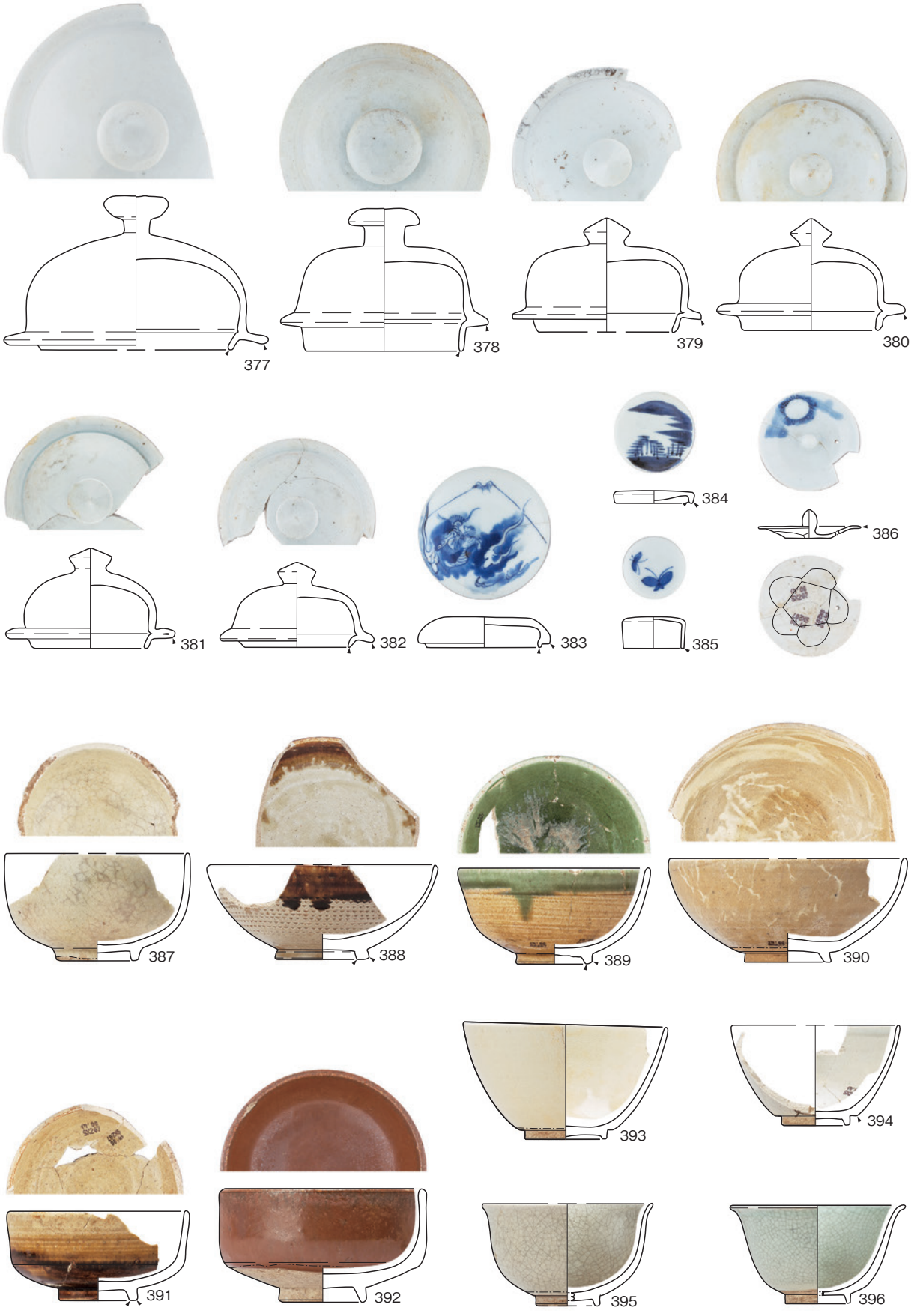


Ⅳ-34図　SK207(24)出土遺物

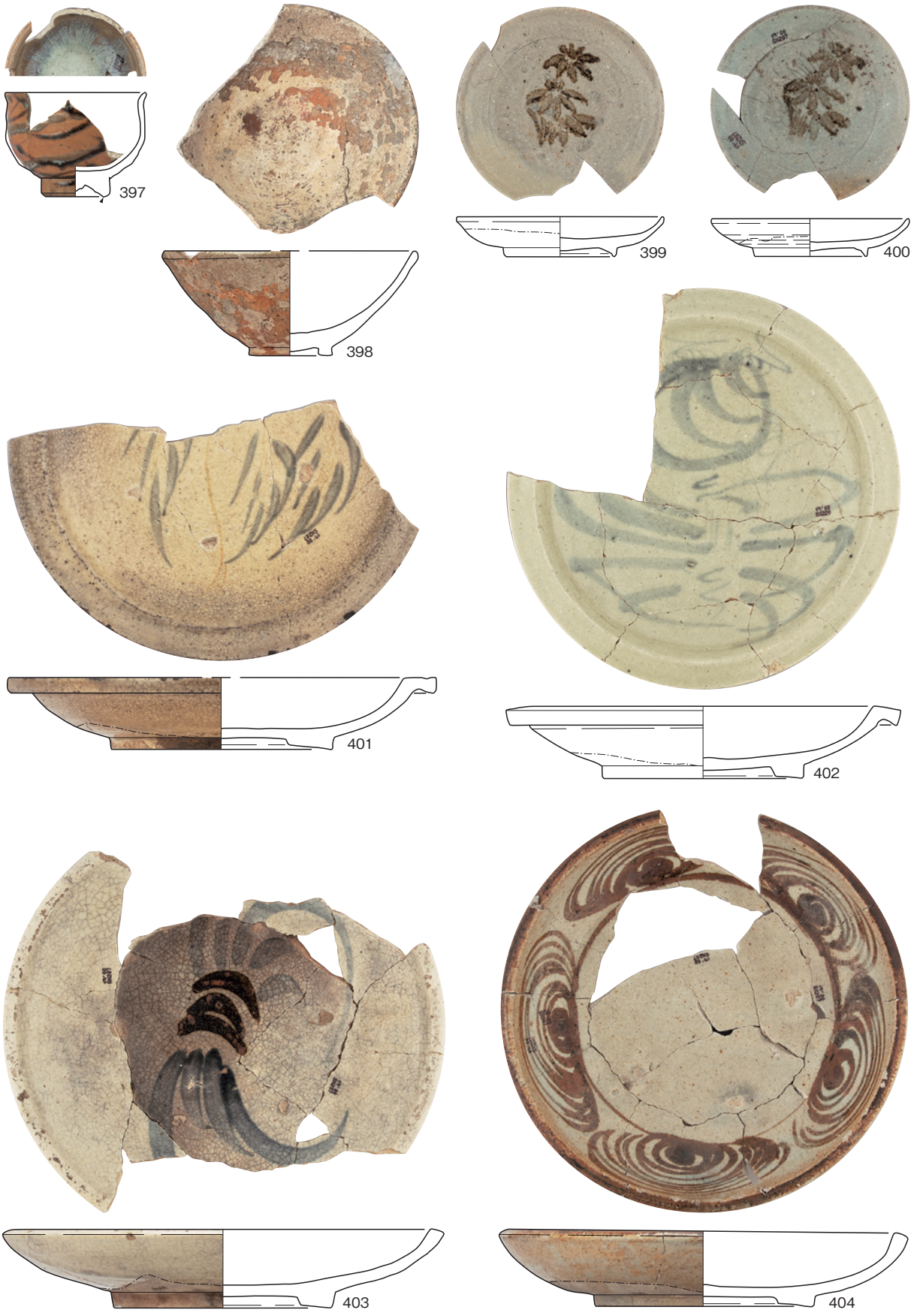


Ⅳ-35図　SK207(25)出土遺物

Ⅳ-36図　SK207(26)出土遺物



Ⅳ-37図　SK207(27)出土遺物



Ⅳ-38図　SK207(28)出土遺物

Ⅳ-39図　SK207(29)出土遺物

Ⅳ-40図　SK207(30)出土遺物

Ⅳ-41図　SK207(31)出土遺物

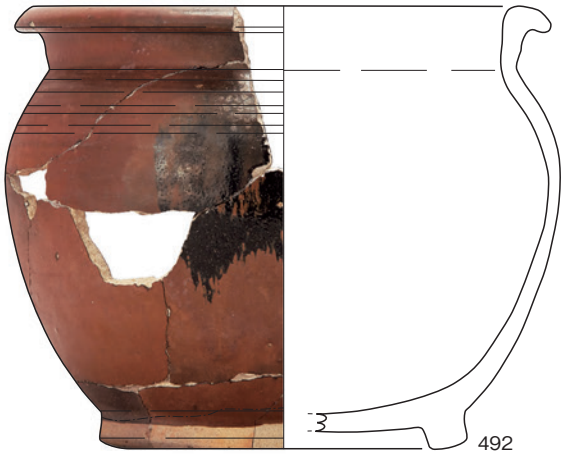
Ⅳ-42図　SK207(32)出土遺物

Ⅳ-43図　SK207(33)出土遺物

Ⅳ-44図　SK207(34)出土遺物

Ⅳ-45図　SK207(35)出土遺物

Ⅳ-46図　SK207(36)出土遺物

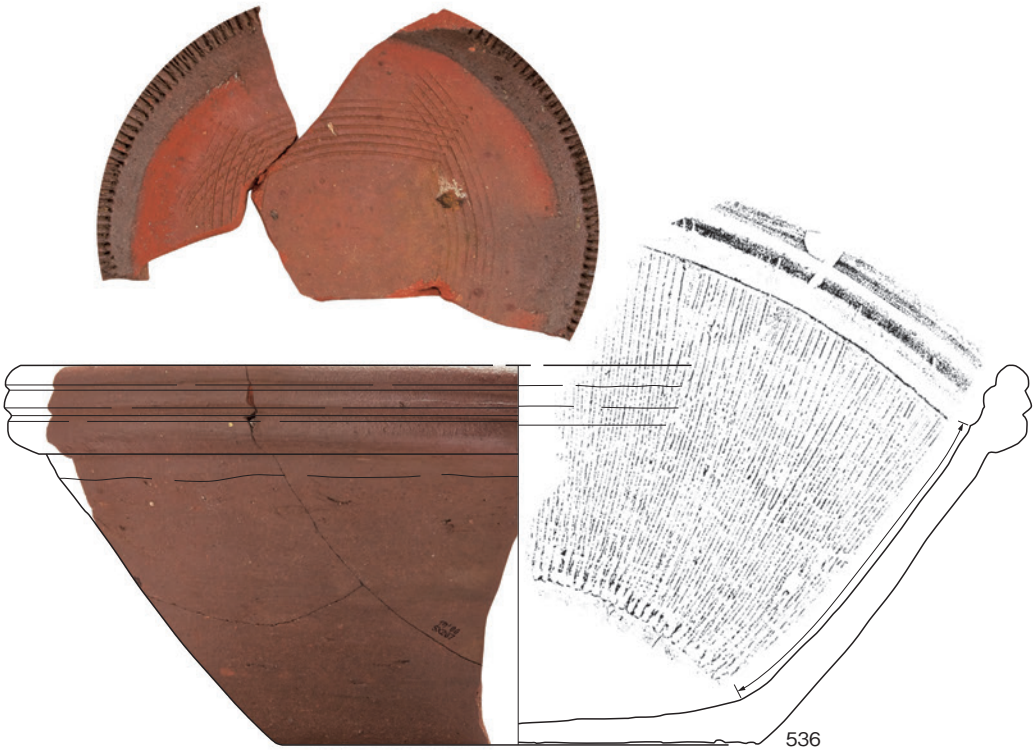


Ⅳ-47図　SK207(37)出土遺物

Ⅳ-48図　SK207(38)出土遺物

Ⅳ-49図　SK207(39)出土遺物

Ⅳ-50図　SK207(40)出土遺物



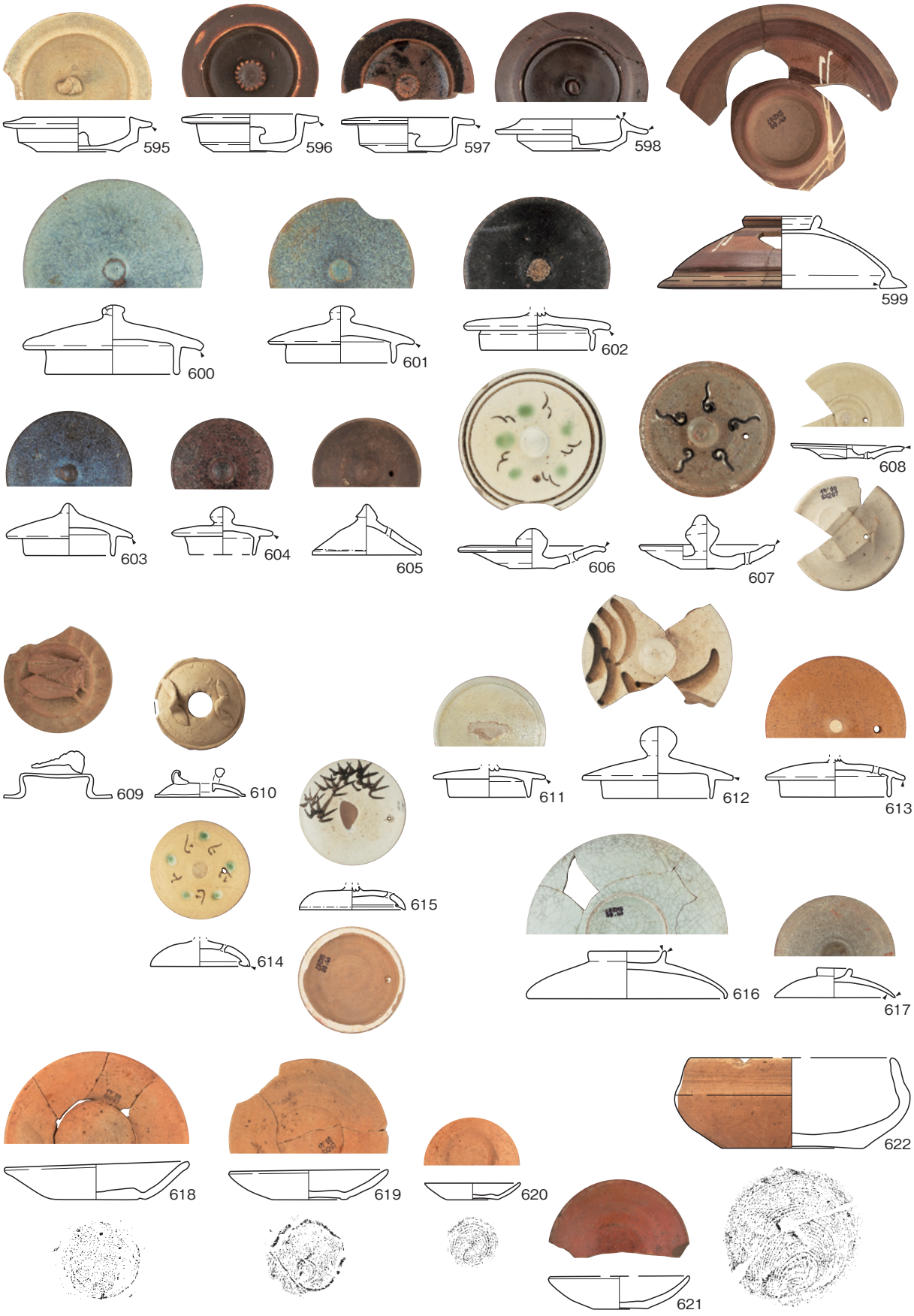
Ⅳ-51図　SK207(41)出土遺物

Ⅳ-52図　SK207(42)出土遺物

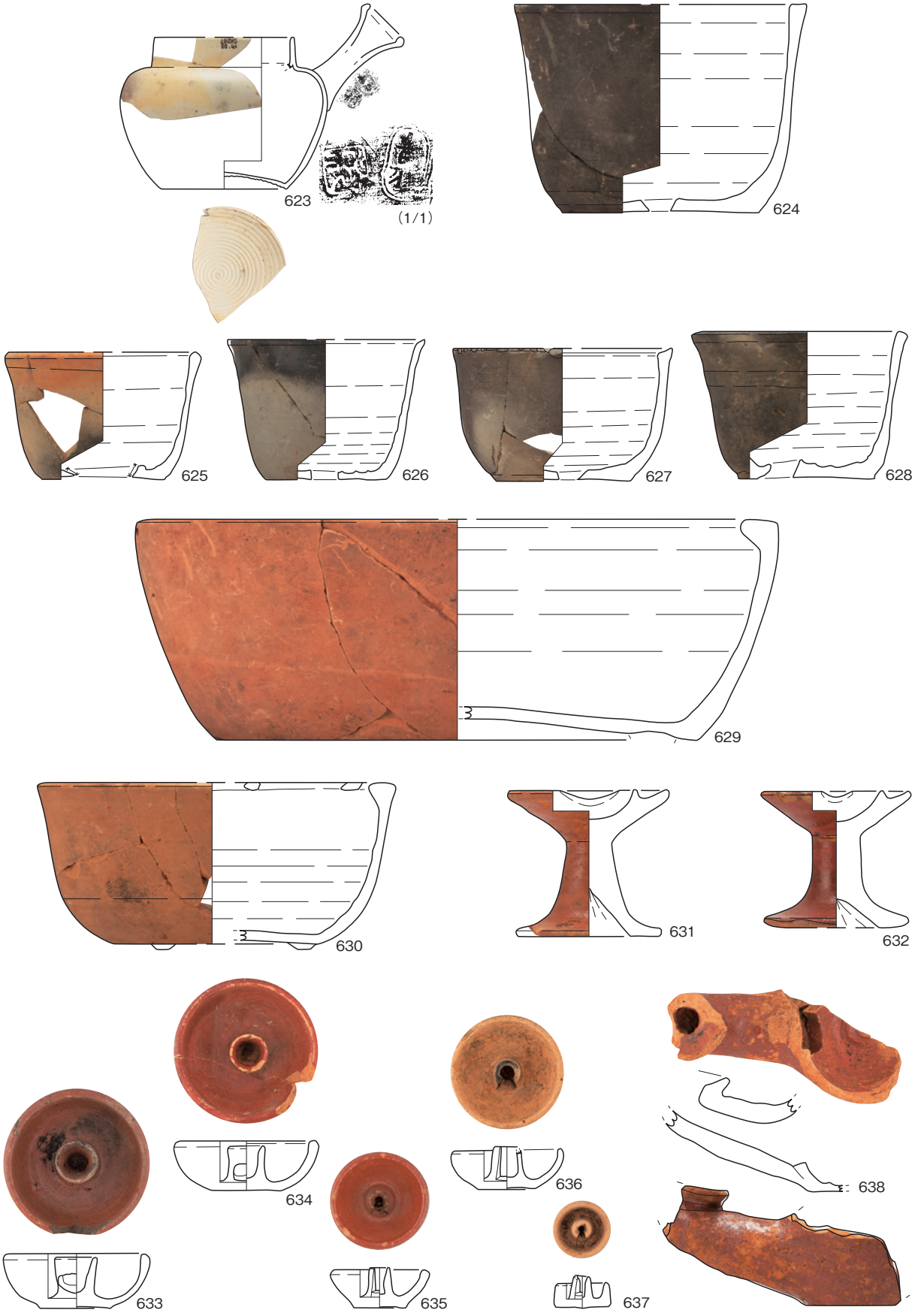
Ⅳ-53図　SK207(43)出土遺物

Ⅳ-54図　SK207(44)出土遺物

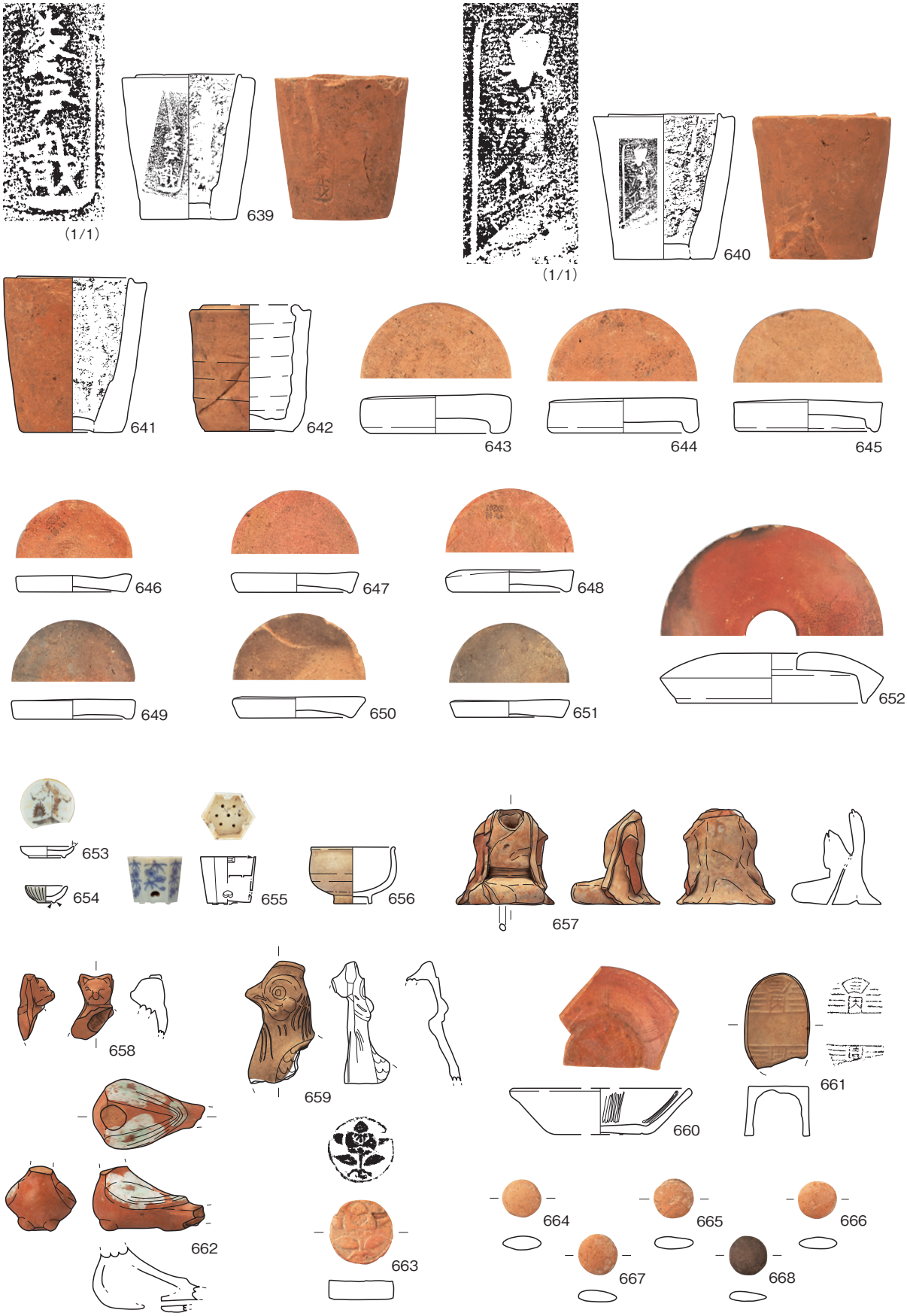
Ⅳ-55図　SK207(45)出土遺物



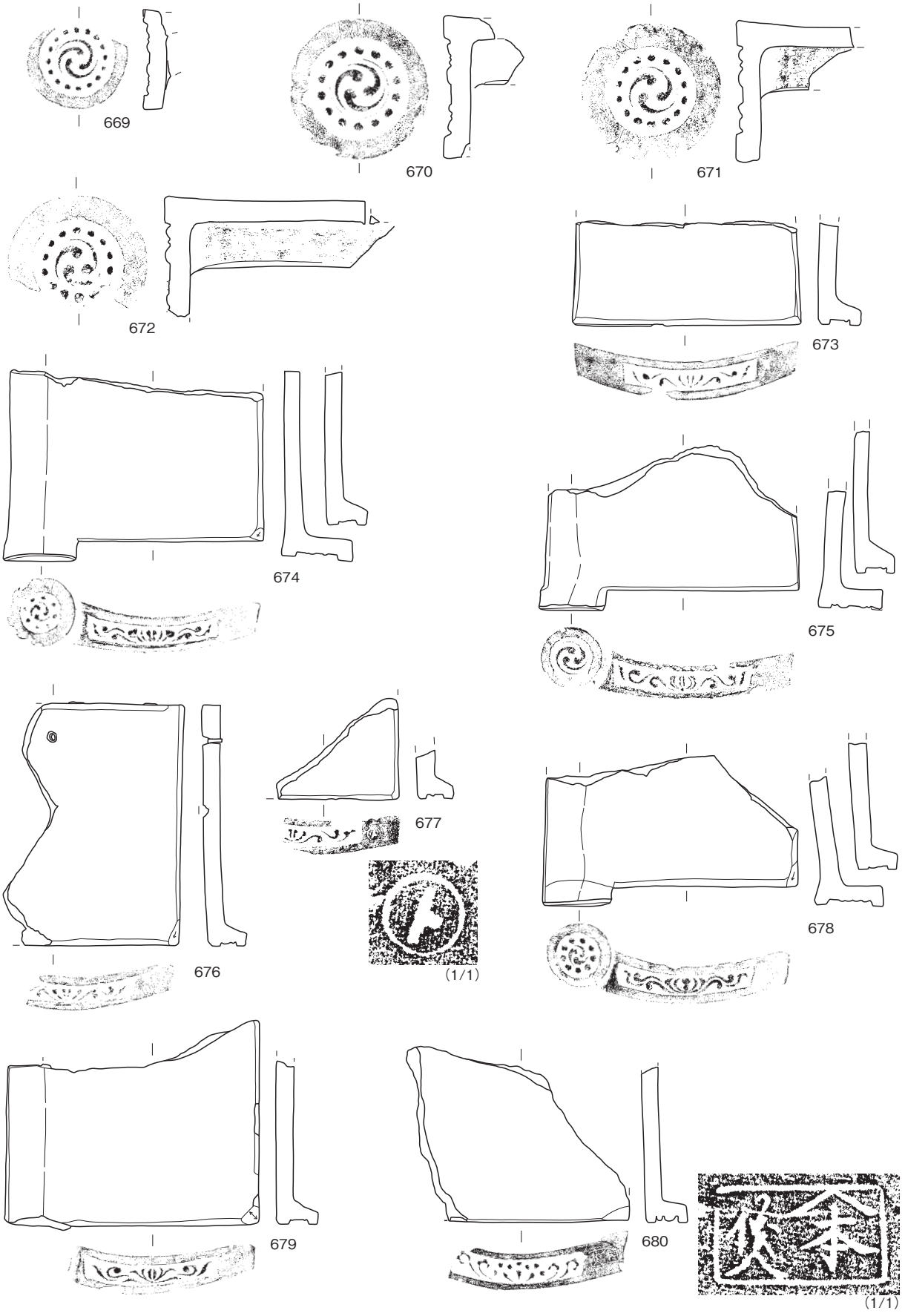
Ⅳ-56図　SK207(46)出土遺物



Ⅳ-57図　SK207(47)出土遺物



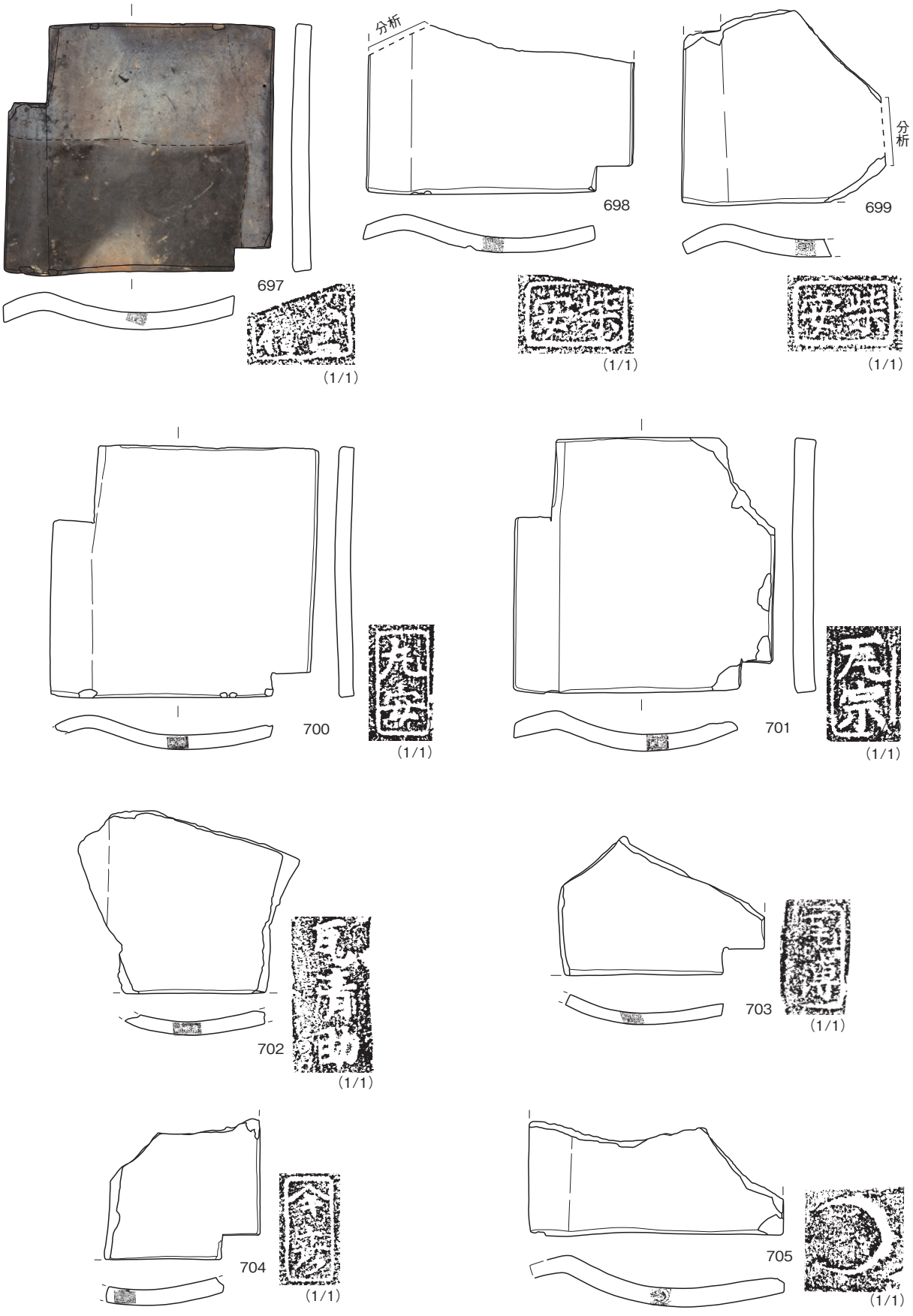
Ⅳ-58図　SK207(48)出土遺物



Ⅳ-59図　SK207(49)出土遺物

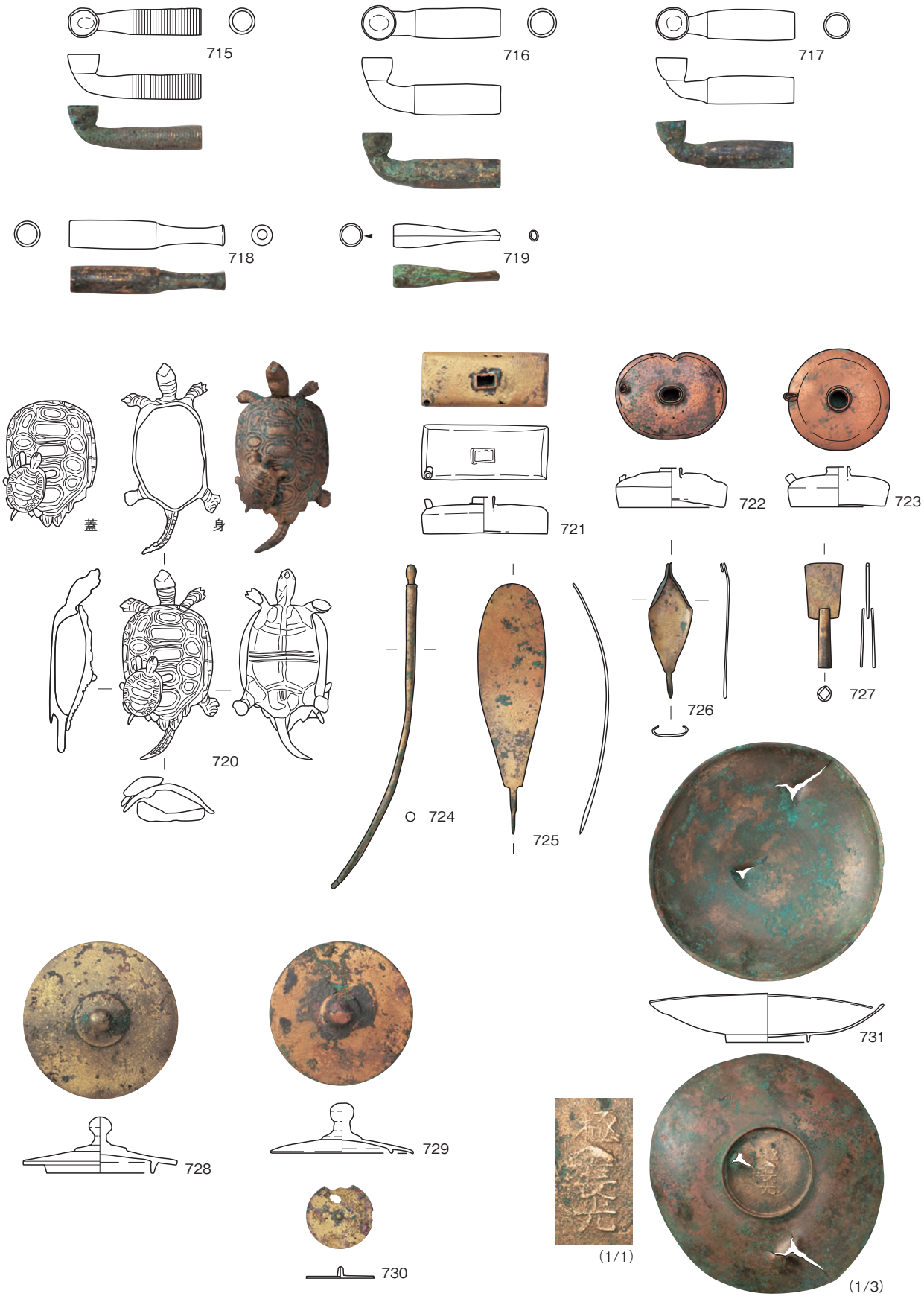
Ⅳ-60図　SK207(50)出土遺物

Ⅳ-61図　SK207(51)出土遺物

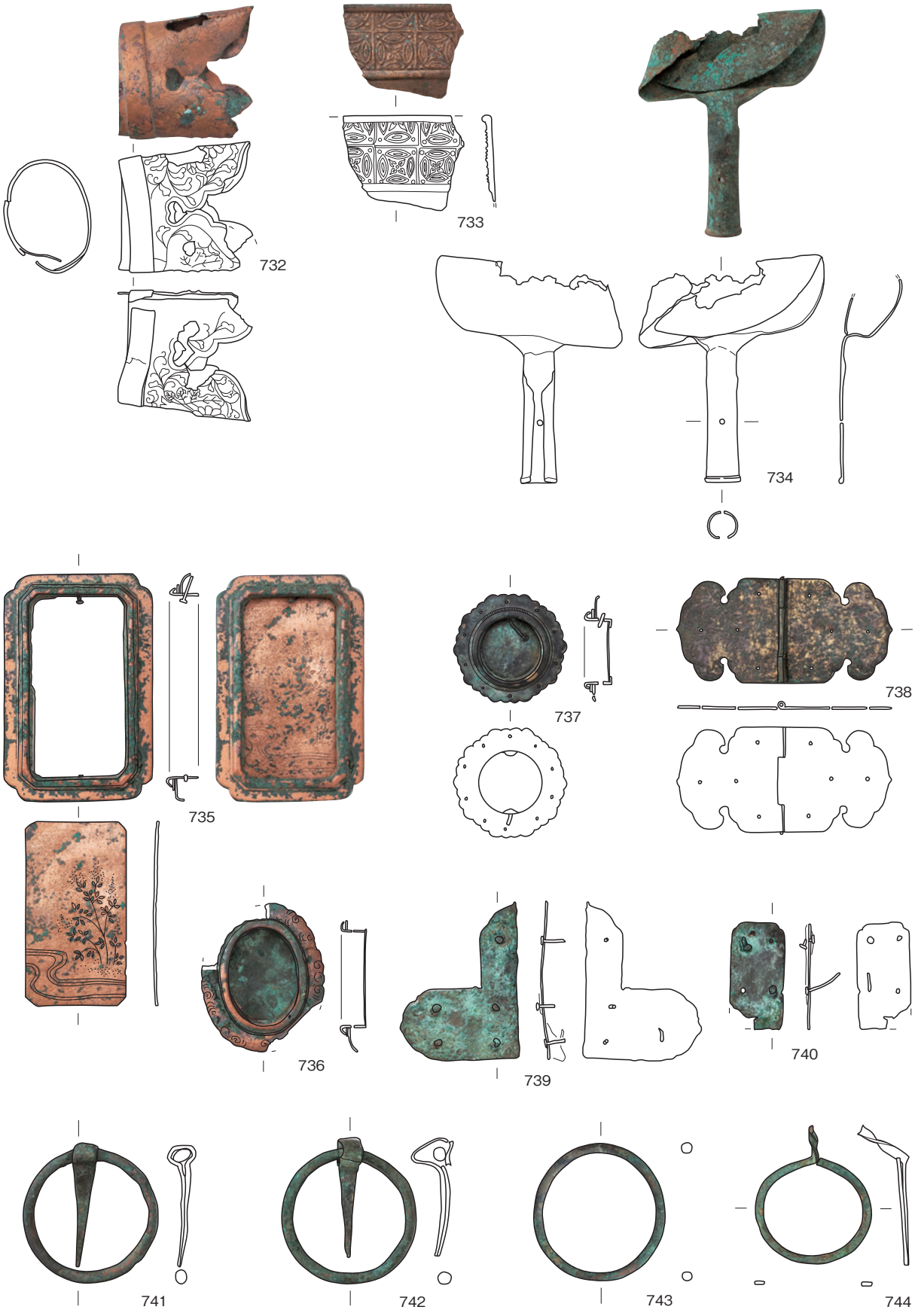


Ⅳ-62図　SK207(52)出土遺物

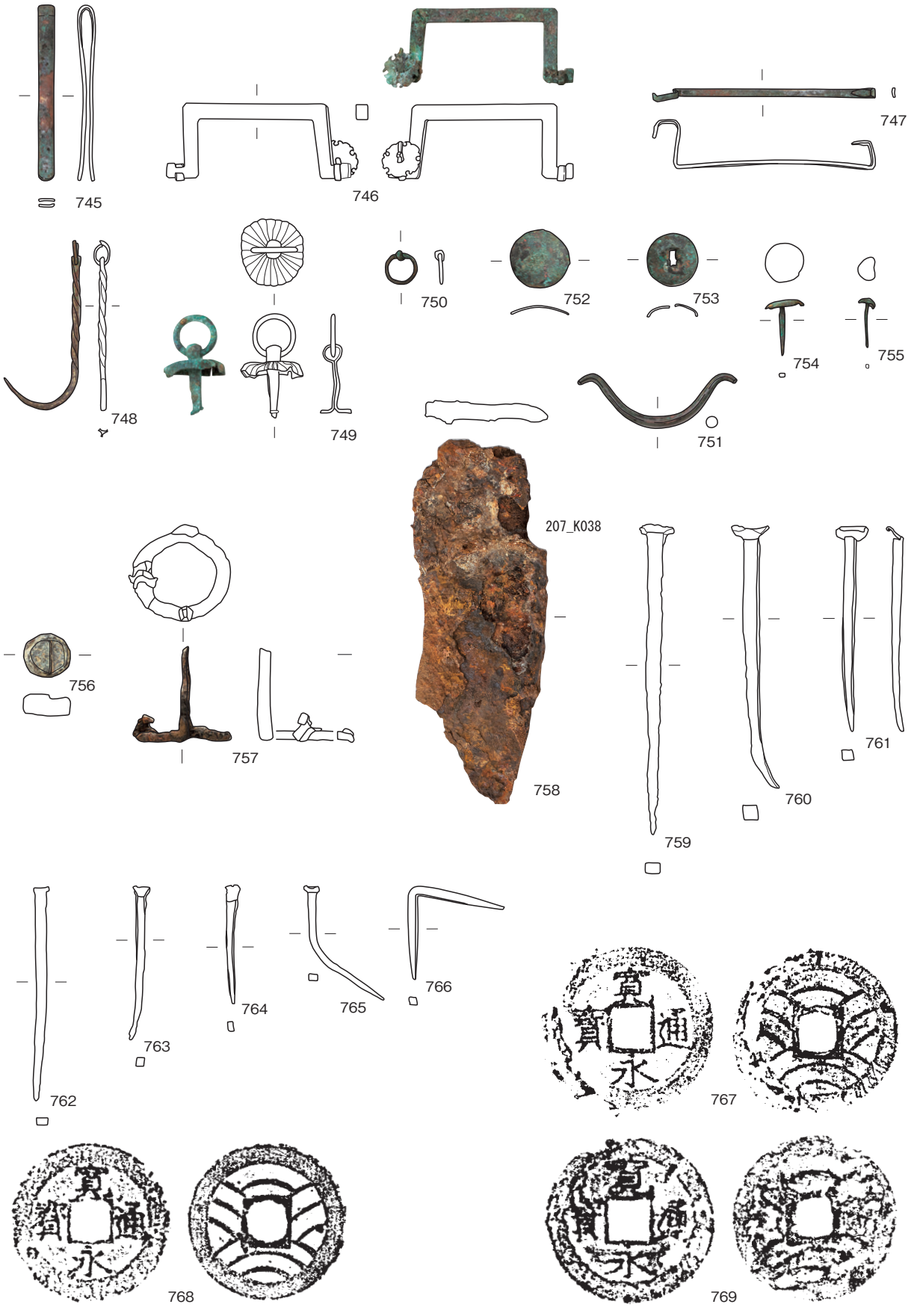
Ⅳ-63図　SK207(53)出土遺物



Ⅳ-64図　SK207(54)出土遺物

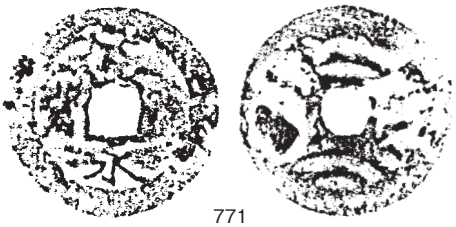


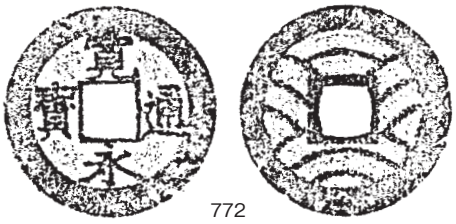
Ⅳ-65図　SK207(55)出土遺物

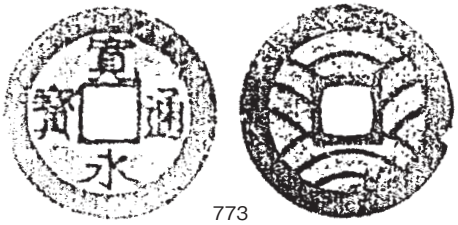


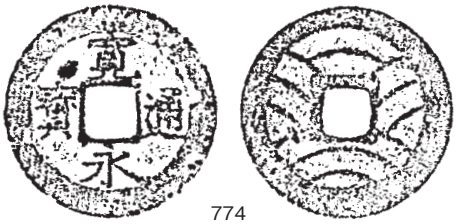
Ⅳ-66図　SK207(56)出土遺物

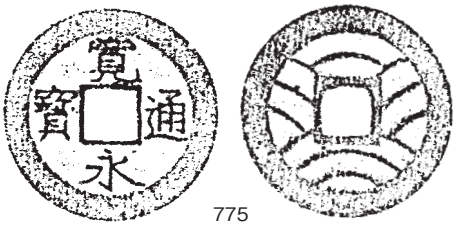
770

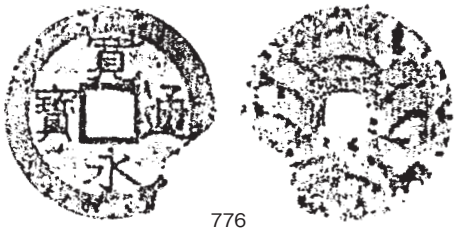

771

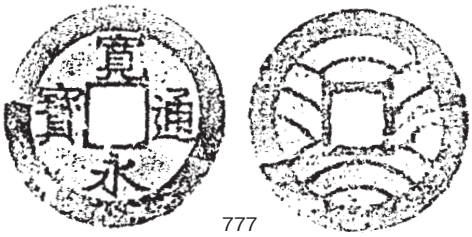

772

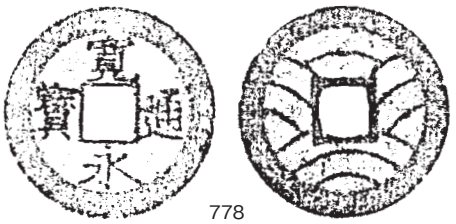

773

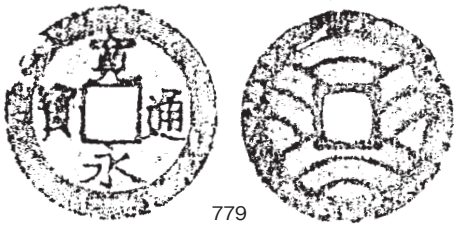

774

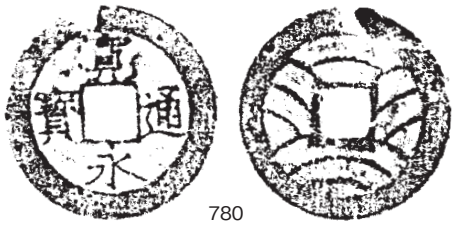

775

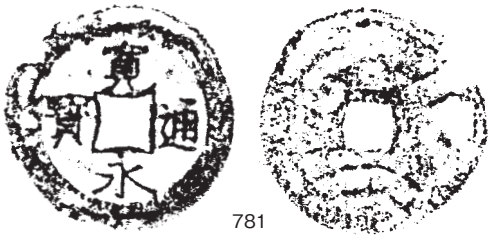

776


777

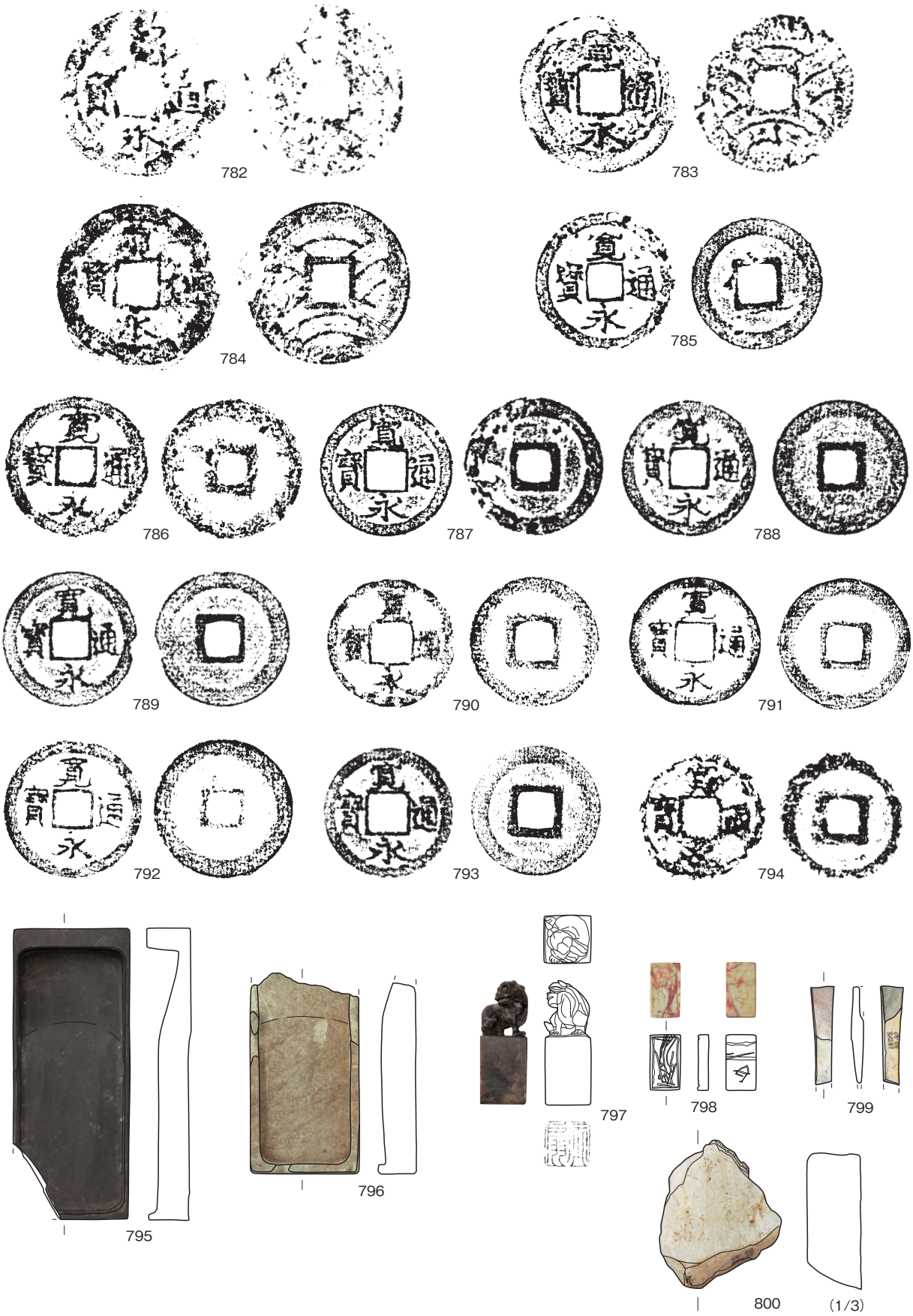

778


779

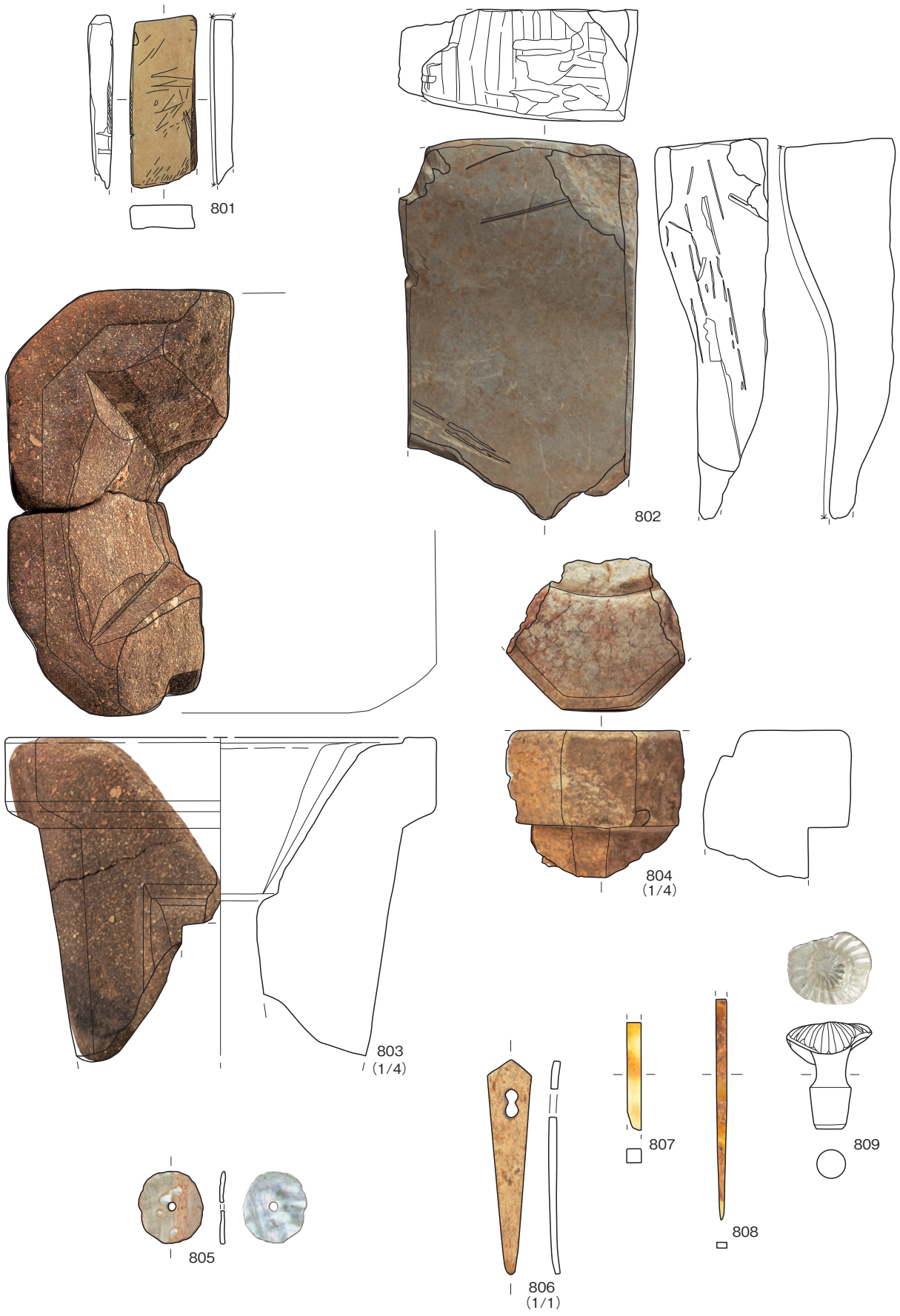

780


781

Ⅳ-67図　SK207(57)出土遺物



Ⅳ-68図　SK207(58)出土遺物



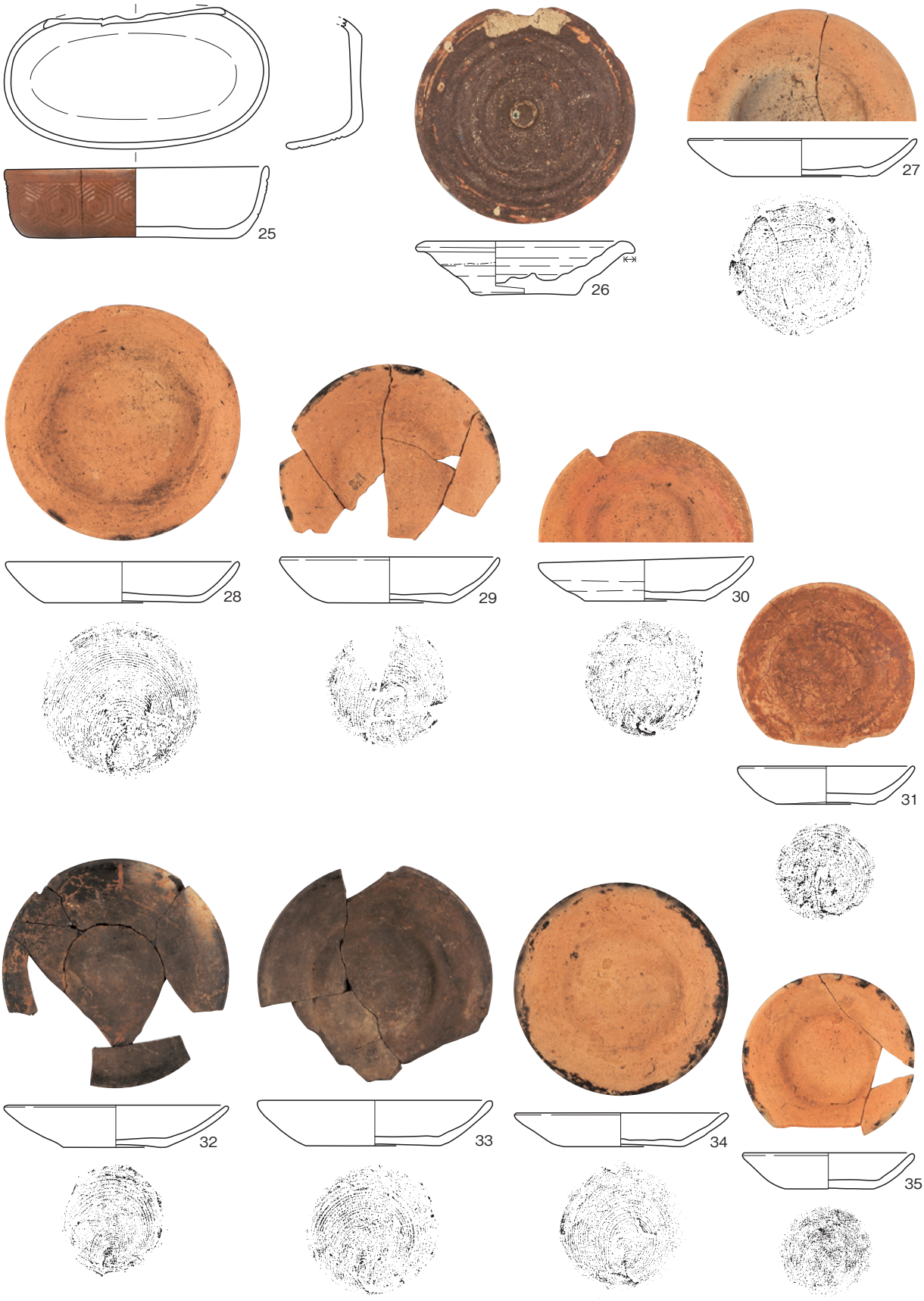
Ⅳ-69図　SK207(59)出土遺物

SK208

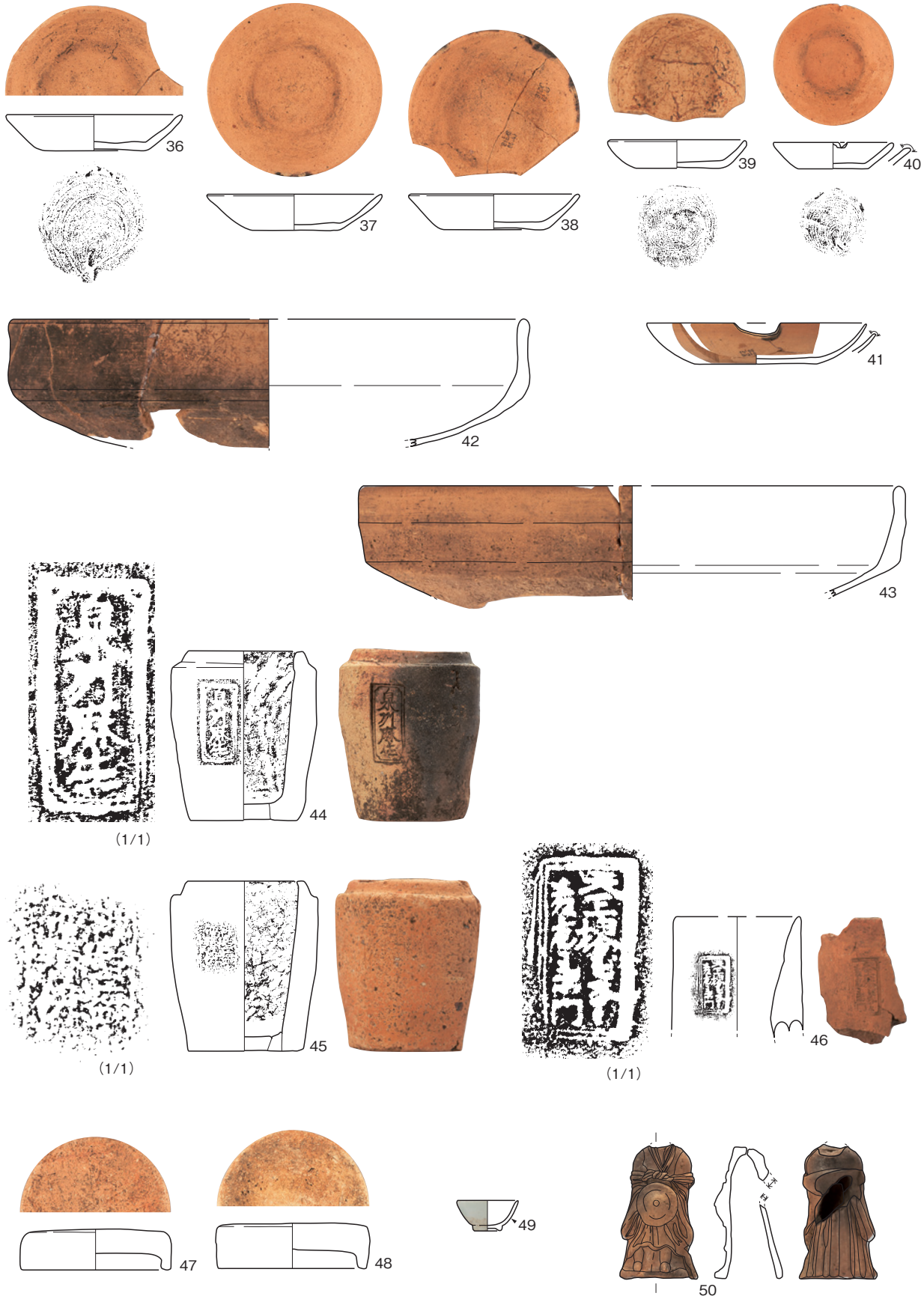
SD214

Ⅳ-70図　SK208、SD214出土遺物

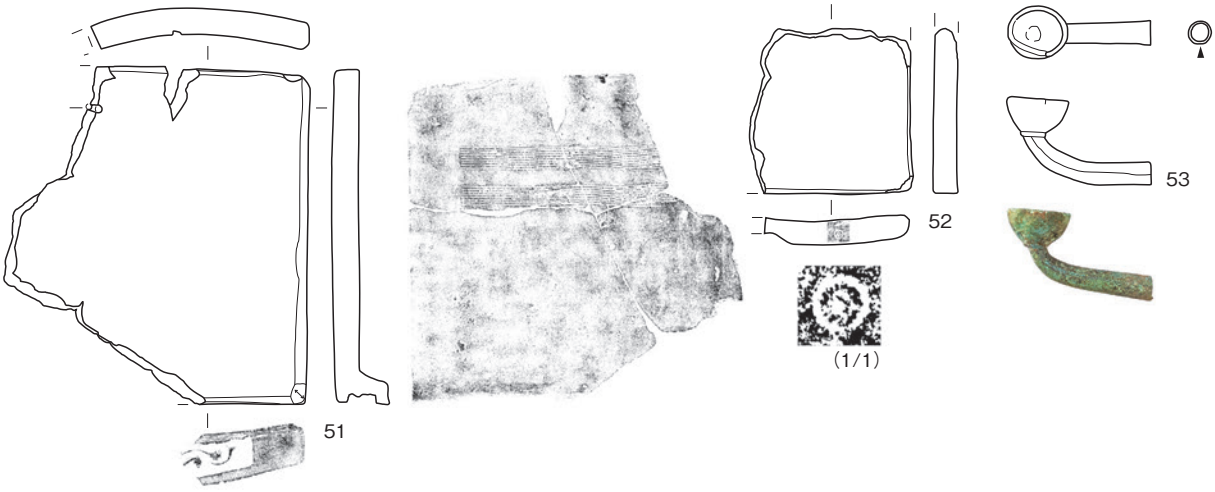
Ⅳ-71図　SK218(1)出土遺物



Ⅳ-72図　SK218(2)出土遺物



Ⅳ-73図　SK218(3)出土遺物

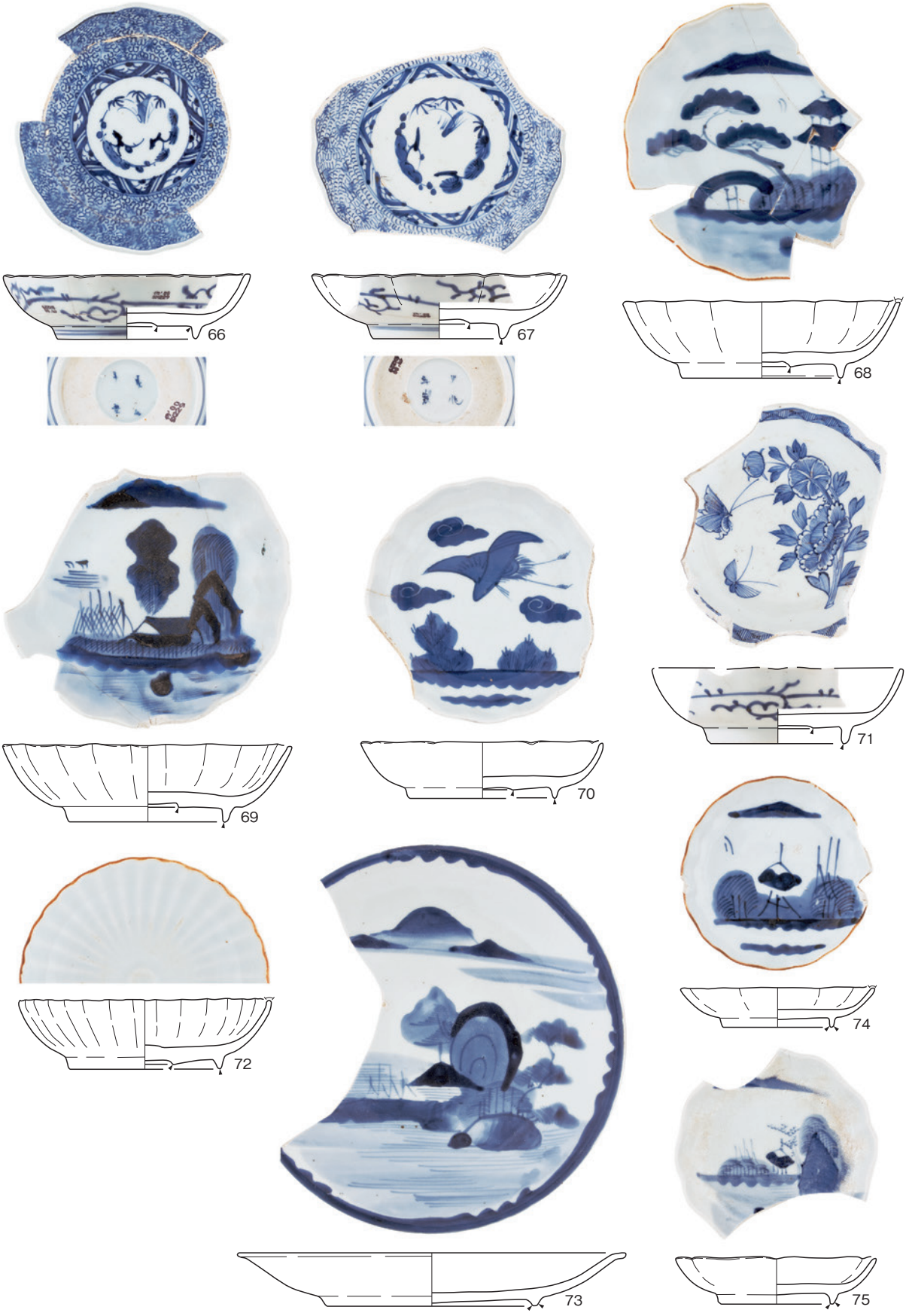


SK218(4)

Ⅳ-74図　SK218(4)、SK229(1)出土遺物

Ⅳ-75図　SK229(2)出土遺物

Ⅳ-76図　SK229(3)出土遺物



Ⅳ-77図　SK229(4)出土遺物

Ⅳ-78図　SK229(5)出土遺物

Ⅳ-79図　SK229(6)出土遺物

Ⅳ-80図　SK229(7)出土遺物

Ⅳ-81図　SK229(8)出土遺物

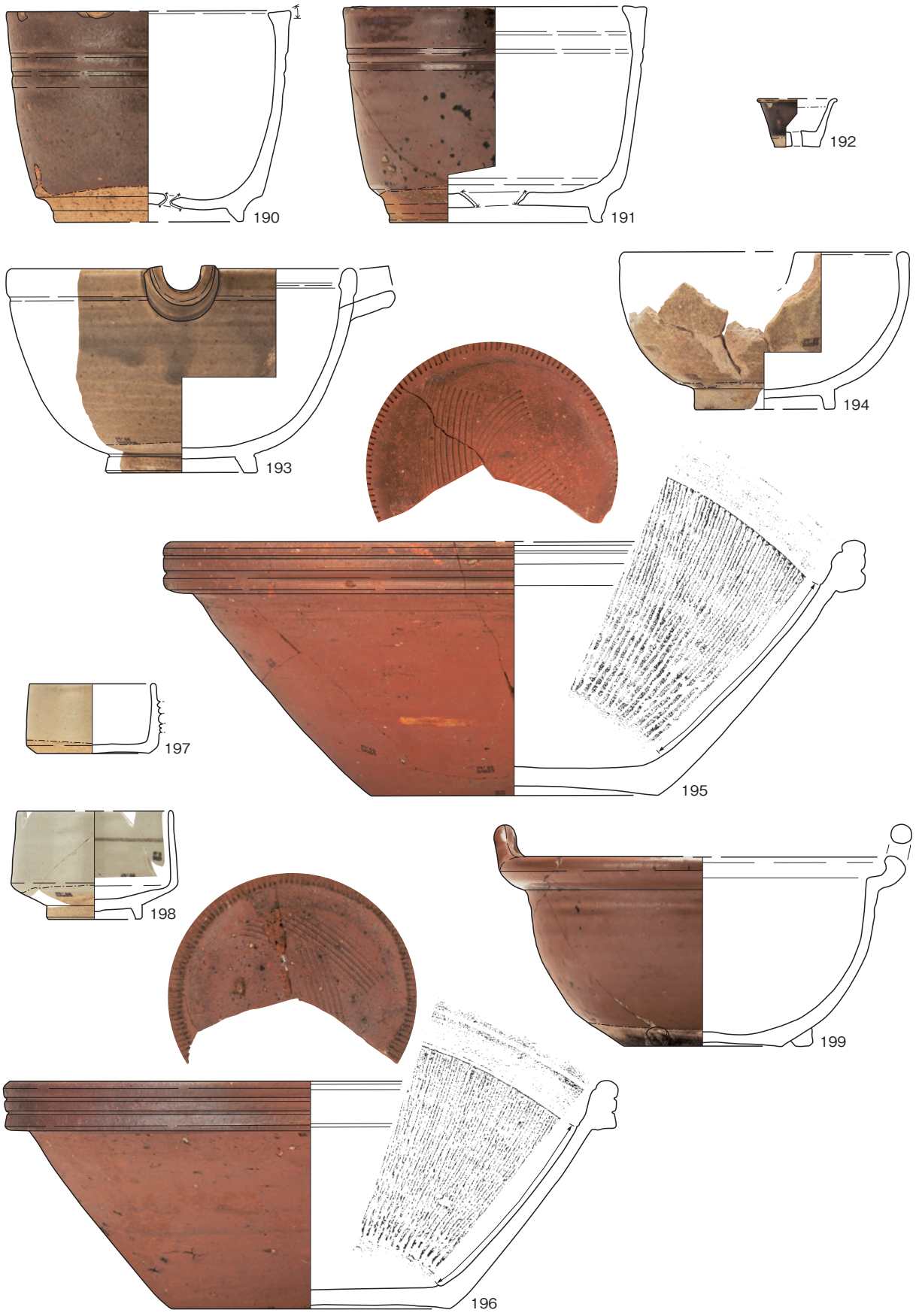
Ⅳ-82図　SK229(9)出土遺物

Ⅳ-83図　SK229(10)出土遺物

Ⅳ-84図　SK229(11)出土遺物

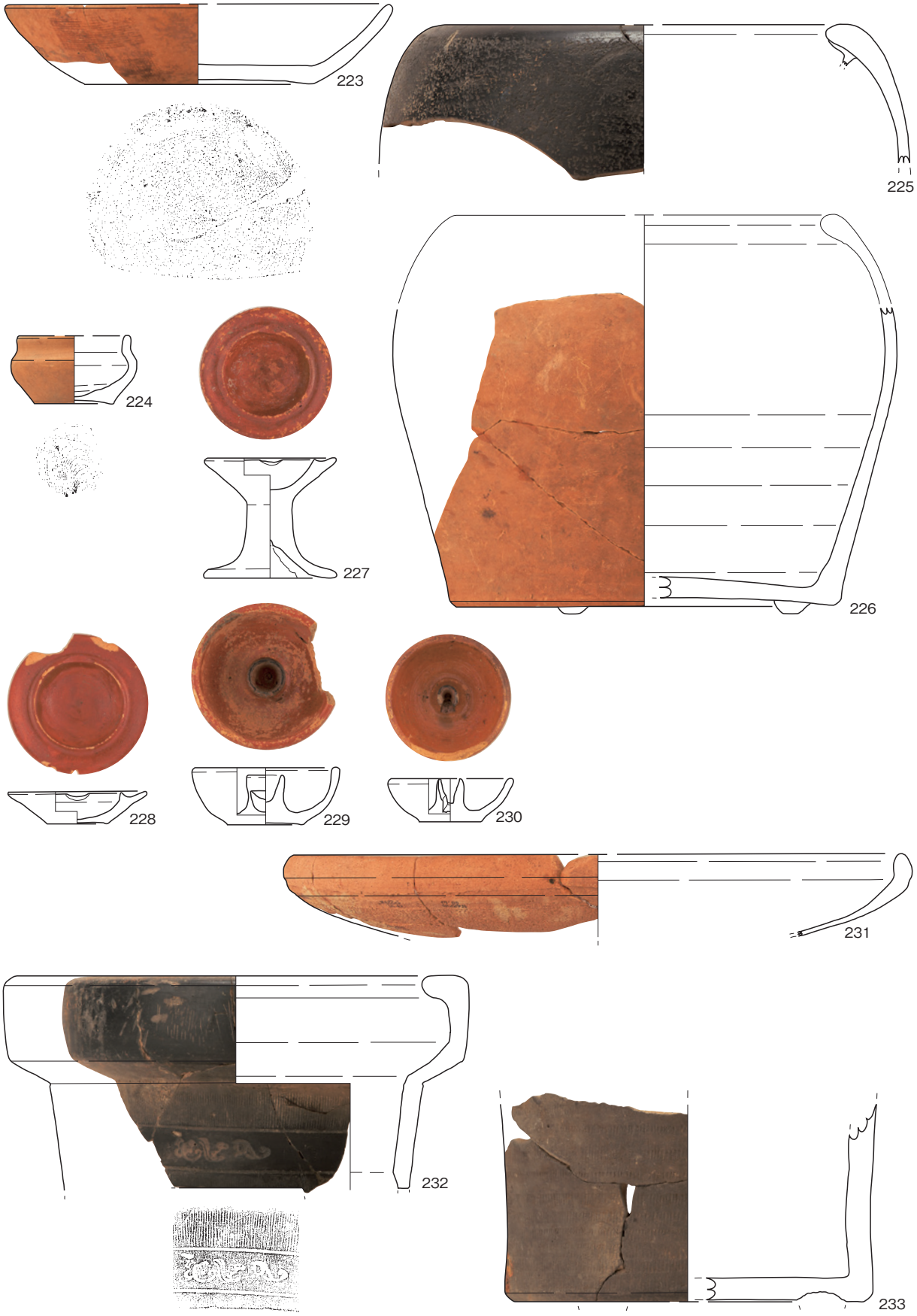
Ⅳ-85図　SK229(12)出土遺物

Ⅳ-86図　SK229(13)出土遺物

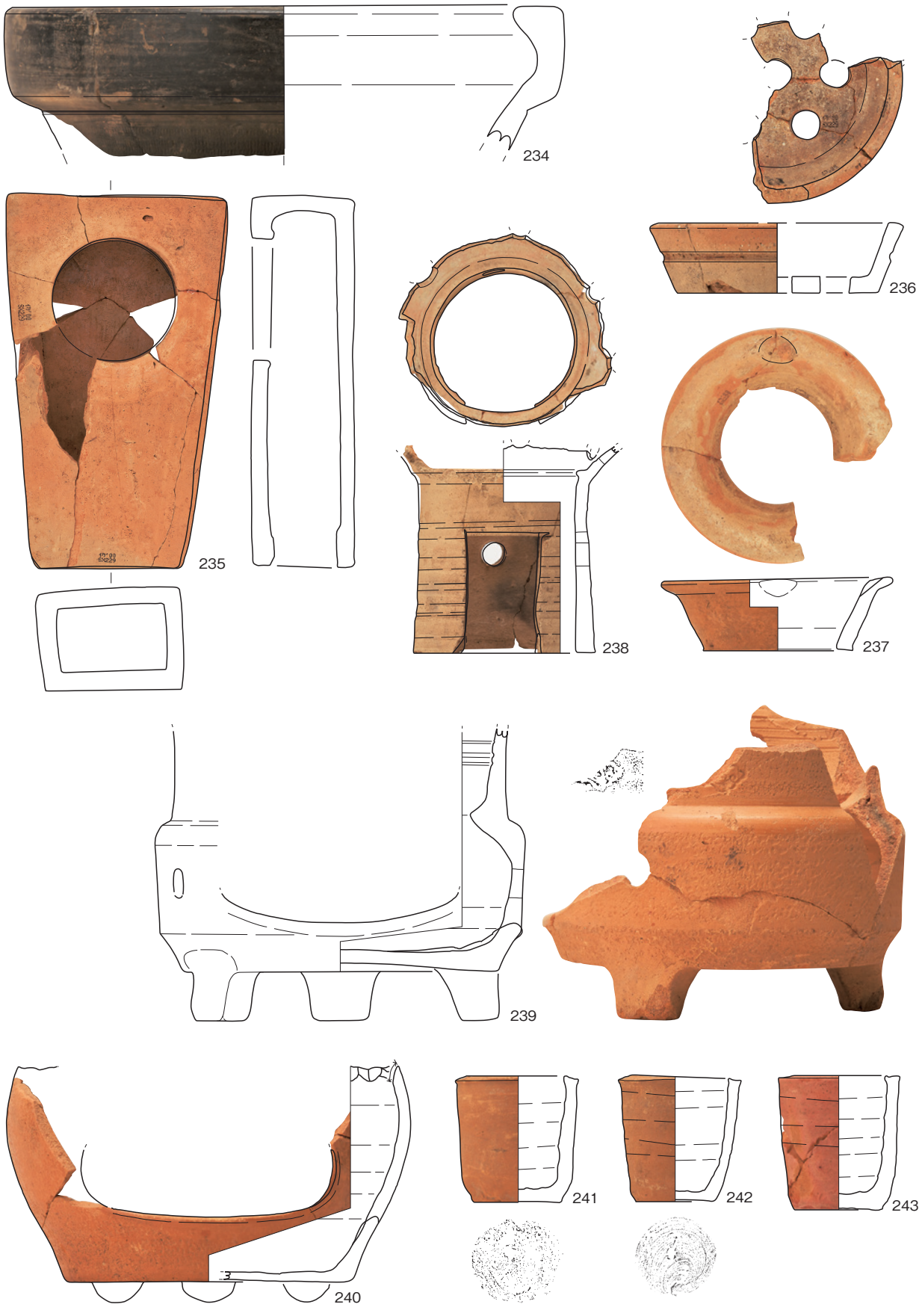


Ⅳ-87図　SK229(14)出土遺物

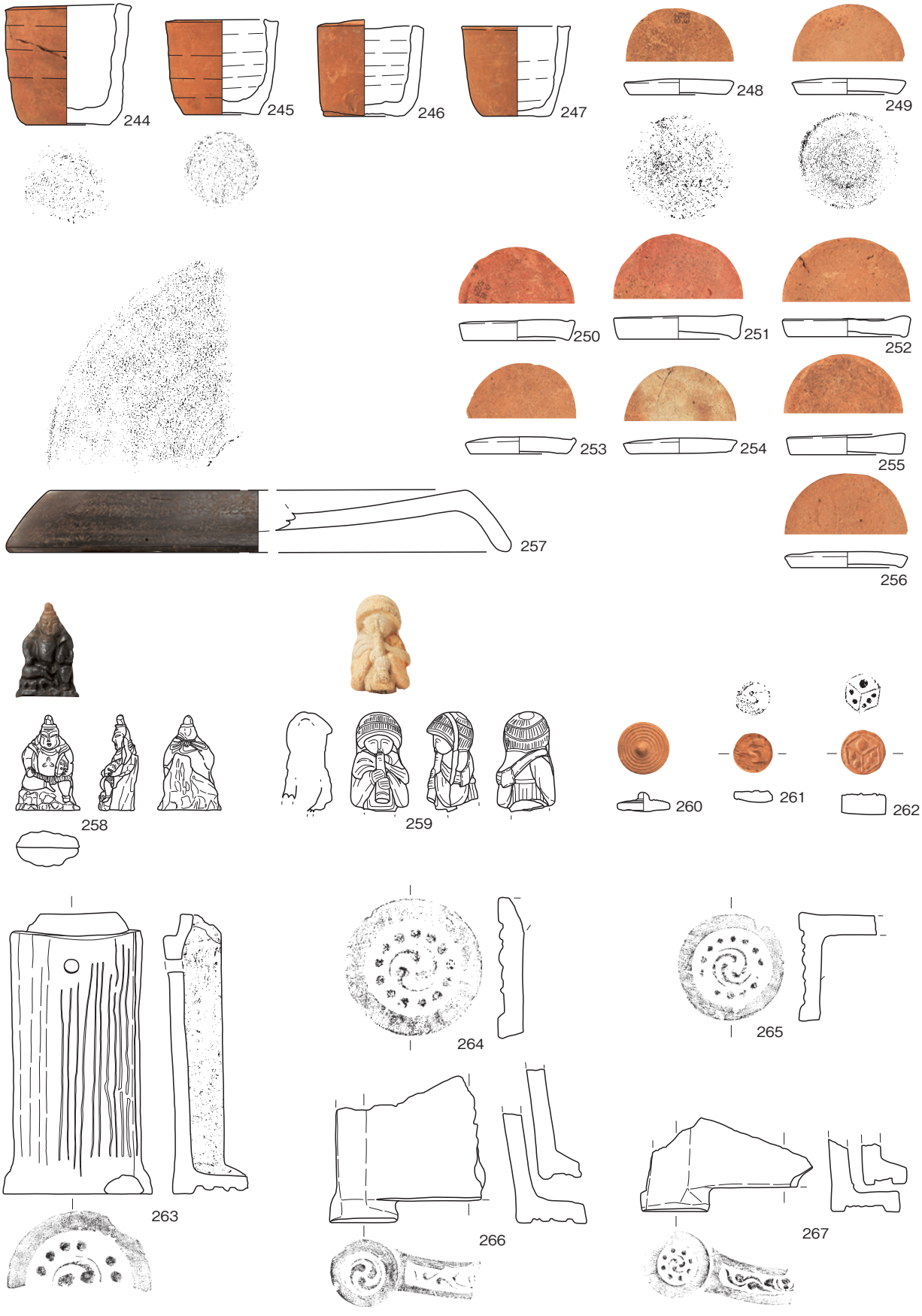
Ⅳ-88図　SK229(15)出土遺物



Ⅳ-89図　SK229(16)出土遺物

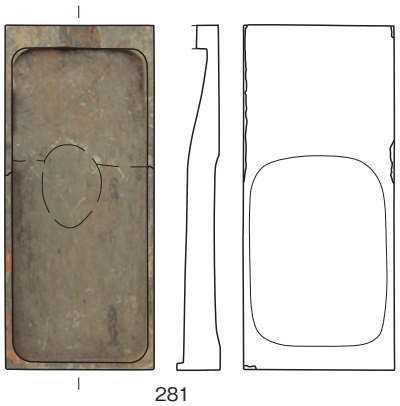


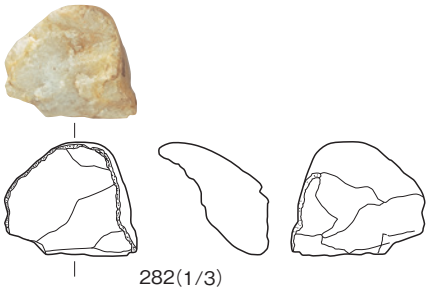
Ⅳ-90図　SK229(17)出土遺物

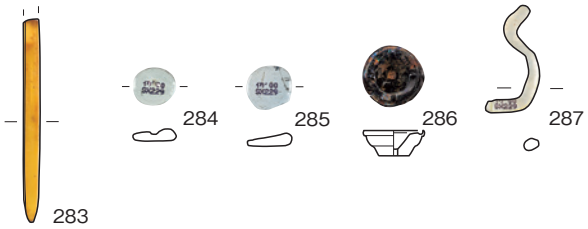


Ⅳ-91図　SK229(18)出土遺物

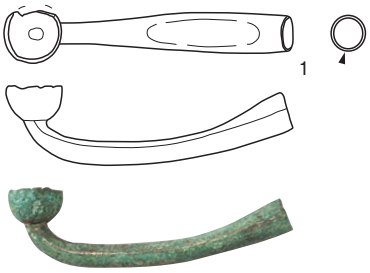
Ⅳ-92図　SK229(19)出土遺物

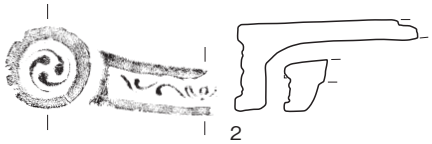






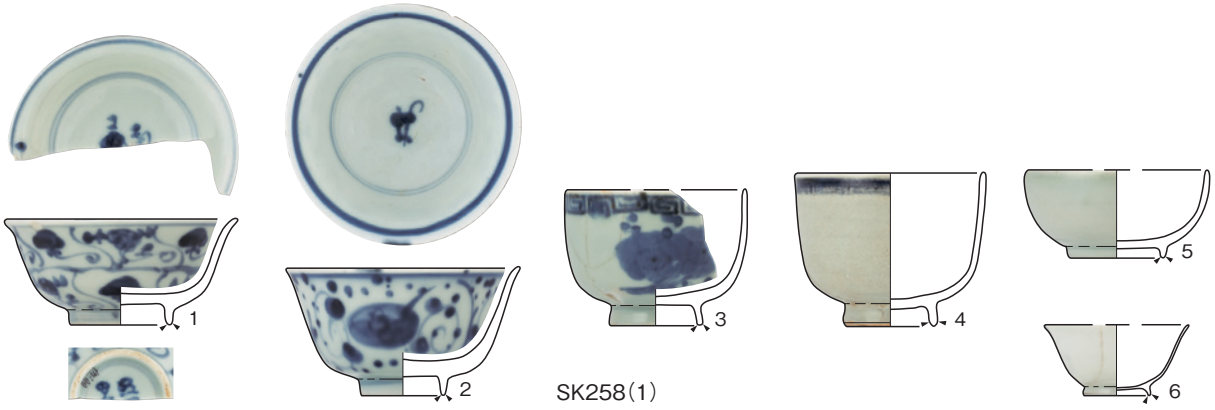
SK229(20)





SK232

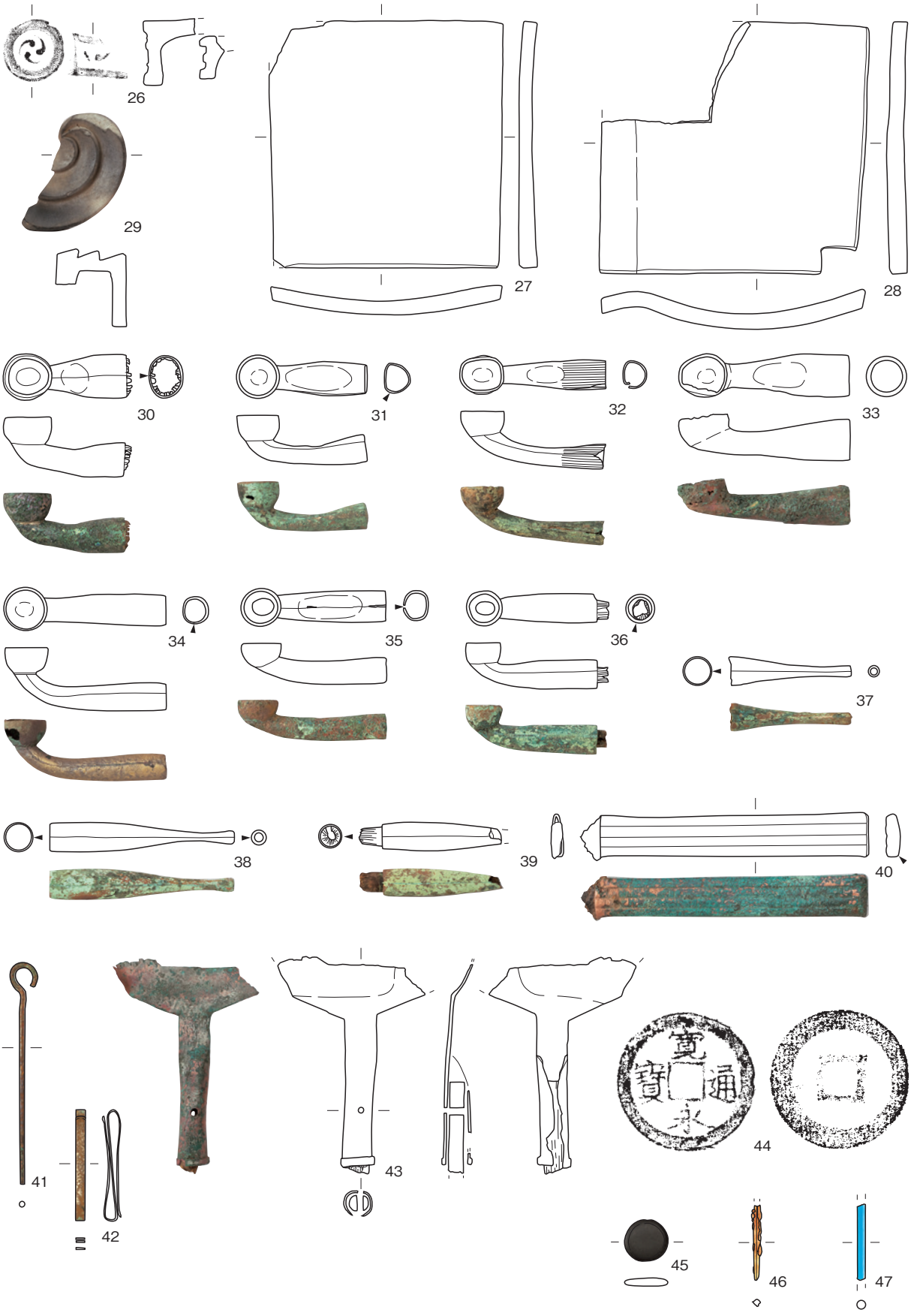
SD234



SK258(1)

Ⅳ-93図　SK229(20)、SK232、SD234、SK258(1)出土遺物

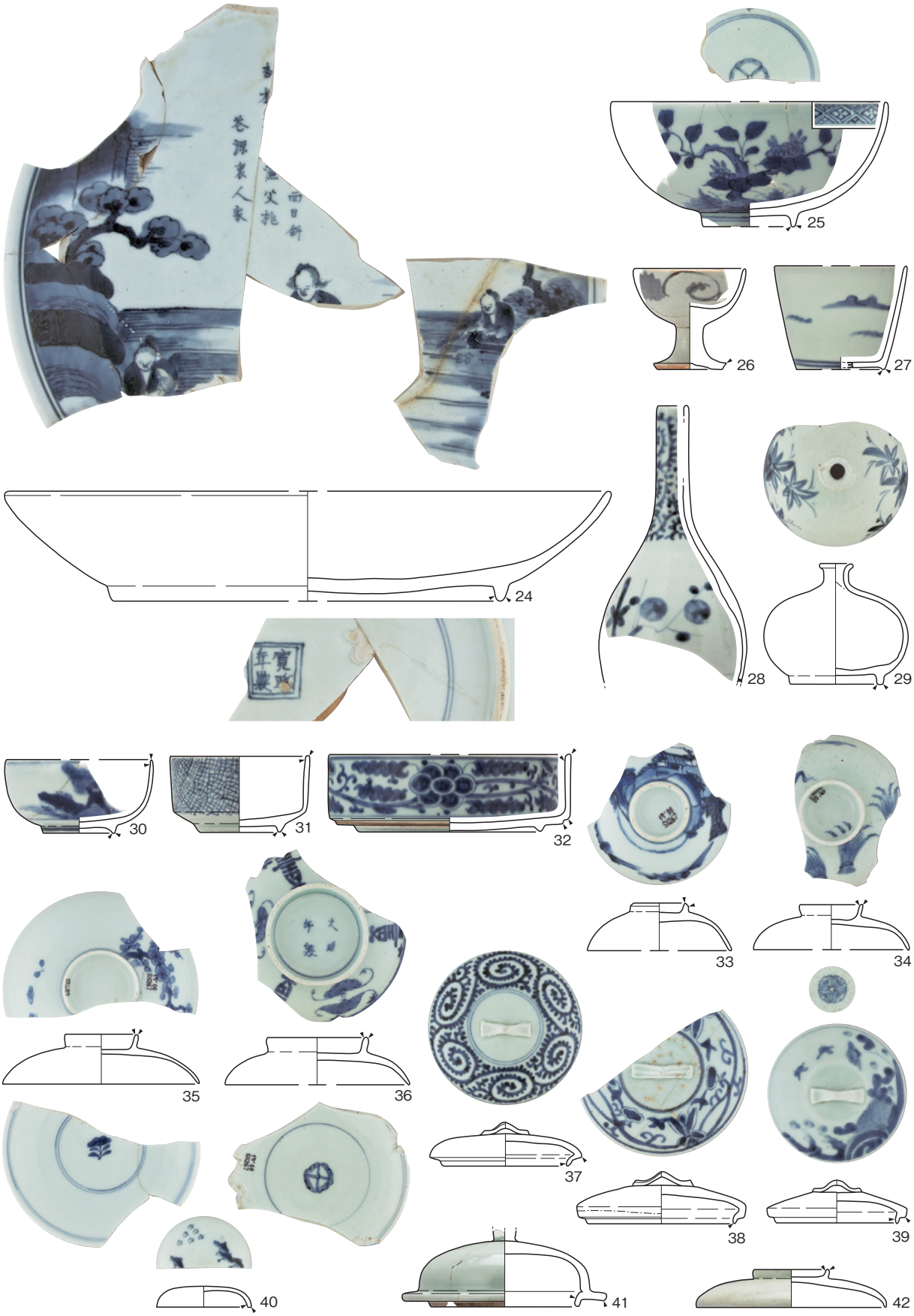
Ⅳ-94図　SK258(2)出土遺物



Ⅳ-95図　SK258(3)出土遺物

Ⅳ-96図　SX260、SD264、SE261出土遺物

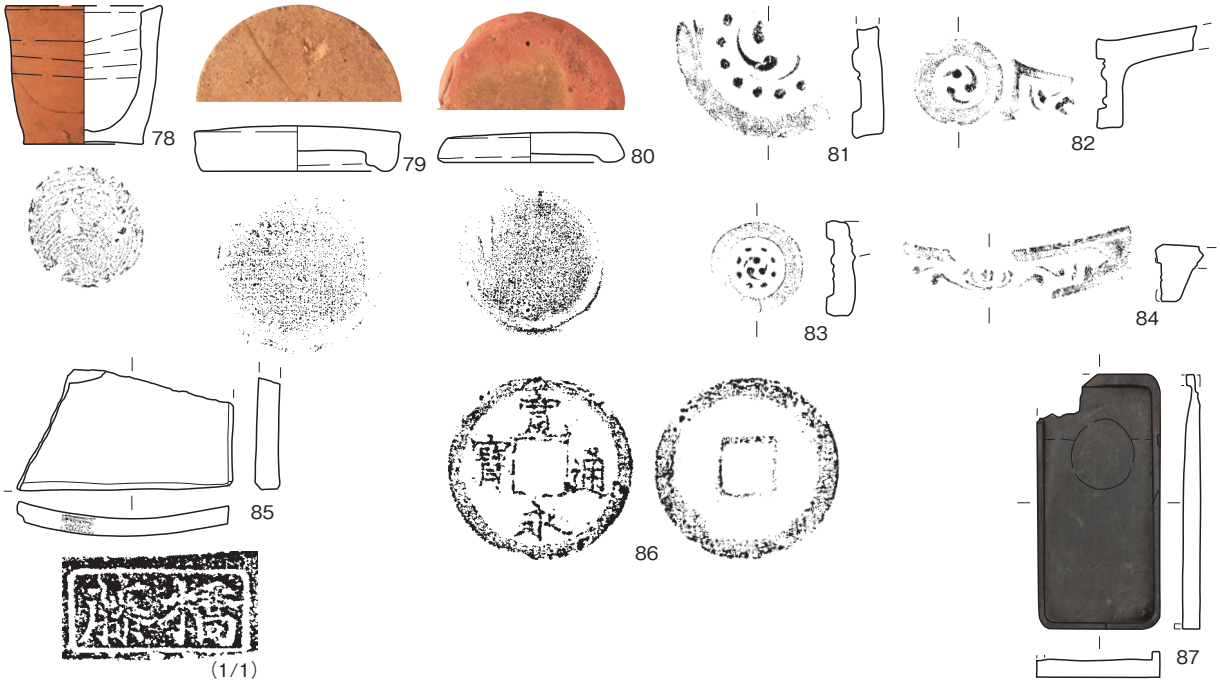
Ⅳ-97図　SX267(1)出土遺物



Ⅳ-98図　SX267(2)出土遺物

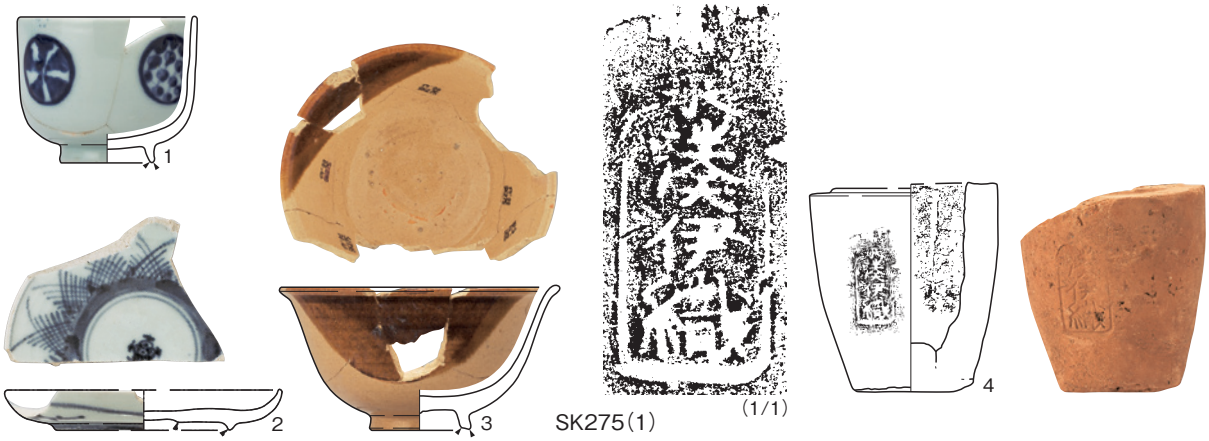
Ⅳ-99図　SX267(3)出土遺物

Ⅳ-100図　SX267(4)出土遺物



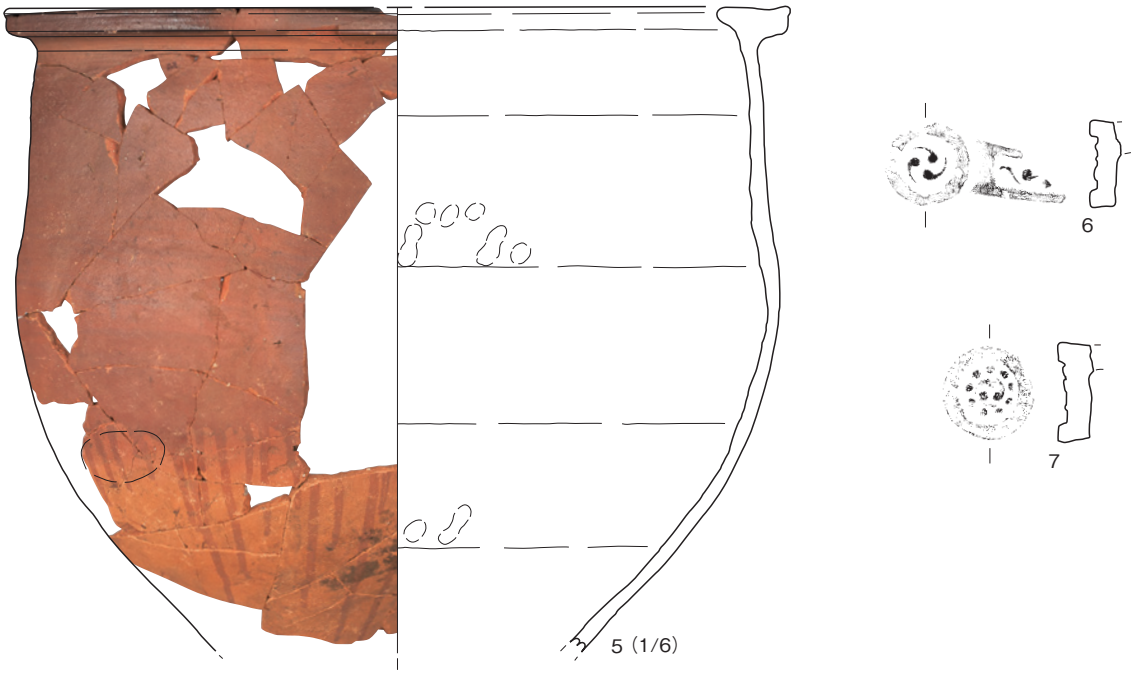
SX267(5)

SD268



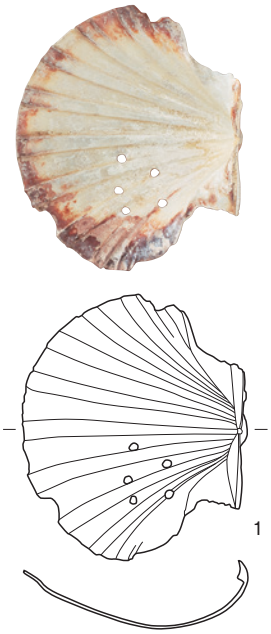
SK275(1)

Ⅳ-101図　SX267(5)、SD268、SK275(1)出土遺物



SK275(2)

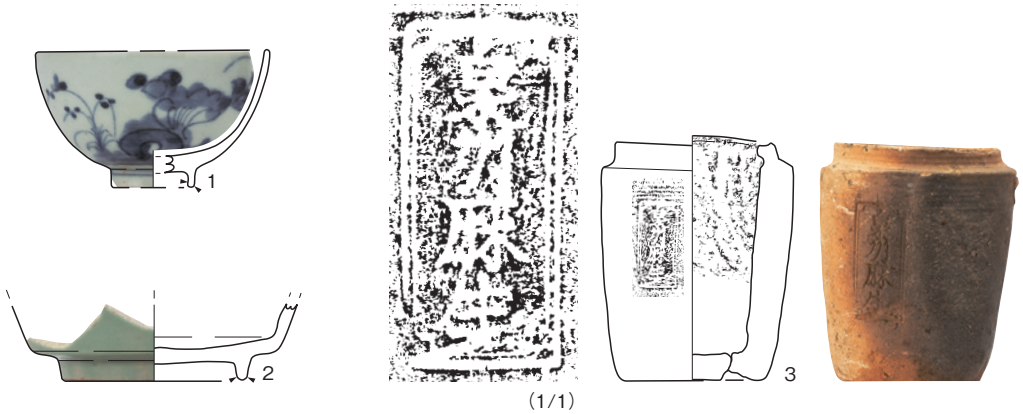
SK278



SP299

SP310

Ⅳ-102図　SK275(2)、SK278、SP299、SP310出土遺物



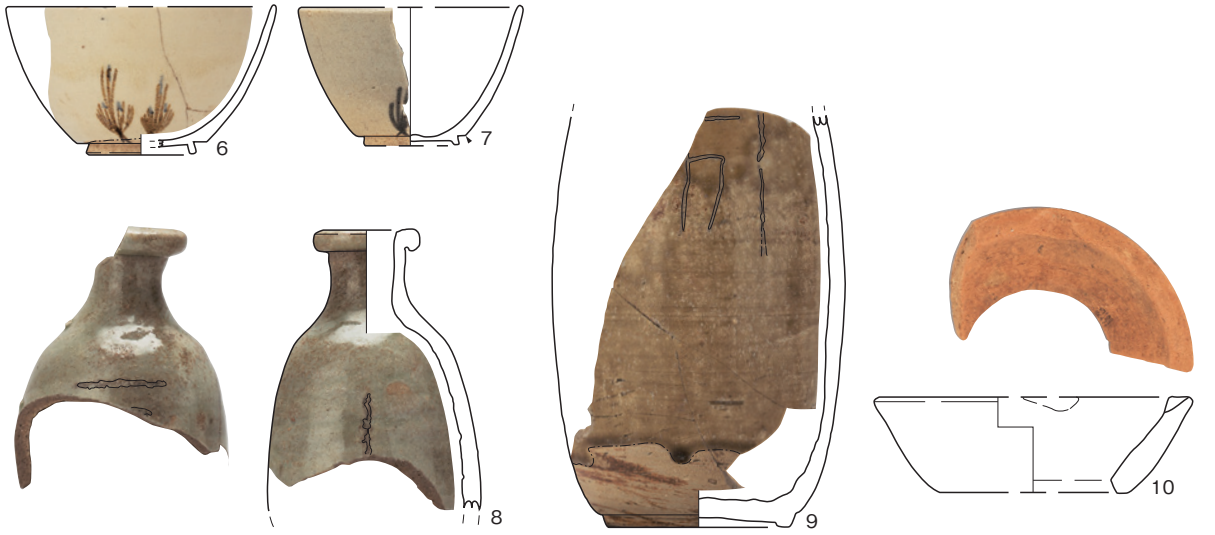
Ⅳ-103図　SU360(1)出土遺物

SU360(2)

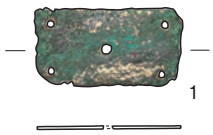
SP389

SK477

Ⅳ-104図　SU360(2)、SP389、SK477(1)出土遺物



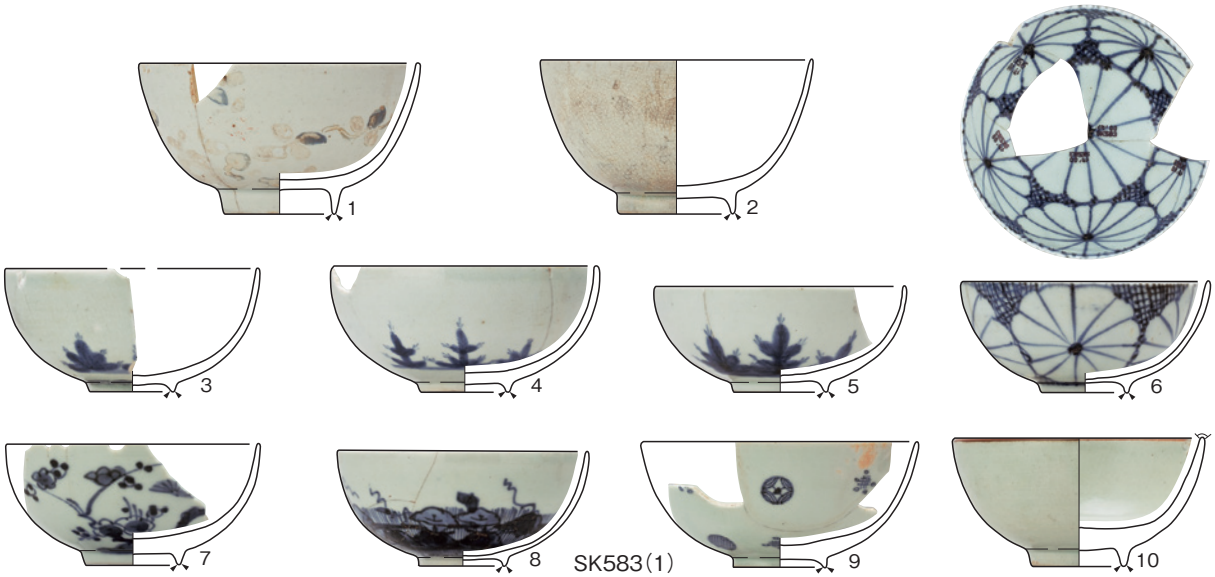
SK477(2)



SK499

SP550

SP554

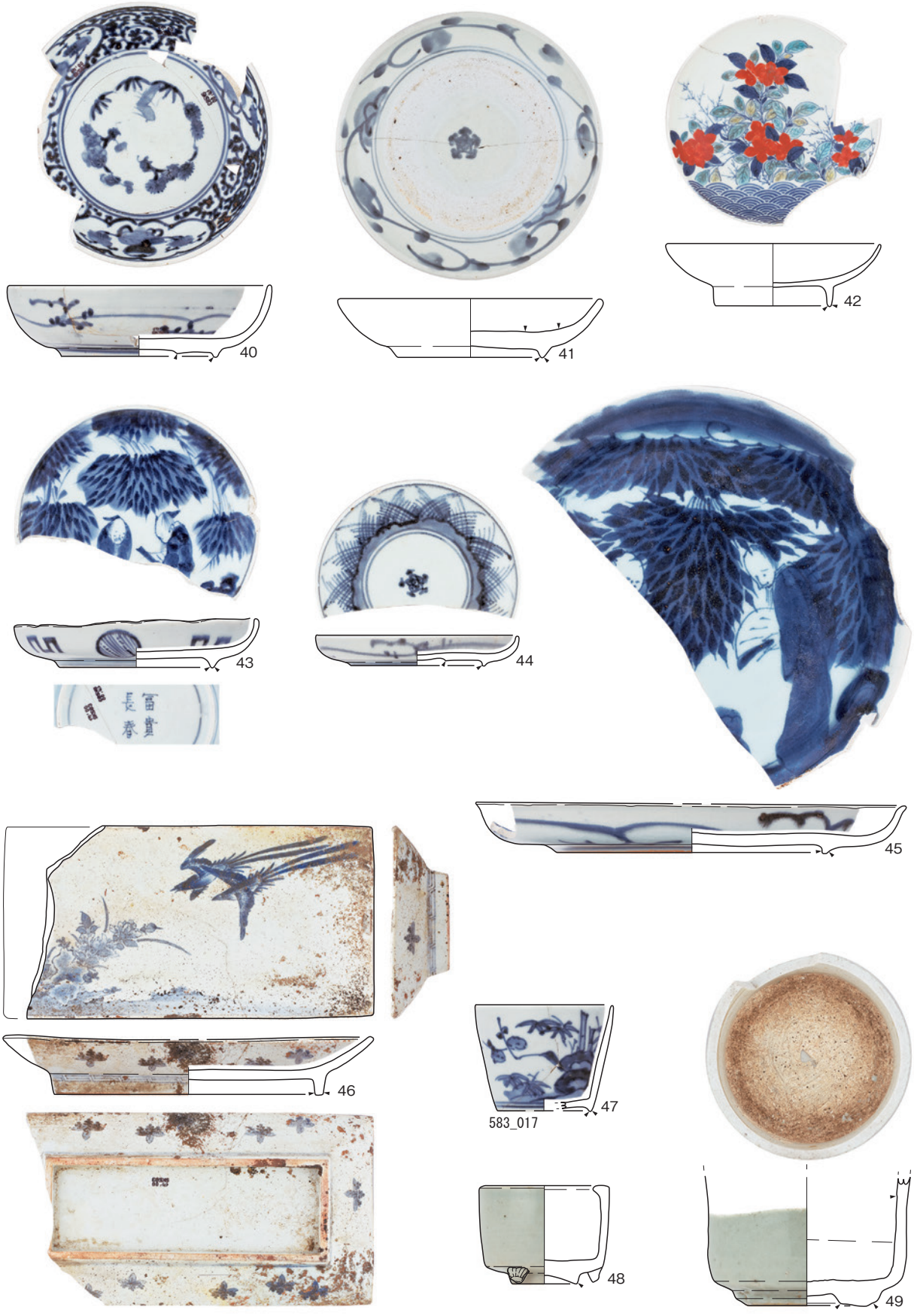


SK583(1)

Ⅳ-105図　SK477(2)、SK499、SP550、SP554、SK583(1)出土遺物

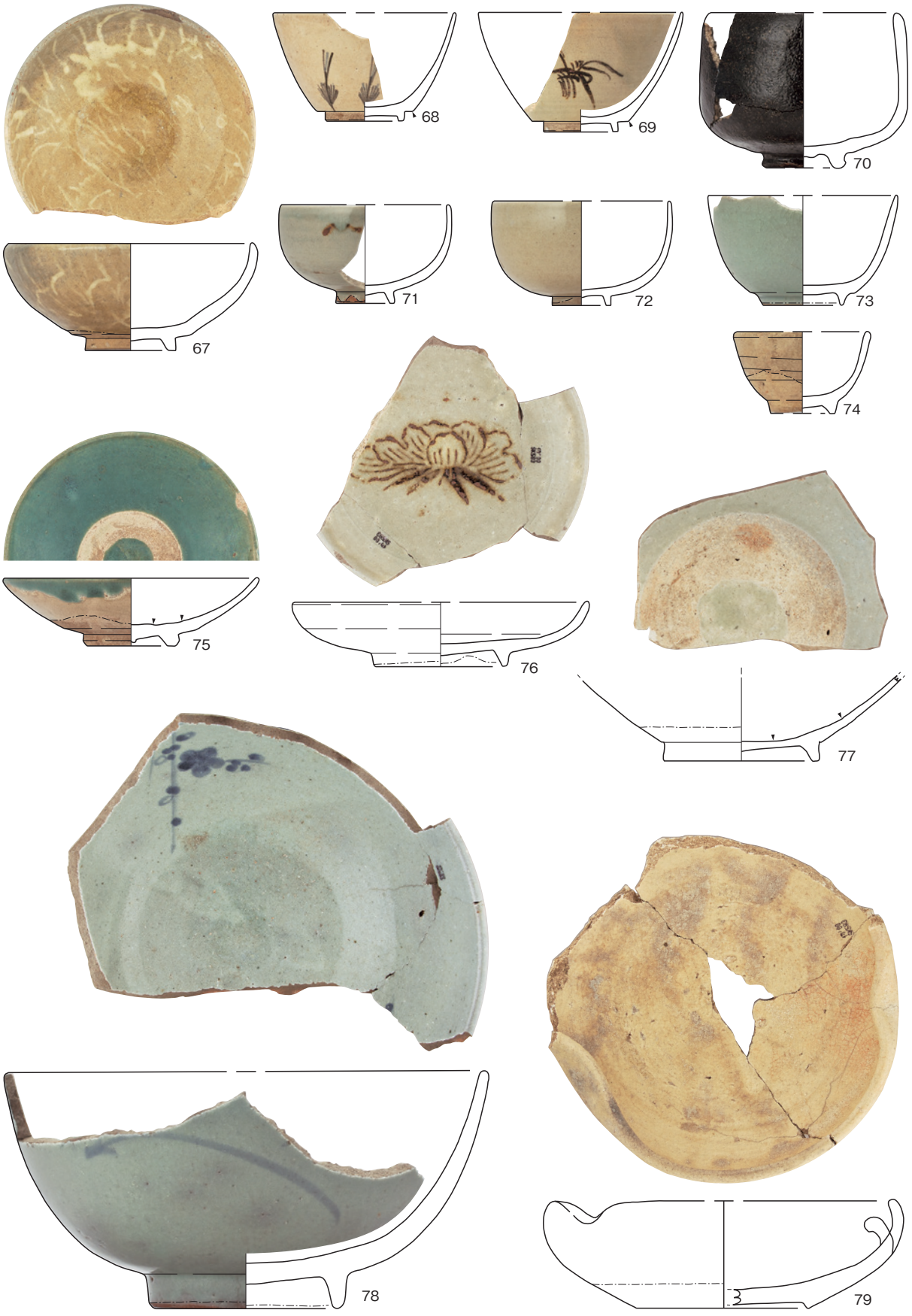
Ⅳ-106図　SK583(2)出土遺物

Ⅳ-107図　SK583(3)出土遺物



Ⅳ-108図　SK583(4)出土遺物

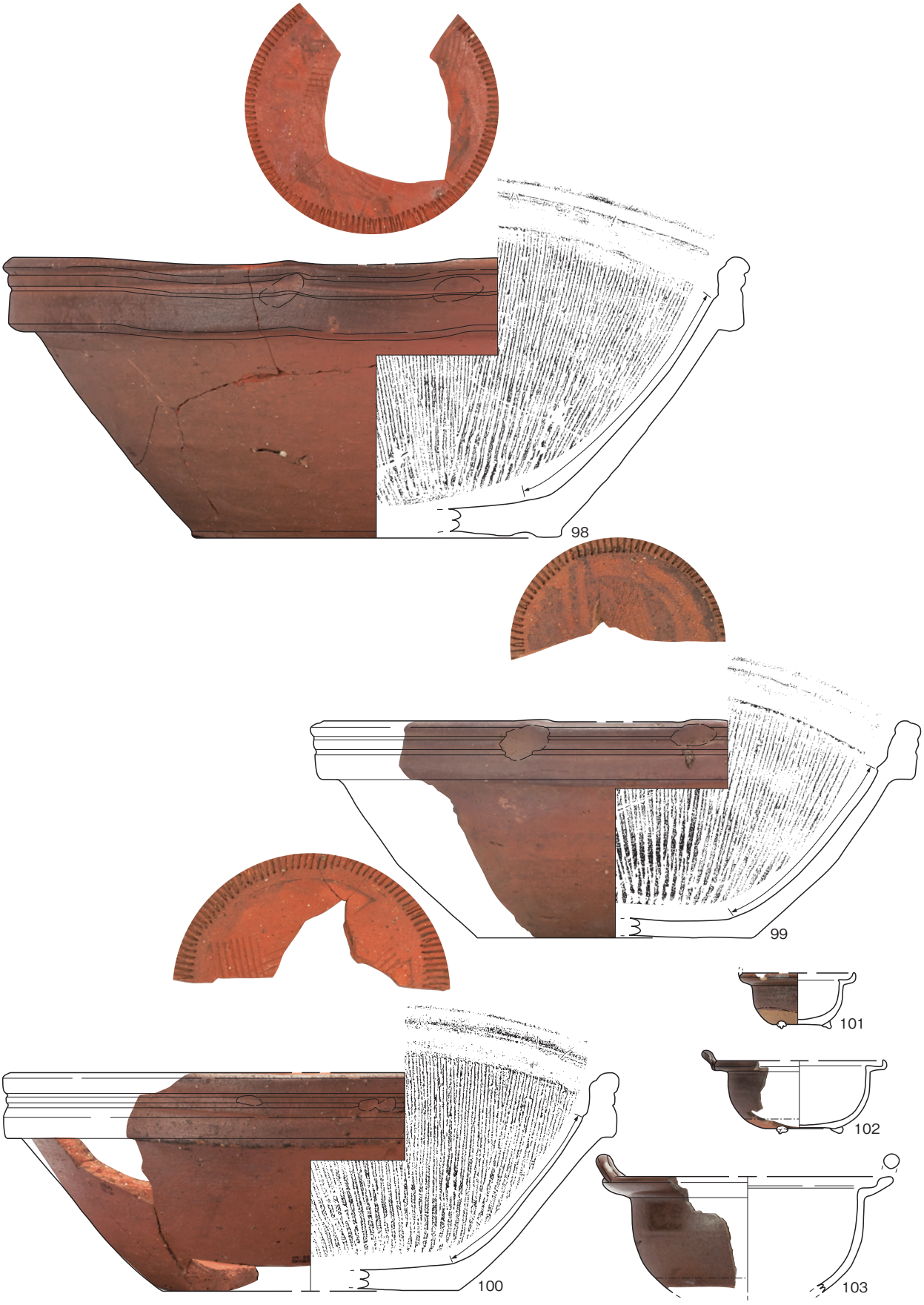
Ⅳ-109図　SK583(5)出土遺物



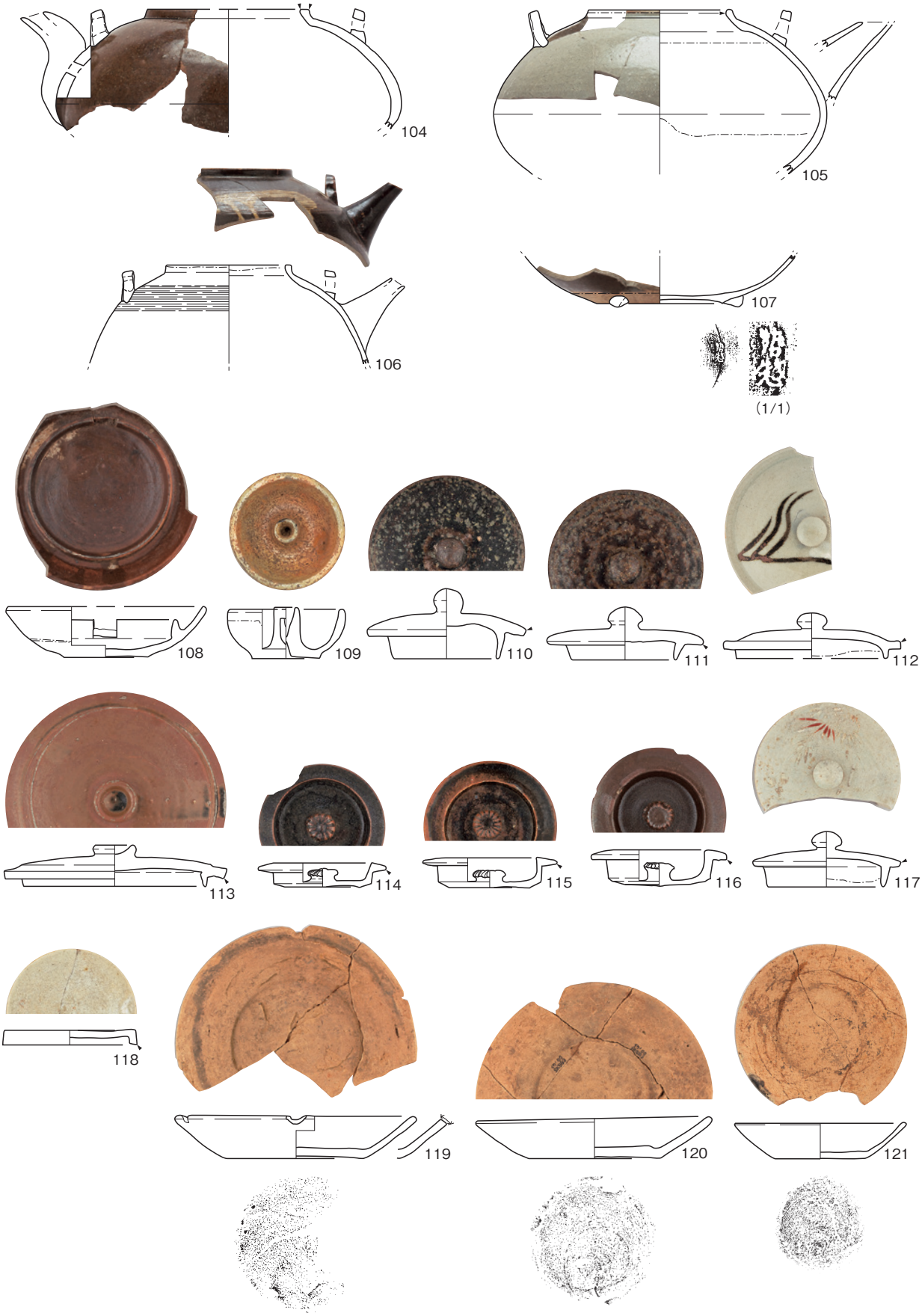
Ⅳ-110図　SK583(6)出土遺物

Ⅳ-111図　SK583(7)出土遺物

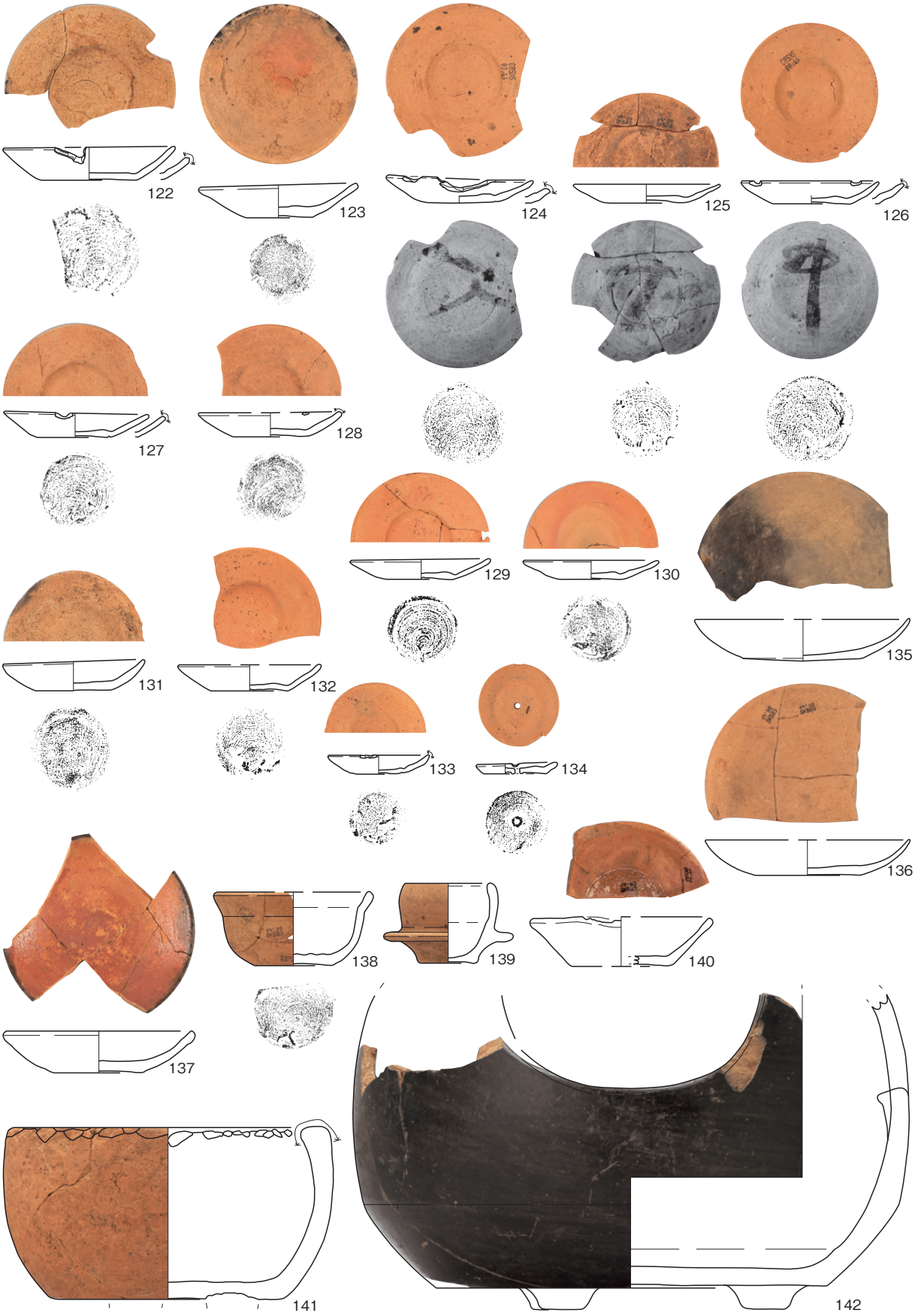
Ⅳ-112図　SK583(8)出土遺物



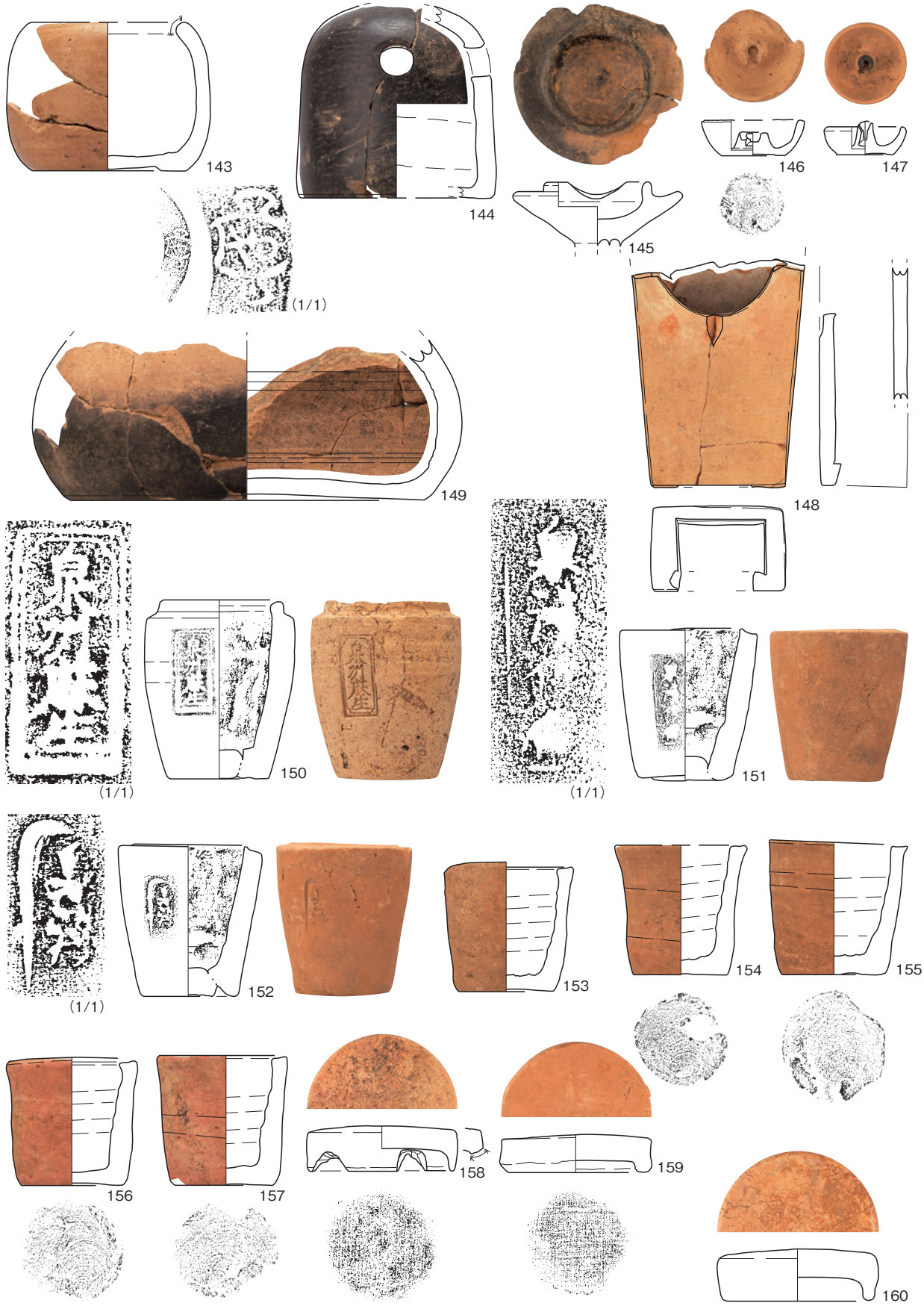
Ⅳ-113図　SK583(9)出土遺物



Ⅳ-114図　SK583(10)出土遺物



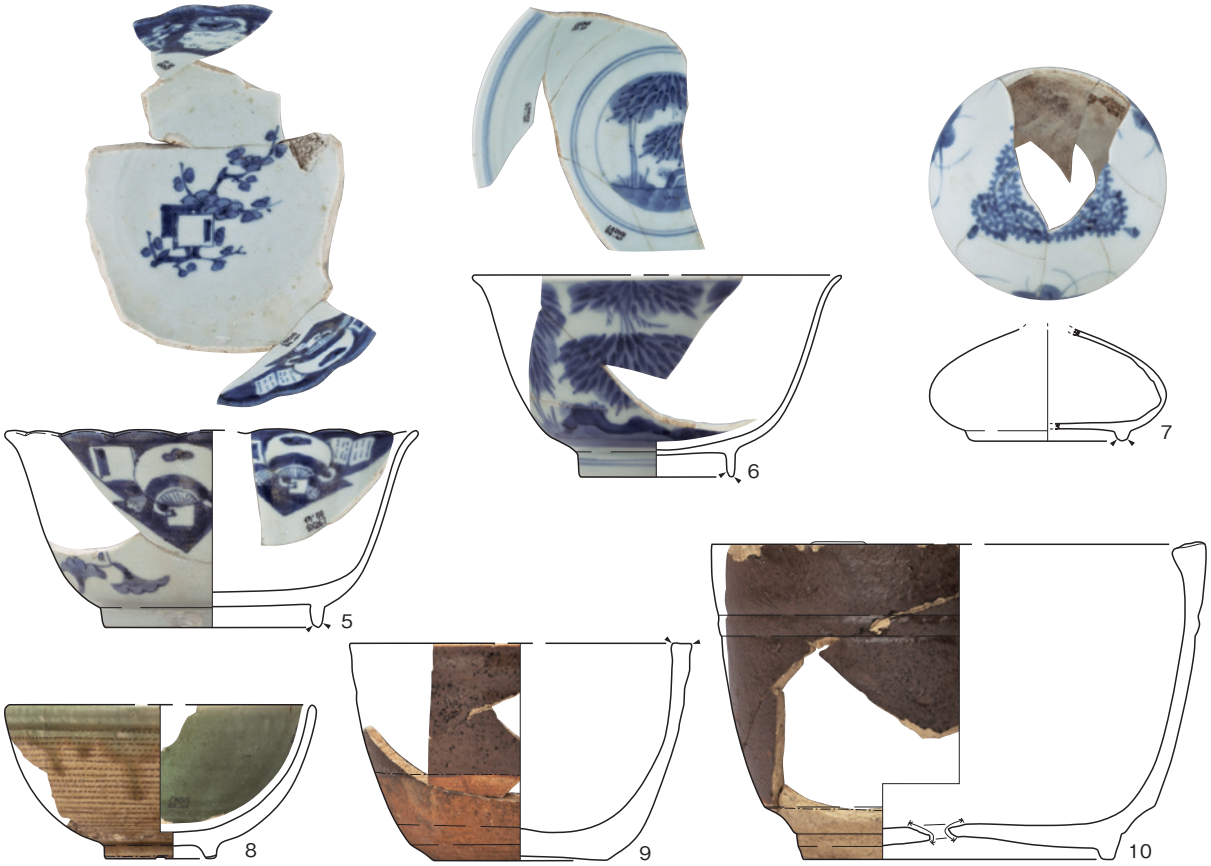
Ⅳ-115図　SK583(11)出土遺物



Ⅳ-116図　SK583(12)出土遺物

Ⅳ-117図　SK583(13)、SP586出土遺物

Ⅳ-118図　SE2とSK207遺構間接合、SK207とSX267遺構間接合(1)出土遺物



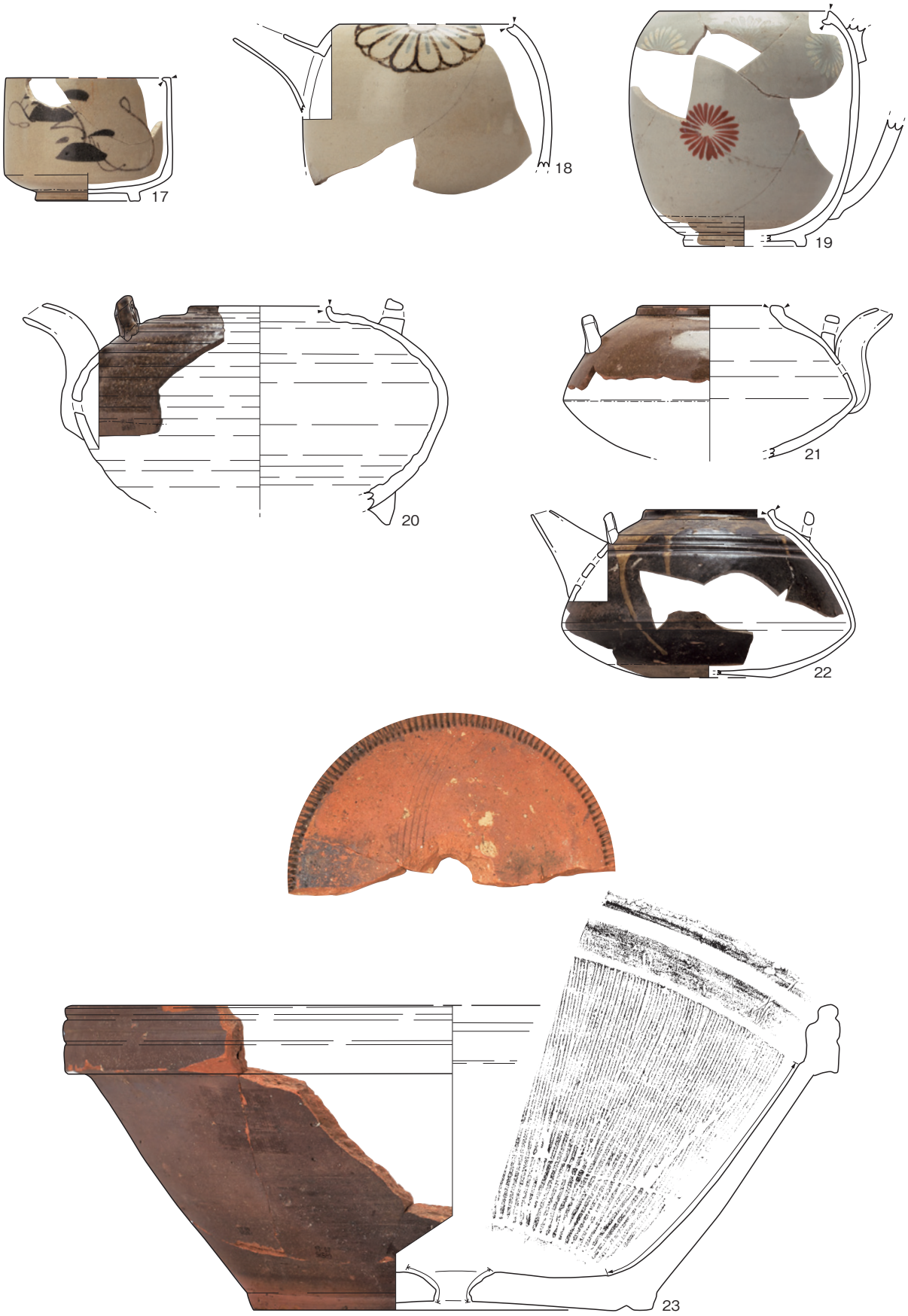
SK207とSX267遺構間接合(2)

SK207とSK583遺構間接合(1)

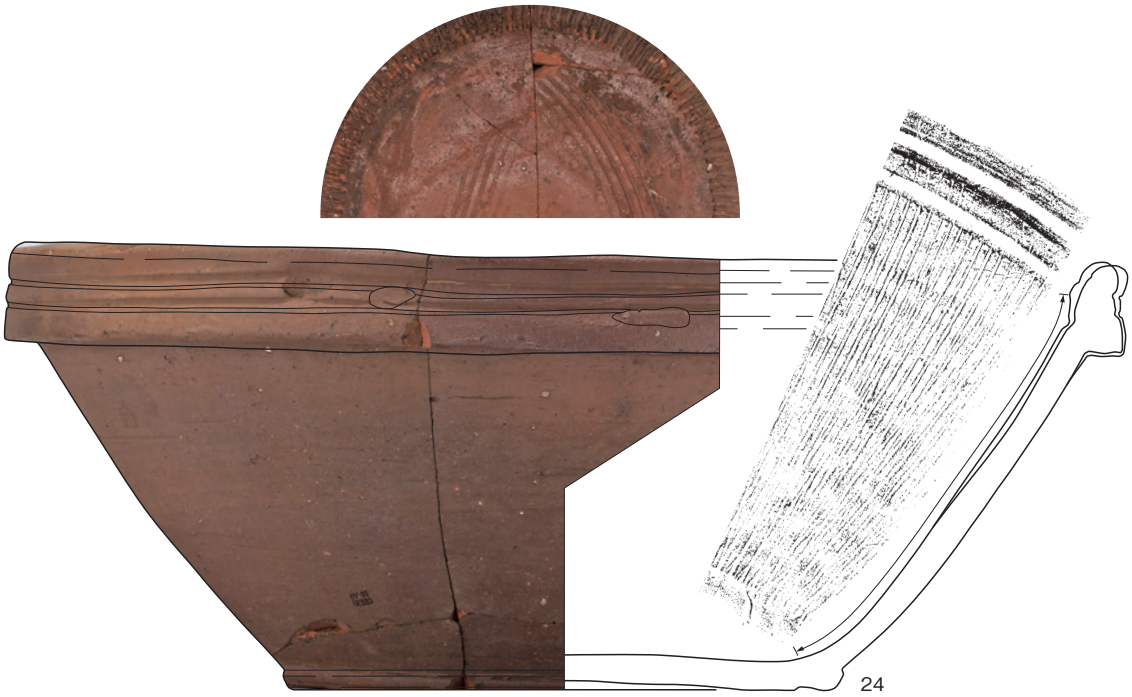
Ⅳ-119図　SK207とSX267遺構間接合(2)、SK207とSK583遺構間接合(1)出土遺物

Ⅳ-120図　SK207とSK583遺構間接合(2)出土遺物

Ⅳ-121図　SK207とSK583遺構間接合(3)出土遺物

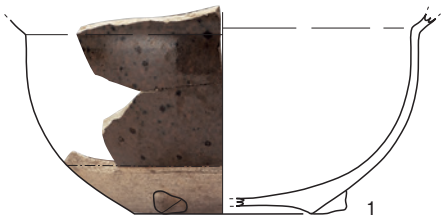


Ⅳ-122図　SK207とSK583遺構間接合(4)出土遺物

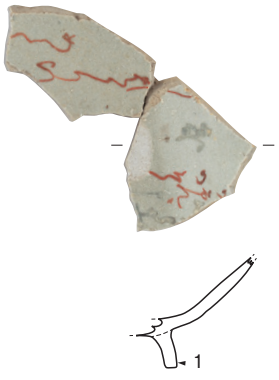


SK207とSK586遺構間接合(5)

SK218とSK583遺構間接合

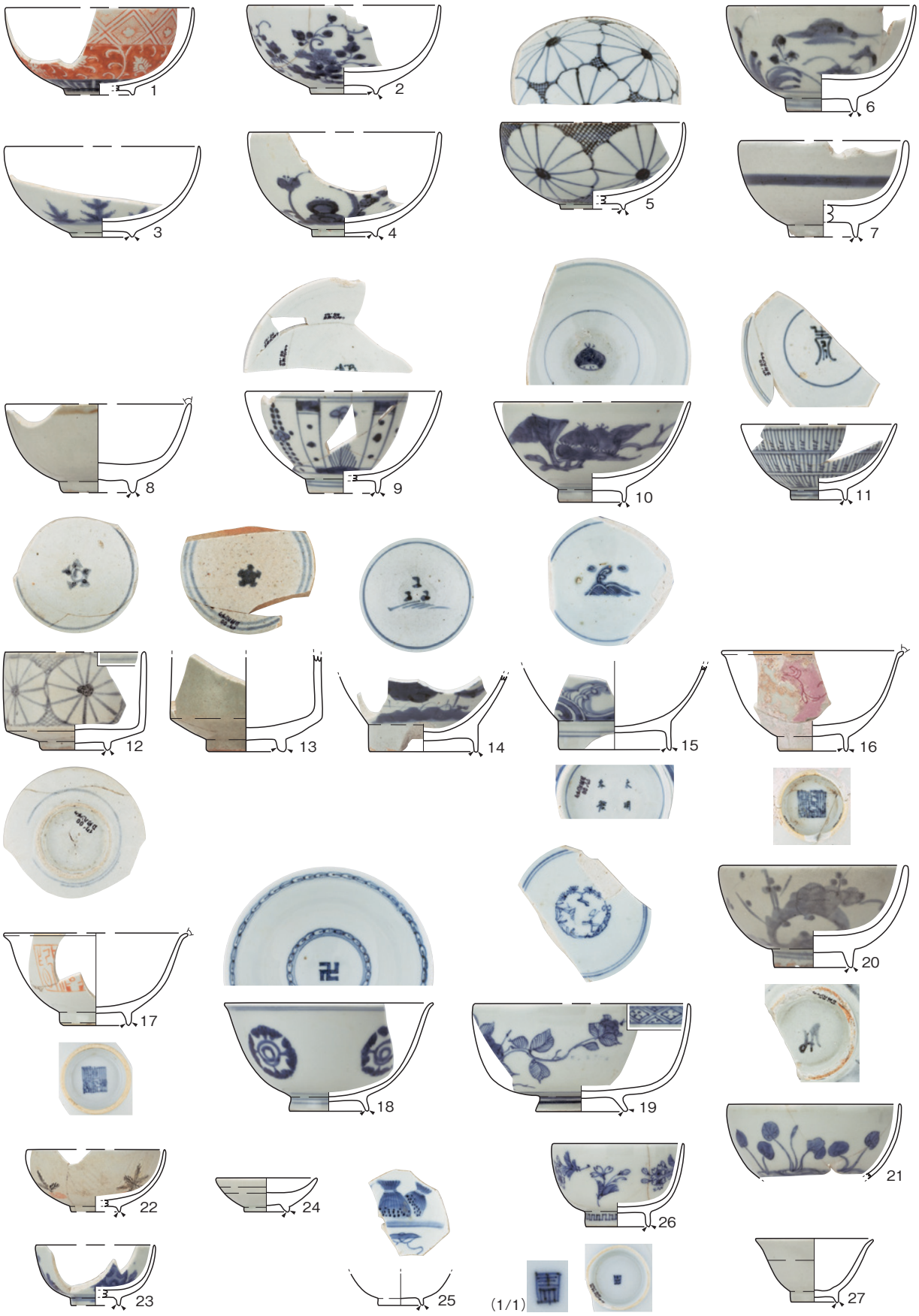


SK207とSE261遺構間接合



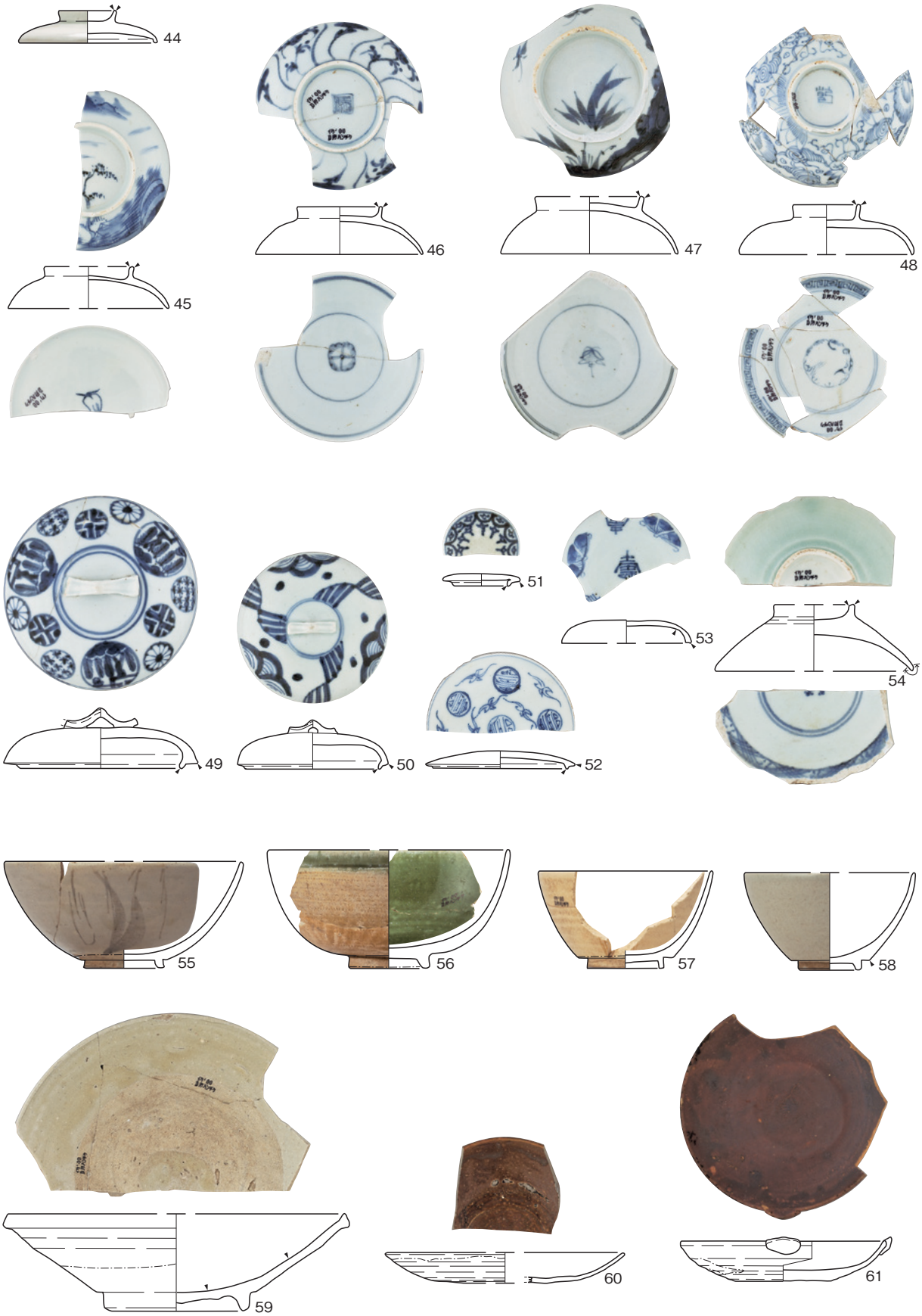
SX267と版築遺構間接合

Ⅳ-123図　SK207とSK583遺構間接合(5)、SK218とSK583遺構間接合、SK207とSE261遺構間接合、SX267と版築遺構間接合出土遺物



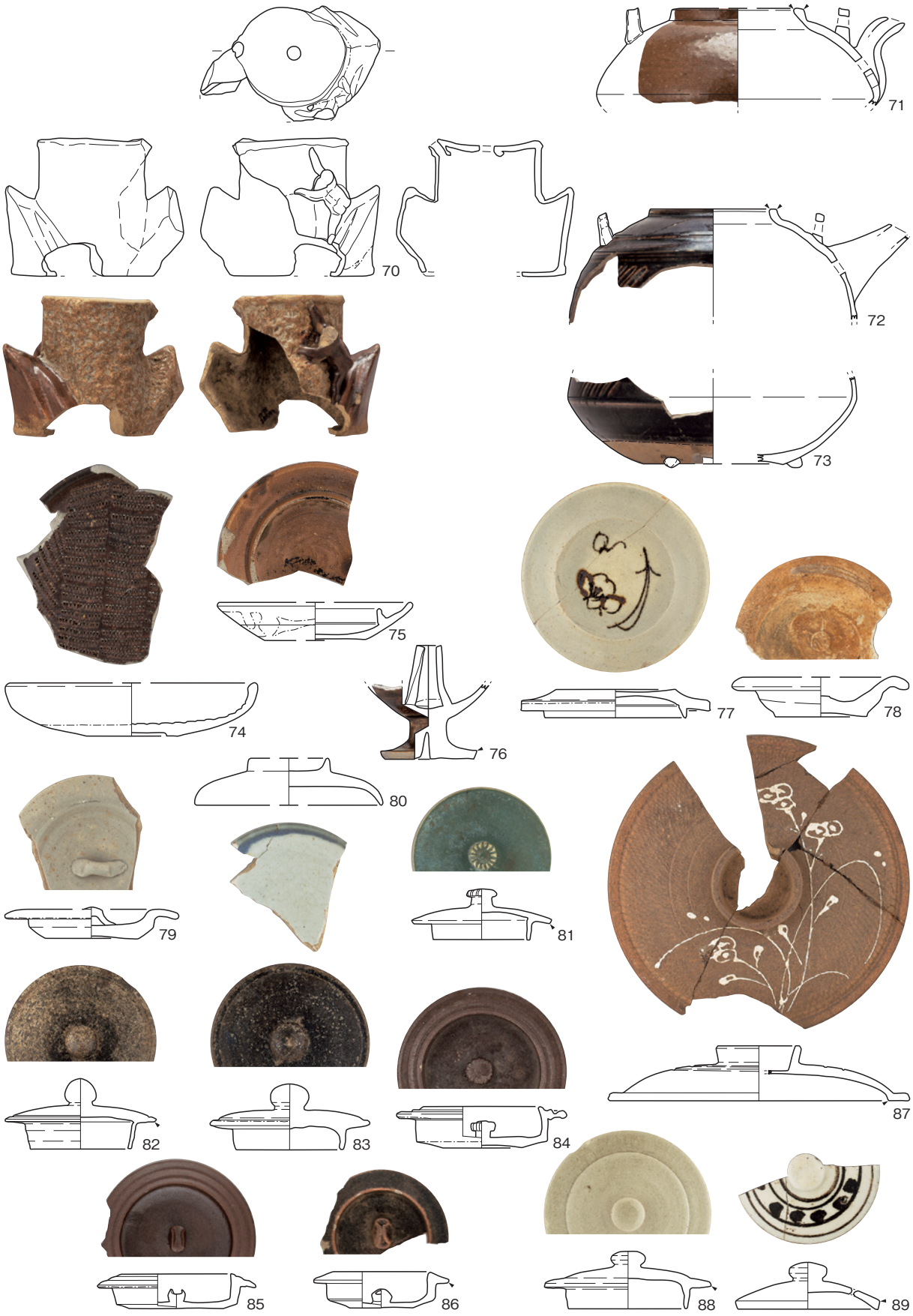
Ⅳ-124図　版築(1)出土遺物

Ⅳ-125図　版築(2)出土遺物

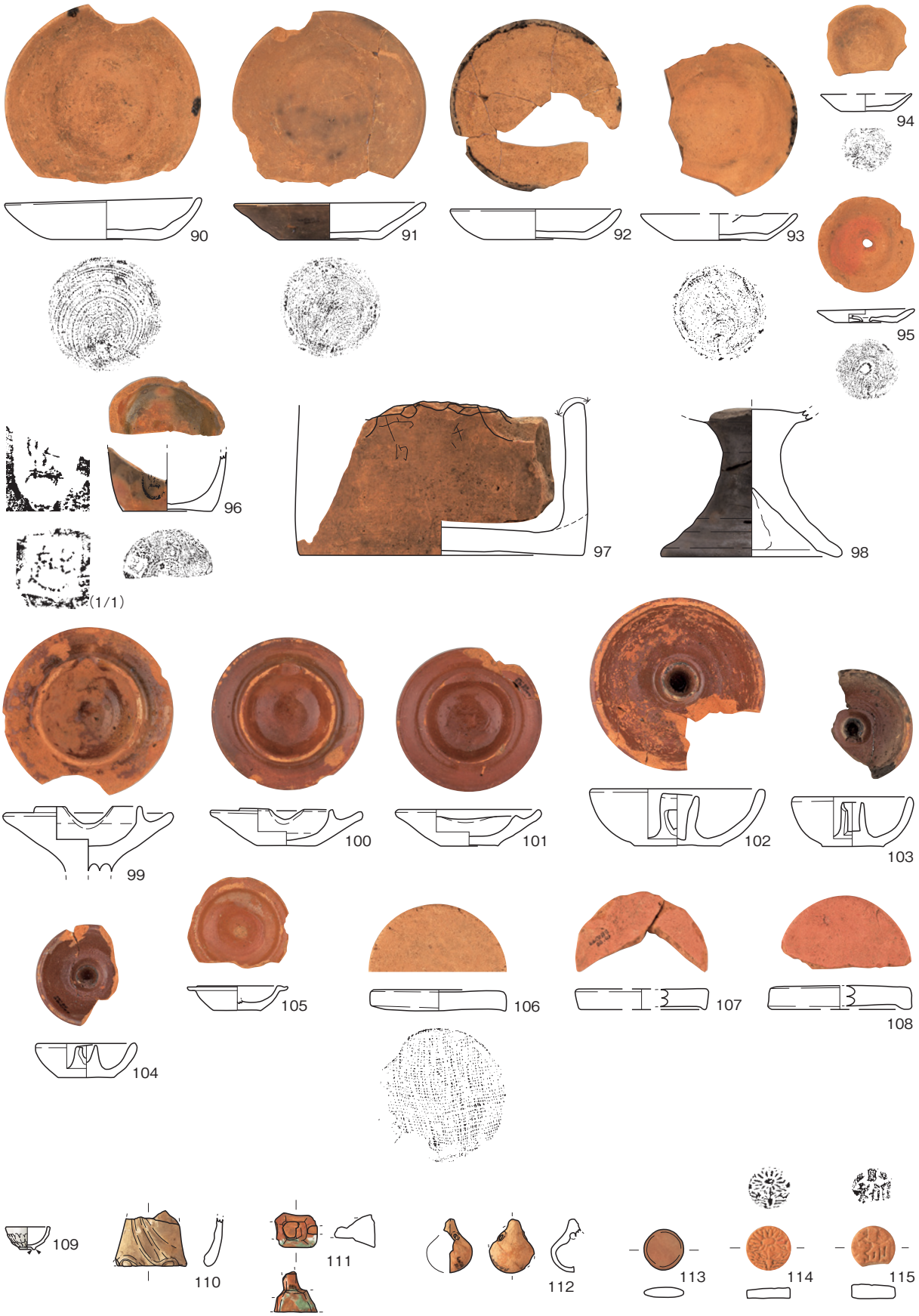


Ⅳ-126図　版築(3)出土遺物

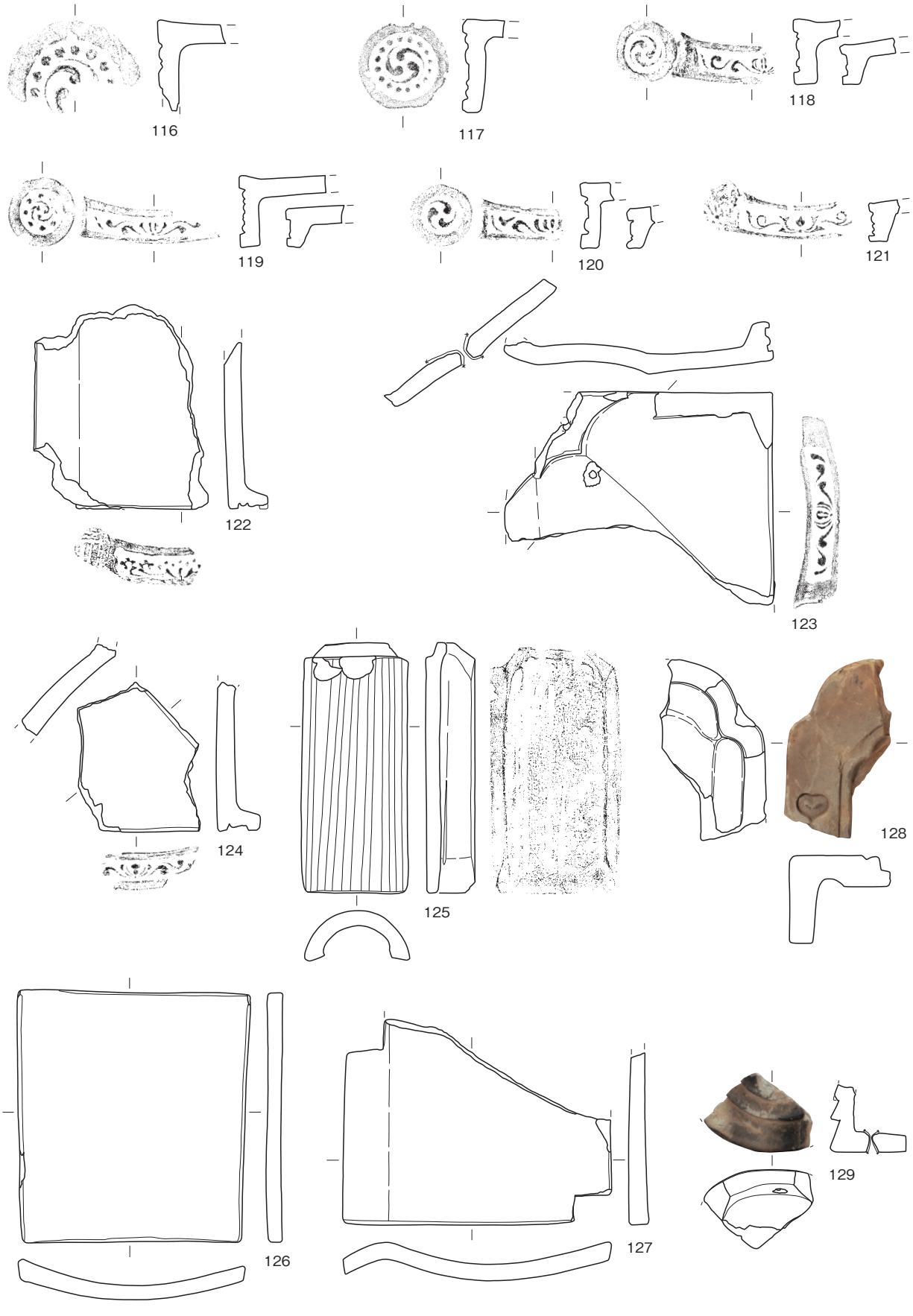
Ⅳ-127図　版築(4)出土遺物



Ⅳ-128図　版築(5)出土遺物



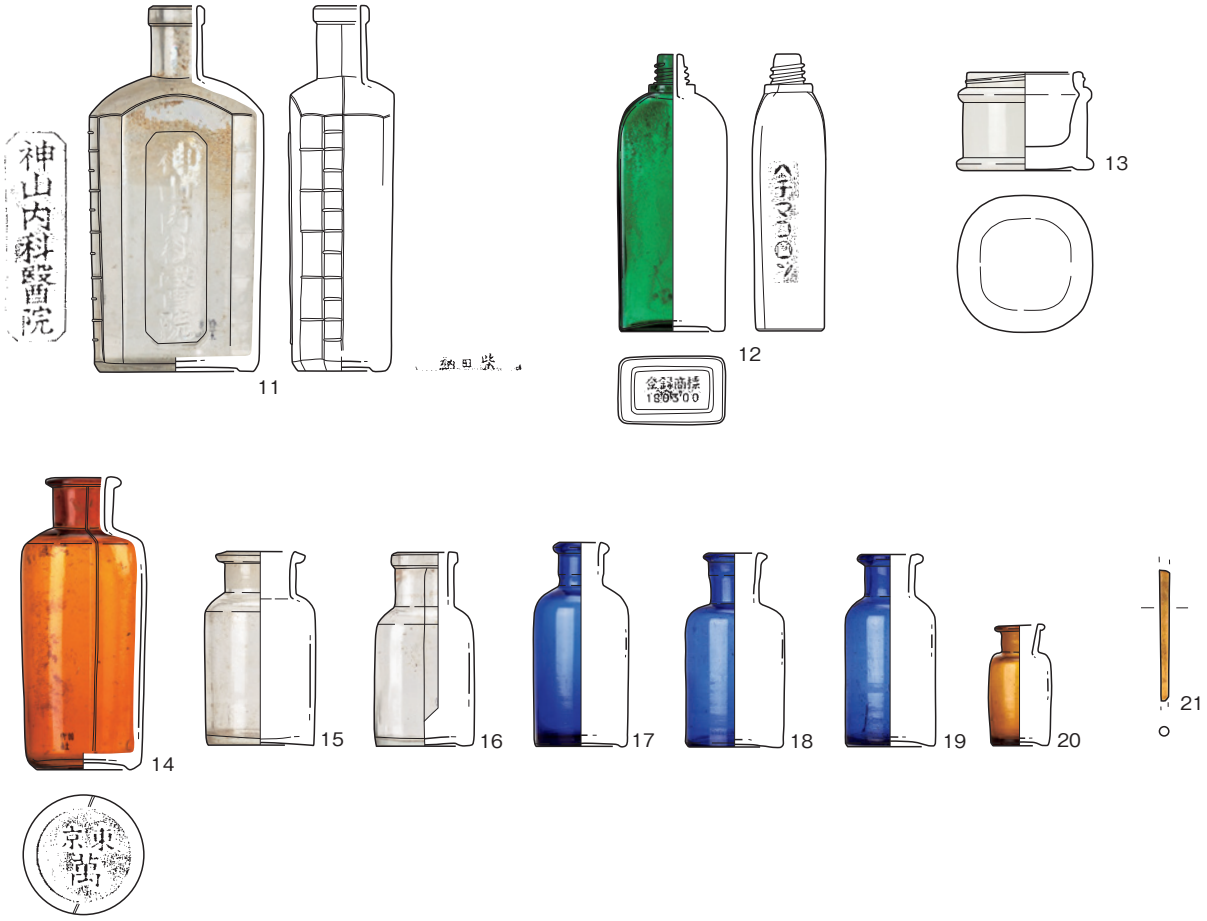
Ⅳ-129図　版築(6)出土遺物



Ⅳ-130図　版築(7)出土遺物

Ⅳ-131図　版築(8)出土遺物

Ⅳ-132図　表土(1)出土遺物



表土(2)

Ⅳ-133図　表土(2)、共同溝出土遺物

第Ⅴ章　小 結

本調査は、調査面積 4,000㎡を超える大きなものであった。確認された埋蔵文化財は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、江戸時代、近代と幅広く確認されたが、その大部が大名の江戸藩邸（大村藩白金邸）に関わるものであった。都市江戸郊外に拝領した下屋敷内で行われた諸活動について多くの成果が得られたと考えている。

調査区は、文献記録から長崎警固役、窯業地波佐見の国元である大村藩下屋敷にあたり、こうした特殊性の高い藩の考古学的情報は、歴史を復元する上で重要かつ具体的な資料として位置づけられよう。

調査では、傾斜地の平準化のための段切りを早い段階で斜面地を利用して行っており、19 世紀前葉以降に大規模ではあるが筵を利用した簡易な版築が行われている。白金邸は白金台地の尾根と渋谷川から開析される谷部へと続く緩斜面に位置し、藩邸全体の調査ではなかったものの、屋敷地内傾斜地に対して行ったこれらの居住域拡大に関わる地業は、一つの藩邸内の空間利用のみならず、自然地形への対処などにもデータを提示できると考えている。

出土遺物も注目される点がいくつかあった。まず、安政元（1854）年の火災資料であろう。陶磁器だけでコンテナ箱で 150 箱を超える量が出土し、年代的定点となる資料であるばかりでなく、国元に波佐見という全国流通するような大窯業地を抱える藩邸内の陶磁器利用がデータ化できた。この資料からは意外な特徴も判明した。国元の波佐見地域で生産された磁器製品が少ないこと、焼継などの補修がほとんどされていないこと、趣味的な器種が多く含まれていることなどである。この他、出土量は少ないが研究編でも言及した「柴安」刻印瓦は、陶磁器とは異なる瓦ネットワークへの、鉛インゴットは藩邸内の金属利用の視点からのアプローチが可能である。

報告書をまとめる過程で、課題もいくつかみえてきた。ひとつは国元との対比である。近世大村藩領内の発掘調査は多くはないが、居城である玖島城、および九州横断自動車道関連の調査などがあり、これらとの詳細な対比が必要である。一方、国元の磁器生産窯である波佐見地域の調査と研究は、1980 年代以降進められ、肥前内他地域との対比の中で細かい様相が明らかになっている。尾張藩などの例を見ても膨大な窯資料との対比と評価は国元との関係を明らかにする上で重要である。

また、白金邸全体の構造とその中での調査区の位置づけ、あるいは外桜田備前町から寛政 6（1793）年に永田町に拝領替えした上屋敷、牛込の中屋敷を含めた江戸藩邸の分掌なども将来的な課題となろう。

なお、本遺跡の成果は、本書（報告編）と合わせて研究編も参照されたい。

最後に本地点の発掘調査にさいして、本書冒頭に名前を挙げさせていただいた方以外にも、発掘調査、整理の中で多くに方々からご協力、ご助言をいただきました。改めて感謝する次第である。

【引用・参考文献】

江戸遺跡研究会編 2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房

恵比寿・三田埋蔵文化財調査会　1993『恵比寿　旧サッポロビール恵比寿工場地区発掘調査報告書』

遠藤邦彦、千葉達朗、杉中佑輔、須貝俊彦、鈴木毅彦、上杉陽、石綿しげ子、中山俊雄、舟津太郎、大江重人、鈴木正章、野口真利江、佐藤明夫、近藤玲介、堀伸三郎　2019「武蔵野台地の新たな地形区分」『第四紀研究』58（6），p353-375

大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）－器種（小器種）の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』７、東京大学埋蔵文化財調査室

大橋康二 1992『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55、ニュー・サイエンス社

大橋康二 2017「江戸中期における家紋入り磁器の盛行について」『中近世磁器の考古学』第７巻 雄山閣

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003 『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (53) 雪山遺跡 猿引遺跡』

加藤晃・金子智 1990「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第３分冊』東京大学埋蔵文化財調査室

金子智　1994 「尾張藩麹町邸跡出土瓦類の検討－軒平・軒桟瓦瓦当文様の変遷を中心として－」『尾張藩麹町邸跡』紀尾井町 6-18 遺跡調査会

株式会社イビソク　2021 『白金台町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』

久保純子　2020「第Ⅰ章　港区の地形と地質」『港区史自然編』港区

渋谷葉子 2004「肥前国大村藩白金下屋敷について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』４

白金館址（特別養護老人ホーム建設用地）遺跡調査団　1988『白金館址遺跡Ⅰ』

鈴田由起夫　1995 「17 世紀末～ 19 世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションⅣ』佐賀県立九州陶磁文化館

諏訪間　順・野口　淳・島立　桂　2010 「関東地方南部」『講座日本の考古学』１旧石器時代（上）青木書店

高山優　2020「第１章　自然　第２節　台地と低地」『図説港区の歴史』港区

東京ガス都市開発株式会社　目黒区中目黒遺跡（C 地点）調査会　1998『中目黒遺跡 C 地点　－地域開発事業計画予定に伴う調査－』

東京都埋蔵文化財センター　2017 『旧白金御料地遺跡』

東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第２分冊』

東京大学埋蔵文化財調査室 1999「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2、別冊

東京大学埋蔵文化財調査室 2004「医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室 2012「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8

原　祐一 2002「東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3

堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1、東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹・大貫浩子 2013「東京大学構内遺跡編年修正について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』14

目黒区遺跡調査会　1994『茶屋坂遺跡　－防衛庁目黒公務員宿舎建設に伴う調査－』

目黒区遺跡調査団　目黒区教育委員会　1982『中目黒遺跡』

目黒区中目黒４丁目遺跡調査会　1994『中目黒遺跡Ｂ地点　－東京ガス株式会社社宅建設に伴う調査－』

渡辺丈彦　2021「旧石器時代」『港区史　原始・古代・中世」港区

港区教育委員会　2015 『旧白金御料地遺跡確認調査報告書』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくしろかねだいこうないのいせき　みなとくNo.135いせき　いかがくけんきゅうじょふぞくびょういんえーとうちてん　ほうこくへん
書　名	東京大学白金台構内の遺跡（港区No.135遺跡）　医科学研究所附属病院A棟地点　報告編
副書名	
巻　次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	17
編著者名	大成可乃（編）、小林照子（編）、堀内秀樹
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153−8904 東京都目黒区駒場4−6−1　駒場リサーチキャンパス内 TEL：03−5452−5103
発行年月日	令和4年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
とうきょうだいがくしろかねだいこうないの 東京大学白金台構内の いせき　みなとくNo.135いせき 遺跡（港区No.135遺跡） いかがくけんきゅうじょふぞくびょういん 医科学研究所附属病院 えーとうちてん A棟地点	とうきょうと　みなとく 東京都　港区 しろかねだい 白金台 4ちょうめ　6ばん　1ごう 4 丁目 6 番 1 号	13103	135	35° 38′ 25″	139° 43′ 28″	2000/10/27 ～ 2001/03/09	4,280m	医科学研究所附属病院A棟新設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学白金台構内の遺跡（港区No.135遺跡）医科学研究所附属病院A棟地点	包蔵地 屋敷	旧石器 縄文 近世 近代	縄文 陥穴3基、土坑2基 近世 建物址1基、柱穴列3基、柵列2基、溝23基、井戸2基、地下室1基、植栽痕7基、段切り1基 近代 建物址	旧石器 フレイク、ポイント 近世 陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品、貝骨製品、動物遺体	傾斜地を有効利用するための段切りと、それにより作出された平坦面に大型建物址を確認。 19世紀中葉に比定される遺構一括資料。

要　約

本調査地点は、文献から大村藩が寛文元（1661）年に白金村のうち5,600坪を江戸幕府より下屋敷として拝領し、以来「白金下屋敷」として同藩が幕末まで所持し続けたとされる場所であり、1藩が江戸時代を通じ下屋敷をどのように利用したのかを知ることが可能な地点である。検出された遺構、遺物も17世紀中～19世紀中葉に比定されるものであり、特に大型遺構SK207から出土した遺物は、大村藩の家紋（五木瓜紋）鬼瓦や安政元（1854）年の火災と推定される火熱を受けた遺物を含む19世紀中葉に比定される良好な遺構一括資料である。

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17

東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）

医科学研究所附属病院 A 棟地点
報告編

2022 年 3 月 31 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 － 6 － 1
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　能登印刷株式会社